九月一日發行



女學世界

第十卷第十一號



博文館

明治三十三年十二月廿[illegible]日第三種郵便物認可（毎月一回廿六日印刷納本）明治四十三年八月廿六日印刷納本


美顔水
びがんすゐ
徳用大瓶　貳拾五銭
中瓶　拾五銭
桃谷順天館製
沖

第拾壹號目次

一品一効

!!純無鉛!!

御料たつた白粉

●一品多能の望なきを主張する
吾製造各種の化粧料は常に

▲博士大家無害證明▼



▲新式中の新式白粉▼

●如斯美人を試金石とし着實に
善良の効果を收めつゝあり

御料あらいこ

▲一合の牛乳で洗ふより▼



▲一さじの御料あらひ粉▼

歐羅巴宮殿式

御料クリーム

▲グリスリンにもあらず▼



▲アブラぶんにもあらず▽

化粧界新美観

新學期開始と男女子供洋服

長き暑中休業は了り將に新學期開始せんとし慈に富みたる親御樣方は令孃令息がたの秋服を御見立遊ばるゝ時となりたり此時に當り定めて弊店の名を御記憶より喚び起さるゝことゝ信じます從來の御實驗で明なる如く弊店仕立の男女小兒洋服が價格低廉、裁縫精巧、服型嶄新、出來迅速なることは弊店が今日京濱間に小兒洋裝界の流行兒と謠はるゝやうになつた一大秘訣であります、未だ御試しなき方は此好機會を利用して此際弊店へ御注文下され、如何に流行兒が自負に背かざるかを立證させて頂き併て弊店の獨特の技倆と熟練とを發揮することに一臂の力を與へ下さらんことを希ふのであります。

●男女小兒服及びベビホックス（嬰兒洋服）出來合ひ品取揃へてございますから何時でもお間に合ひます

注意 東京市内御注文のお方は電話本局二九〇一番、端書なれば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下されば雛形と切れ地見本持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたす樣謹進致します



殘暑と新輸入の化粧水

今回當店に於て發賣するデリケート化粧水は英國ロンドンの取引先より試賣の爲め送附せられたるものにして曾て舶來したることなき歐米化粧界にて絕大の賞贊を得たる逸品なり試用の結果有ふれたる化粧水と其選を異にし有効確實なるを認め大方の紳士淑女に汎く頒たんとす幸に御試用の上好評あらんことを希ふ

【効能】……顏のあれ●白粉やけ●顏のしみ、はたけ●日やけ●ひゞ
【定價】……大（百グラム入）壹瓶五拾錢、送料八錢●中（五十グラム入）一瓶廿五錢、送料八錢……（郵券代用一割増）
▼女學世界讀者に限り送料負擔す
【見本進呈】……郵券十錢御送附あらば見本一瓶送呈す
【御申込】……横濱は本店へ……東京市及び地方は東京出張所へ御申込み下されたく候

〔本店〕・・横濱辨天通り（電話三四四番）

中野屋洋服店

〔東京出張所 及地方係〕東京市神田鍛冶町（電話本局二九〇一番）

女（いの一）



婦人の美容を遺憾なく現はす電氣簪にあり

電氣簪は高尚優美なる造花に、最も巧妙なる電氣を裝置し、夜間之れを使用せば、花心より美麗なる電光を發し、優色四邊を照らして、眞に美の極を現出し、又晝間の使用には輝々たる電球花心を飾りて、他の簪の遠く及ばざるの美を添ふるものなり

●電氣花簪●



電球は永年の使用に堪ゆるを以て造花のみ替ゆれば各自好みの簪を得るに容易に尚ほ電光は明滅自在に行はれて些の危險なきものなり

定價表
甲號 貳圓八十錢
乙號 壹圓八十錢
小包送料十二錢

御註文の節は御好みの花、及色合、花の大小、其他御好みに應じ御申越下され候はゞ適當の品を見計らへ直に發送仕るべく候

本社附屬工場の製出に係る電氣花簪は電池は美麗なるサックに納め造花は通常の花簪に見ざる最も優良の原料を以て製造したる優等品なり

◉金屬特製電氣簪 本品は全部金屬製にて堅牢無比の優良品華實種々あり 甲 參圓 乙 貳圓 送料十二錢

◉新案電氣襟止 本品は男子のネクタイ及婦人の帶止等に兼用し得 甲 參圓 乙 貳圓 送料十二錢

東京市神田區西小川町貳丁目九番地

製造發賣元 振替口座東京貳〇四五五番 盛文社電氣部

●御部開設、……取次販賣希望者は返信券添へ御照會下され度候

女(いの二)

ぬりもの

美術蒔絵物

御陳列縦覧御随意

東京日本橋通室町

木屋漆器店

電話本局 九百九拾七番

長 千七百拾番

衛生美顔術

（一回施術料金五拾錢）



美顔術實驗有効

御化粧水 **ライラック水** （一瓶平十錢 送料八錢）

にきび知らず **理容水** （大五十錢 小三十錢 送料八錢）

芳香無鉛 **理容白粉** （一瓶平十錢 送料八錢）

東京市京橋區竹川町十二番地

理容館本部

電話新橋二二八〇四番

晚涼



田中製版所三色版

婦人一生中に最も心配な事實

政治上實業上に外交の繁き其夫を持つ夫人と日々多數の嫖客に接する婦人は殊更注意せよ恐るべき難産と流産と不姙症は必ず來るべし

婦人は身體の構造上梅毒痳病に對し病毒の發源地となりて他人に感染せしめ又病毒の蕃殖地となりて自己の膣子宮を害し血の道、癪に苦むは婦人の持病と諦め腰より脚部へ冷る如く感せば婦人は冷へ込む天性と自覺して帶下、白帶下、赤帶下の惱むも冷込と速斷し他人の擧兒を羨むと共に我が子寶なきを嘆きながら之も例の冷込みと誤信して見當違の暖め藥等を内用する故遂に長引は畢竟誤療の結果と知るべし元來婦人の生殖器は天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の蕃殖するは當前にて結婚の機會に病菌侵入し其田畑を荒すゆゑ子宮血の道に惱み倍々荒せば荒す程其肉落ち身體の窶れるは實際惡き土地の田畑に滿足の農產なき道理なり婦人科學上婦人病の療法は局部の治療を第一義とし局處の外用する藥劑の要求は益急を告るに至る余は藥劑師にて衞生の天職上豈に傍觀するに忍びす積年苦心慘憺研究の末方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を壓する獨乙伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に則る藥液をして直接に婦人の局處に作用すると同時に吸收せられて其藥効を發揮すべく可要球(座藥にて内用藥にあらず)を調劑し幾多の婦人科醫に之が實驗を請めたるに子宮内膜炎にて下腹痛み常に帶下ありて白帶下又赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り更に胸先きへ差込み子宮糜爛して痛み、子宮出血して褌を汚染し、厭な處に臭ありて他に嫌れ又は燃へ立つ搔痒を起し搔ば痛む症、月經時の疼痛と月經過多に惱み或は黴毒性子宮病等の諸症に用ゆれば何も其の効力神速にして驚ろくべき顯著なりとの賞賛を受たり「可要球」は最新の學理に適合し最も親切なる良劑にて恰も田畑に完全の肥料を與ふる如き直接に其の藥効を顯すを以て婦人の姙娠すべき局部と田畑の道理を思ひ彼是と迷ふ事なく殊に婦人病には必ず「可要球」を外用して速に根治し給ふべし尚病毒の疑ある婦人は速に唯一丸を内用せば拭ふが如く其病毒を去り面白き程治療す故に良夫あれば相互に其病毒を驅除する事を忘るべからず

「可要球」定價三球入貳拾錢、八球入五拾錢、拾八球入壹圓、四拾球入貳圓

「唯一丸」定價三日分四拾錢、七日分八拾錢、十四日分壹圓五拾錢、三十日分參圓(いづれも内地逓送無料)

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上

藥劑師 **中西莊吉**

振替貯金口座東京千五百番

本(ろの二)

女(ろの二)

專賣特許

エンゼル香油

田原藥學博士の實驗御證明清浦子爵高山三兩博士の實驗有効御證明東京美術學校千頭教授の實驗有効御賞賛狀其他大家より多大の高評を以て迎られたる特許エンゼル香油は毛髮を黑化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる『ヘリオトロープ』『バイオレット』『ホワイトリリー』等の高雅な



見よ!!!

※る芳香を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故別に他の香水等御用の必要は有ません又くせ毛の方はB號エンゼル香油御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升

◉實價は小壜六十錢中壜壹圓大壜壹圓八十錢と天性難毛用特製三圓五十錢の四種で送費は市内は何れも七錢内地は小中壜迄は十一錢大壜及び特製十五錢です▲代金引替は一切謝絶す▼

東京市本郷區東片町十五番地

エンゼル商會

電話 下谷二五六九番
振替東京二〇七四三番

見よ●月經な女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物

其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

●肥滿病新藥

（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顔赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり誓て美顔窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音

美人となる



やせる藥

藥價	一劑一圓五十錢	三劑四圓卅錢
	二劑二圓九十錢	四劑五圓半
	送料	十錢

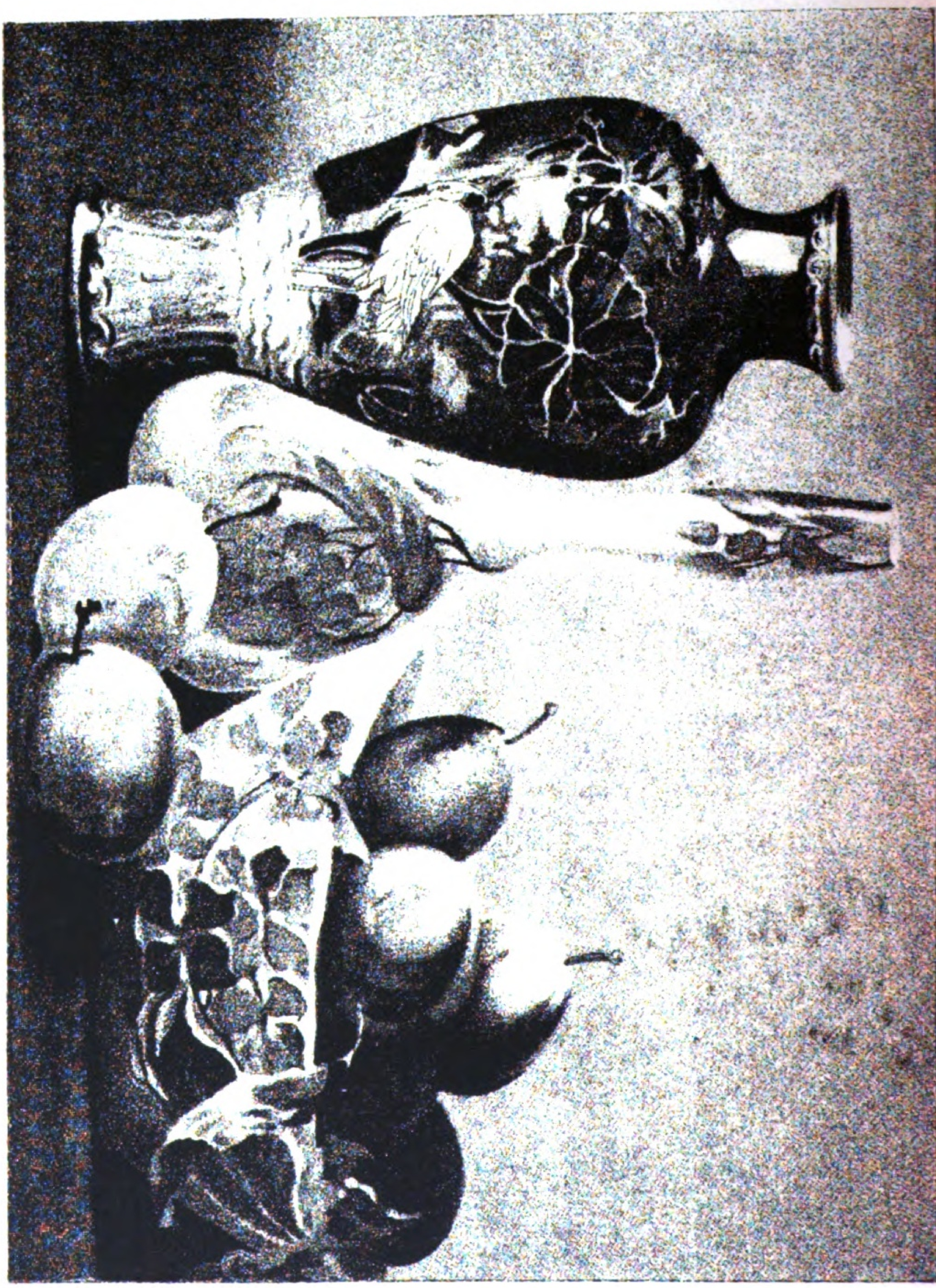
發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番

小宮愛生堂

女（ろの三）


千代田香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たッ
特製 金七十錢
大瓶 金三十五錢
中瓶 金二十五錢
小瓶 金十七錢
東京市馬喰町
山岸三之助
電話浪花二七九二
純白 浮き
スワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸
▲定價 二個箱（壹本） 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇番

女（ろの四）



清味

學校家庭必備之寶典

兒童訓話の絶好資料として大高評を以て迎へられたる
本書は初版忽ち賣切れ今や再版發行す

巖谷小波先生校閲 沼田笠峰先生編述

兒童教訓 赤穂四十七士畫譚

全壹册 洋裝頗美本舶來紙印刷美麗 寫眞版六拾餘箇挿入 正價六拾五錢 郵送料六錢

本書は少年少女の教養に經驗ある編者が元祿義擧の顛末を平易なる文章で述べると共に六十餘の鮮明なる繪畫を加へて四十七士の個々の行動をも詳細にあらはしたる者なれば忠勇なる日本帝國の少年少女諸君が士氣を養ふに最も適當なる讀みものと信ず。

大好評 大歡迎 續編發行

西川三五郎編

學校家庭 續兒童百話

新刊 洋裝全壹册 正價卅錢 郵税四錢

學校家庭 兒童百話

拾版 洋裝全壹册 正價廿八錢 郵税四錢

今回更に最も嶄新にして趣味ある童話百餘種を蒐めて續編を刊行せり乞ふ一讀あらん事を

發行 東京神田松下町 文盛館・東京神田美土代町 振替東京二〇一四一六 博文書院

みやけ油



東京人形町通三宅堂本舗

みやけ油

宮内省（於第一回貿易品博覽會）御買上の光榮を蒙りたる最良髮油なり僞物あり東京人形町通みやけ油本舗木村三宅堂製と長髮美人商標に御注意を願ます販賣所到る所の信用ある店にあり



耳病

即耳だれ耳なり中耳炎鼓膜炎及

耳遠

き人よ如何なる治療にても全治せず困難の人は二錢券封入御照會あれば詳記せる自宅療法書を呈す

東京々橋區南鍛冶町三　東藥房

男ちゞれ 女くせ毛

赤毛は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髮に治して差上升

岩阪澄子

東京麻布區材木町

石鹼一個の代金を節して本書を熟讀實行せば最幸福なる根本的の美人たるを得べきなり

最新美人法

一冊送料共金廿七錢切手代用は三錢を十枚振替廿八錢

本書は醫學上藥學上の學理實際と幾多令孃夫人の實驗とより成り然も何人にも實行しやすきを本旨として犯逃せし良書也

白色法 醫學上より見たる白色法●色白くなる飲み藥●色白くなるつけ藥●實驗有効の白色法●色白くなる簡單なる方法●キメを細かにする法●日にやけるを防ぐ法●手の色を白くする法其他種々

美髮法 髮の毛を美しくする法●髮の毛をやわらかにする法●つやをよくする法●毛のぬけるをとめる法●毛をのばす法●ふけをとる法●ちゞれ毛くせ毛うす毛赤毛白毛等をなをす最良法其他種々

美顏法 愛嬌と愉快●顏を洗ふ最良の方法●油の多過ぎる顏と油のたらぬ顏●赤すぎる顏と青き顏との療法●顏を醜くする食物●しわのよらぬ法●齒を白くする法●ニキビそばかすホクロの療法等

治療法 やせる法こえる法●鼻高くする法●聲をよくする法●おしろいやけエボあざシモヤケわきがヒセン田蟲タコなます等の最良療法●毛をはやす法●赤鼻眉毛のさか毛手のあれを治する法其他

養生法 根本的美人となる平素の養生法●食物と美人との關係●充分に睡眠せよ●寢る時の心得と寢具●運動はかくの如くすべし●醜婦も此の如く常に注意せば亦美人に優る●婦人病と顏色の關係

化粧法 入浴中行ふべき美人法●此の如き化粧品は反つて恐るべき結果を來す●化粧品の選擇法●おしろいのつけ方●鼻高く見する法●目を大きく見する法●唇をうすく又は厚く見する法其他種々

服裝法 服裝を美しくする法●衣服の材料●衣服の洗濯●衣服の色●衣服の縞●呉服店にて染色縞柄を見る秘訣●此の如き模樣と縞柄とは甚しく美人を醜婦とす●帶のしめ方●前のあわせ方等種々

これ目次の大略のみ眞に婦人の寶典也。眞に少女の必讀書也。御身の幸福を得べく一日も早く本書を讀め。

處生必携

婦女の顧問

全一冊送料共廿七錢切手は卅錢

裁縫の事、料理の事、育兒の事、洗濯の事、禮法の事、其他何でも婦人として分らぬ事あれば本書を見ますぐに分つて甚便利なり

發行所　東京神田錦町三ノ二　振替東京一六一八番　學友社

女（はの三）

ケーバー石鹸

舶來石鹸界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり

レツクス



實用浮石鹸

英國ボッソンエンドシンプソン會社特製品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは本品の特點なり
價格の低きは本品の特點なり
實用に適するは本品の特點なり
上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也

論より證據實地御使用を乞ふ

ケーバー香水

●全世界を通じて流行品

最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水



定價
小瓶 金廿五錢
中瓶 金一圓
大瓶 金二圓
特瓶 金五圓

東洋一手代理店

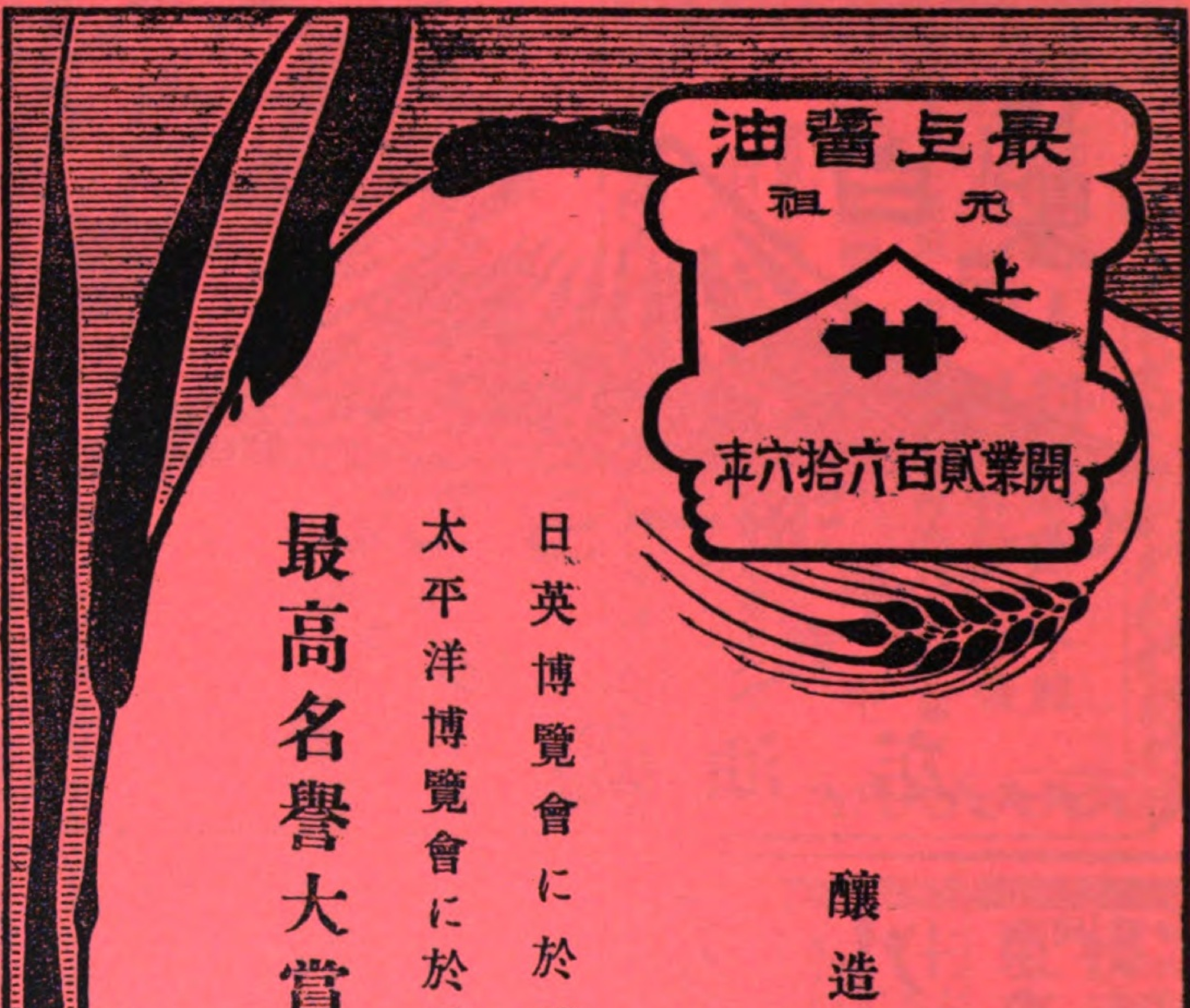
竹間商店

●賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物及び化粧品店に有り升

紫陽花



河崎蘭香筆


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾六年
千葉縣銚子港
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞牌受領

悪筆は一生の損

習へば直ちに上達すること全く機械的なり

▼新專賣特許を得て大改良大發展を企つ▲

舊 專賣特許

舊 實用新案特許

新 專賣特許

今回新に得たる專賣特許を従來の二特許と組合はせたるを以て頗る嶄新奇抜なる最大速成法となれり

▼此際入會者に大特典を與ふ

▼男子部小學部書者

稻川雲谿先生

玉木愛石先生

▼女子部の書者

小野鵞堂先生

外講師……大家數拾名

▼見本詳細會則無代進呈す

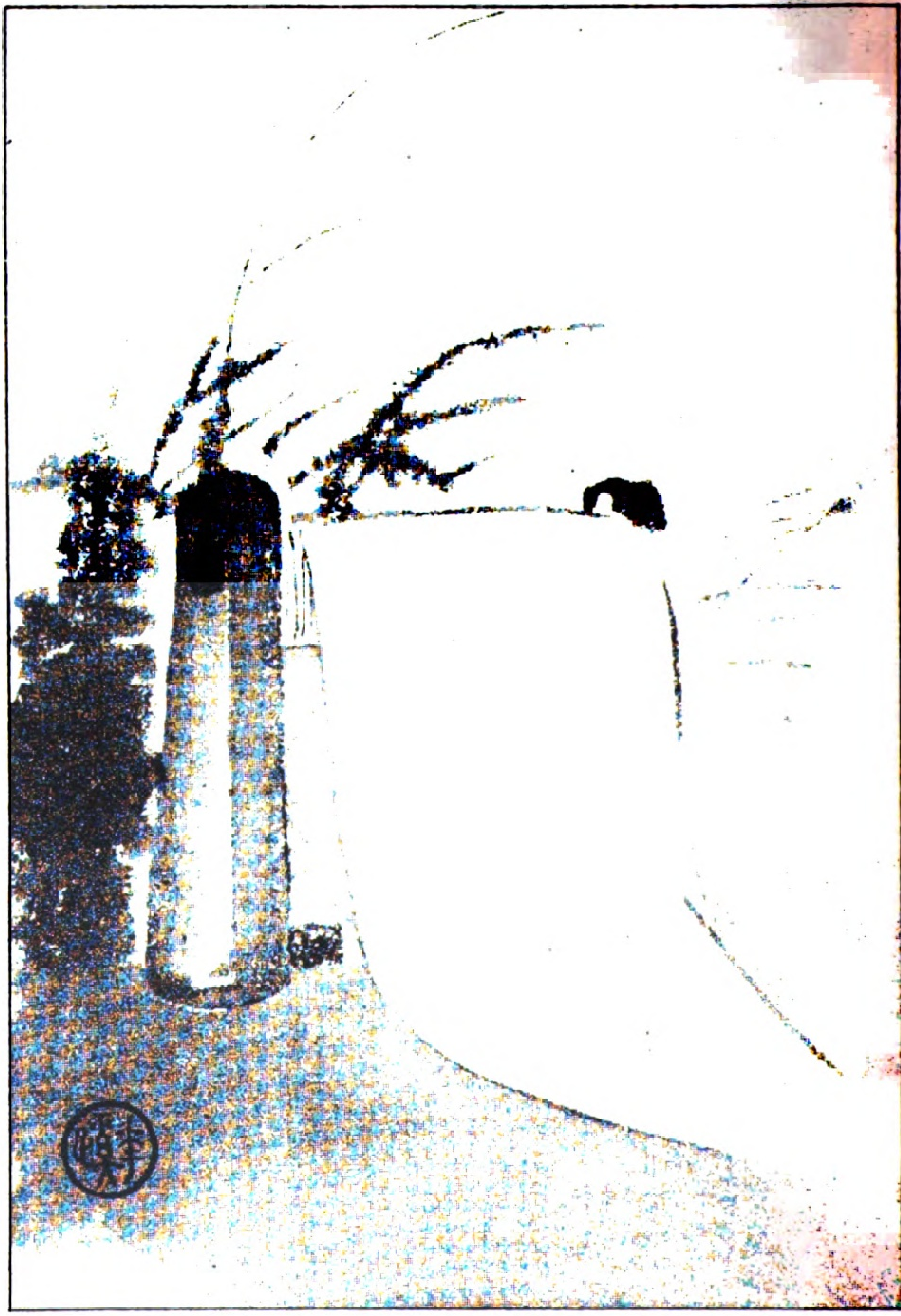
帝國習字速成學會

東京本郷區大學正門前
電話下谷三〇壹壹番
電話下谷三貳一〇番

〔注意〕近來本會と類似の者多し故に本會名稱と所在地に御注意を乞ふ

女(にの四)

たぬき



跡見花蹊女史筆

良夜



平福百穂筆



(其の一)

は欧米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き藪が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮はへぎはまゆげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツボー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●らい病

取次所ハ前月ノ廣告ニアリ

●●●●●●●●●●●●●●●●●●

醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール　一ヶ月分　貳圓

複方ザノサール　一ヶ月分　參圓

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京貳參壹壹

電話 刈谷參拾貳番

本舗　醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

○肺病は不治の死病なりや???

最新刊

心理療法 肺病治療篇

定價送料共參拾錢‥‥郵券代用參拾五錢

肺病に適藥なしとは藥學界の定論にして肺病は藥で治らぬとは醫師の公言する所なり然らば肺病は不治の死病なりや? 否々心理治療法は唯一無上の肺病療法にしてこれに依て死地を逃れたるもの甚だ多し、本書は如何にして恐るべき結核を根治すべきかの心理的工夫を最も詳細丁寧に說明したるもの實に斯界空前の快著なり、本書出でゝ從來幾多の斯病に關する著書は廢物に等しかるべし重病者と輕症者とを問はず是非共一讀を要す

好評噴々

實例 心理治療秘訣

定價送料共參拾錢‥‥郵券代用參拾參錢

▲人生最大不幸は病です藥ばかりを頼みにして病氣を癒さうとするのは病氣の何時迄も治らぬ基です

▲未曾有の福音最新の學理により心に依て病を治す心理治療法は眞に二十世紀の最大發見であります

▲驚くべき實例東西大醫數十家の實驗に成る實例七十餘章は眞に驚絶奇絶如何なる病者も本書を讀ば

▲瀕死者は生返り十年の病は一年、一年の病は一月で癒り健康者は益々健康になること疑ひなしです

發行所　東京市小石川區大塚町三番地　心理療法研究會

女(ほの二)


鉛氣ない匂の高尚な
大學白粉
如何ほど荒れたる
肌も美しく滑かになる
大學化粧水

古流生花の會

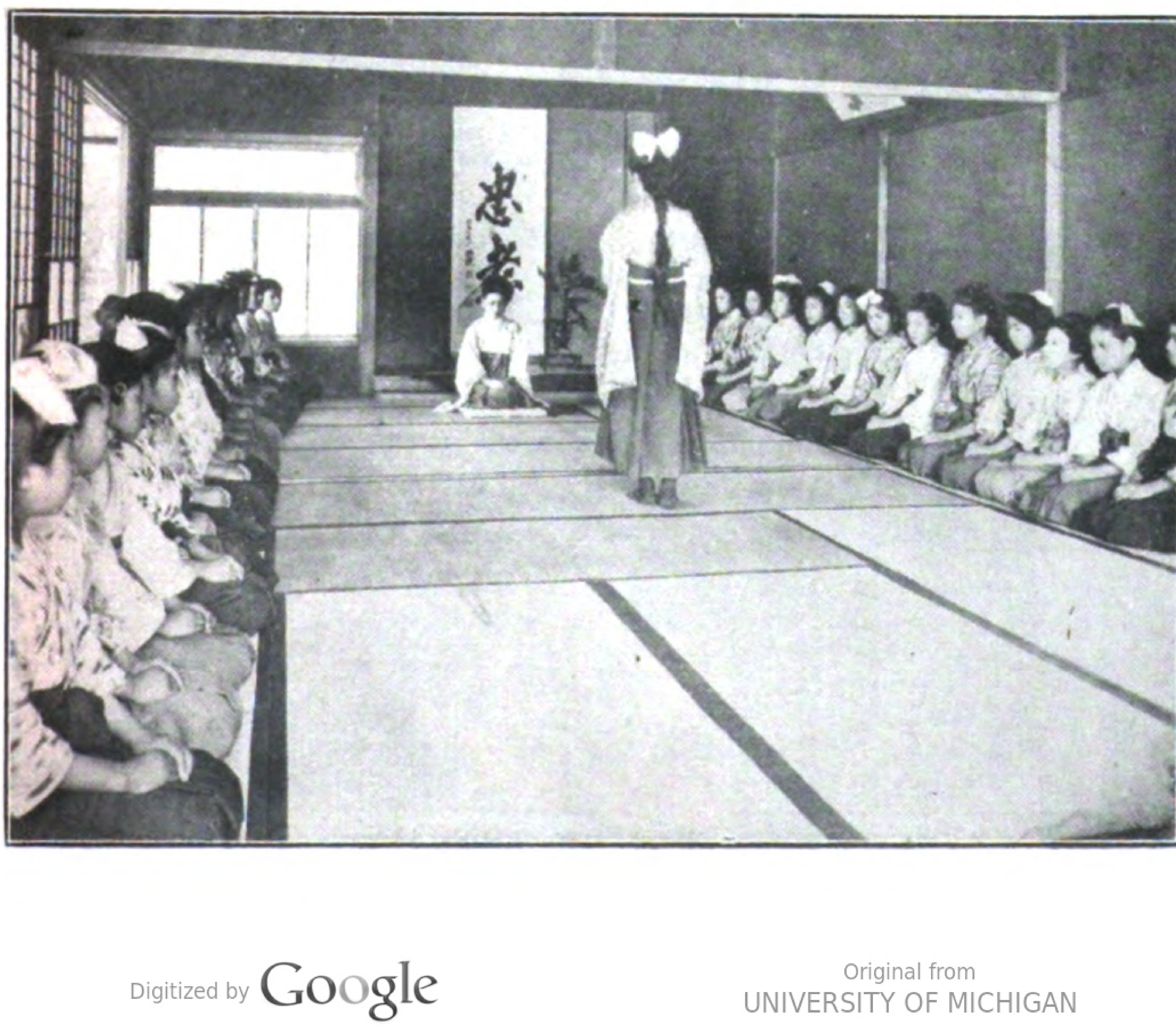


家元古流松翠齋理育尾崎恒子女史社中の紀念撮影、右の端が女史、老婦人は先代理育、他は皆門下の人々なり（本郷區春木町三丁目）

京華高等女學校の内外



上圖　運動場の光景

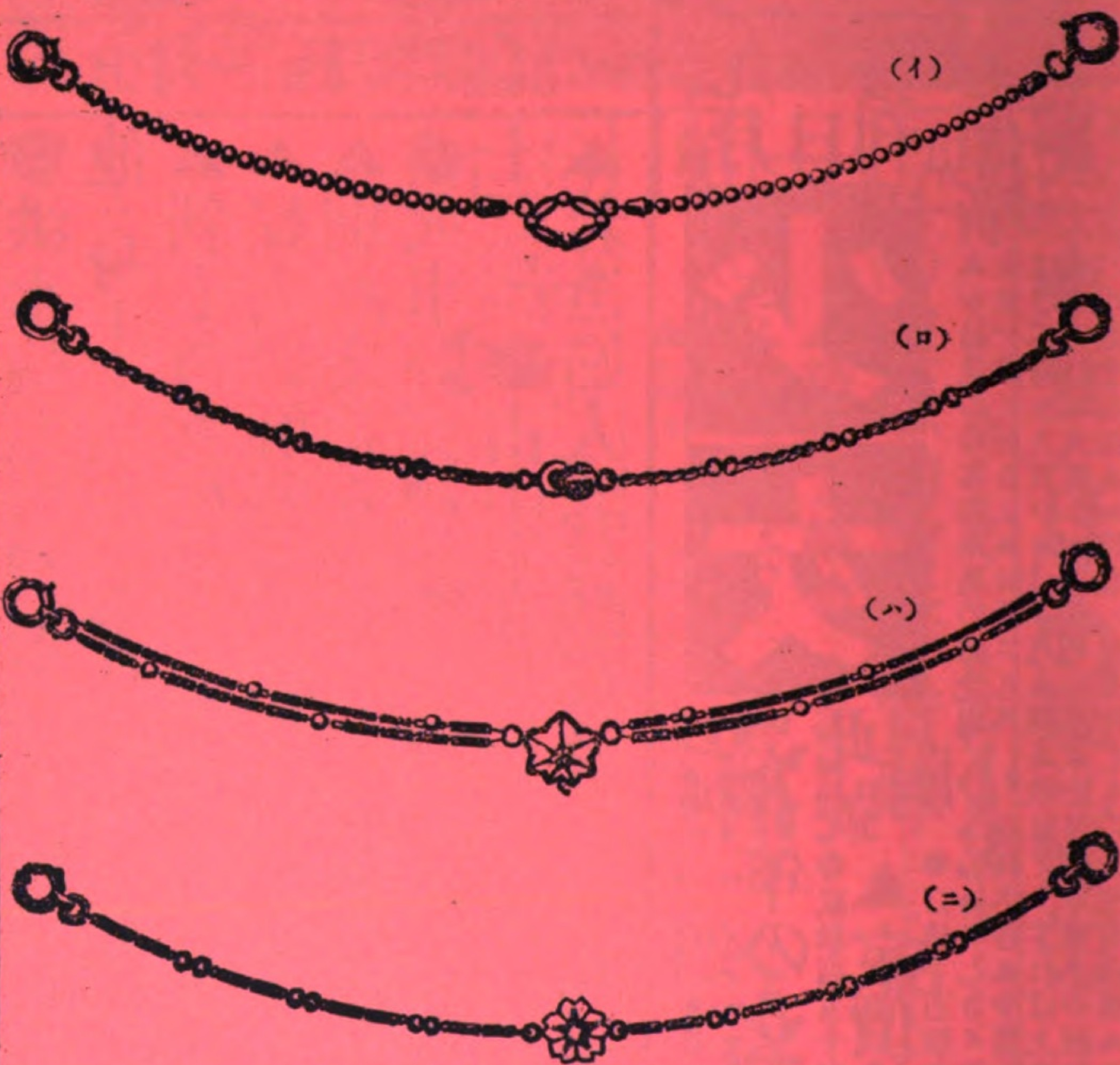


下圖　作法室の實習

東京京橋區南傳馬町

新形羽織紐　大西白牡丹

振替東京九二九三番※電話本局三十番・三千番



(イ)總眞珠ツナギ　金貳拾圓

(ロ)眞珠ツナギ十八金〆縄　金拾貳圓

(ハ)金剛石入眞珠ツナギ　金貳拾圓

(ニ)十八金製眞珠ツナギ　金拾五圓

右は何れも最上銀色の眞珠を巧みに應用致せし物なれば萩桔梗の此頃より召させ玉ふには至極御うつりよき品に御座候

女(への一)

東京市京橋大鋸町 女子文壇社出版 振替口座東京第壹七貳九番 賣捌全國書店

女子文壇

九月一日號

第六年拾貳號要目

●洪水に浸されたる跡見女學校…跡見季子 ●崖壊れて九死の中に一生を得たる當時の慘狀…尾島菊子 ●今日は他の身上明日は我が身の上…横井カネ ●住居に就ての注意…藤崎恒子 ●日本上海倫敦の各地で生んだ子女…[illegible]

▲新しき女に就いて……文學博士 坪内雄藏

▲婦人の躰質及び疾病……澤田順次郎

▲別れませう(對話)……森川葵村

●火事と强盗に遭つた經驗 足利子爵夫人 ●英京倫敦より 九條男爵夫人 ●强者に對する同情 醒川 ●富士登山の印象 山田邦子 ●市中の女の商ひ振り 白木絲子 ●洪水記…記者 ●各地の祭 十數項

▲若き婦人の手に成れる懸賞文章。詩歌は生氣充溢他に類なき盛観 ▲每號好評

口繪 石版畫及寫眞版十頁 美麗 ●定價拾五錢 郵稅壹錢五厘

二卷九號 九月一日發刊 少女

滿一週年の紀念號

此號に限り ●紙數百五十頁●挿畫皆寫眞版刷込 ▲定價拾五錢 郵稅壹錢

●口繪:石版畫密刷寫直色刷數葉入

要目

お伽噺 ▲お月見のお客様 ▲梟の御先祖 ▲魚が寝て居るよ ▲蛙子さん外 ▲人買ひ ▲蟬 ▲歌はどうすれば上手につくれるか ▲美文

小說 ▲美しきイサベラ ▲以前の家 ▲淸水谷 ▲少看護婦 ▲女間諜 ▲暗い心

▲(冒險小說)女人禁制(下) 對話 ▲大笑ひ 唱歌の歌 ▲思ひ出 外博士の面白い動物談、歷史地理談、某外交官の外國少女談 ▲お待兼の懸賞探しもの及解答披露 ▲少女文壇等豐富

女(への二)

婦人世界

九月一日發行　第拾號　一冊拾五錢　郵稅一錢五厘

東京京橋南紺屋町十二（郵便振替口座三三六番）　實業之日本社

女（への三）

於内外諸博覧會名譽賞牌各種受領

專賣特許 連働蓄音器

新案 重函蓄音器

各種



獨逸國ライロホーン、ウエルケ會社 東洋一手販賣

ライロホーン兩面音譜多數着荷

ライロホーン新曲譜歌集 實費金參拾五錢 送料金四錢

○御不用の蝋管有之候へば便宜御引取可申候

東京市銀座一丁目 長電話新橋九七九 四二〇四 振替口座東京六四二五

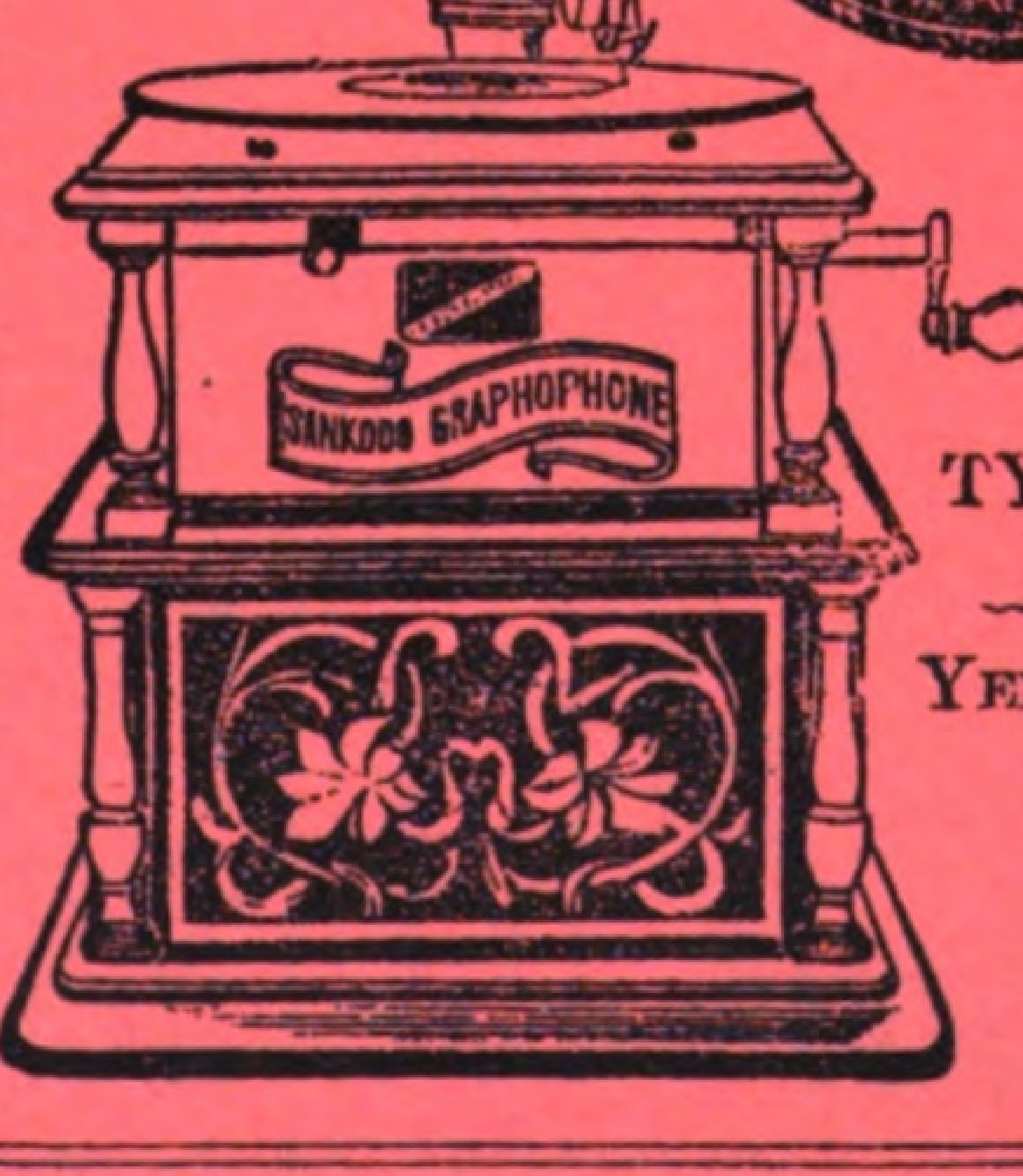
東京市淺草區並木町 長電話下谷九八八 振替口座一九八八四

大阪、博多、小樽



三光堂

定價表歌目錄御一報次第無料送呈可仕候



TYPE MN

YEN 85.

新案特許 喇叭無し重函蓄音器

女(への四)

名家の令嬢



右、通信局長小松謙次郎氏令嬢暐子
中、東宮侍従馬場三郎氏令嬢きく子
左、満鉄副総裁國澤新兵衛氏令嬢貴美子

好みの晴衣裳



（さま〴〵の衣裳くらべ　其一）

第二巻第十號・九月一日發行・定價一冊廿錢 郵税壹錢五厘

婦人界

▼一筆啓上　文學士　小谷栗村
▼古くて新しき家庭の美風　陸軍中將　比志島義輝
▼娘の墮落は如何に所置すべきか　文學士　三輪田元道
▼海軍軍人の妻として一家を整理する私の實狀　海軍中將夫人　藤井重子
▼最も幸福なる結婚法　鳩山春子
▼羨むべき一家の團欒　楚水生
▼近代的の結婚式と日比谷太神宮　月下氷人
▼名流婦人と結婚當時　婦人記者

大發展
紙數（百六十頁）を増加して二百頁とし
内容を改善すると共に讀者文藝欄を擴張し一層女學生向の材料を增す

▼秋の始めの子供の注意　女醫　吉岡彌生子
▼流行に付いて　新保一村
▼衰へし一家を興さん爲め嫁入後九年間の苦學を成せし經驗　堀内ます子
▼足を資本とする私の婦人會に係る實驗　大尉夫人　笹岡佐智子
▼江木博士夫人と語る　そする
▼子供に何を教へられたか　法學士　山本移山
▼呪はれたる閨秀音樂家　高橋生
▼虚僞と輕薄との女性　青木秀峰

東京日本橋區本町三丁目　金港堂書籍株式會社　振替貯金東京八八一五番

女（その二）

女（その三）

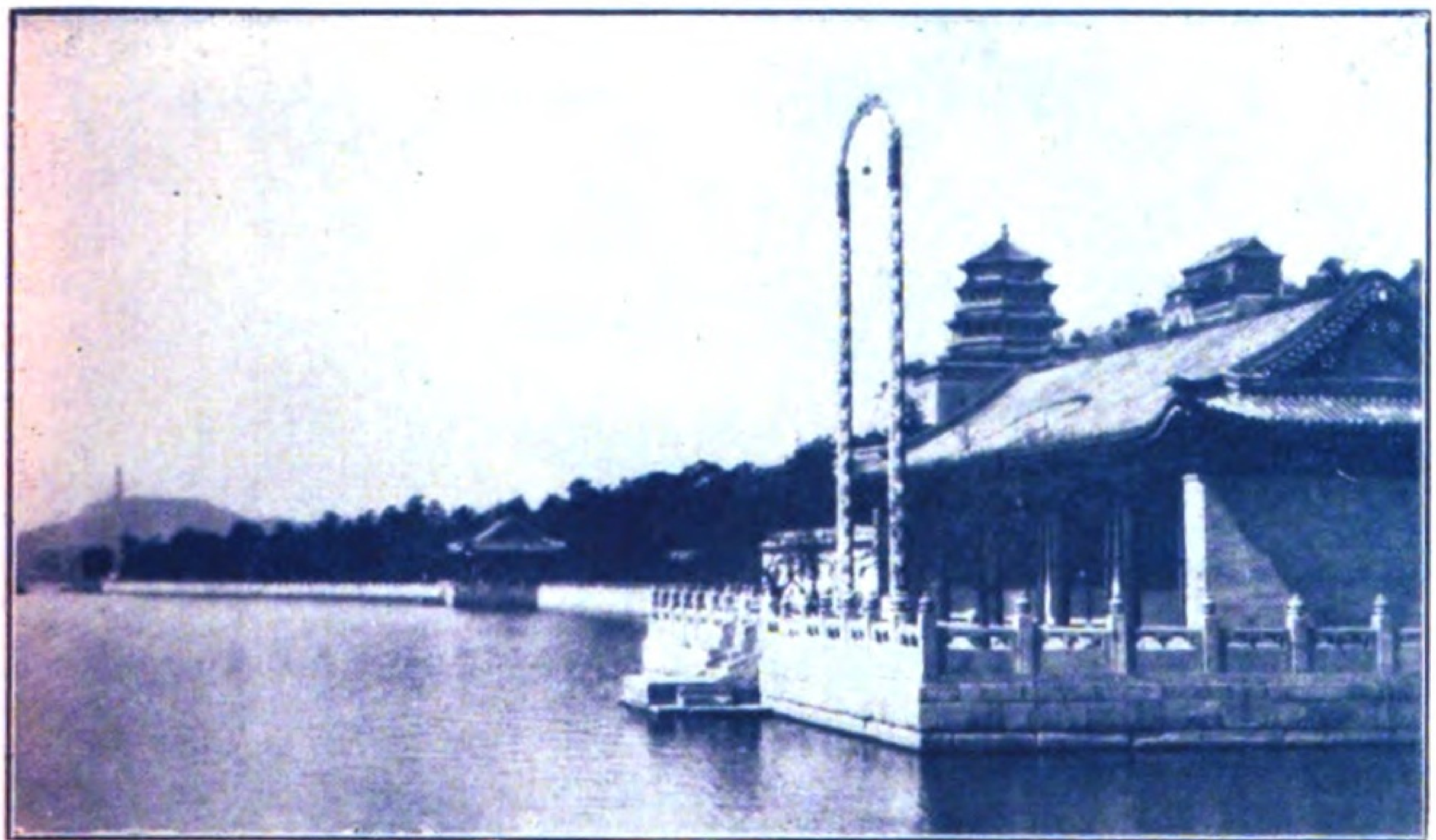
女(その四)

姉と妹洋裝と和服

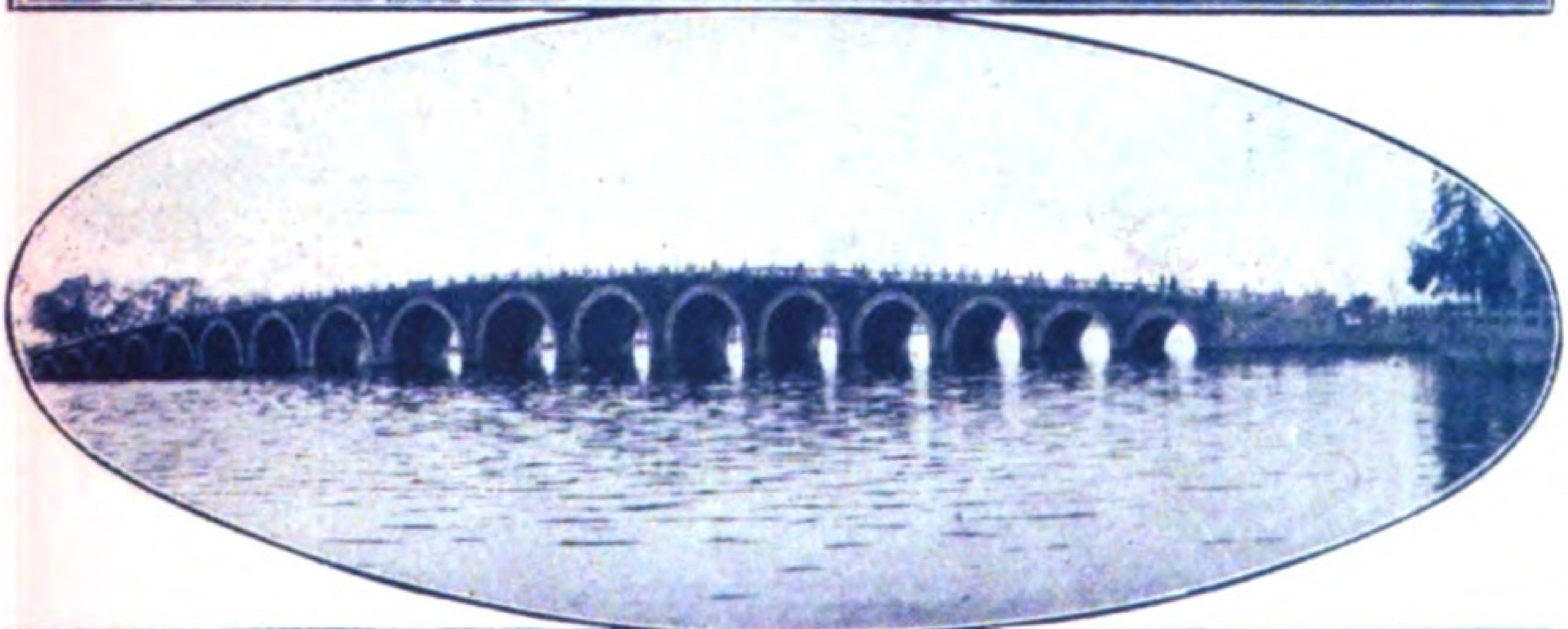




北京禁苑萬壽山の勝概



四層の高樓は佛香閣



昆明湖の觀月橋



佛香閣の階下

村井弦齋先生曰く有名の山田逸子が歐羅巴に行き幾多月經帶を調査し日本婦人に適する樣改良を施し新に製造したる『月の帶』は私共の家族が用ゐて居ますが至極輕く腰の工合も自由で大層都合が良ですと云々

元大阪府立病院產科婦人科醫長**伊庭醫學士**は、本品の婦人衛生に適し且必要なることを婦人世界に汎く紹介され

報知新聞曰く『月の帶』は產婆山田逸子が西洋婦人の用ゆる月經帶を我邦婦人に適する樣改良を施したるものにて日常之を用れば各種の生殖器病を豫防する故月經時の活動に最適當也

婦人世界雜報は殆んど每號其記事欄婦人衛生問答欄及各通信欄內に於て本品の衛生經濟に大稗益あることを賞賛し汎く紹介せられたり

其他明治の家庭、女子文壇等に於て頗る好評を博し**宮中、御殿**各貴顯紳士の家庭は勿論殊に近時**各女學校**に採用され多くの**御用命**を蒙るの**名譽**を得たり

最新式月經帶
月の帶

効用

●月經時に使用すれば如何程强い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令孃教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品なり

●赤白帶下の强き人、子宮病を惱める人等にも最も妙也

●初めて月經になりし令孃に頗る適當す俗に冷え性と唱へる婦人常に用ゐて腰を溫め子宮病を豫防するの効があります

●殊に月の帶は其製造の親切なるを以て極めて堅牢なれば長く使用し得らるべし

改正定價 (特製品金一圓五十錢、甲種金一圓(附屬品添)乙種金七十五錢送料各八錢

△送金は郵便爲替郵券代用は必ず一割增

東京神田猿樂町二丁目

發賣 醫療藥品器械勉强店 **資生堂藥局**

注意 學校其他團體にて一打以上御注文の節は相當割引可致候

女(ちの一)

女（ちの二）


本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
ふけを去り艶を出しちゞれ、くせを直し毛の發育を補く
高等香油
チエリーオイル
定價 大八拾五錢 中四拾五錢 小貳拾五錢
特効
フケ取リツヤを出しチヾレクセ毛を直す
高等煉香油
チエリーポマード
定價 小金貳拾錢 中金參拾錢
本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フエスおしろい
定價 金參拾五錢 金貳拾五錢
東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舗
高橋初次郎
電話特四一三番


於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
ヒゲタ印醬油
宮内省御用達
千葉縣 銚子港
田中玄蕃釀造

女(ちの四)

名家の令嬢

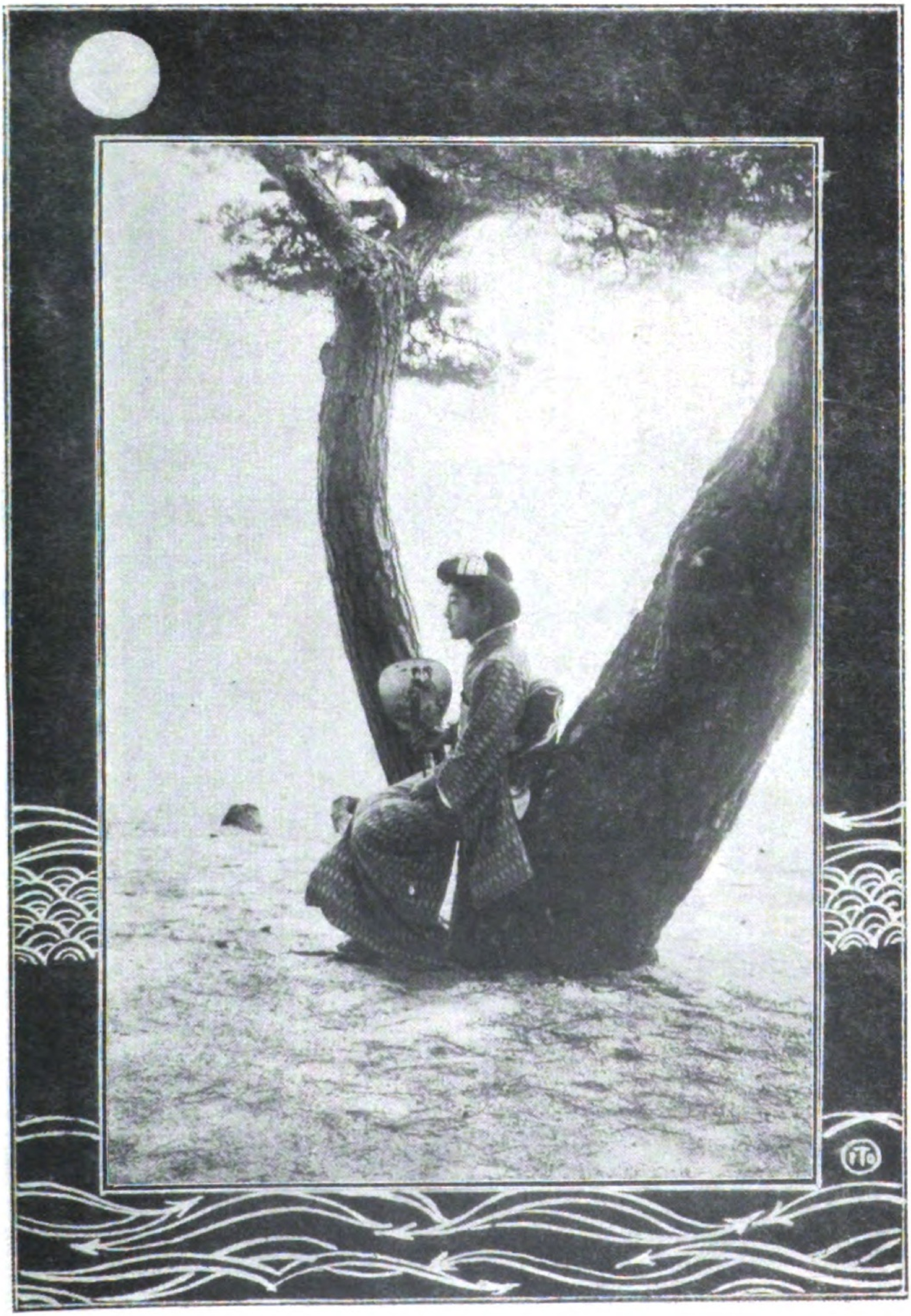






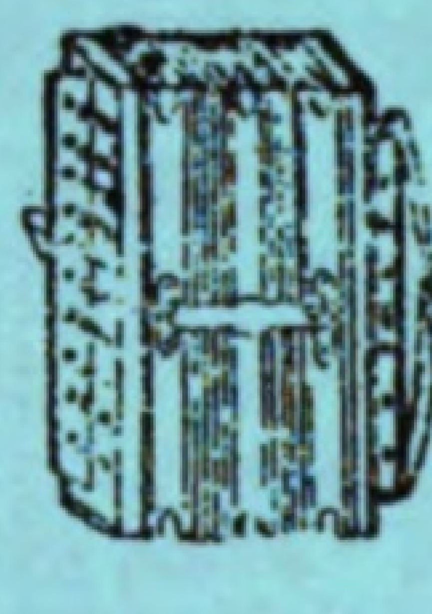
右、海軍中將加藤友三郎氏令孃喜美子
中、陸軍少將大島健一氏令孃長江子
左、男爵海軍中將宮原二郎氏令孃きくえ子

月下の佳人










和洋オルガン

音調正確 堅牢無比

西川製金 十八圓以上三百五十圓
舶來 金五十圓以上三百圓

軍樂隊用吹奏樂器

簡易的樂隊一組二十圓以上
本式六人組軍樂隊 一組二百圓以上

平圓盤大聲發音器

口徑一尺六寸 花形ラッパ付 正價金貳拾五圓以上

最新吹込音譜盤

日本曲入十吋金一圓以上

西洋横笛 ハーモニカ（獨乙製）

金三十五銭以上三圓五十銭

手風琴

金一圓三十八以上
金二十圓マデ

和洋バイオリン

和製一組二圓以上
舶來一組十八圓以上

幼年唱歌（十冊）	一冊 十銭	郵税 二銭
少年唱歌（八冊）	一冊 十銭	郵税 二銭
最新中等唱歌集	價 五十五銭	郵税 六銭
バイオリン樂譜箏曲 六段の調	價 十銭	郵税 二銭
同 替手六段の調	價 十銭	郵税 二銭
同 松風	價 二十五銭	郵税 二銭
同 椿盡し	價 三十銭	郵税 二銭
同 江の島の曲	價 三十銭	郵税 二銭
同 うすの聲	價 三十銭	郵税 二銭
同 根曳の松	價 四十銭	郵税 四銭
バイオリン、吹、箏、合奏 松風	價 四十五銭	郵税 四銭
西洋樂譜 端唄全集（一冊）	金十五銭	郵税二銭
オルガン獨習之友	價 三十五銭	郵税 四銭
バイオリン獨習の友	價 三十五銭	郵税 四銭
手風琴獨まなび	一冊 二十銭	郵税 四銭
横笛獨まなび	價 二十銭	郵税 四銭

端唄全集 内容：
其一 春雨、御所車、
其二 梅にも春、かうもり、惚れて通ふ
其三 金時、八重一重、我か物
其四 京の四季、雪は巴
其五 紀伊の國、竹になりたや、花の雲
其六 松づくし 紅葉ばし
其七 露は尾花、わしが思ひめぐる日、
其八 夜さくら、滲葉、
其九 垣根卯の花、浮草、御互に、

十字屋樂器店

電話特長新橋一二五九　東京銀座三丁目　振替口座東京一七一五八

文(りの一)

女(りの二)

女（りの三）

父「暑くはあるし
水害後の流行病騒は
あるので
生水は實に危險だ

母「**シトロン**は蒸餾水で
調製してありますから
安心して飲めます

姉「**シトロン**は
私しおいしくてヨ

弟「僕も大賛成ダ



女（りの四）


女學世界
九月號
第拾卷第拾壹號

情に激する女と冷淡なる婦人

山脇高等女學校長　山脇房子

△感情に支配され易き譯

婦人は兎角感情に支配され易くて往々大事を誤るといふことをよく申しますが、これは婦人の智識が乏しくて、理性を以て感情を抑へることができない爲でございます。御承知の如く人の心には智情意の三つの作用があつて、智で知り情で感じ、意で決行するといふ風になつて居ります。その三つは孰れも皆大切なもので、これが圓滿に發達した人でなければ眞に人格の高い人とは申されません。智力が十分でなくて感情ばかりが逞しいと、その人は非常に偏頗な者となつて、人事を全うすることが出來ないのであります。婦人に於ては特にこの弊が多いのですから、知情意の程よき調和は容易に望まれないとしても、成るべく此の理想の境に近づきたいと思ひます。

△男子と女子の違ひ

例へば親が無理を言つたとか、他人が誹つたとかいふやうな場合に、男子ですと、これはかういふ道理だから致し方がない、此れは成程自分が惡いから改めなければならぬとか、或は人が何を言つたとて一々氣にしたものでないといふ風に極く輕く考へて居りますが婦人であると、先づ感情に制せられて、なか〳〵諦めることが出來ません。そして何でも人を惡く思つて了つて、省みて成程自分にも多少の缺點がある、さうでないとしても、さういふ事を言はれるのは自分に德望がないからだといふやうに道理を分けて考へる事ができないのです。

△女の愚痴は禁物

婦人は養老といつて兩親や舅姑を大切にすることも

肝要だし、夫を内助することも大事ですが、ことに力を注ぐべき事は能く子供を育てゝ第二の國民即ち立派な後継者を造るといふことであります。これは十分の修養を要する事で感情ばかりではできません。それを覺らずに子供が少し言ふ事でも肯かぬと、家の子は性質が惡くて困りますと口説きます。又大人になつて放蕩をすると、これ程心配して育てたのにどうしてかうだらうと言つて口説きます。此等は何れも愚痴といふもので、實は自身が惡い事を知らないのです。又召使を使ふに就ても、人は使ひやうで何うでもなるのに、それを使ひきれない、役に立たぬと言つて不平を並べるのは、自ら無能を示すもので、修養ある人の行ひとは思はれません。徒に感情に走らず、十分修養をしていたゞきたいと思ふのであります。

△一方へ偏する弊害

申す迄もなく、感情は人間に取つては大切なものであります。之れあつてこそ慈悲仁愛同情の諸徳も生じ、清く美しく人世を渡ることが出來るのですが、ただ感情一方で智力がお留守になると、又種々の不都合を生じます。何事に就ても腹を立て易く言行の平和を得ない爲に、成功すべき事業も成さずに了ひ、遂には身を亡し家を滅すことになります。又親しい人が亡くなつたからといつて、餘り哀しみ過ぎては、心が眩んで却つて人に無禮を加へることがあります。つまり感情は智力で適度に抑へて居なければならないのです。

けれども餘り感情を抑へると、人に對して同情心も有たず、愛情もなく、國に害を加へる人があつても起つて制壓することもしないといふまるで枯木同様の者になります。かうなつてもなりませんから、十分注意を要します。人は何れかの極端に流れ易いものですから、つとめてこの智情意を調和させる事を理想として進まねばなりません。つまり感情は善いものだけれども、又程度に依つて惡しくもなるから、之に智識を配し、意志を以て統御してゆくべきでございます。

△冷淡なる人と情に過ぎた人

私の知つて居る婦人にまことに感情の冷淡な方があります。年は五十二三ですが、非常に情を抑へる人で何か物事を相談しても、じつと是非を考へて、直ぐには判斷をされません。その時は、さうですねえと僅に一言仰つる位です。それから翌日になつても先づこんなものでせうと言つて、餘りはつきりしたことは申されません。それでは、かう定めませうといへば、それが善いでせうと言はれるが、そんならそれで通されるのかと見ると、他の人が巧に反對の意見を述べればそれもさうです、さうしたら善いでせうと言はれるのです。斯ういふ方は、比較的に過失もありますまいし忍耐力にも富んで居らるゝでせうが、さて人が病氣であるとか、不幸の境遇に沈んだとしても、心底から同情して慰めらるゝといふことがないのです。それゆゑ其の方が困つて居らるゝ時には此方でも同情する氣になれません。冷靜に物を考へるといふ長所があり又威嚴もあるでせうが、これではつまらなからうかと思ひます。

又年は此の人位で言行は丁度正反對の婦人があります。自分の感じたことは、何處迄も仕遂げやうとするのです。性質は活潑で、自由の精神にも富み、仲々世話ずきでございます。で思つた事は遠慮會釋もなく言はれるが、感心に又人が困まつたと見ると、種々な方法を以て宥めて下さるのです。或は手紙を毎日寄せるとか、ふさはしい書物を運んで送るとか、色々慰められるのです。從つてその方が萬一不幸な境遇にでもなられると、此方から進んで何處迄も同情し、微力を盡したい心地がします。

今此の人々を比較して見ますと、情に富める人は溫い親しい交際はできますが、感情のまに〳〵動かれて熱し易く冷め易いといふ缺點があるから、的にすることが出來ません。之に反して智の克つた人はあたたかい交際は出來ぬけれども、何となく人を信頼させる所があります。どうか、この兩者の中和を得た即ち冷靜で而も熱情ある婦人となりたいものでございます。(談話要領)

政治家の内助者として二十年間の苦心

代議士小久保喜七氏夫人　小久保政子

小久保氏は立憲政友會の驍將にして黨人中稀れに見る戰士なり、少壯志を抱いて自由黨に投じ、有名なる加波山事件、大阪事件を始め爾來幾多の政事運動に關係し、屢々危地に入つて大事を成さんとしたるの人、當年悲歌慷慨の志士、今や堂々たる國士の班たり、夫人まさ子は妙齢十六歳にして嫁し以來同棲三十年、其間良人の數奇多難の生涯に伴ふて具さに艱苦を嘗む、事既に尋常婦人に超越するの資あり、而かも身は蒲柳にして羸弱風にも堪へざるの纎質をもつて壯烈の志氣屢々人を感ぜしめ、高潔なる情操よく內助の績を擧ぐ、而して裁縫、炊爨所謂家事經濟を一手に捌きつゝ良人をして內顧の患なからしめたるは天晴の賢婦人といふべし。

▲良人の血氣時代

私は十六歳の時、小久保の家(茨城)へ縁付きましたが、良人は私より一つ年下で未だ部屋住でございました、良人は十九歳の時加波山事件で入獄いたしたのでございますが、餘程以前から毎日館野の文武館の方へ出掛て居り、事件の起る間際なぞは歸宅することも稀な位で、而して折々良人と連立て來られる友人は怖い險相な青年ばかりでしたから老人も私も內々心配して居りました。その頃加波山の麓の下館と申す處に居つた友人は爆烈彈を密造して居りましたところ破裂いたして手がちぎれて了いましたが、不思議なことには栃木の鯛沼で爆裂彈を拵へて居た友人も同日同時刻に破裂して矢張手に負傷いたしたのでした。この爆裂騷ぎから警察の探偵が嚴しくなり良人の友人達は皆蓑笠姿て方々へ免れ中には重箱を包んだやうな物を提て居る人もありましたが、これは爆烈彈の入て居る包であつたさうでございます。宅へもこんな扮裝の人が可

なり出入しましたので家族の者は安き心もございませんでした。

▲火急の場合、連判狀を火に投ず

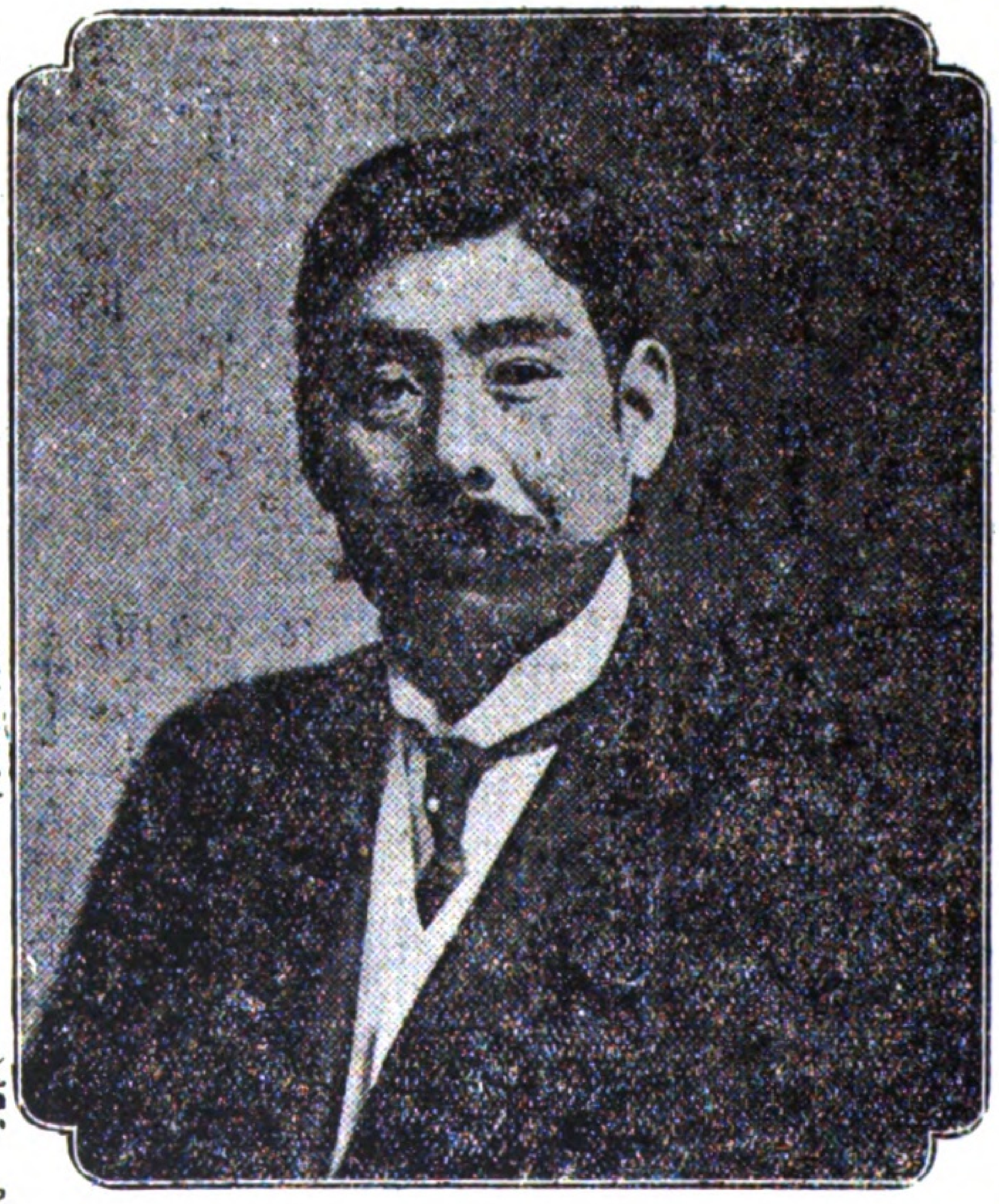
明治十七年の九月良人が拘引されました際、大勢の巡査が宅の周圍を取卷て家宅捜索を始めました刹那に私は兼て良人から命にかけて大切に預れと申して渡されました秘密の一包を兩袖の下へ藏しましたが、如何かして家の外へ隱したいと存じて裏口の方へ廻りますと、そこにも白服の巡査が立て居ります、私は勝手元の用足でもいたすやうな振をいたして草履をはいてわざとぶら〱歩いて見ましたが、何處へも隱す場所が見當らず、當惑して居りましたところ、丁度竈の下に火が燃えて居りましたので火を燃す振をいたし乍ら件の包を燒べ込で了いました。警官は私共夫婦の部屋を嚴重に調べましたが事件に關係ある書類も物品もございませんでしたので事なく濟だのでございます。後に良人が、以前の包は自由黨員の連判狀で若し押收されれば大勢の一大事になつたのだが火中してくれたのは幸福であつたと話しました。

▲平氣を裝ふ此の場の苦痛

良人が一年間未決監に囚はれて居ります間、家族の面會を嚴禁され、種々の事情を申立て乞ひましても一回も許されませんので唯食物などの差入物が通つて居る間は良人が無事であると推するだけのことでございました。良人の實母は家付の獨り娘で良人を擧げますと直に死亡いたしましたので、祖母は一粒種の良人を掌中の玉と大切にして居つたのですからその心配は一通でございませんでした、私は心を勵まして老人に力を添へて居りましたが、事に依ると死罪になるかも知れぬと云ふ噂を聞て居りましたから表面に平氣を裝ふのが却々の苦痛でございました。待ちあぐんだ一年後無事に出獄してホッと息を付く間もなく二ケ月ばかりの後に又大阪事件で囚はれたのでございます。

▲燈明で良人の記事を讀む

加波山事件の際は前々からの動靜で多少覺悟もあつたのですが、大阪事件は寢耳に水でしたから唯一寸の調べだけで直その日の内に警察から歸ることと存じて居りましたところ、その儘大阪の方へ廻され三年間未決監に幽されたのでございます。委しいことは存じませんが何でも大井さん（憲太郎氏）へお送りした爲替の受取から嫌疑を受たのださうで、お友達も大分彼地へ牽かれました。で彼地へお出になつた奥様もおありでしたが私なぞは無教育で參つたところで役にも立ませず、且老人も捨置ねませ



んから宅を守つて差入物は大阪に居る黨員の方へ送り取扱つてもらひました。入獄者の動靜は毎日の新聞に悉しく載て居りましたから何事を置てもこれを見たいのでございましたが、昔氣質の老人達は女が書の内から新聞を見ることを好みませず、縱ひ動靜を知らせて心配を掛てはと存じ、祖母や舅姑（姑は後妻）が寢みましてから薄暗い佛壇のお燈明でそつと新聞を讀みました。私が近眼になりましたのは全くこれが原因であつたらうと存じます。結婚後引續いてこんな心配が續きましたけれども老人達は私の不幸を憐んでやさしくして與ました上に世帯の方も親がゝりで居りましたから未だ責任が輕ふござ

いましたが、その後來島さん（條約改正の際大隈伯を狙撃せし來島恒喜）の事件で良人が入獄しました時は一番強い打撃を受けたのでございます。

▲私が警視廳へ引かれる時

良人が大阪の獄から歸つて二年ほど經ましてから、東京倶樂部の監督をいたすことになつて郷里の不動產を悉く異母妹に讓り私を連れて出京いたし根津に二ケ月ほど住んで居ります内、良人は神奈川へ遊說に參る留守中私に郷里へ殘した道具を取に來るやうにとのことで歸郷して用をすませ上野から俥で家に着きますと家の中は寂然として留守居に置た二人の書生も居りません、見知らぬ男が三四人火鉢を圍んで居りましたが「私共は一寸奥樣にお越を願ひたいことがあつてお迎えに來つたのです」と申しますので、これはてつきり來島さんの事件に關係した嫌疑で自分まで拘引されるのであらうと推しましたが故と落付て、「一體何處へ來るのですか」と尋ねますと、「イエナニ直其處で、決して御手間は取せませんがお寒くないやうに御支度なすつて、御俥も用意してございます」と急き立てます。私は羽織を簞笥から出さうとして引出を明けますと一人の男が直に側へ來て引出を覗きますし、便所へ立つと二人の男が附て來ました。私はこの探偵と合乘で警視廳へ着ますと、彼等は拔群の捕物を爲て來た顏付で意氣揚々と私を白洲へ連込ました。

▲拷問に遇ふ決心

警察では良人が逃亡したものと考へて第一に良人の行方を詰問いたしましたが、私は神奈川へ遊說に來つたに相違ない旨を答へました。それからこの事件に關係ある良人の友人淵岡氏がその月の十六日の晩に私の宅へ泊つたか如何かと云ふ尋ねがございました。さう申せば淵岡氏は先頃、「奥さん若し私が十六日にお宅へ泊つたかと聞く人があつたら泊つたと云て置て下さい」と、戲談のやうに言はれたので、「宜うございます十六日ですネ」と申した限り氣にも止ずに居ましたが

この用心であつたかと氣が付きまして、泊つたに相違なき旨を答へました。ところが淵岡氏は同志の者と手筈打合のため十六日の夜遊廓へ一泊したと云ふ證據が已に上つて居つたのださうで、私が宅へ泊らぬことを證明すれば調べ書が纏るので御座ますから係官は腹立し氣に叱つたり或諭して見たり長時間詰問しましたけれども私は頑として居りますと、係官は「茨城の者は實に剛情だ」と呆れ返り、終には居眠の風まで致しました。警部達は非常に憤り左樣に剛情を申せば拷問にかけるぞと威し、宅へ參つた探偵は、奥さん他人のために拷問に逢ふのは馬鹿げていますせ貴女が一言泊らぬとさへ仰れば直にお宅へ歸れるのですと耳打いたします。その内に證人として遊廓の亭主や娼妓までその場へ呼出して參り私に突合せましたので、厭でもわふでも白狀いたさなければならぬ場合になりましたけれども、私の申立一つで一人の命にも關係するのですから拷問に逢が獄に投ぜれやうが、約束を破るまいと決心して居ましたので少しも怖いことはなくなりました。夜に入りますと警部は私を引立て暗い一室に連往きましたから此處で拷問にかけられることゝ存じましたところ、よく考へて見ろと申して長時間座せられただけでした。廣い室内に一つの燈火もなく、遙か向ふの廊下の角燈を置て側に番人が一人居るのが見えます。深夜この暗室に獨座させられた私



は良人を思ひ親を思ふて悲感交も迫り、世間の罪人が悔悟して白狀いたすのも尤の事と存じました。二時頃に警部が參つて床板を踏ならし未だ白狀せんかと喝する聲が夜陰を破つて物凄く胸にしみわたるやうでした。併し私の度胸は全据つたのでございます。その内打良く良人の友人の辨護士がお兩人私のことを聞知つて此處へ驅付け、婦人を深夜まで留置するのは不法であると論じて下さいましたので、一旦家に歸されましたが、その時は巳に良人が囚はれた跡でございました。

▲始めて出京した實母の驚き

私が警視廳へ牽かれました跡へ實家の母親が末の弟を連れて出京しましたところ直に警視廳へひかれ小久保の所在を尋ねられましたさうですが實母は私の囚はれて居ることも知らずどうなることかと驚いて居る内、家に歸され暫らく寢んで居りますと、夜半に玄關で小久保の聲がいたしますから歸つて來たのかと存じて立出る内に最早姿が見なくなりましたさうですが、この時良人は拘引されたのでございます。これより前に良人は留守中の出來事を存せず神奈川の遊説を終つて歸京しますと、新橋に友人が待受て險呑だと忠告しましたので、友人の家に立寄て和服を借り、(入獄中洋服は不便なので)一番必要な鼻紙と手拭を懷中いたし何時拘引されても差支ないやうに用意して須賀町の自宅へ入り、待設けた探偵に身を任せたのでございます。良人と淵尾氏が囚はれました後は家宅の包圍を解かれましたが、一時は數名の警官が本鄕と根津の境に網を張て私共へ入りさうな風采の者を悉く追跡すると云ふ騷ぎでございました。この入獄は六ケ月でございましたが、死罪の評判が專らでありました上に、鄕里に居た時と違ひ家の財政も逼迫して居りましたので内外の心配は非常なものでございました。

▲良人が壯士に斬られた時

今日までには實に樣々の變事に出遇ひました。明治

二十一二年神田に住で居りました頃、良人が大同團結の大會に出席する早朝のことでございましたが、良人は書生一人連て直近所の洗湯へ參り自分が先へ戻りますと、宅の門前で壯士に顔から胸部を斬られましたが宅へ驅込だら皆が狼狽するであらうと考へて傷口を抑へながら神保醫院に飛込み、致命傷か否かを院長に尋ね大丈夫と言はれたので、それでは療治してから家人を呼でくれと申したのでございます。宅の方ではこんな騷ぎを少しも存せず何時もお湯は早いし特に出先であるのに何故手間取るのであらうと存じて居ます內、門前で何だかパタ〳〵人音がいたしましたのも喧嘩だらう位で玄關に居た五六人の書生さへ心付ずに居りました、その內神保院からの報せに驚いて書生と共に飛で參りますと、良人は顔から胸を繃帶して氷囊を當て寢臺に仰臥いたし周圍には醫員が一ぱい取卷て居ります。私も書生も危篤の容體と見て取り不思聲を擧て泣出しますと、良人が馬鹿――と大聲で叱り付けました。この傷あとは唯今以て殘つて居ります。

▲病苦を忍んで家事を働く

失禮なお話でございますが私は結婚の翌年から卵巢水腫症にかゝり追々腹部が大くなりましたけれども、その頃は未だ醫術も進んで居ませず、老人達も手術を危ぶみ信心を勸めますので、その儘姑息の養生で凌いで居ましたが、二十餘年目に濱田先生の手術を受け積年の宿痾も忘れたやうになりました。併しこの病氣のため遂に子供一人も擧げ得ず、家事を働くのにも却々難儀いたしました。政治家の內幕は私共ばかりではございますまいが、日數の知れぬ遊說に出掛る時なぞ宅の手當は丸でございませんから、どうにか遣繰して居らなければなりませず、それでも恐ろしい借財だけはいたしたくないと存じまして、他に藝能のない私はこの四五年前まで下婢を賞ずに通しました。而して鄕里から賴つて參る苦學生をなるべく拒まず置くやうにいたしたのでございます。併し來客も可なり多いのに男學生は臺所の手助にもなりませず未だ水道も引けぬ

頃でしたから多勢の炊事、洗濯等手一つで働きますと毎日身體が綿のやうになりました。買物にも出なかつた私を存じて居る郷里の人達は私の手を見て氣の毒がる位でございましたが、持病を忍んで餘り勞働いたした爲に腹膜炎を起して危かつたこともございました。

▲衣服の新調は思ひも寄らず

財政困難時代の良人の衣服には隨分苦心いたしました。どうかして體裁だけは崩させまいと工夫算段いたす針仕事を人に頼み兼ねますのでつひ寢む間が少くなりました。こんな風でしたから自分の常着一枚も新調したことなく嫁入時に持て參つた物を染直しては間に合せました。今日でも未だ衣服の新調なぞ思ひも寄りません。つまり私が外出嫌ひの所爲もございませう。良人は留守勝でございますのに選擧地の方々なぞが來られた際、私のやうなものでも居りませんと失禮になると存じますから始終家に籠つて勝手働ばかりいたして居ります。まあこういふ譯で東京へ來てから二十餘年私はまだ一度も芝居見物したことがございませんから劇場とはどんなところか知りませんと言つては笑はれました。

▲謹直家に豹變した良人

良人は若年の頃は御酒をあまり頂きませんでしたが交際が弘まるに連れて段々酒量を增し從つて宅へ歸らぬ夜が多くなり、世帯の方とこの方との私の心配は却却お話し盡せぬ位でございましたけれども、當節は丸で人間が變りまして御酒も煙草も頂かず、どんな場所へ參つても十時までにはキチンと歸宅いたし、暇さへあれば書見をいたして居りますので皆樣に方正家と目されて居ります。お前の苦勞した甲斐があつて今日少し樂になつたと良人から申されます度に私は唯神の冥助であつたと感謝いたして居ります。（以上夫人の談話婦人記者記す）

批評眼で見た日本婦人の服裝

香樹女史

▲批評眼

服裝の事に就ていつぞや（七八年前）竹柏會の席上で大塚博士が『衣裳美』と云ふ題で御講演をなさつたことがございました。美學と云ふことを唯今ほど人が口にいたさない頃ではありましたが、極めて通俗にお話し下さいまして、西洋の婦人服は曲線の美を多く現はして居ること、日本服は縦の線が多いので運動の美が專らであると云ふやうな大體なことは、幾らか私共にも分りました。唯今ではもう色彩の配合とか線とか申すやうなことは專門家の御講義や御本が澤山御座いますから、大概は御承知で、それ／＼御工夫のことゝ存じますが、それらの方々は芝居なら役者の方でございますから、何もしらない私は見物の側になつて、ほんの岡眼八目のところを申上げて見ませう。

▲東西女服の形

長い歴史で段々改良變遷して來た當今私共の着て居る日本服は隨分手輕な便利な而して美しいものであると存じます。改良服なぞと申しても、諸方面から不足が出て便利ではありながら彼のリボン締の筒袖なぞは行はれやうとは思はれません。以前梶田半古さんの御考案になつた改良服の模形を拜見しましたが、天平式と朝鮮婦人服とを一處にしたやうなものでした。近頃或本で朝鮮の婦人服は良く出來た風俗だと云ふ學者のお説を拜見しましたが、東西の女服を折衷いたしましたら先づ梶田さんの御考案のやうになるのでございませう。こんな良い改良服でも實際一般に用ふるとなりますと、今まで持傳への着類を根本から作り易へなければならぬと云ふ臆劫な一階段がございます所爲か矢張物にならずに了ひました。格別缺點もない唯今の日本服をわざ／＼首を捻つて改良して見る必要もなさ

さうですが、時代の進歩に伴つて女も務が殖てまゐりまして、活動には便利に、美術としては世界の婦人と見くらべられますから、室内勤務時代のまゝでは、中流の者でも社交其他の場合に滿足が出來兼るのは無理はございません。先づ形の點から公平に見ましたら、宴上の服裝は別として、普通用の和服は支那に勝る位のところで、(支那服も盛裝は大層立派ださうですが愛では形の點丈を申ます)、到底東洋以外諸外國の女服のやうに變化自在な天女式にはまゐりません。形に一定の制裁がありますから、衿と模様の一方で僅かに眼を易へてゐるのです。それが洋服であると眞白な麻の切地だけでも只その仕立方次第でどんな複雜にでも又單純にでも出來ます。肩が張て居ればそれを利用した襞積を作り、袖の形、胸の形、その他腰や裾の切地の使用などは變化自在十人十色で、工夫應用の範圍が誠に廣うございます。尚髮形でも一定の形式になづまないで、生際が横に曲つて居ればそれを活して使ふ細工も出來ますし、身體の缺點を利用する點は實に羨しいやうです。形の點から申しましたら西洋の方が確かに進歩して居るに違ひなからうと存じます。

▲袴について

女子には袴の方が良と云ふ御男子方のお說を度々承りますが、男子の袴は今でこそ襠高一通りで民間禮服丈に用ひられて居りますが、昔は身分に應じ儀式盛裝、實用等それ〴〵幾通りとなく出來て居りまして上は長袴から下は裁附、踏込まで申分なく行屆いて居りました。女子のは僅かこの頃殿上の切袴をそのまゝ地下の娘風俗に移してきたのですから、双子の縞は素より無地の染拔紋附の着物でも幾らかはまらぬ處があります。(紋付でも織色地のぬい紋なら宜しうございます)。彼の濃色(海老茶)の袴には大きい花形の模様の地紋なり綾なり又は友禪の衣服に黑い靴をはいた處が美しくて整然として最も似合ひます。男子の袴はざつと數へましても二十通りもありますが、之は追々必要に應じて工夫せられたものと存じます。女子のは未だ形

はたつた一通りで、子供も大人も學生も老婦人方（女敎師方）も、ほんの色丈が變つてゐるので、晴の儀式の時も運動の時も何の工夫したところがございませんから、どうも思はしき形が出來ませんのでせう。小紋の着物に黑の袴をはいて高下駄などを穿つたのを見ますと何か工夫をいたしたくなります。尤も學生用としては勿論、私共でも子供なぞを連れましてどんな草原でもベンチの上にでも自由に惜氣なく立居が出來、汚れゝばその儘洗ひますし、裾の心配もなし、活動用旅行用には實にカシミヤの袴に限るのでございますが、慾には最少し廿世紀の工夫が熟して優美を加味した者が出來て普通の風俗になればよいと存じます強て形の上の不足を申せば、あの男子と同樣な形では縦の線があまり無味で、腰部以下の動作が全く沒却されるかと思はれます。その上に女子の特長のない尤も平面な脊中が丸出になり、三つ襟の四角な線と、袴の紐の横斷線と、又



その下の直線とで丁度郵便局のお印のやうになつて居るではございませんか。白と赤との官女風は俗に水引姿と申して、色のよい爲か美しいとばかり見えますが縞の平民服だと淋しい物足りない感が起ります。その所爲か大方の場合に被布とか羽織とかを召すやうですが、例の有職模樣の掛のやうな落着がありませんから無味は一層無味になります。(被布ですと前の形が餘程ようしいやうです)。それであの後の變化をのぞみ、袴の皺を美化いたしますと矢張前述の天平式(袖無樣の上着が袴腰にかゝつて居る姿)か西洋式になるのでございませう。梶田さんのも後によほど御工夫があつたやうに覺えて居ります。

▲對色の美

先達て或高貴の會を拜見する機會を得まして、その折日本の流行を應用した西洋貴婦人を見ました。胸と背中は白レースの透し、服全體の地色は鼠琥珀で、所肩から位置を揃へて處々に同色の渦卷模樣を縫取してあるのです。他の色は少しもありません。帽子は黒で薄緑の薔薇の大輪二つを挿んでありましたが、淸楚の中に得も云れぬ花やかな長閑な感じがして、五十路に餘る半白髪の老婦人でありながら些とも冬枯の淋しい思ひがいたしませんでした。又餘程以前、或訪會で某夫人が天平式の束髮で耳の後の處へ黒いリボンを結び無地黒羽二重の二枚重ねに、純白に黒すぢ入の博多帶を結んで、襦袢の襟は黒天鵞絨に燃立つやうな朱の亂菊を縫取してありましたが、如何にも晴々した感じを與へました。誰にも似合ふのではありませんけれども、これらは色彩の統一や和色對色の工合を旨く工夫せられ、多勢の中へ出るには巧妙な、金圓のかゝらない取合せであると未だに目に殘つて居ります。幕府中世の頃、江戸の一富豪の妻女が大内の宴に列する際、その富豪は妻女の服裝について意匠を光琳に賴みましたところ、光琳は色の調和の極致のものとして禮服着替とも黒白の配合を撰んだと申すことが書物にかいてございました。凡て對色は顏色を浮起し、和色(灰色を帶

びたもの）は顔色を沈靜させるのでございませうが、何れを撰びましても何處か注意を一ヶ所に纏め、色でも模樣でも他はそれを少しづゝ散じたもの、或は受た氣味合のものを用ゐたのがよいやうで、人體を一つの畫と假定しますとどうもこんな工合にいたしくなります。併しこれを字通りに御承知下さつては困ります。爰に申のは極めて廣い意味でして、襦袢の襟が江戸紫であれば、袖はお持合の中でそれを譜る色假令ば薄紫を取合せるとか、赤の側にとき色、萠黄の下に鶸色といふ風に取合せますと、上の色をうける氣味になりますから、離れ〳〵になりませぬ。西洋服は帽子と揃へてこしらへる場合が多うございますから、誠に都合が宜しうございますが、和服はつむりの物から帶も襟も衣服も揃へて買つて居りませんので、一寸のことで折角のお召物に活き死が出來ます。

▲鈍色は無情寂寞の色

今年の四月八日に釋尊降誕會が國技館にございまして參つて見ましたところ、男子と女子と半分づゝ位の人で、一人々々を見ますと縮緬紋付、朱珍の帶で立派な方々なのでしたが概括したところでは少し眼についたのは黒の羽織位のもので、男も女も一樣の鈍色づくめ、顔の色も衣服の色も一面の灰色に混合して見え丁度五月雨の空か擂鉢で交せ合した胡麻ゐへのやうな感じがいたしました。奥床しい内端な色調ではありませうが、對色の映がございませんので、廣い晴やかな所を惜いことに目に飽が來て汚い一種の色ばかり頭腦に印象されたのでございます。鈍色は無情寂寞の色と申すことでございますが、時代の進歩に比べますと當節の衣服は暗色が克ち過はいたしますまいか、或美術家の先生に今樣美人を描くと卑しく見えて、古い風俗（豐國、國貞、以前）をかくと品良く見えるのは何處の加減でせうと伺ひましたら、その時代には社會の色調が進歩して居つたからだと申されました。又泉鏡花氏がこの頃の女は櫻の花の下に立て居ても眞黒で似合ないと言はれました。先日來遊された印度のバロダ王女

は日本婦人の服裝は男女の差があまり見えないのが違歟だと仰せられたさうでございます。(素より途上の御所見のことでせうが)。併し日本は花の色にも外國のとは違ひ着付のある奥床しい處がございますから、原色その儘では人種の皮膚にも似合ひませんでせうが、當今のやうにくすむのも如何でせうか。儉約とか質素とか云ふ思想の色が出て來たのかも知れませんが、地味自慢、質素自慢もやはり虚榮心で味噌臭い物ださうでございます。この流行も極端に往てから戻るのでせう？かやうに衣服に暗色の流行する割合には帯は充分大模樣になつて居ります、つまり鬱氣が何處かに發展致さなければならない道理と見えます。何に依らず劇出に



抑へ付けられると、繼母に睨まれると同樣妙にすねたがります。質素、儉約などの心持は教育の効で、自覺的に働かねば結果は挙りませぬ。唯抑へられますと、上を汚く見せながら潜と金目を光らせる仕掛になりは致しますまいか。

▲隠れた金目

成る可く目立ないやうにと心懸るのは一面には大人しいやうですけれども、それは人間の自然の情を推へて我慢をするのですから、目立たぬ色の何れかに非常な賑りが潜んで居ります。これは徳川末世の例の勤儉の御趣意に壓制された餘弊が殘つて、隠れた詰らぬ處に費を盡し、裏小袖の内證賑りが流行となり競爭となつた因襲かと

も默はれます。それから日清の戰爭後に何時までも集り癖がついて困つた處から、其後の日露の役後には特に實業とかいふ方の聲が高く、或側には報德宗が盛んに唱へられたりいたしました。そのためにこの暗色の流行が七分を占るやうになつてたのでせうが、女の眼から見ますとちつとも倹約になつては居りません。長襦袢に少からぬ金を費やし、下着や、下着の胴や、裾廻しなどと云ふ目立ぬところに大分競爭の頭腦が要るやうになつて居りますが、こんな風に頭腦をつかつた服裝は、日本座敷の小さなしめやかな背景には似合ひませうが、それにしても神經質の眼で能く〳〵見分けなければ分らないやうに、縞柄や地質、下着帶留、襦袢の襟なぞと各々離れ〳〵に鑑定してから漸くその粹と金目に感服しなければならぬといふ工合では、天眞爛熳な西洋婦人に對しても何だか弊なやうでございます。

▲夏の化粧、を永く持たせますには、矢張、下地の掃除が充分に出來上がつて居らなければならぬのは申すまでも御座いませぬ、そして平日の御顏の手當を等閑になさらぬ樣に願ひたいので御座います、それにはお風呂に召ます際には必ずマッサージスープをお顏に塗り暫く其儘にして置いて、それからヘレスブランシェでお洗ひになり、尚ほ小皺のある處はフェースルーラーでお洗ひになると輕便で而して大へんに綺麗になります此マッサージスープは一二回は一寸肌が荒れるやうになりますが、それを少し御辛抱なさると、後には肌が大層濃かになつて參ります。

▲それからライラック(化粧水)を附け、ポンピヤンマッサージクリームを塗つて、シヤミスキーで好く拭き取り、其上に粉化粧を施し、掌で好く均し、水白粉を附けて、其上にコールドクリームを極く少し掌で好く塗り、更に又粉化粧を致します、爾うすれば假令汗をお掻きになつても一日位お顏のお化粧の亂れるやうなことは御座いませぬ。

權威ある子供の育て方

小此木ドクトル夫人　小此木みつ子

耳鼻科專門の大家小此木ドクトルの御家庭は、專ら簡易質素を旨として、精神修養に重きを置き、ことにお子樣方の御敎育には最も御注意されることをきゝましたから、記者は麻布六本木のお宅へ御伺ひしました。

小さいお子樣の大層おむづかりになるお聲を聞きながら、廊下を廻はつて導かれた處は、西洋風の建物に疊が敷かれた座敷。——座敷といつてもペンキ塗の窓と窓との間の白壁に山水の一幅がかゝつて居るばかり、他には何の裝飾とてもなく、窓の下に一閑張の小机が持ち出されて、其上に百科全書が開かれたまゝ、無雜作に置かれてあるなどは、何方かの御勉强部屋らしくも御座います。次の室との間の仕切のものが取りはづされてあつて、先づ目につくはミシン臺でした。夫人は家族のお召物を決して仕立屋にお賴みにならないで、悉く手づから御仕立になり、そしてミシンをお稽古なして、お子樣方の洋服はすべて御自分で御裁縫なさるといふ事です。ミシン臺の傍に圓いテーブルを据えて、若い男の方が熱心に勉强して入らつしやいます處へ奧樣がお見えになりました、お年の頃は四十前後、白絣に黑繻子のお帶の御服裝。いさゝかお取りつくろひ遊ばした御樣子もなきに、何處となく容儀のとゝのふたお姿品よく。

△家庭講話會の成績

近頃の雜誌の訪問記事を見ると、何處の家庭も模範的のやうですが、ちと模範的が流行し過ぎますよ。私の家なども決してそんな立派なのでありません。何うも一寸訪問して上部丈けを見、夫人の體裁のいゝ話をきいたばかりで、直ぐ模範的家庭は驚きますね。其實內部に入つて見ると隨分ひどいのがあるやうですよ。

私共ではたゞ言葉や儀式でなしに、何うか家の中に生命ある空氣をこしらへたいと心懸けて居るのですが、それがなか〳〵出來ません。

家庭講話？あれは餘程早いことで、本郷に居た時分やつて居ました。私共では皆の者が毎日忙はしい働きをいたして居りますから、せめて一週に一度位は何か爲めになるやうな御話でも聽いて精神修養の助けとしたならばよからうといふ考で始めたのでした。漢學、歴史、通俗理科といふやうなもの、偶には牧師を招んで説教をして貰ふ事もありましたが、とにかくそれ〳〵先生を願つて、毎日曜日の夜、女中も書生も家中一緒になつて講話を聽くことにして居つたのであります。處が面白いものは皆興味をもつて聽きますけれども、論語の如きは朱子註の至極堅くるしい御講義なので、なかなか皆の頭に入りにくゝ、つひ居眠りでもするか、いたづら書でもして



居るといふ風で、眞面目に聽いて居るものが極めて少いのです。で、かういふ風では講義をして頂く方にもお氣の毒だからといふので見合せました。其代り家の中には娛樂といふ事を絶えさぬやうにして置きたいと存じて矢張り一週に一度、琵琶などの品のよいものを聽くことにして居ります。

△勤儉貯蓄の奬勵方

私共は貧乏ですから、子供にも成る丈け奢侈に流れさせないやうにつとめて居ますが、先年詔勅が出ました時、ある學校では子供の服裝を質素にしてよこせと家庭へ通知されました。いかに學校で質素にせよといひきかせても、家で家内の者が奢つて居るやうでは何にもなりません。勤儉貯蓄の風はまづ家庭から起るなければ駄目です。本當ならば子供を學校にやる時は、出來る丈整然とした服裝をさせて、心持を神聖ならしめるといふことが必要なのです。それをもし學校に行く時丈けは粗服を着けて、學校から歸ると立派な着物に着更へるといふやうな行爲の上に裏切をして虚飾の質素をするやうになつては、奢侈以上の害があります一體今日の家庭には奢侈が非常に流行して居ります。婦人會などは隨分華美に流れて居るので、私共のやうな金の乏しい家の婦人は段々出難くなつてまゐります。何うも日本の婦人には財産や夫の地位に依つて威張りたがる人が多いのは困つたものですね。

△勅任の奥樣と奏任の奥樣

先日米國に留學して居る妹から斯んな手紙が參りました。始めてワシントンの方へ旅行した時、お友達の紹介で大統領夫人に面會しました。しかし旅行服丈けで着更も持ちませんから、あまり無理と存じて御斷り申上げました。すると先方では、それでかまはないから是非來て呉れとの事でした。それで官邸へ伺つて見ると、大統領夫人自ら出て丁寧に迎へ入れ、應接室で手づからお茶を煮てねぎらはれたと言つてよこしました。大統領夫人の身分で日本の留學生に對して、この

やうなもてなし方をなされるといふのは實に感心な事だと思ひます。それが日本ですと、奏任の奥様が勅任の家に往くと非常に肩身がせまいとか、そんな思ひをするとか、させられるとかいふ事ですが、どうも驚きますね。何も夫の地位を夫人同士の交際にまで及ぼして階級をつける必要もありますまいに。日本婦人のこんな階級的思想は何うしても打破しなければなりませんね。偶に日本の貴婦人に平民的の處があるかと思へば、まア慈善芝居の周旋をする事か、さもなければ待合の女將と交際があるといふやうな實に恥かしい事位なものです。この邊の方にはチト米國の話などを考へて頂きたいと思ひます。



△親に盡すか子に盡すか

けれど日本婦人の婦徳は昔に比べて決して衰へては居りません。世間では無暗に婦人の德操が廢れたやうに申しますけれども、これはたゞ世の中の噂が盛んになつたといふに過ぎなかろうと思ひます。日本の女性は先天的の訓練がよく出來て居るから、さう容易

く墮落はしません。何分過度の時代ですから、色々思想上の相違の起るのもその樣に見られる原因かと思はれます。思想上の相違の事を申しますと孝行といふ事なども餘程變らねばならぬでございませう。子が親に孝行をするのがよいか、親が子に盡す方がよいかといふ事は容易く斷言出來ませんが、社會の發展上からいへば親が子に盡した方がよいやうです。此の事の爲に今日どれ程家庭に悶着を起して居るか知れません。何れ段々と思想も統一される事でせうが、この點は西洋の方が餘程都合よく行つてゐるやうでございます。西洋の家庭が比較的圓滿に行くのはいろ〳〵な理由もあるが、其一つは西洋ではたとへ進化論者でも習慣的に神を崇拜する。從つて理想が同一であるから、家庭をなして行く上に非常に好都合ださうであります。

△子供は別居主義

私は十三才を首に六人の子供を持つてゐますが、子供等の部屋は一緒にせず、六人とも別々にしてあります。これはおなじ兄弟でも性質は非常に相違して居りますから、一緒に置くことは六つかしくもありますし相互のためにまたよろしくないやうに思はれるからです。そして子供達の事には親でも女中でも大人はすべて手をつけない事にしてあります。隨分取り散らす事などあつても、強ひてそれを片付けさせたり、叱つたりはいたしません。物の整理は子供の趣味性が發達して來なければ起らないのですから、それを無暗に大人が手出しをして、彼此と世話をやくのはまことによろしくない事です。

主人は毎日病院へ出懸けて研究とか讀書とかいふ事は其方でいたしますから、此方には特に書齋を設けません。又私も始終家内のいづれにも行き渡つて居らなければならぬ譯ですから特に自分の部屋といふものを有ちません。客間といつても別にこれといふ立派なお座敷も用意はなく、お客樣が御出でになれば矢張り此室へでもお通しするのでございます。

旅行と風俗觀察

男爵夫人　目賀田逸子

▲裏店の探險

曾て、私は主人と朝鮮に參つて居りました間、獨りでよく貧民街を觀察して歩きましたが、却々參考になることがございました。最初言葉の分らぬ内、純粹の朝鮮街へ奥深く入り込んで返り道に迷ひ、道を聞きたくも言葉が通せず、困りきつたことがありましたが、二十種も言葉を覺えましてからその心配はなくなりました。彼地の下等街は道幅が狹く、大抵東京の下町邊にある露次位で、隨分臭うございますが、何處の家へ默つて入り込んでも、婦人達は少しも驚きませんで隅隅まで快く見せるところは無邪氣なものでございます。併し男子ですと厭がるさうです。私は何時も硝子壜だのお菓子の殘りだのを袂へ入れて參つて女子供に遣つたのですが、大層悦びまして、私が戸棚や抽斗を明けて見たりしても、平氣なもので、私の時計の鎖だの襦袢の袖だのを引張つて見ては何だか喋舌合て居るのです。

▲居酒屋の珍味

彼地の居酒屋は日本のより御馳走がございます。日本では人參、蒟蒻、燒豆腐に鰊位が御定りですが、彼地のは肉類が澤山です。凡て上食用の廢物を利用するので、牛の腑臟だの羊の膓なぞを悉皆ゆで上げてズラリと並べてあり、土竈の大釜には牛や豚の頭をその儘入れて幾日も煮出した例の萬年スープがグラ／＼沸いて居ります。で顧客には饂飩丼位の器へ御飯を入れて前のゆで物を並べ、スープをかけて二三度絞り醬汁と唐辛子を加味して出しますが丁度日本の牛飯か五目飯のやうなもので一杯拾錢づゝ、處によると五錢のもあります。夏は列べた食品に蠅が眞黑にたかつて居りますが、沸騰した萬年スープを通しますから、自然消毒が出來るのです。顧客は矢張その日稼ぎの勞働

者が多く、皆土間へペタリと坐つて丼を低い臺の上にのせ匙でかき交せながら食て居ります。この丼飯は見かけは惡うございますが、風味は却々宜しく、滋養分にも富んで居るやうに思はれました。こんな居酒屋にも女の給仕人は少しも出て居りませんで、暖簾を隔てた内房に閉こもつて仕事を爲て居ります。

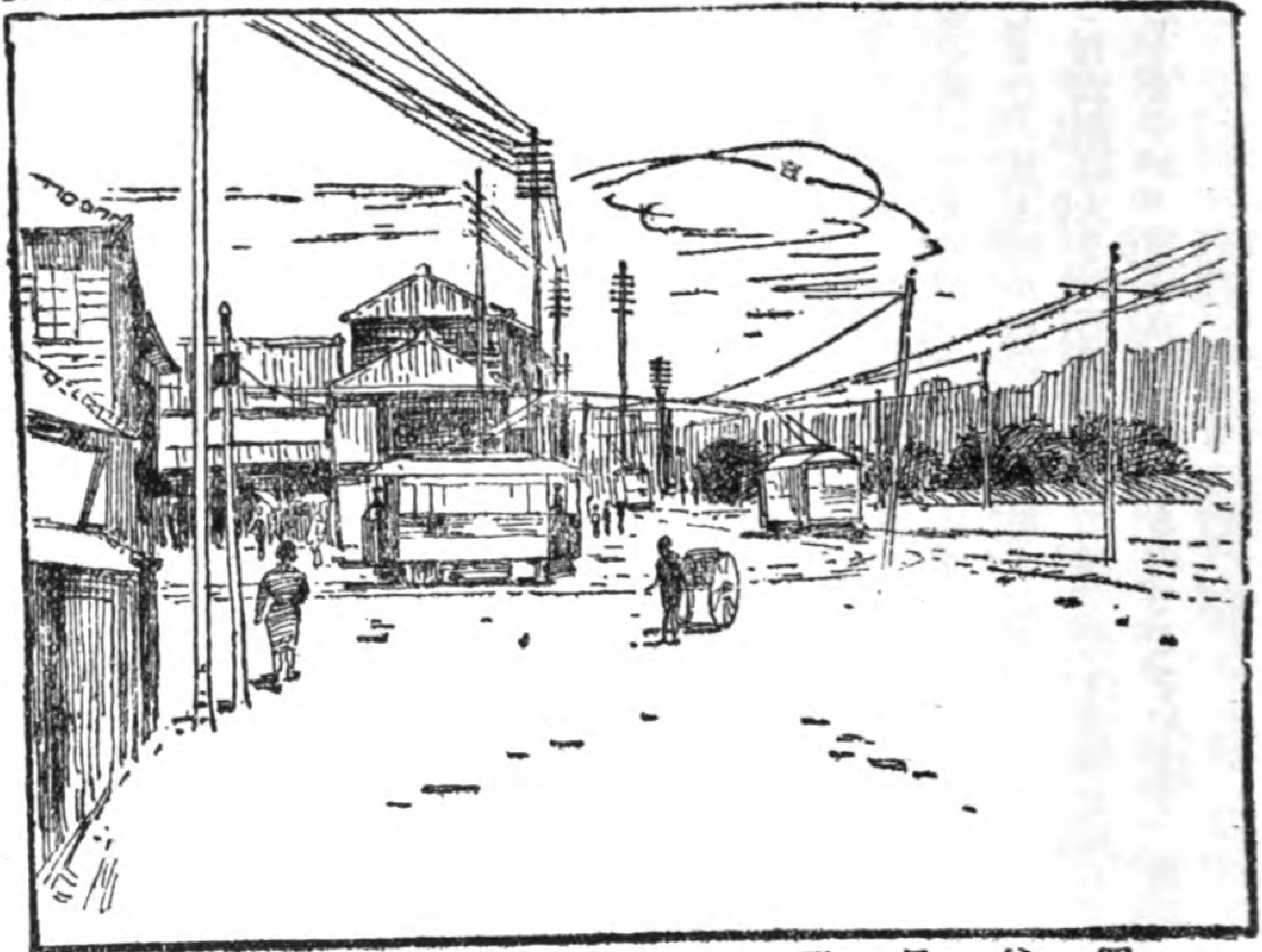
▲子供の腹は太鼓のやう

彼地の下等社會の子供は燒るやうな炎天に何も被らず男女共眞裸で外を飛び歩いて居りますが、そのお腹の大きいことゝ申したら大したもので、太鼓か西瓜のやうに張切て居ります。これは何の家でも湯茶を沸さず子供が水を多く飲むのと、お粥のやうなどろ〳〵したものばかり食べて居ます爲に體はやせて、腹ばかり張るものと見えます。私は試に子供のお腹を輕くはじいて見ましたらポン〳〵と鳴りました。彼等の弱いものはズン〳〵死んで丈夫なものばかり育つのであらうと熟々哀れに思ひました。彼地の子供は皆玩具を持ちませんで、往來に落て居る空罐なぞをいぢつて遊んで居りますから、人形なぞをやつても怖がつて泣き出して了ひます。

▲白粉も妙薬となる

私が或時貧家を訪ひました折、顏の醜く爛れて居る赤兒が母親の乳房に縋つて居ましたが、その母親も赤兒のが傳染して胸から乳房の邊が赤裸になり難儀して居るのを見ましたから、早速有合の粉白粉を持て往て抹布することを敎へましたら、手を合せて拜みました程經てから赤兒の祖母さんが繻子の被衣をかぶつて私方の勝手口へ參り、先達のお藥が大層利きましたから何卒今少し頂きたいと申しました。其後私が見舞ました時は皮膚が悉皆綺麗になつて、家族一同靈藥の奇効をくり返して居りましたので。可笑しくもあり氣の毒にもなりました。

▲漬物で貧富が分る



四谷見附

彼地の漬物の仕方は巧妙なものでございます。白菜を切つて洗ひ、唐辛子、胡瓜、大根、その他の野菜と魚肉まで卷き込み、鹽をふつて大瓶に入れ、壓は少しも載せずに共ぶたを確かりして永い間寢かして置くのですが、實に旨しい香の物が出來ます。但し唐辛子が澤山ですから、私共が食べる時には、ハンケチと鼻紙を具へて涙をふき乍ら食べなければなりません。而してこの漬物瓶は味噌瓶と共に各家の入口の前側へ幾つも並べ、夜もそのまゝ放擲してありますが、雨のない土地ですから心配はありません。そして漬物の多寡と良否に依て貧富が分ると云ふ風習ですから、皆競ふて良いのを拵へて居ります。私が訪問しますと漬物や味噌を甞めて見ろと申しますから、一寸味つて褒めますと、にこ〳〵喜んで居りました。

▲韓國獨特の洗濯法

朝鮮は水の少いところで、田舍へ參ると、掘井から少しづゝ沸く清水を一人が漸く汲み上げると、他の一

人はあとから沸くのを待て居ると云ふ風で實に氣の永いものでございます。木材も極乏しいので大きな夕顔を截り割つてこれを盥にも水桶にも米磨桶にも兼用して居ります。洗濯は汚い下水に莚をひたし、その上へ洗ひ物をのせて（洗濯物は白ばかり、多は白キヤラコの綿入を直に着まして丸洗ひします）石で摩り、上ゆすぎだけに僅かの井水をつかふのですが、下水にアンモニヤを含んで居ます所爲か、眞白に綺麗になりますそれから彼地は竹も少いので、棹竹を用ゐるのは上流ばかり、縄乾も一部の人だけで、大抵は地面へ、ベタ〳〵置て乾すのです。海城から京城へ參る道などは、地面へ乾した白い衣服で、一面に絨毯模様のやうに見えます。朝鮮は極乾燥した土地ですから、地面へ洗濯物を列べても砂が一寸附くだけで、拂へば直に落ちてしまひ、風も吹かぬので飛ぶ患もございません。乾上つた衣類は大きな石の上へ置て槌でたゝき皺を延して居りますが、實に立派に仕上るのでございます。對馬邊では女子を朝鮮へやつて洗濯を覺えさせるとか聞きました。

▲韓國婦人の長所

彼地の下流婦人は物を提げる代りに頭へ載せますし子供を負ふにも腰の處へひろい帶で結び付け、體を曲げませんから、頸は皆まつすぐで太く立派でございます。而して一般に男子より良く働らき、夜分なぞは例の洗濯物仕上の砧の音が小夜更るまであちこちに聞えます。私は萬戶衣を打つ聲と云ふのを思ひ浮べて床しく感じました。貧街へ入りましても日本の裏店社會のやうに口うるさく女が喋つて居りません、それから私の良と思つたのは女の腿引でございます。いかなる貧婦でも腿引を二重にはいて居る、炎暑の時でも袴の下にチヤンと用意して居ります。これに比べると日本婦人は實に不用心なもので、立派な支度を爲てハイカラのボアなんぞ首に巻付けたつて、御互に下部の用心がありませんから、若し乘物が引くり返つて轉がり落ちた時には、赤恥をかゝなければならず、高樓や船梯子

の登り降にも何の位心配か知れません。第一往來で脛が見えるのは實に恥かしいのですから、彼地へ往かれる婦人方には長い靴下をはくことを御注意致して居ります一體日本服はお金ばかり掛つて見榮が爲ないのには閉口でございます。朝鮮服は五十圓かけましたら立派な物が揃ひます。私共は王妃に謁見の際には束髪に裾模樣で出ましたが、思ひ切て派手にしても宮女達は少しも目を附けませんで、縫のある支那婦人の服を賞美すると云ふ工合で、交際服には日本服は實際制が悪るいのです。彼地の貴婦人は外の空氣にふれませんから、時としては妾のあらや、嫉妬話を持出すことなぞもございますが、交際は却々上手で、お世辭の行届いて居るには感心します。うか〳〵して居るとこつちが負けるやうにならうと思ふ位です。

▲日本の舊師らしい

彼地の田舎を歩いて見ますと、門口で女か向ひ合て米を搗て居りますが、あの獨の兎が持て居る通りな杵



京都新京極

で悠々と搗て居る様子が如何にも太古の風がございます。この杵その他の農具は朝鮮から日本へ傳へて、日本で改良したものに違ひないと思ひました。又日本で昔行はれた被衣なども先生は朝鮮らしうございます

彼地の婦人は貧民に至るまで萌黄の被衣を被つて歩るき、時としては疊んで頭上に置き、その上へ包だの水桶だのをのせて歩いて居りますが、却々優美な様子がございます。

△洋行歸りの不便

△歸朝して第一に不愉快に感じたるは東京の夜は到る處暗い事です、紐育では部屋に少くとも電燈が六つ以上點いて居りますので、愉快な計りでなく、隅でも仕事が出來る位です、一番賑かな銀座等の暗い事、それに困るのは萬事が不規則な事です、例へば訪問時間の如き、私は午前中を家政や勉強等に取り、午後は訪問や應訪する事に極めてゐますのに、主人や子供を外へ送り出して未だ身仕度も出來ない朝ツぱらから御來訪のお客様がありますが、時間を極め樣かと思ひましたが去る奥様の話に、さうすると多くの方は合客を嫌つて訪問日外の日を目かけて入らつしやるから何の役にも立たないとの事ですから止しました。

△米國では家事を總て女中が心得てますから安心ですが、東京では少し西洋風を入れ樣とすれば一切私が世話を燒かねばなりませぬので堪りません、今日も大笑ひしました、近頃求めた冷藏器があるので、女中に今日來客があるから先日貰つたお菓子を冷して置きと申付けて置きまして、軈てお客が見えた時出させますと、まア何うでせう、冷藏器の中へ水引の懸つたのを箱のまゝ入れて置いたので、肝要な中のお菓子は少つとも冷えて居ないのです。

△東京へ歸つたら子供達には必つと洋服を着せやうと大決心で歸りますと、日本の建物には如何しても不便です、靴を履いたり脱いたり、毎日幾度しなければならないか分りません、是れでは時間の不經濟計りでなく、第一靴足袋の破れ易い事夥だしいので經濟が堪りません。（福井菊三郎氏夫人）

家事經濟に細密なる若き藝術家の婦人

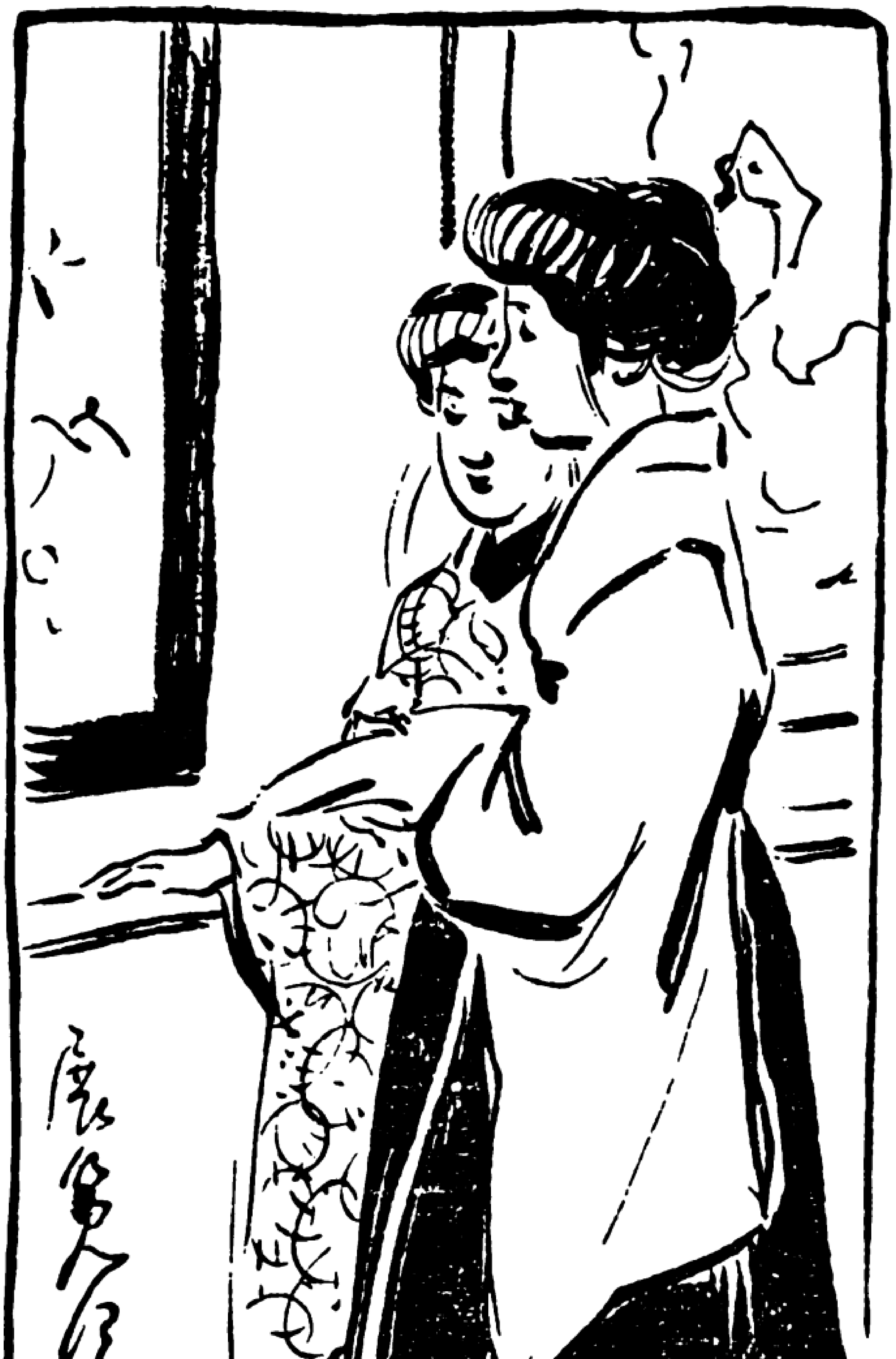
婦人記者

女が藝術に凝ると兎角獨身主義に傾いたり、嫁しても良人の折合が惡かつたり、家政が不精になつたりするのは、勢ひ免れがたいことであらうと思つて居りましたのに、案に相違した感心な閨秀畫家の平生に接しました。それは何時の展覽會にも作品の好評を得て居られる石川玉溪さんでございます。玉溪さんは帝室技藝委員石川光明氏の令孃で、良人の塑像家（石川確治氏）と谷中初音町に閑居して丹青に親しんで居られます。玉溪さんの尤も得意なのは美人畫でありますが、故人雅邦翁に學ばれた雄健の筆力が作畫の中に潛んで居る所爲か柔軟卑俗に流れ易い美人畫をよく雅化して書きこなされるので尋常の閨秀畫家に得難い手腕があると評されて居ります。お化粧盛りの女史が一切の虚飾費を節して藝術の資料に傾注されるのには記者が常に敬服して居るところですが、特に若奧樣として拔目なき働き振りは又一段でございます。

▲不釣合が却つて奧床しい

記者が始めて女史のお宅を訪れました時、絣の羽織に小倉の袴を穿いて出迎はれた中年のお方は女史の良人であります。女史は色の白い優形な美人で、マガレットに水色のリボンを結び嬌羞を帶びた體度は未だ初心な令孃としか見えません。良人は衣服に至ると云ふ程でもありませんが當世の壯人には珍らしい粗朴な風采で相並ばれたところを見ますと松の根元に寄る姫百合とでも喩へられませうか。併し優雅な言葉で女史を遇する良人の寛容と、親ふじて折目正しき女史の禮容とがこの不釣合を打消すのみか却つてハイカラ揃ひの夫婦より奧床しい暖かみを偲ばせるのでございます女史は美術學校に出往るゝ良人を玄關に送つてから繪筆なぞ取出してもてなされ乍ら記者の問に答へられま

した。



▲眞人が繪畫の注意を爲て呉ます

何時も滿足な物が出來ませんで殘念でございますが、取分け今度の展覽會の(東京府美術展覽會)畫はお恥しいのでございます。あれは前に文部省の展覽會へ出品いたす畫のためにモデルを雇ひ樣々な形をさせて見ました時、一寸三味線の音じめを爲た姿が良いと存じ、いつかこれを畫いて、見たいと思つて居りましたので、暇々に心掛て居りましたが、今度筆を執り始めて時日が迫りましたので一ヶ月ばかりで仕上て了つたのですから何ですか不充分でございます。ハイ、モデルは始終頼んで居りますが日本畫の寫生は洋畫と違つて大體の姿を寫すだけですからざつとした者でございます。私は以前あのデッサン(木炭畫)を少し良人に習つてやつて見たことがありますが、餘程實物を看る力が精密になりました。處が困ることには衣服の皺襞を日本畫にかく時隨分病になつて筆が少

しも走らなくなりましたからデッサンは止て了ひましたでも良人は塑像の嚴重な寫生をいたしつけて居りますので私が寫生する側で形の正しくないところを注意いたしたり、解剖の説明をして呉れたりなぞいたしますから餘程助かるのでございます。イエモウ樂しみどころではございませんけれども唯同じやうな職業ですから萬事に都合の宜しい點は御座います。

▲一處に參考品あさり

私は十五歳から玉章先生に五年ほど御厄介になつて居ります内、好な人物が習つて見たくなつて雅邦先生についてあの流儀の人物を暫らく習らひ、それから唯今のやうな婦人畫をぽつ〳〵書き始めたのでございます。この婦人畫を描くについて雅邦先生の筆意が非常に助けになりまして衣服の皺襞なぞも餘り迷はずに筆が使へるやうに思はれます。最初の内は古い畫卷なぞ見ましても何處が良いのか薩張分りませんでしたが次第に眼だけは進むものと見えて、近頃では畫卷や古い浮世繪なぞを見ますと手離されぬほどその妙味が分るやうになりました。而して此らが何よりの參考になりますので良い古畫が見當ります度に欲しくつて〳〵堪らず分に過た高價な品と存じ乍ら財布をはたいて買ふ氣になるのでございます。良人も矢張參考品道樂で夜分は私を促して上野當りの古書店や骨董店を素見しに出掛け兩人で參考品あさりで夢中になつて居ります。

▲着物の方は諦らめました

良人は御覧の通り身なりに少しも頓着しない方で、偶に良人の物でも求めやうといたすと、そんな物を買ふより參考品でも買なさいと止めますが、餘り極端でもと存じてつひ氣が揉るるのでございます。併し實際私共の身分で兩方は迚も及びませんから先づ兩人の收入は技術の材料の方へ注き込で身の廻りの方は諦らめやうと決心して居りますが、私はこれでも職業の方の出用が可なり多ふございますから、履物とか裾とかについて隨分苦心いたし、お安くつて丈夫で不體裁に

見えぬやうな物を工夫して用ゐて居ります。ハイ裾廻しは主にメレンスを用ゐますが、晴着にはカシミヤなぞそつけて居ります。(三越でカシミヤを求めましたが袴地だけの切れを一つばいにつもつて三枚につけました。)足袋もよく切れますからカバーで覆ひ、下駄は臺は何でもよいとして鼻緒は軟らかい白なめしを用ゐますが、白なめしに繪をかきますと一寸體裁のよい下駄に見え足袋のためにも極宜ろしうございます。マアこんなことで被服の方は何んでも誤魔化して居ります。



▲朝の内はお三どん

私共は結婚して五年になりますが未だ一度も下婢を雇ふたことはありません。私は依賴物を認めます間に展覽會の物をかいて居りますが、出品物も引續き執筆の都合になりますので年中仕事に追はれて居りますからお三どん兼帯では無理だと仰つて下さる方もございますが、私

は元來性急で下婢を使ふより自分でサッサと致して了ふのが好きなのでございます。朝は四時半に起きまして御飯炊から拭掃除、食後の片付晝飯の用意、結髮、ざつとした身仕舞位を七時半までに濟せ、それから夕方まで畫にかゝり、夕刻から又食事の用意をいたすと云ふ風に繰合はせて居ります。洗濯は一週間目位に纏めて夜業にいたしますが針の方はつもり物がやつとでございます。イエモウ臺所事は實家に居る内から馴れて居りますし運動になつてどんなに宜いか知れません但手が御覽の通りで冬なぞは人樣の前へ出し惡くいやうになります。

◇二人の理想

女は結婚すると專門の業に從事するのに都合の惡ひものでせうが、私はこの心配がありません上に却つて良人に助けられて研究が出來ますのは誠に有難いことと存じて居ります。それに獨身ですと若い内は種々な障礙が起るものですから、私は結婚後安心して筆を執ことるやうになりました。未だ子の無い所爲でもありませうが良人でも私でも本當に生徒肌で、而して何時までもこの若々しい希望を持つて互に研究を積むつもりで居ります。昔から名人と云はるゝ人はどうも長壽のやうでございます。全く長壽でなければやりたい處まで仕遂られぬ次第でございませう。ですから私共も成る可く氣を若くして進んで見たいなぞとよく話し合つて居ります。私共がいつも模範として居る古實家關先生(保之助氏)は實に感心なものでございます。關さん御自分には非常に節約して斯道の參考品は金を惜まず買入れて居られますが、奧樣が又豪い方で、お子さんのあるのは下婢を置かずお若いのに眞黑に煤ぶつて働らいて居られます。關さんが先達て參考用の立派な衣服を求められます時、その店員が奧樣のお召物だと合點して、御序樣にこれも如何でございますと丸帯を持出したので先生が「イヤ嚊アの物なんぞ買ふどころじやない」と仰つたさうですが、先生が萬事こんな風でも奧樣は少しも不平らしいこともなく參考品が一つでも殖えるのを何よりの樂しみにして居られます。私共も及ばずながらどうかこんな家庭に則りたいと存じて居ります。

初秋の趣味

物集梧水



◎秋風淋しき都大路

夕ぐれ、都大路を行きゆく。

初秋の空清く澄みて、新月あざやかに中天に懸りぬ、昨日まで、路傍に床几出しつ、蚊遣火の煙に咽びながら、男女の笑ひ罵りあひしも、あはれ夢なれや、今將た其影なく、人々皆な忙はしげに歩みゆく姿見れば、やがて來ぬべき歳の暮さへ思ひ出されて、限りなき感慨の、胸に溢るゝをば覺ゆるなる。

秋來ぬと目にはさやかに見えねども　藤原敏行
風のおとにぞおどろかれぬる

我が兄子が衣の裾を吹きかへし　讀人不知
裏めづらしき秋のはつ風

大方の人、秋の淋しさを說き、更にも暮秋の淋しさを說けども、哀れは初秋にこそ一入多き心地こそすれ、暮れゆく秋の、花も紅葉も眼に見えで、天地唯だ蕭條たる、その淋しさのほどは元より言はずもあれ、去りながら、指折り數ふる間もあらで、近く新春の訪るゝあれば、此の赫々たる盛夏を送りしばかりなる初秋の淋しさとは、いかで比べ得べきや。

はつ秋や餘所の灯見ゆる宵のほど　蕪村

うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づゝ　一茶

◎秋雨靜けき山里

秋雨しどゞに降りくらす日、京の田舍の片邊、八瀨を過ぎて、大原の里へ遊ぶ。

巡に淸き溪川あり、巡に茂き雜木林あり、川には巖石縱横に横たはりて、深潭を湛へ、白雪を迸しらしめ

ぬ、林には病葉雨になやみて、其一葉、二葉、音もなく翩翻と散りぬ、淋しき極みや。

途に牛追ふ童子に逢ひぬ、途に薪木頂ける大原女に逢ひぬ、其身に相應しからぬ大なる蓑笠を着、黒く大なる牛の尻を打ちつゝ、鄙唄可笑う歌ひゆく彼の童子が姿、胸に何の煩悶もなく、胸に何の苦慮もなく、笑ひつゝ、樂みつゝ、働きつゝ、一日々々を過ぎ暮す有様、都會に住みて功名に急なる青年、これを見て羨ましとせずや、紺の衣服を脛高に褰げ、白の手甲、白の脚絆、赤い太襷を掛けて、薪木、草花を頭に頂きつゝ、互ひに心置きなく戀物語に笑ひさゞめく彼の大原女の姿、心は春よりも長閑かに、氣は秋よりも清く、恒に笑ひつゝ、樂みつゝ、働きつゝ、一日々々を過ぎ暮す有様、都會に出でゝ虚榮に憧憬るゝ淑女、これを見て羨ましとせずや。

大原女や野分にむかふかゝへ帯　　國女

圓き山、卑き丘、其間を幾つか廻りゆけば、一叢木立の茂りあへる中に、世を距れし寂光院あり、土の階段高くはあらねど、綠苔滑かに蒸して、兎もすれば脚踏みすべらせんとしつ、幾年月の雨風に曝されて、灰色に古びし門を潜れば、大きくもあらぬ本堂、抹香の薫微かに鼻を衝き、讀經の聲甚と細々と洩れ聞えぬ、あはれ其昔、建禮門院が綠なす黒髪を此寺院にてぷッつと切り給ひしかと思へば、そゞろ涙の流れんとすなり。

思ひきや深山の奥に住居して　　建禮門院
雲井の月をよそに見んとは

◎昔ゆかしき住吉の濱

秋雨霽れたる朝、住吉の濱をそゞろあるきす。

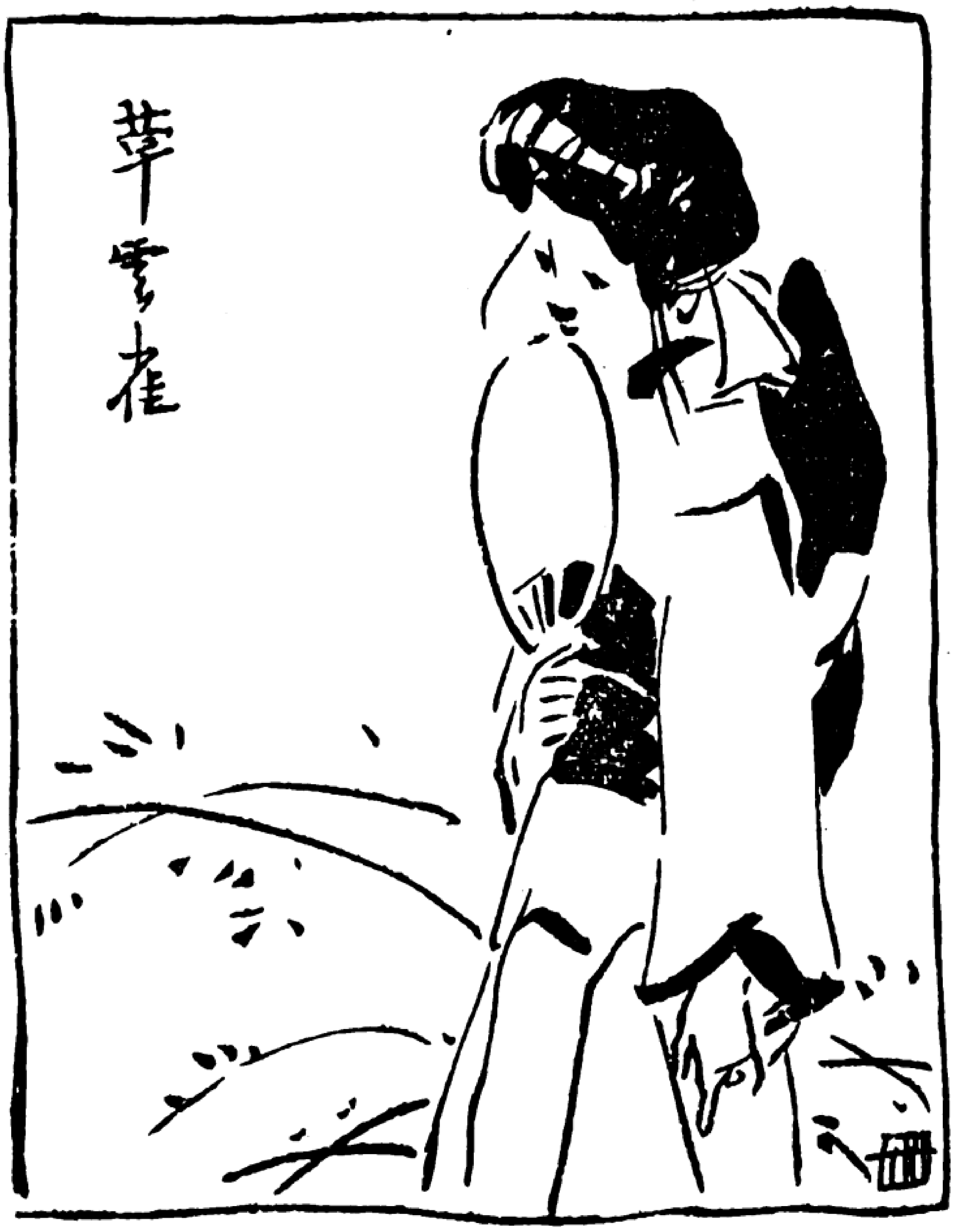
水も、空も、唯だ一色の碧色にして、海岸の眞砂のみ皓々と白く輝けり、此の邊、大阪市に近けれども、未だ朝まだきなれば、來りて遊ぶ者もなく、美しき白砂の上に、獨り下駄にて印することの、心地好さよ、遙かに海原の彼方を望めば、白銀の小櫛にも似たる弦月、まさに波間に沈まんとし、沖の諸所に、眞帆、片

帆、宛ら白き胡蝶の如く浮ぶも艶なりや。

やがて、細き途を辿りて東へ向へば、網を干したる家並、軒を連ねて往來を挾みぬ、大なる魚籠の中には、銀鱗の大魚、潑剌として時々躍るを見たり、更に木槽の內を覗けば、幾尾の鱸魚、悠々として游ぎぬ。

釣りあげし鱸の巨口玉を吐く　蕪村

途は愈よ狹まり、煤けたる小さき家々、曲り迂りて軒を接しぬ、荒物を鬻ぐ店には、未だ靑々したる小さき柿盤臺の上に積み重ねられ、胸も露はの子供等、其の周圍に遊び狂へり。



斯かる往來を過ぐれば、幾程もなく住吉神社の邊に出でぬ、千古の老松、鬱として祠畔に蟠踞り、紅を洗せるが如き朝暾、其梢に輝きぬ、美しくまた清き景色かな、今朝、最先に此宮に詣でり、前途の平和を願ひたてまつる。

住吉の岸の松が枝うちさらし
　よせくる波の音のきよしも　卜部兼直

◎花に懷しき武藏野の野末

一日、東都の西郊へゆきぬ。甲州路へ通ふ乘合馬車の喇叭の響すら遠く聞えて、

唯だ廣やかなる廣野の中へ佇立めり、今は昔の俤うすくなりぬれども、武藏野の野末は、なか〳〵に趣味あるものぞかし。

西も東も平野茫々、南も北も野草芊々、諸所に隆き丘あり、諸所に深き森あり、白雲旗の如くたゞよひ、渡鳥燦然として群り飛びぬ。

小さきいさゝ小川の聲をなして流るゝ其の片邊に、野菊の花うす紫に咲きたり、いたいげなる姿や、終日その小川の水と何をか語る、汝は何が故に斯く可憐き姿に生れたる、雛菊を歌ひし湖畔詩人なりせば、此の野菊の哀れさをば美妙う歌はむものぞ。

我れ武藏野の野末に來て、恒に想ひ出せる歌は、

　紫の一本ゆゑに武藏野の　　讀人　不知
　　草はみながら哀れとぞ見る

　緑なるひとつ草とぞ春は見し　　讀人　不知
　　秋はいろ〳〵の花にぞありける

此の二首の歌の中、前の者甚だ秀れて、その風韻、その情致、泰西詩人の其れに比ぶるも、をさ〳〵劣ることなしと思ふなり、殊に讀人の知れざるをば、却々に嬉しく思ふなり、時代の知られざる神社佛刹、作者の知られざる名著名畵、詠人の知られざる詩歌、何れか奧床しきものならざるべき。

◎野分に荒れし庭面の風情

昨夜ひと夜野分吹きぬ。

今朝夙く起き出でゝ見れば、あゝ荒れ果てにけり我が庭面の風情よ、百日紅の紅花絕かに地に塗れ、萩花、桔梗、女郎花、紫苑、野菊、鷄頭、吾亦紅、白粉の花など、皆な折れまがりて頭を垂れつ、垣に取りつきし朝顏の花の、垣諸共に吹倒されたるまゝ、小さき花の啓きたるさま、又なく哀れさ繁かりき。

未だ全く吹き罷まぬ野分に、千草、八千草、怕れ戰きて打震ふ哀れさよ、譬へば胡人百萬の軍におびゆる宮庭三千の美姫の其れかとぞ覺えし、垣根の陰に深く身を潜し、微かに鳴く音を洩す蟋蟀を聡け、昨日まで花の褥に榮花の夢を貪りし秋の蟲の、今や一日々々と

滅びゆくなる其跡弔ふものにあらずやと思はれて、言ひ知らず胸を斷つが如き心地ぞすなる。

見どころのあれや野分の後の菊　芭蕉

蟀の飛ぶや唐箕の挨先　一茶

千草の萎れたる間を通りて、小やかなる古池の畔に出づれば、藤の枯葉あへなく池面に落ちて、蓮の枯葉の末枯れし間より、尙ほ秋風のしみじみと通へり。

加納諸平

古池のひとつ棚橋
　けた朽ちて
　　蓮の枯葉に秋風
　　　ぞ吹く

世は斯くて物淋しくなりぬ、昨日と思ひし蛙の聲だに、今は更にも無く、青く澱みたる水の面より、薄黑き岩石の間より、朽葉色なる蓮葉の間より、あはれ哀しき秋の氣の、目には見わかで立ちに立つぞかし。



△鏡の曇をおとす法

鏡の汚れを除くのに皆さんは何うなさるか知りませんが、私はアルコールを布片へつけて能くこすつて、次に乾いた柔かい布片で幾度も丁寧に拭きます。アルコールが無ければ、炭酸曹達を溶かした水でも宜いのです。少し位曇つたのでしたら、白粉を撒いて、よく拭いても綺麗になります。

雜記帳

與謝野晶子

×

問。あなたは家庭の事を何う御考へになつて御出でです。

答。わたくしは家庭と云ふ詞が嫌ですよ。日本人は家庭が主で家族を附屬物の樣に考へてゐるのですもの丁度人の爲の國家であるのに反對に國家が人權を無視してゐるのと似て居ります。又生徒の爲の學校であるのに却て學校が生徒を束縛するのと似て居ります。一體舊い詞には舊い臭味が附いて廻るので改つた御話の場合には誤解を招き易いのです。家庭と云ふ詞は明治の造語ですけれど、何時の間にか舊い意味を盛られて仕舞つたので新鮮の氣を失ひました。世間でも同感の人達があると見えて近頃新家庭と云ふ詞を用ゐる事が流行る樣ですが、其内容が矢張り自分の考と異ふ樣ですから、わたしは重に日常生活と云ふ詞を用ゐる樣にして居ります。

問。その日常生活に就て御考を伺ひたいと存じます。

答。日常生活はわたしの生活のほんの一部です。わたしは從來の婦人の樣に家庭と云ふ事を格別に尊い物だとは思つて居りません。至つて簡單に考へてゐるのです。人が生きてゐる以上衣食住の計をしたり小兒を育てたりするは當前の事でせう。わたしは良人と自分との收入に應じて日常生活を按排して居ります。良人の處へ初めて參りました當時二三年と云ふものは良人は常に高利貸に責められてゐて、收入と云つたら滿足に參拾圓も纏つた月は無いのです。其上に雜誌を出して居ましたから其方の不足も毎月二十圓以上五六十圓も掛るのです。自分は隨分精神的には厭な家に育ちましたが、斯う云ふ亂脈な日常生活には慣れないものですから、何う整理を附けてよいか少らず當惑しました。併し女中を廢したり雜費を省いたりして先づ

毎月二十圓で暮しを立てる案を工夫し、收入の餘りは一切雜誌の不足を補ひ、其れから多くの債權者に頼んで延期をして貰ひ、中には僅かの月賦で永遠に償却する事を承諾して貰ひなどしましたが、良人の收入が不定ですから漸次に自分の衣類を賣拂つて適宜の處分を致しました。其れでも中々足らないで其遣繰には困りましたが、私共夫婦に同情して下さる人もあつて其人達の補助で何うにか今日まで遣つて參りました。其れに近年は自分も何がしかの收入を得る樣になりましたから初の樣な慘めな日送りは致しませんが、其代りに夫婦二人きりの頃とちがひ六人の子供を育てねばなりませんから經濟も大變に膨脹して居りますし、また以前の負債も殘つて居ますし、暫くも其方の氣苦勞は絶えないのです。でも之がわたしの生活の全部では無いのですから何もくよくよとして計り居りません。わたしの生活の他の部分即ち精神生活の上には猶之にまさる苦勞もあり、又日常生活の氣苦勞などは影の消えた樣に忘れる事の出來る樂も多いのです。わたしは收入に應じて日常生活を切盛しようと云ふ考ですから、衣食住すべて何うにでも伸縮の出來る樣にして置きます。私共には持家が無い。只今の收入では借家住ひが適してゐるのです。若し家を建てる丈の餘裕が出來たなら美術家に頼んで私共の趣味に協つた家を建てゝ貰ふかも知れぬ。併し只今はそんな事まで考へてゐる餘裕がありません。自分等夫婦と子供等の爲に適したよい貸家があれば其れを探して住んでゐたいと思つてゐます。一體今後の人は自分の持家と云ふ物を餘り重んじない方がよいかと思ひます。持家があればこそ生れた土地を動かない。世界を家として適應に事功を建てる事を考へない。島國人の萎縮した性質を改めない。又持家があればこそ家族制とか長男に家督を讓るとか云ふ時代遲れの思想が衰へません。又子弟に對する父母の權利が餘りに過大にもなります。殊に私共の生活では何處に住むにしても氣の向く儘に適當な貸家か下宿を求めて移つて歩く方が便利なのです。わたしは初め澁谷に住み、次に千駄ヶ谷に住み、昨年神田の駿河

臺に移り、此度は麹町區の中六番町へ移つて參りました。郡部から市內へ來ましたのは子供が學校へ參る便利を考へたのです。其れから衣服は餘り外出する事も無いのですから格別晴著ど云ふ物を持つて居りません。其代り平生に銘仙位の物を著て、成るべく垢の附いた物を著ない樣にして居ります。男の



兒には綿服、女の兒にはメリンスを著せます。舊くなつた衣類は古著屋に賣拂ひ、無用な物を保存する爲に簞笥を澤山並べて場所を塞ぐ樣な事を致さない樣にして居ります。衣服の好みなどに意を用ゐるのは贊成ですが、無用な衣服を多く貯へて置くのは馬鹿らしい事だと思ふ

のです。裁縫は好きですから暇がある限り自分で致します。併し女は是非裁縫をせねばならぬものだと考へてゐませんから、他の仕事に時間を費した方が利益だと思ふ場合には仕立に出して居ります。色にせよ模樣にせよ派手な物を好みます。地方の婦人が嫁に行くと直ぐに地味な風をするのは氣の毒でなりません。衣服丈でも都會に住む女は幸福ですね。

食物ですか。どの樣な物でも頂ける習慣がついて居りますから、野菜でも魚肉類でも自分で調理しますが成るべく滋養と美味とを一致させる樣にして居ります子供等が料理屋の物を珍しがッたりしない樣に時々宅で特別な馳走をする事にして居ります。わたしは人間の精力の基礎は三度の食事にあると云ふ考ですから、出來る丈滋養物を良人や子供等に進める樣にします。自分が生れて一度も大病に罹らず二日と寢た事の無いのも、父が食物の贅澤屋で三度が三度料理屋から運ばせ、子供等にも常に美味を供給して與れたせいだと思ふのです。併し私共のは然う云ふ贅澤をするのでは無く適宜に滋養物を取ると云ふ丈の事です。

問。貯金をなさいますか。

答。致しません。必要を認めないのでは無いのですが、其處までは中々手が屆かないのです。平生の衣食住を初め交際費や書籍費や醫藥の料などを倹約してまで貯金をしようとは考へないのです。貯金をする餘裕があるなら良人の舊債を皆濟致したいと思つて居ります。尤もわたし貯金の必要と云ふのは子供等の學資丈の事です。學資丈を何うにか貯へて置いて遣れるのは親が物質的に子に盡す義務の全部だと思ふのです。又精神的に子に盡すのも中學卒業高等女學校卒業までの事で、其以上は學資丈を與へて子供の自由意志に一任して置けば、子供は自由に育つだらうと思ひます。一生の目的などは子供自身に撰擇させるがよい。すべて十五六歲以上の子供には親兄弟が干渉しない方が穩當でせう。或程度まで教育して置けば子供自身に時勢と自己の實力とを考へ、又先輩や友人に聞いて自分の適處に何うにか進路を開いて行く。父兄は其れまでの間

子供の教育を監視して、何れの道へなりとも進み得る丈の素地を作つて遣る事が必要です。其以上は學資を與へて遠巻に援護する位の程度に止めて置きたいと思ふです。わたしの長男は今年暁星小學の二年生で體操と唱歌とを除けば大抵滿點を取ッてゐます。數學と繪畫とが一番に巧く、佛蘭西語も可なり好きですが人樣は工學士にせよとか、或は洋畫家にせよとか言つて下さいますけれど、親共の考では、長男位の出來榮の子は日本に澤山ある。又小學校の成績が當に成るものでも無い。先月京都大學の哲學科を出て銀時計を頂戴しました宅の甥などは、小學校から大學まで終始首席で續けましたが、然う云ふ例は稀有でせう。で私共は長男が何に適するか少しも然う云ふ事は考へて見ないのです。唯體質を成べく堅固に育て親と學校とで教育さへして置けば何かに成るであらうと思つてゐます。福來博士の御話に



人には幾多の本能があるのだが、自分は是位の事しか出來ないと自ら見極めを附けてゐるので幾多の本能は潛在して力を示さず、僅に少數の本能が發動して居るに過ぎないと云ふ意味の事を述べられましたが、親が幼年者に對して早くから何に成れよと云ふのは、惡い暗示を子供に與へて多方面に働らくべき本能を豫じめ殺して仕舞ふ樣なものでは無いでせうか。長男などは親の欲目かも知れませんけれど然う出來の惡相な子でも無い樣ですから、若し注文をするなら工學者をも文學者をも畫家をも一人で兼ねる樣な人物に成つて欲しいと思ふのです。

問。衛生上の事は何うなさいます。

答。親しい御醫者や看護婦の方などに伺ッて致します。わたしは女學校で貴重な時間を家政とか育兒衛生とかに費すのを至極無駄な事だと考へてゐましたが、實際の日常生活に關はッて見て益々その感を深くしました。妊娠でも分娩でも一度經驗すれば大抵其心得が解るものです。解らない事は其時に臨んで御醫者に聞けば直ぐ解るのです。又少し實驗が積めば一寸した事位は御醫者を待たなくても自分で手當が出來るのです。子供等の浣腸などは何時でも自分で致します。斯う云ふ日常生活の事は二年も三年も講義を聞くより實地に臨めば必要に應じて十分會得が出來るものですよ。お錢の餘裕が無ければ自然節儉的にもなります。節儉がよいので無く日常生活を適當に按排して人生を樂しく暮すのがよいのですから、餘裕のある境遇になれば決して節儉の必要は無いのです。日本人は貧しい階級程比較的贅澤で、富んで居る家程物質的の節儉を計る守錢奴の多いのは見苦しい事ですね。勤儉貯蓄の詔勅が出ると富有な階級が一番に吝々する。然うなれば直ぐに不景氣が來るのは知れて居る。金持の錢の落ちこぼれを待つてゐる貧乏人は不景氣の爲に職業が無くなり賃銀が安く成る。貧乏人たる者與へらるべき金錢が無くては勤儉をしようにも仕方が無いではありませんか話しが逸れました。それで學校で習ッた料理法や衛生學は實際の役に餘り立ちませんよ。子供が百

日咳に罹ッて一ヶ月以上も晝夜吸入器を掛けねばならない樣な場合の氣苦勞は實驗せねば解りません。斯う云ふ實驗さへすれば適宜に處分の出來る事柄に家政學などゝ云ふ鹿爪らしい名を附けてわざわざ敎育するのは虛榮を排する文部省の措置にも似合はない無駄な事だと思ひます。

×

新しい女子に新しい内心の要求があるのは當然の事として、實際その要求が何う云ふ程度まで進んでゐるか。之は女子の各自に反省すべき事である。婦人が眞に目覺めて男子と對等に生活し享樂しようとするなら精神的にも物質的にも今の幾倍かの充實を計らねばならぬ。第一我國の婦人には學術の趣味が解つてゐない。まだ一人の心理學者も歷史家も植物學者も婦人からは出てゐない。愧しい事に、臺所で女中相手に出來る料理法などに家政學などと云ふ名を男子の敎育者から附けて貰つて、其れを得意になつて修めようとする程度の女子が多數

夕の庭



なのである。又親兄弟良人などの財産や勞働に依つて衣食してゐる婦人以外に、眞に自己の勞作を以て獨立の生活を營んでゐる婦人が幾人あらう。智識、感情、勞作に於て男子と均衡が取れる所まで實力を養成した上で無ければ、すべての新しい婦人問題は空論である。理想である。

×

わたしが便利な神田から麹町へ引越した理由の一つは前の家は日當りが惡かつたから。今一つは近所に支那人が多くゐて怪しい日本の女を置いてゐる。其れが宅の女中風儀に影響するから。今一つは近い所に立つた廣瀨中佐等の銅像が餘りに非美術的な作で、子供等を其附近で遊ばすのはよくないから。

×

女子高等師範の校長中川先生などが女子に高等なる學問を奬勵せられるのは感謝してゐます。猶中川先生などに奬勵して戴きたいのは中流以上の家から初めて一般に女子を鄭重に育てる事です。只今では大抵の場合父兄が男の兒と娘の兒とに對する待遇や心持に差別があつて男尊女卑の惡風を存して居りますが、平安朝の文明貴族間では父母兄弟が娘姉妹に對して常に鄭重なる敬語を遣つて談話し、決して呼捨などは致して居りません。天皇までが皇后は勿論女官や女房に對せられる場合にも鄭重なる敬語を用ゐて居られます。然う云ふ女子を尊ぶ氣風があつてこそ女子の方にも自重心が起ると思ひます。父母兄弟が女子を厄介者だと思ひ女子も厄介者で甘んじてゐる間は明治の文明もまだ大したものでは有りません。



新學期開始

本月より高等科を新設す

會員募集

入會の最好機

共立女子職業學校

櫻友會內
女子手藝普及會編

女子手藝講義録
（壹ケ年修了）

會費一ケ月分僅に金參拾錢
半ケ年分金壹圓七拾錢
一ケ年分金參圓二拾四錢

講義課目

●裁縫科和洋各種 ●編物科各種
●造花科花卉果實 ●組糸科各種
●刺繡科和洋 ●袋物科各種
●割烹科和洋各種 ●細工物科
毬細工、撮細工、絹細工、押繪細工、接物細工、ヘムシ及バテンレース ●手藝用圖畫科 ●手藝敎授法
其他科外講義數種
鮮明なる説明圖を挿入す

手藝の技と知識を益々廣く且つ深くして益々文明的の生活を最も經濟的に之を學ばんと欲する婦人或は少額の費用を以て專門的に之を學ばんと欲する女子は只今速に入會せよ
本會の講義録は**何人**と雖も完全に**理解**し得る也
尙女子手藝講義録より引續き高等女子手藝講義録科へ入會せば會費破格の割引をなす
▲無代進呈▼……內容見本と入會規定

高等女子手藝講義録
（壹ケ年修了）

會費一ケ月分僅に金參拾五錢
半ケ年分金壹圓九十九錢
一ケ年分金參圓七十八錢

女（その二）

入會申込所 東京日本橋角 大倉書店 振替東京二三八番 電話本局四一四番



ヴィノォリヤァ會社
大英國皇室
撰技御用品
HONI SOIT QUI MAL Y PENSE
DIEU ET MON DROIT
VINOLIA
日本代理店●
ヴィノオリヤアクリーム
ヴィノオリヤア香水
ヴィノオリヤア白粉
ヴィノオリヤア歯磨
ヴィノオリヤア石鹸
交際場裡に名高き舶來のヴィノオリヤア製品を愛用せば起臥に爽快にして艶麗なり
神戸、クローザー商會
倫敦——巴里 紐育

（其の二）

●衛生寶典及婦人好讀物●

ポケツト女醫者

袖珍形箱入天金美本七百頁正價金壹圓●特價壹萬部限九拾錢郵八錢

大好評の女醫者(卅八版)新女醫者(卅三版)續女醫者(十版)の内容全部を類別改版し人身衛生に關する諸問題を七拾項千五百の細目に分ち問答體に通俗なる文體にて説明したれば一般家庭に於て最も必要なる衛生書なり尚水害と衛生と題する小冊を無代進呈す

●文學博士芳賀矢一先生序 三輪田眞佐子先生題詠并序 井上民子著

偉人と母

菊判二百餘頁正價[illegible]拾五錢郵税六錢

本書は我日本に於ける偉人と母即ち應神天皇と神功皇后、源義經と常磐、北條時賴と松下禪尼、楠正行と滋子、德川家康と傳通院、吉田松陰と母瀧子等の如き二十五偉人及偉母の逸談傑行を輯錄せし美本にして一般婦人の好讀物たり殊に學窓にある女學生は本書を讀みて將來の偉人の母たる素養と修養を得られんことを

脚氣(かつけ)腸胃病者(ちやうびやうしやつ)に告ぐ

百發百中効驗神の如し

前東京第二衛戍病院長臨時脚氣病調査委員會二等軍醫正ドクトル

都築甚之助先生御證明 糠精

衛生食糠

本品は化學を應用して米糠中より本質脂油を除き其有効成分のみを美味に飲み易くした特効食料品なり

卅日分卅五錢送料十錢 十日分十五錢送料五錢(實驗報告説明書見本六錢送呈製造元へ)

證明書

尾崎兄弟飼禽場に於て試驗の結果尾崎氏製造食糠の脚氣病に偉効あることを證明す

明治四十三年六月一日

ドクトル 都築甚之助 ㊞

製造發賣元 尾崎兄弟飼禽場 分場 舊大隈伯爵家養鷄場

陸軍省御用達

特約販賣元 東京麻布霞町 電芝二一八二 南信堂藥舖

▼全國到る處の藥店及食料品店に有り▲

女(おの三)

松本ピアノ・オルガンの特長

優秀なる樂器は清新なる樂想を喚起す

松本ピアノ、オルガンは歐米各國の最も進歩したる技術を參酌し、之に弊社獨特の技巧を施したる東洋製中最優秀なるものにて、殊にアクションの精巧なること、現時歐米にて專賣特許を得たるものに粹を採りて考案し其一部分を米國紐育にて製造したるものなれば、タッチの妙、音色の美、音量の大、而もペダルの確的なるは世界に對し日本のブライトとするに足る。

斯の如くにして松本樂器は優秀の評有り



オルガン雛形



ピヤノ雛形

オルガン定價表

普通形	第一號	金拾八圓
同	第二號	金貳拾七圓
同	第三號	金三拾八圓
同	第四號	金四拾八圓
同	第五號	金五拾圓
同	第六號	金五拾八圓
同	第七號	金六拾八圓
同	第八號	金八拾圓
同	第九號	金九拾圓
同	第十號	金百拾圓
同	第十一號	金百貳拾圓
同	第十二號	金百五拾圓
同	第十三號	金百八拾圓
同	第十四號	金貳百圓
同	第十五號	金貳百廿圓
改良形	第八號	金八拾五圓
敷島形	第八號	金九拾圓

ピアノ定價表

ピアノ	第一號	金參百廿圓
同	第二號	金參百八拾圓
同	第三號	金四百圓
同	第四號	金四百五拾圓
同	第五號	金五百五拾圓

其他ヴァイオリン、西洋樂器及樂書一切販賣仕候。
新版目録御申越次第送呈仕候

東京銀座四丁目

松本樂器合資會社

電話新橋二二九八

女(ぬの四)

何人モ直チニ新應用シ得ベキ一式
記憶術

⊙通信速成教授　會費壹圓貳拾錢

◉本會の記憶術は簡明實用を主とし毎週二回以上懇切平易なる講義錄を發行し二週間を以て卒業せしむ（但し學生は課業の餘暇を利用して優に修了するを得べし）

◉本會記憶術修了者は數十個乃至百個以上の事物にても一回ノ見聞によりて直に之を記憶するを得べし

◉教授概目　記憶術の定義▲從來の記憶術▲新式記憶術の原理▲原則的記憶術（三法）▲例外的記憶術▲數字、外國語、法律、地理、歴史及其他の諸學科に對する各特種記憶術▲各種業務用記憶術▲娯樂的記憶術▲其他數十項

◉説明書は掲載雜誌名記入の上申込あれば無料進呈す

大阪北區天滿橋筋西三丁目八六地　大阪記憶學會

月やく

不順又は二三ヶ月もなくておとまりの方は

小野醫學士の新發見になりし靈藥月調を服用せば月經不順等は速に全治し三四ケ月の滯りも安全に流經する有効無比なる錠劑なり未だ用ひざる人は速に試よ價は六十五錢一圓十錢二圓●服藥否哉不拘郵券二錢送付の方に病理攝生等を詳記せる冊子を呈す

東京々橋區南鍛治町三　東藥房

男女 生殖器科
明治療院

●東京淺草七軒町二●

●梅毒麻毒　生殖器障害　神經衰弱

●婦人科一般　ヒステリー　月經障害

●診察　午前　午後

●入院隨時●

理想的最新製劑
ちゞれ毛くせ直し
ペント

定價　大金九十錢　中金四十七錢　小金廿五錢　送料　市内四錢　市外八錢

本品を一度使用せば如何なるチヾレ毛クセ毛にても立處に直伸す永く使用せば根本的にチヾレ毛クセ毛の有る處を忘るべし

發賣元　東京市本所區外手町八十七番地　深澤國華堂

最新輸入高等染髪料
しらが赤毛そめ
ヘーヤダイ

大壜金貳圓五十錢　中壜金壹圓　小壜金五十錢

送料　市内四錢、市外八錢

此の二大有効製劑の説明は左の書に詳記せり

衛生化粧
最新美髪法

本書の内容

◎しらが、赤毛染の話
◎ちゞれ毛くせ毛直しの話
◎拔毛どめ、ふけとりの話
◎毛のなき所に毛の生へる話
◎毛髪の洗ひやうの話
◎毛髪營養の話

其他毛髪化粧に關する秘訣

本書御入用の方は郵券二錢封入御申込あれば無代進呈す

發行所　東京本所區外手町八十七番地　深澤國華堂

（太ぬの七）

家庭談叢

土耳古の奇風俗

在土耳古中村商店主　山田寅次郎

△水を酒に代へる國人

土耳古の家庭では、甘味の强い菓子類やバダでいためた脂氣の强いおかず類を不斷用ひますせいか、一般に水を飮むことは大したもので、私の見たところではどうしても、一人一日ならし三升位は用ゐるだらうとおもひます。私なども、彼國に參つて居る中は、終飮みますのです。それに又、あちらの水が誠においしいのであります。

宗敎上の誡めで、あちらではお酒を一滴も用ゐません。たとへば外國の珍客がございまして、皇族がたなどが主人役をお勸めで、御馳走をさるゝ時でも、外國のお客の前には、シャンペンや葡萄酒などを出しておきますが、主人方のテーブルの上には水だけをおきます。そして「國風で我々はお酒を用ひませんが、どうぞ御隨意にお上り下さい」とお斷りを申す樣な風であります。

それで日本の方が、酒の味を利酒する樣にあちらでは、水の味をよく鑑定して、これは好いそれはまづいと言つて居ります。で、皇帝水、銀水など、名ある水もあり、ビール樽の樣な物に詰めまして、遠方から輸送して居ります。

で、あちらの町には、一町内に一二軒づゝ、乾度水店がありますし、又市上を賣り步いて居る者も澤山あります。丁度こちらの居酒屋か氷水屋などの趣きがあります。氷で冷しておくとかレモンの味をつけておくとか、進步したのもあります。勞働者などには、又勝手に飮まれる樣に、水道がよく整つて居ります。そしていつに限らず寒暑ともに打通しに飮みます。

△お祭好の土耳古人

土耳古位、お祭りの永い國は、外に例しはあります

まい。三十日間、打續けた、宗教上の斷食お祭りがあります。此の三十日間といふものは、夜あけごろから夕の六時ごろまでは、一切飲食をいたしません、煙草さへ禁じて居ります。そして、商店員も銀行員も、矢張斷食しながら、營業は致して居ります。

併し、夜になりますと又、御馳走祭りで、朋友親戚などを招いで散々御馳走を致しますし、たとひ知らぬ人でも、誰にでも接待いたします。それですから、此の三十日間は、どこの家でも御馳走を山の樣に拵へて備へて居ります。

私の、あちらに居りました時などは、屢々知人から招かれますので、勿體ない樣でありますが、斷るに忙がしい位。毎日日表を作つて、今日はどこ、明日はどこと、日取りを極めて居りました。

招かれて參りますと、食卓について、時計を見ながら、「もう少しだ」、「もう少しだ」と、待つてゐます。すると、六時ごろに、號砲が響きますのを合圖に、「それよろしいのだ」と食ひ始めますが、これが中々可笑しいのです。

土耳古には、平日は芝居寄席の樣な興行ものがありませんが、このお祭り中は、その樣な興行ものも盛んに、活動寫眞や何か、大繁昌であります。此の三十日間に限つて、徹夜で遊んでも構はぬことになつて居まして、まあ此方の盆と正月とを一つにした位の遊び月であります。そして、夜あけ方に、一寸したものを食べて、日中の斷食の豫備をいたします。

このお祭りがすみますと、續いて三日間菓子祭りをいたします。これも、親族朋友の間で、お菓子のやり取りをいたすのであります。それから三十日後に、羊祭りがあります。丁度年の市の樣に、田舍から羊を澤山賣りに參ります、それを名々買つて歸つて、其の肉を家中で食べ、貧民にも施します。これで、お祭りがお仕舞ひであります。

でお祭りは何月にあるか……、それが又妙であります。月日が一定して居りません。これは例のアラビヤの暦法によつて、毎年十三日づゝ後れて參るのであり

ます。私が始めてあちらに參りました頃は、二月にありましたが、只今では十一月になつて居ります。

△宿料なしで旅行の出來る國

土耳古の國の人氣の善しいことは、世界に珍らしい處で、第一どこの都會に行きましても、宿屋といふものが無い、といふてもよろしい位であります。それは、旅客が、宿屋の厄介にならずとも、濟むからであります。たとへば、私が今、甲州へ旅行するとして、



自分の知り合があれば無論のこと、若し知合が無ければ、友人に「私は甲州へ參りたいが、あなたのお知合がありませんか」と言ひますと、「有ります〳〵手紙を一筆書きませう」と直ぐ紹介してくれます。これはお互のことで、普通一般の習慣になつて居ります。その紹介狀さへ持つて往けば、それは〳〵懇切に取扱かひ、「私の家へ東京のお客が來ますから」と觸れまして、懇親の方などを呼び、一緒

に御飯を食べるとか、又都のお話をさせて聽くとか、誠に、「一見舊知の如し」と申すことは、土耳古人一般の美風であります。そして他鄕から來客のある事は、つまり其の家の名譽にもならうといふ事になつてをります。

△寛濶悠長な風俗

人氣の善いことは、一寸道を尋ねたばかりでも知れます。一二町の處は、先に立つて案内して吳れます位でありますが、これがもし伊太利などになりますと道を尋ねてごらんなさい、僅か二三軒さきの家でも、先に立つて案内してくれますが、その家の前まで往きますと、直に手を出して、案内料を請求します。「何だ、只の二三軒の間でないか」など言ひましても、「一軒でも二軒でも、あなたの爲めにこれだけの時間を潰したから」と申しまして、強請ます。それに、スリ、カツパラヒが多く居りまして、街上で逢つた者が、突然「時間は何時でせう」と尋ねますので、時計を出して見て答へてやりますと、いきなり其の時計を強奪して逃げるといふ樣な風で、伊太利、希臘邊の人氣といひましては、又特別にいけない樣であります。

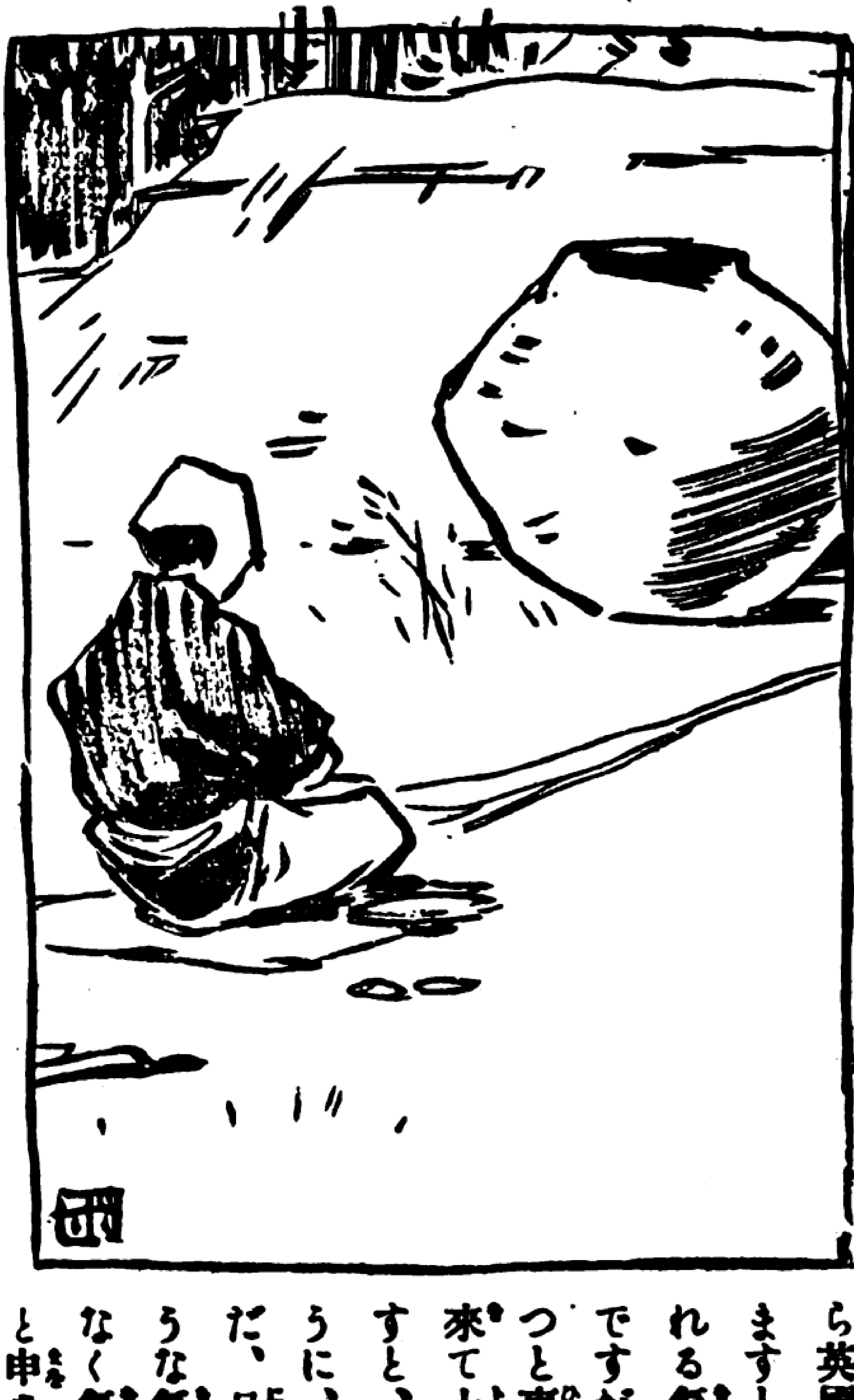
それが、土耳古ではどうでせう。宮内省の役人などに、用があつて參りまして、晝頃にでもなりますと、誰彼の差別なく、その來訪客にお晝飯を御馳走します。たとへば、そのお役人が、各、私の客が何人前、私の處へ何人前と、仕度を通しますと、そのお役人の官位相當、奏任官の膳、判任官の膳といふ風に、御馳走いたします。で、晝ごろになりますと、宮内省の内膳寮は御馳走の山が出來てる樣な壯觀であります。が、元〻くらしが樂なのでありますから、御馳走になりましたからといふて、それを此方で思ふ程に、有りがたくも思ひませんです。こゝ等がつまり前世紀的の風習で、善くいへば寛濶悠長なる美風であります。

△天産の饒な富源國

土耳古は、御承知の通り、煙草が世界屈指の産地で

あります。その他、無花果、桃、葡萄の様な果實類が、見事で立派なものが澤山に産しまして、佛國、獨逸などへ、盛んに輸出しますから、これ等天產物の爲めばかりでも、國內は生活が樂な筈でありまして、あの樣な人氣で濟んで居るのでありませう。

土耳古では、風呂屋で番頭さんを呼びますに、ポン〳〵手を打つて呼びますのが、こちらの料理店で丁度女中を呼びますのと、よく似て居ります。又、あちらの小賣店は、店員が皆坐つて居りますが、これも日本の風習とよく似て居ります。それに、人氣がこせつかないで、ゆとりがあります。世界週遊をした日本の方々が、先づ米國に渡りますと、四十階の建物にエレベーターに地下鐵道など、生存競爭の激しい、せゝつこましい國風に面喰ひます。それから英國や佛國に渡りますと、やゝ緩和される氣持になるさうですが、それからずつと東の方へ廻つて來て土耳古に着きますと、皆樣が同じやうに、「これは好い處だ、日本に着いたやうな氣がする、何となく氣が落ちつく〳〵」と申されますが、全くその通りで、どうしても東洋趣味があるのであります。



△家の建築は不適意

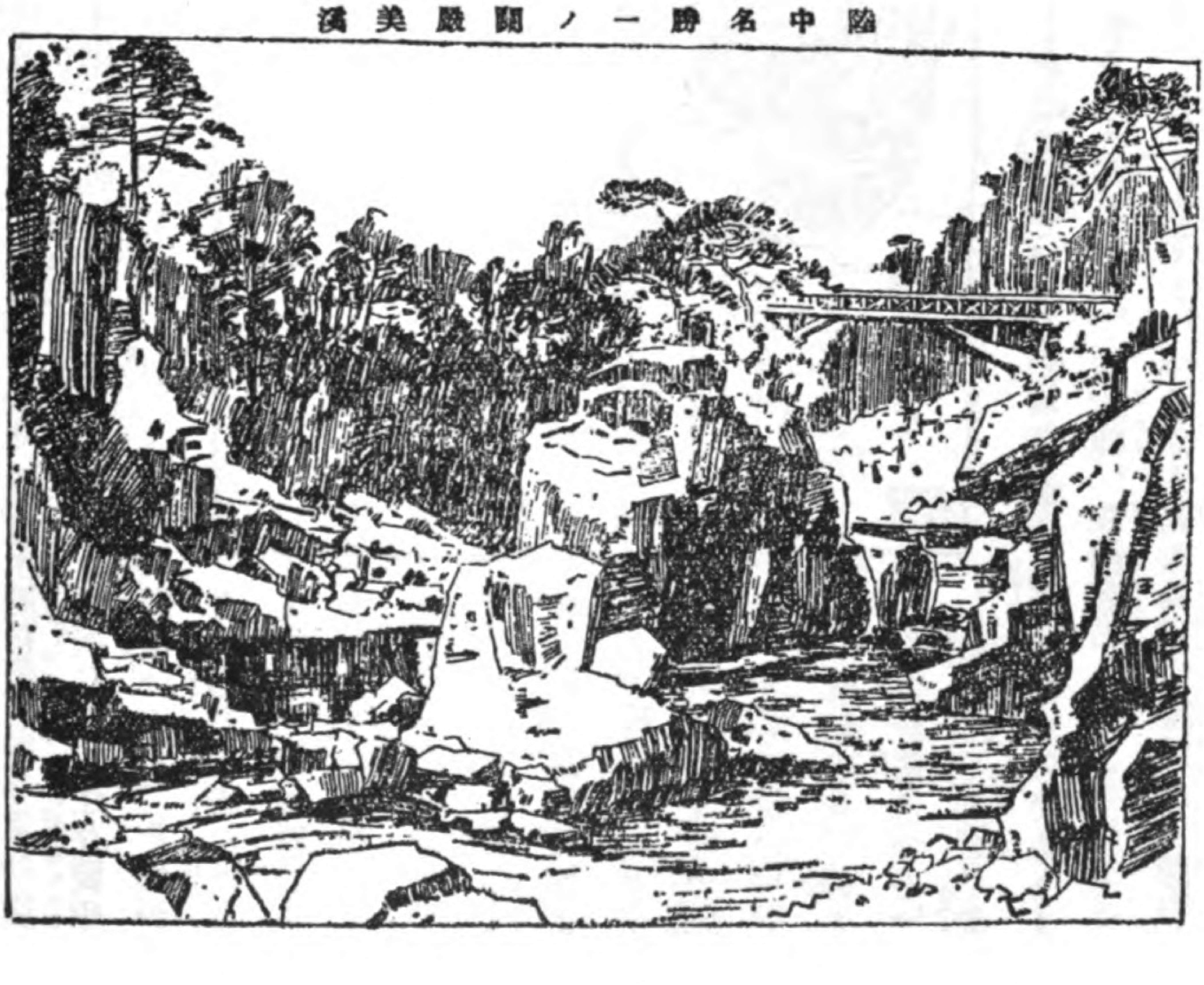
たゞ、われ等日本人から言ひますと、困るのが家の建築であります。石か煉瓦で積むのが常になつてをりますが、どうも、じめ〳〵濕つてたまりません。色々と不導體の物質で、室内の壁や柱などを包んで見ますが、利目がありません。あちらの婦人は、若い娘さんでも、年とつたおかみさんでも、毎日きまつて買物に出る風俗でありますから、思ひの外病氣にもかゝりませんが、こちらから參つた婦人などは、矢張日本風に終日家の中にばかり居りますので、どうも病に冒され易いかと思ひました。あちらに、日本風の家を造つて居りましたら、どんなにかよからうと思つて居ります。

（談話筆記）

△雑巾掛に牛乳

或時、子供が縁側へ牛乳を流しましたので、少時して其處を力を籠めて拭きましたら、誠に好い光澤が出ました。其れ以來私宅では牛乳が腐敗でも致すと、直ぐ其を縁へ零して置いて、後で拭きます。たつた二三度致した丈けですけれど、奇妙に光澤が好くなりましたから、私の此の實驗を皆樣にお知らせ致します。（みつ子）

陸中名勝一ノ關嚴美溪





政治家の内助者としての私の苦心

故星亨氏夫人　星綱子

▲孝心を示す手紙のいろ〲

談に益々佳境に入らうとする。令息光君は起つて、新らしき茶を齎らした。柔らかな湯氣の靜かに立ち昇るを見入りつゝ、未亡人は語り續くるのであつた。

「主人の經歷は千變萬化でありますから、私の心配はつねに絶えなかつたのです。とりわけ政治上の奇禍で前後二回入獄した時などは、主人との往復、一家の取締、母の世話など一身に引きうけたので隨分と苦心致しました」

「おつか樣には孝行をなすつたさうですね」

「主人でございますか。それは〲孝心深くありました、後には荏原郡の嶺村の方に別莊を造つて迎へました。母は八十三で亡くなりました」

僕は卓の上に載せられたる、故人紀念帖をくりひろげた。明治七年暮、ロンドンから嚴父に寄せた手紙の末には

「御兩親とも寫眞を新たにお取り被下度」

なる文句が見える。また明治八年十一月、家嚴の訃を聞きて母君に寄せたる手簡は餘程情をつくしたものである、その文に曰く、

「一昨八日四時五十五分出電信ナトサマ、九月一日カタランニテ死去の凶報昨九日朝七時到着、實に寓入夢の樣に思ひヒヨスラ悲歎に沈ミ候、母公にも不意の事とてサゾ御驚キナサレ御愁傷ノ事ト存候、然し何(明治初年の英學者何禮之、星亨氏は何氏の食客)先生伊阿彌氏其他皆樣ニテ葬式等ハ夫々相濟ミ候事ト存候、兒も早々歸國致し亡父ノ佛事又家事ノ取

リシマリを附け、凡母上を慰メク存候得共何を申すにも御用にて此地へ参り候故自分ノ思フ儘ナラズ此地へ在勤ノ上彼へ相談致候處今スグニ歸國致候譯にはカナフマジとノ事、是も致し方なく候、近々成ル丈ケ早く歸り御心ヲ慰メ申可候得共モハヤ御失なり被成候ものはイクラ御ナゲキ相成候トモ再び御出來になる譯には参ラズ候故に、餘り御歎きに相成御身體でもワルク相成テハ兒ノ不幸と相成ツイテハ亡父ノ思召にも相違ひ候ニツに相成り可申候間ドウゾ御氣ヲシズメ兒ノ修業早ク御用ヲ相濟セ歸リ候迄ハ御カラダ大切ニ御持被下度候其後ノ家事取締等ハ左ノ通りにてヨロシカルベク存候、然し伊阿彌とも御相談ナサレ別に都合よき手段あり候はヾ御知ラセ被下度住家は盗賊火事等の心配スクナク候間是迄の通何先生御構内にてヨロシカルベク存候

右返事オソシナリヤキ事ハ綱子へ申付ケ手紙ヲ書セ御送リ被下候以上

明治八年九月十日　　孝　拜

母公　膝下

此後兒留守中は母上と綱子トニテ諸事御取シマリに相成ルベキニ付餘リ綱子をシかりなく家内ヲダヤカニ通行被致候

假名遣ひなどに頓着せず、片假名、平假名ザツタバランに使つた處に豪宕なる面目が見えるではないか。しかし諸事こまぐ\と記す處は細心なるを示す。孝は百行の基、この孝子にして惡事を働く譯がない。星氏ほど誤解された巨人は少ない。それを云ふも時代に先つた性格であつたからであらう。

明治九年十一月ロンドンより夫人綱子に寄せたるうちに左の様な文句がある。

「此度の旅中は色々奇しき物十大ナル山河ナド澤山見物し其寫眞なども買置候何れ歸國の上は其元ナゾへ御咄しまた御見セ可申候 右ノワケニ其元へ度々返事ヲナサザリキ此後は度々手紙を送可申 また私の寫眞も後より取らせ送可申、其元もまめに手紙を書き度々送ラレヨ申迄もナケレド母上に孝仕し、身を正し學問を出精し、私の歸る時分には是は大層上達シタと感心サセルよふに學問致しおきなされ(下略)」

すでに世人も知る如く星氏は位置と名望を得た後といへども、決して當今の紳士がすなる如き放蕩に身を持ち崩すやうな事はなかつた。これ一つは綱子夫人の賢なりしが爲めで、内助の勳功その當を得た故である。

未亡人はおもむろにその一ッを今から語らうとするのである。

▲病中雪を犯して北行す

「主人は明治十年に歸朝致しました、――左樣です。日本人で最初のパリストルです。二番目は目賀田さんでした――スグに司法省附代言人となつたのですが、名義ばかりで、始終自分の用にばかり追はれて、出勤した事などはない位です。

自由黨に入りました後――丁度十七年でした、新潟の演説が官吏侮辱罪に觸れて入獄する事となりましたこれが入獄のはじめで、主人が三十五歳、私が二十八歳です。



主人の推測では先づ二ヶ月位だらうと思つてゐたさうですが、案に相違して、重禁錮六ヶ月の宣告を受けました、東京では新聞を出して居りますし、いろ〳〵仕かけた事業があつて、そんなに獄中に閉ぢ込められてはたまらないと、即刻上告して、七週間の暇を得て歸宅して參つたのです。時は十二月で北國の雪嵐の吹きまくる中を、橇に曳かれて旅行しましたから、氣管支をいためまして、山城町の宅で呻吟して居ります。上告も何分旗色がわるいので、此上大審院まで行つても駄目だらうから、寧ろ潔よく刑に服さう。それにしても此病體で、寒氣冴えかへる新潟監獄に一と冬送つては身體が續かぬから、どうかもう三週間だけ自宅療

發がしたいと願出したのですが、頭からハネつけられて、紛雪のちらつく午後、引たてられて宅を出ました

▲同志夫人連の交際

闇然として語なき事しばし僕は十八年入獄當時の新潟よりの文に眼を曝した。

「二日付御手紙落手披見致候又荷物ハ未ダ到着セズ」と云ふのが書き出しで、

「山城町ノ家屋ハ賣拂候事勿論ニ有之候　且成丈ケ速ニ賣拂候方可然ト存候

入獄中書籍ハ自在ニ讀ミ候事ニハ參ラズ候、但　服役後トカ祭日休暇トカニ多少時間アルベシト存候ユヘ其際讀書スル積ナリ」

などゝある。

「監獄ノ事ハ監獄則ト云フ者有之一讀セバ相分リ可申候　其書ハ拙者藏書中ニアリ野澤氏等ニモ　必ズアルベキモノナリ借覽シ一通ハ御心得有之度モノナリ其中目前必要ナルモノナル事アレバ」

と數ケ條を詳說し、

「入獄スル日ハ知レ次第電報ニテ申越ルベシ　其外時事新報ヲ當方ヘ送ルコトヲ斷ルベシ然レ共拙者ハ入獄スルモ　時事新報ハ宅ニ於テ取續キ置キ其許ヨリ之ヲ讀ムベク且拙者　出獄ノ日在獄中ノ世間ノ事ヲ知ル爲メ必要ナルニツキ能ク整頓置キ有之度候」

とある。其頃は昔よりも追々綿密な文章を書かれた事を氣づかねばならぬ。米國公使となつた後には、今の言葉で云ふハイカラになつて、お世辭などもよくなつたとの事、未亡人はなほ話頭をすゝめて、

「病氣揚句に餘寒きびしい新潟へ行つたのですから、心配に心配を重ねたのですが、折よく病氣は全治して無事に半年を過す事が出來ました。——差入物の苦心譚なんぞ話せばいくらもありますが」

「其後同志の夫人連の交際振りはどんなでありましたか」

「私は家事にかまけてとても所謂「おつきあい」は出來ませんでした。けれども主人同志は生死を倶にして働いて居るのだから、奧さん達もお互に相助け合はうと云ふので、社交倶樂部の樣なものが設けられ、時々集つて色々話をしあつたものです。板垣伯の奧さん、河野(廣中)さんの奧さんなぞもおいでになりました。

私は幹事の樣な役でありましたので、發議して毎月僅かづゝ――二十錢でも三十錢でも貯金する事にきめたのです。喜びは共にせずとも、せめて悲しみを倶にしませうと、不幸があつた方へ贈り物など致しました大分うまく運んだのですが私が米國に滯在中分散して仕舞ひましたのは殘念でなりません。

▲家宅捜索を受けた時

『しばらく無事だと内々喜んで居りますと、二十年十二月二十五日には例の保安條令が發布されまして條約改正に反對した者は皇居三里以外に退居せよと云ふのです。東京に家のない人は翌日の午後三時までに、また家ある者は三十日の午後三時までにと急な話なのでせう、いくら困つたか知れません。



横濱野毛のあたり一寸した貸家が澤山ありますが、取敢へずその一つを借りて、主人書生二人と、殺風景な男世帶を持ちました。私は東京から用事の溜つた時尋ねて行くと云ふ事にしました二十一年の正月は淋しい火の消えた樣な心地で迎へました。

六月の十八日に、主人は横須賀から手紙をおこしまして、演説の爲めにこゝへ來て居る、二十四日に宇都宮へ遊説に行かうと思ふが、東京市内は通過出來ぬから、品川から乘りかへて、赤羽へ出やう。ついては用があるから横濱のスチーションであはう。とあつたのです。

横濱までワザ〳〵出向く位なら、前晩から行つて、久し振りで野毛の假宅の有様も見、そこに泊りませうと、私は前の日野毛の宅へ參りました。」

未亡人は苦茗に喉を濕して、

「翌朝ふと眼が醒めますと、何だか知りませんが恐ろしく澤山の靴音が聞え、宅の前でパッタリと歇みました。これはをかしい、どうしたのかしらと思ひ乍ら、寢卷の儘おきて、借家の事ですから表の處に、戸のない小さな窓があります、それからのぞくと、巡査が五七人立つて居るではありませんか、書生に云ひつけて何用か尋ねさゝうとしますと、表戸を開けるを待ち兼ねてドヤ〳〵と踏み込んで、

「お前の處の主人は横須賀で官吏侮辱罪でつかまつた自分等は□□判事の代理として、家宅捜索に來たのである。」

と大威張で申します。私は着物を着かへて、玄關へ出ました。

「私は案内でありますが、昨夜こゝへ泊つたばかりで一たいが假住ひで御調べになる程の事もない様に思ひまするが、」

など〵云つたのですけれど、どん〳〵捜索にとりかかりました。私は

「それぢや勝手になさいまし」

と坐り込んで平氣で見てゐますと、二點だけ差し押へて、預つて行くと引き上げかけますので、

「まあお待ち下さい。それだけでは主人に云ひ譯がありませんから、一應控えを取らせて頂きませう」と控えを取りました。巡査が出て行くと入れ違ひに、東京の宅の書生が參りまして、本宅も嶺村の御隱居さまの方も捜索をうけましたと知らせました。さつきから着いてゐたのだけれど、入れて與れなかつたのだと申します。

しばらくすると、保安條令で退去した連中の合宿から使で、主人が捕へられた事を知らせて與れました。私はヒヨツとしたら豫定の通り八時の汽車で横濱を立つのではなからうかと、念の爲め、大急ぎで仕度を整

へてステーションへ着きました」
火急の状目に見る様な話しぶりだ。

▲差入物で泣かされた事

「どこかに主人がゐるに相違ないと、目を丸くしてさがしたのですが、其頃の横濱ステーションのプラットホームの灯の暗い事つたらお話になりません。どうしてもわからず汽車はもう出やうと云ふ時、天の與へか他の囚はれた連中の見送人がゾロ〳〵と改札の方へ行きまする。あゝ有難いとまた取つて返して、一つ〳〵のぞいて見ますと、主人が居るぢやありませんか、掻つく様に戸を開けて乘り込みますと、間もなく發車——ほんとに危ない處でありました。

主人の左右には巡査が目を光らしてゐるので、詳しい話はもとより出來ません。たゞ、東京の家も横濱の假宅も、嶽村の方も捜索をうけた事。入獄後の事など切れ〳〵に語りあつたのです。少し警官の意に逆らひますと、注意されます。雨の様な注意と、八ヶ間敷い車輪の響との間に胸にあるだけの事はお互に通じ合ひました。

東京へ着くと、前後を警官の伴に挾まれて鍛冶橋へ送られたのです。別れ際に只一言。

「洋服では苦しいから日本服を差し入れて貰ひたい、今日は土曜であるが、特別の計らひで、午後許しを得る様に」

そこで私は警官の許を求め、念の爲めその人の名まで聞いておいて、歸宅するや否や、門下生の妻君にたのんで、和服を差し入れに行つてもらうと、どうでせう今日は駄目だとハネつけられたのです。「イ、エ、〇〇さんの許をうけました」「わからぬ事を云ふ人だ、規則は枉げられぬ」と云ふ次第で空しく引きかへして來ました。

翌日は日曜で無論駄目。月曜にやつと納めましたがこの二日の間、主人がどんなに不便を感じたでせうか私は苦痛でなりませんでした」

戸外は暮れて、夕立前の蒸しあつく、三人は齊しく團扇をまさぐりつゝ、語り、かつ聽く。（嘲風生記）

初秋の家庭料理

近藤田鶴子

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かされて、まづ今日の獻立は

朝の獻立
一、味噌汁　初茸　賽の目豆腐
二、白隱元
三、香の物　やたら漬

一、味噌汁は先づダシ昆布を適宜の水に入れて靜く〱煮て味を取つて居る間に、初茸を洗ひ鹽水に放ち、お豆腐を賽の目に切り是も水に放ち置く。普通の赤味噌を擂り、裏漉しにかけて前の昆布煮汁の出た頃、夫れに溶し入れる。同時に初茸を鹽水より引揚げ、清水にて一寸洗ひ、よく水氣を切りて汁に入れ、一ト煮へ立つた處へお豆腐を入れ、又一度煮立つたところを見斗らひて火より下ろす。

二、白隱元豆一夜水に浸したるをよく洗ひ、水たつぷりにして火にかけ、煮へ上りて豆の皮のみ膨れた頃、其湯をしたみ更に水を充分入れて、暫く煮。豆の九分迄軟かになりし頃、(指にてつまみて潰れる位) 汁氣をシタシタ位殘し置き、是に白砂糖多量、鹽少量にて味をつけ、後二十分間も煮たらば火より下ろし、其儘に十時間以上もむらし置くべし豆は汁氣を自然に吸ひて、ふつくらと極めて軟かうしかも一粒もくづれる事なく、美事に煮へ上るものなり。故に朝食に上ぼさんとならば、前夜よりしつらへ置くをよしとす。

三、やたら漬は茗荷の子を細かく小口切りになし、玉菜を繊切りにしたると、紫蘇の實とを鹽にて揉み、輕く押石をかけるべし。三四日も經なば食され、二十日間位は保存される。永く保存せんとならば鹽を鹹味にせばよし。芳香馥郁として、朝の漬物、酒の相手等には最も妙なり。

朝食の濟んだは七時半。良人の出勤後片付けして、新聞見て居たら八百屋が來た。今日始めて栗が出た、一升三十錢とは餘り高價いから五合斗りにして、外につまみ菜と、秋茄子は嫁に食はすなとやらいふ、其茄子とを取つて置く。肴屋も來たがいつもながら變つたものもないから鰺を置いて行かす。彼是してる内に十時半、下女をして牛の挽肉百目を買つて來させ。お行廚の仕度に取掛る。

中食行廚獻立
一、上の重　つまみ菜の胡麻よごし
二、下の重　ビーフボール付合せ　玉菜

一、つまみ菜を洗ひて揃へ、竹の皮を細く裂きたるものにて、よき程づゝ括り把にし、鍋に湯をたつぷり沸騰したる中に入れて、色よく茹で、引揚げて十に移し、水が全く冷へる迄

二三度取替へる。別に白胡麻を煎りて、擂鉢てよく〳〵擂り、砂糖、醤油、味淋にて鹽梅し。次に水に浸せるつまみ菜を、両掌にて押す様にして水氣を搾り、是を爼板に乗せて縛りありし竹の皮を去り、菜の上下を揃へて切り去り、皿に入れ上より、前の胡麻醤油をかける。

二、挽肉に胡椒、鹽、メリケン粉少量を加へよ、交ぜ是を程よきボール形に作り置く。ラード油を煮の立つ迄沸騰せしめて、ボールを揚げる。別に濃きスープと、牛乳と等分にしたる汁を鹽にて味を付け、其中へ今の揚げたるボールを入れ、トロ火にて一時間許り煮込む。

付合せの玉菜は。細く刻みたるをバタにていため、煮へたる頃鹽と胡椒にて味をつけ、ボールと共に皿に盛り、上よりトマトソースをかける。

お弁當出して先づ安心。午食は下女と二人で淋しく済ます。土曜日だから晩餐は少し御馳走をしなければならないけれど、こんな田舎は珍らしい材料や走りものが、ちつとも手に入らないから困つて仕舞ふ。

晩餐獻立

一、鰈のフライ付合せパセリー
二、ボイルドチツキン付合せグリーンピーツ
三、栗の梅肉あん
四、茄子のふろふき
五、ポテトサラダ

一、鰈を三枚に下ろし、薄鹽を當て一時間許り經てから、メリケン粉にまぶし、次に玉子をほぐしたる中に浸し、次にパン粉をまぶしてラードにて揚げる。

パセリーを鹽水にて洗ひ、付合せとして皿に盛る。

二、雛鶏の腿の肉を程よき大きさに切り、鹽胡椒を當て暫らく置く。フライパンにバターを溶きて鶏肉を両面共よく焼く。(テンピにて蒸焼となせば猶更宜し)次に煮込鍋にスープを入れ、其中にて此鶏肉を一時間以上トロ火にて煮る。

付合せのグリーンピーツ(罐より取出し一寸火を通すべし)と共に皿に盛り、ホワイトソースをかけて出す。

ホワイトソースの作り方はバター一ト小匙を溶かし、メリケン粉一ト小匙を加へ、よく攪き廻はしブツ〳〵のなき様にして後、牛乳にてドロ〳〵になる迄ゆるめ鹽にて味を付けるなり。

三、五合の栗を半分は、炒りて後澁皮を去り、半分は澁皮を去りて後よく茹でる。別に梅干一個の核を去りたるものを、擂り鉢にてよくすり、然る後茹た栗をつぶして、梅干の肉と共によく〳〵擂り、裏漉しにかけ、砂糖、味淋、鹽少量を加へて鹽梅し、きんとんの衣位になしおく。次に木茸少しを茹で、繊切りにし醤油砂糖にて味を付けたるものと、前の炒りたる栗とを、右の衣にてあへるなり。但し梅干の酸味強きに過ぎれば、折角の風味を損ずるもの故、加減が肝要。

四、なるべく皮の薄きような、中位の茄子を撰り

花落ちと蕾を去りて丸茄となし、(御飯を炊ぐ時にお米の上に乗せて置くと御飯の出來には少しの障りもなくお茄子も誠に工合よくむれる)。別に生薑味噌を砂糖、味淋にて煉したるを右の茄子の丸の儘にかけて出す。

玉、ポテートサラダは馬鈴薯の皮を剝ぎ、千切りに打ちて酢を一寸落したる水に(あくの出ぬ爲め)放ち、暫時にて水に打掛げ、水氣を去り、なるべく水に抜ける樣にして、沸湯を上からかけると、馬鈴薯が煮へ色に變る。別に玉子をほぐし鹽と砂糖にて加減し、玉子燒にべゝを引きて、薄く燒きたるものを千切りとし、(馬鈴薯三個なれば玉子二個の割)。四杯酢を鹽、砂糖にて鹽梅したるものにて、馬鈴薯と玉子を共に交ぜて皿に盛る。

平凡なお料理だと、お小言かも知れませんが此頃では冬の仕度の仕度物の忙はしいので、お料理に外り手を懸けてゐられないのみならず、材料も都會の樣には、自由がきかないから。マア我慢して下さいと、笑つて夕食終る。

避暑地の洪水

小田原に避暑されし某令嬢が水難に遭ひ玉ひし折の消息

(前略)當地及箱根の被害は他の地方より一しほ烈しく、唯一の交通機關たる電車は酒匂川氾濫のために全部不通となり、通信なども全く杜絶いたし候

十日の午後には早川橋流失、寶石橋もまた洗ひ去られたりとの報に接し當町民の若者全部よりなれる消防隊總出にて警戒につとめて町にては吹きだしやら何やら實に戰場もかくやとばかり物すごき光景に候ひける。

去月三十日より昨十五日夜までは都合により兩親とも歸京いたし居り候ひしため荒れの頃は妹と下女と三人ぎりにて誠に心細きおもひいたし候、十六日午後にはまた蘆の湖溢出との騒擾し全町民擧げて板橋と申す處に警戒に赴き申し候こゝは蘆の湖より流るゝ水の落つる處にて當小田原の町はづれに御座候、昨今もなほ島流しの有樣にて十日頃の手紙新聞など漸く手に入るしまつ、實は交通杜絶のため(酒匂橋流失)當町にては今はたゞ二日間の糧食のたくはへ有るのみ其後には八千の町民の食する物さへ無きしまつにて漸く今日あたり汽船を仕立て伊豆下田及日本橋にて米穀を買入るゝよしに御座候、たゞ今の處茄子など一個一錢とかいたすよし、尤も玄米は當地にも澤山あるよし乍ら水車流失のため右のしまつに御座候毎夜電燈はつかず實に慘たる有樣、かへるにも歸られず過し居候、

歸京は大抵當月二十五六日頃のつもりもはや浪もしづかに相なり候まゝこれから少し遊ばなくては折角出かけたる甲斐もなき事とこぼし居候、箱根湖畔におはします千代子樣、とみ枝樣の御上も氣づかはれ乍ら未だ御見まひも申上げず候まゝ御たよりのおついでも候はゞたゞ御案じ申上げて居ると御傳へ願ひ度候。

天女降臨

内藤千代子



△

私は旅館の養女でございますのよ。あら、姐さんぢやありませんわ、エ、場所、それは申せません、だゞ湘南の……ある海水浴場とだけ、ね、オホヽヽヽまアおきゝ下さい。

養母ト云ふのは私の實の伯母なのよ。何しろ女の手一つで、これだけ盛んにやつてるんですものねえ、姉妹とは云ひ乍ら、實家の母なんかとは違つて男まさりの氣性ですわ。私のことは五六年前からきまつてたのでした。で、この春女學校を卒業と直ぐこちらにまゐりましたの。義從兄は早稲田の英文科に居ます、エ、卒業？　來年。

來たてにはねえ、ずゐ分困りました、何だつてそれまで、崇高な海老茶袴を蹴立つて飛びまはつて居たカムレット式部が、一足飛びに○○館の娘となり下……つたんだか、上つたんだか、その當時は、ハイカラだとか何とか、近所の評判など凄じいものでしたけれども、此頃ぢや私もすつかりなれ切つて了ひました。

養母は、嬢や、嬢や、つてそれは大切にして下さいます。もう實家の方がそんなに戀しくもありません。

エ、はア、それや面白いわ。だから少しすつぱぬいてきかせて上げやうつて云ふのよ、ホヽヽまアだまつてお聞きあそばせよ。

△

「八重ちやん、玉枝さん、玉枝さん、八重ちやん、八重ちやん、もう五時ですよ、起きて頂戴、八重ちやん、玉枝さん」

え、焦れつたい」う八重ちやん、八重ちやんつたら、玉枝さん」肩に手をかけてはげしくゆすぶる。まアこの二人つたらまるでお話よ、あれ程氣丈の八重ちやんなどが、どうしてかう朝世話がやけるんでせう、目ざまし時計の三十個も一時に鳴らさなくつちや鼓膜にひゞかないんだ、ほんとに困り者！

「八重ちやんつたら。おそいんですよ」

「ムニヤ〳〵ムニヤ」切角起き上つたと思つたらまた突俯して了ふ。玉枝さんは散々眼をこすつて、ひよいと立上つて、

「あゝ眠つちやつた――」と両手をのばす、

私は堪らなくなつて失笑した。

まだ〳〵この人達はいゝけれど、女中部屋の寢態なんてありやしないの。女中頭のお兼さんからして大きな口は利けやしない、まるで寢間着の裾を頭にかぶつちやつて居るんですもの、お貞など枕を頭にしばりつけて寢たら、翌朝一間も先へ飛んで居たつて大笑ひ。

手早く前髪かき上げて、一寸御園撫子はたいて、昨日縫ひ上げた久留米を出して着る。

臺所ではもう大活動が始まつて居る。のこ〳〵出て行くのゝ間のわるさ。火種を十能に盛つて裏のお離れへ行く、音のせぬやうにそつと戸を一枚開け、火鉢の掃除して炭をついで、鐵瓶をかけておく。私の受持の江田原伯爵の五位様、昨日一寸東京の御本邸へおかへり遊ばしたので、何だか今朝は物足りない……あの五位様はほんとにお氣輕な平民的のお方で私大好き！え、理科よ、數學科をやつてゐらつしやるんですつて。

六時にお目覺のベルが鳴る、若様はほんとによくお時間をお守りあそばす、御洗面のお水をお取り申し、グラウンドを御散歩中にすつかりお掃除して……一昨日活けたぎばしゆの花がみんな落ちて了つたので、花壇へ出て大きな白百合を露ながら採つて來る。直徑五寸にも餘んぬべき大輪のしとゞ透きとほつて目にしみるやう……

七時おかへり、お茶を差上げて、直ぐに御食事、若様は脚氣の氣味でゐらつしやるので米飯はおとりにな

らない。

玉枝さんと共同膳で御飯を食べる、玉枝さん、秋澤さんに、豚がソマトーゼ飲んだやうだつて云はれたつて、なんぼ私がせいひくで横肥りだからつてねえ、とおこつて居る、丸つこいこの人はいつそ可愛くてよい褪紅色の帯がよく似合ふ。

一しきり片づいてから髪を結ふ。例の通りローマに束ねて、水色リボン、この髪ばかりは母様が眉をおひそめなさるけれど、私は知らぬ顔で澄まして居る。

縁側で多田様の奥さんと立話してたら、

「一寸！」と平岡様が手招きなさる、何か御用？と伺つたら、今日▲▲館にゐらつしやる御友人方と、烏帽子岩へ舟遊びの御催し、それで私にも一緒に行きませんかつて誘つて下さる、切角だが御辭退申す。この日山下様のスケッチ帖はいかに賑ふであらうか、平岡様は女子大學の家政科の學生、叔母様と有仰る山下様は美しい婦人畫家で、二十六の今日までまだおひとりすみとやら、一寸人の目に立つお二人なので、みんないろんな事云つて居る。平岡様もいゝ方だけれど、うちの學校、うちの學校つて毎度御氣焔には當てられます。

母様が一寸お外しなさる間を帳場に坐る。チリチリチリ〳〵、ア、八重ちやん、八重ちやん、殿様のお召！え、エ、殿様つて松村子爵の御世嗣よ、先月の廿六日から來てゐらつしやいますの、あちらの離れは八重ちやんの受持ですけれど、私も母様の御代理で時々御機嫌伺ひに行く事がある。そりや華族様なんてかへつて、ずゐ分思ひ切つた事など有仰るものね、遠慮會釋と云ふ事御存じないんですもの。八重ちやんがよく泣顔してますのよ。

三番へサイダと梨が出た。

若杉様が何かあまい菓子を下さい、と別館から玉枝さんが來る。若杉様のお好なものならきまつて居るわ唐饅頭を持たせて上げる。

別館の六番にゐらつしやる秋月澪子様、これから大磯へ一寸行つて來ますつて、お出掛あそばした。

見れば見る程、まア何ていゝ御縹緻なんでせう。きりつとした細面、きめこまかな中高顔の、つぼみのやうなお口許して、お眉の美しい、生ぎはの濃い、お髪だつて羨しい程眞黒なふさ〳〵と、それよりもそれよりもあの御眼ざし……夢二式なんぞ遠く及ぶところでないわ、何と云つたらいゝんだらう……かぎりない愛を含んで……ぱつちりと涼やかな黒眼勝の……まつたく美人よ、そりやア美人よ、例の通り前髪を思ひきり高めに張らせたルイザ卷、お召物はいゝ藤納戸の風通で、青磁色コントラス織のおみ帯胸高に、極細のプラチナくさりを首からだらりと、白茶に水色のへりとつた刺繍入のパラソルついて、すらりと立たれたお姿つたら……美しい歯なみを見せて、につこりなさる可愛らしさ、ほんとに何て好い方だらう。何しろ東京育ちのハイカラさん、何處となく垢ぬけて、とても〳〵平岡樣なぞいくら大前髪ふり立てたつて駄目よ。

そして大變な柏葉宗の大信者でゐらつしやるから、お互に紀念祭の話でも始まると夢中になつて了のよ、だつて實際向陵健兒は可愛いのねえ、ほんとに罪のない人ばかし、あゝつく〴〵私も男子と生れてあすこの寄宿生活がして見たい……コムバーストーム！何て愉快なひゞきでせう「勝つた方がエー」なんか何て無邪氣なんでせうねえ。女の身の口惜しさは、あのグラウンドのまん中にをどり出して、白旗を打振る事も出來ない。

寮歌なんか深樣のお上手なこと、美い聲でよく歌つてゐらつしやる、たゞね、稻門健兒が大お嫌ひ、ワセダツポ、ワセダツポ、と有仰るもんで、私はその度毎くすぐつたいやうな氣がして仕樣がない……あら、お手が鳴る、お貞、お貞、十三番よ、早く、早く、オヤもう十一時。

お裏へ見まはりに行く。「オイ」と例の若樣のお召、手をついて伺ふと、「これを君に上げやう」つて大きな紙包を下すつた、何だか知らないが、「恐れ入りましてございます」と有がたく頂戴する。歸つて來て開けて見たら、銀紙包のチヨコレートやら、懷中汁粉やら、

思はずほゝ笑まれた、後でみんなにも分けてやらう、あの若様がお菓子を下さらうなんて、晴天のへきれきだ。明日は暴風雨かも知れない。

　ねえ、この若様つて面白い方よ、まだ一度も名をお呼び遊ばしたことがない、「オイ」か「君」でおつ通し、それやね、御食事の時とよく／＼御用の事以外いつもお口は閉ぢたつきり。

　大學でも評判の秀才で在すとか、さうでせう、御勉強が獰猛なのだもの、海岸へも行らつしやらず、朝から夜は十時まで、デスクの前をおはなれ遊ばしたことがない、えゝ



えゝ無論法科ですの。

　でもね、先日――あの、若様は妙なもの持つてきてゐらつしやるんですの、だるま様の持つてるほつすねえ、あんなもの何になるのか、不思議で／＼ならないの。たまりかねてある朝、お茶を差上げながら、

「君さま、これは何でございますか」と伺つたら、

「これか、これや君が居眠りした時、引ぱたいてやる物だ」

「あら」私は俯いて了つたが、御串談とはわかつてるけれど、あまりお眞面目なので、何だかこはいやうな氣もして、そのおむづ

かしいお橫顏をつく／＼とながめた。したら其後お晝餐にお給仕終へて下るとき、
「おい、その蠅はらふもの取つてくれ」
蠅ばらふもの…そこら見まはしたが何にもありやしない、大方これだと思つて例の妙なものを差出すと默つておとりになつたから、やつとわかつた。蠅はらふもの…
午後別館へ行く。欄に凭つてた若杉樣が見下して、
「おーい」と有仰る、今日は少し　元氣がないやうだ一高の生徒なので、奧樣も大さわぎして御機嫌おとりなさる、學校は御病氣のためにこの春から休學なのださうな、あゝ肺尖加答兒？…男には稀な清い姿、美しい人、私は人事とは思はれません、先日もお風邪が重つて、二三日枕をお上げなさらなかつた。とゝかねながらも私の看護を大へんに喜んで、
「文さん、とんだお世話をかけますね、貴女の…僕ア死んでも忘れません」とあの凉しい御眼にかすかな露さへ浮べられ…私はその時思はず、泣いて了つたのです。それ以來いよ／＼文さん／＼と有仰つて、私が取まぎれて別館へ行かない日には、何かの用にかこつけては、本館へ出かけて行らつしやる。別館は海の音が近くて夜ねむられない、ねむられないつて私の顏見る度、おうつたへなさるのも、本館の方へ室を替へてくれとの下心。けれど、けれど、どうしてそんな事が出來ませう、一度ならず二度ならず、紅の痰を吐かれた、そんな事みんな母樣には秘密です、母樣に知れたら、お立退を願ふのはわかり切つてます。母樣の前ではげしく咳入られる時なぞ、傍に居てゝもハラ／＼する。それを、秋澤さん達、"お文さん、若杉君の病氣は危險ですせ、それやお鈴大明神なんぞ、パナルスの方から御免かうむつて了ふだらうけれど、貴女なんか注意せんと…殊に若い人にはうつりやすいですからね」なんて――
　きつとあの人達がいつか母樣のお耳にも入れずにや居ないわ。お風呂だつてさうよ、他の方達はさうでもないのにあのA組、きつとなの、若杉樣が先におはいり

になつた日には、どうしても厭だつて意地に掛つて：：：仕方なくいつも／＼若杉樣は皆樣のあとでばつかり

それと云ふのも澤樣と云ふ同情者があるので、皆樣妬けてたまらないんだわ。

うちにやねえ、不思議と早稻田の方が多いのよ、ことに別館の十二番を占領してるそのA組ね、牛耳つてる秋澤さんがあの通りの人だから揃ひも揃つて：：その中に商科生の田中さんて方、若葉會の選手だつてね、カルタ狂ひなの、はね飛ばす二本の指に、タコが出來てるつてそれが御自慢なんですの、私、



「何ですね、立派な殿方が、高の知れた紙片に血眼で疊のちりを吸つて指をすりむくなんぞあんまりだわ」と云つて上げたら、本氣になつて怒るの：：。ほゝゝゝいつか一番田中さんと願ひたいと思つてるむざ／＼人後には落ちないつもり：：

皆さん海岸へお出掛のあと、室はからあき、颯と吹きこむ青嵐、ハタ／＼と掛すだれを吹き上げる。どのお室も／＼すゐ分散らかされてある、お鈴は臺所の板の間に坐つてコクリ／＼、玉枝さんひとりせつせと紺飛白の着物をいぢくつて居る。

玉枝さん一生懸命ね！　えゝ若杉樣にほころびをたのまれたのよつて若杉樣のことだとみんな喜んでして上げるからうれしいわ。

婆やが洗たくして居たから、ついでに私の矢飛白も洗つて貰ふ。糊をこはくつけちや厭だよと云つたら、糊の利かないのをお好みの方は、意氣地なしの旦那樣をお持になりますよつて、うづら豆のやうな齒をみせて笑つた。

四時までは閑散の身、網町の楊大眞樣へ手紙書く。五時頃お着になつた制服の五人づれの學生さん、腹が空つた〳〵つて大さわぎ、それでお風呂がすむと直ぐ御飯、お貞は次の間にお櫃をならべて控へ、私がお給仕する、忙しいのなんのつて杓子も眼のまはる程つかはれる、一時に三つも四つもお代りがあつまるのでどれが何誰のだかわからなくなる、なか〳〵獰猛な勢だ。

今夕若樣フオークをお執り遊ばしながら、めづらしくいろ〳〵お話があつた。君學校は何處の出身か？去年當家へ來たと云ふ學習院の綾小路を知つて居るかなんて有仰る、私は一生懸命になつてお答へ申した。食後美しい月に浮れて門に出て居たら、若杉樣に逢つたので、つい海岸へ憧れ出て了つた。風は金波銀波を動かして遠く聲あり、夕がすみ模糊たる中に、江の島の燈影星の降るが如く、白飛白や紺飛白、緋博多、お納戶、丸髷、廂、カイゼル、五分刈、三々伍々、打つれて汀をたどつて居ます。私の指環もうれしいほど光る。

歸つて家へ入る時、帳場の母樣の水色眼鏡がうごいて、剃つて靑い眉をおよせなすつた、と見たはひが目か。

先刻の十一番さん、貸浴衣を着て、へんな恰好の一人が廊下へ出て、誰かをさがして居られるやうだ。私が出て行くと、「あゝ、あの君にこれを上げますからね漬物とりかへてくれ給へな」「はア」何だかわけがわからない、「どう致しますの」

「こゝにこれだけ餅菓子が殘つてるんだがね、これを

箱根金時山



る君に進上するから、少し漬物を下さい」
「あら、さう、ホヽヽヽ少しお待遊ばせよ、」
婆やを呼んで澤山茄子と胡瓜の糠味噌を出して貰つて小鉢に山と盛つて持つて行くと「やあ多謝々々、ちやこれを」袋毎渡さうとする。思はず笑ひ出して、「あらようございますよ、頂いたも同じ事で‥‥」
「だつて、僕等だつてもう澤山だから‥‥」
果物の皮やら、福神漬の空罐やら、コムパの後は狼藉たるものだ、またしても含笑を禁じ得ず、
「皆様は何處の學校でゐらつしやいますの！」
「えゝ」と顔見合せて笑つて居られる。
玉枝さんとお湯にはいる。八重ちやんとお貞はね、よく沈沒するので名高いのよ、湯槽のふちに頭をのせてい丶心地に目を閉ぢて居るうちはいゝけれど、時々どぼんと頭まで突こんで了ふのですもの、うそのやうだけれどまつたくよ。ざつと汗を流して上る、リボンを外して置くのを忘れてビシヤ〳〵にぬらしてしまつた。

ねむい眼をこすつて時計をみれば、もう十時二十分びつくりしてお裏へ飛んで行く、襖のきはにひざまづいて、

「若樣、御就床時間でございます」

「あゝ」

お次の間へお床をとゝのへて、雨戸をくりにかゝるとやつと讀みかけの洋書をお閉ぢ遊ばす。

お召物をたゝんで洋燈をフッと、お枕元には朱塗の行燈、おぼろにゆらめく青蚊帳、「御きげんよう、おやすみ遊ばせ」

あゝこれで今日の一日も終つた、學生時代と違つてこの頃の一日の長いこと、一日すむとほつとする、嘗ては氣位の高いのに「姫君」なんて云はれた私が、朝な夕な人の機嫌を取つて、つまらぬ串戯など云はれたり、失敬な事云つて弄はれたり、こんな生活は何よりの苦痛である。それも兄樣さへ……ふと眼を落す机の上の寫眞立に、ほゝ笑み給ふ御姿、思はず取上げて頰につけた。

あゝ早く來年になれ、來年になれ、兄樣！　兄樣！兄樣！　おゝ文ちやんと云つて下さい!!!

△

髮を結ふ。

癖直しのお湯をとりに行くと其處にフォークや匙を一まとめにして磨いて居たお鳥がいきなり顏を上げて

「お孃さん」「何です」「昨夜お着になつた七番の方さ、ねえ」「あゝ」「今朝洗面場でね、貴女のことを、あの女は何かつておきゝなさいましたよ」

「さう」

ーそれから當家のお孃さんですと云つたらね、何にしても素的な尤物だつて……」

七番の方？　あゝさう〳〵、昨夜お着になつた……夏みかん面の初老紳士とアルパカの縞の洋服の三十あまりのハイカラ紳士、あまり捻つたら形なしになり相な、至極夏向の凉しげなお髭を、しきりとひねりまはして居らしつたつけ。

お貞が來て「お鳥さん、五番樣でちよつと」

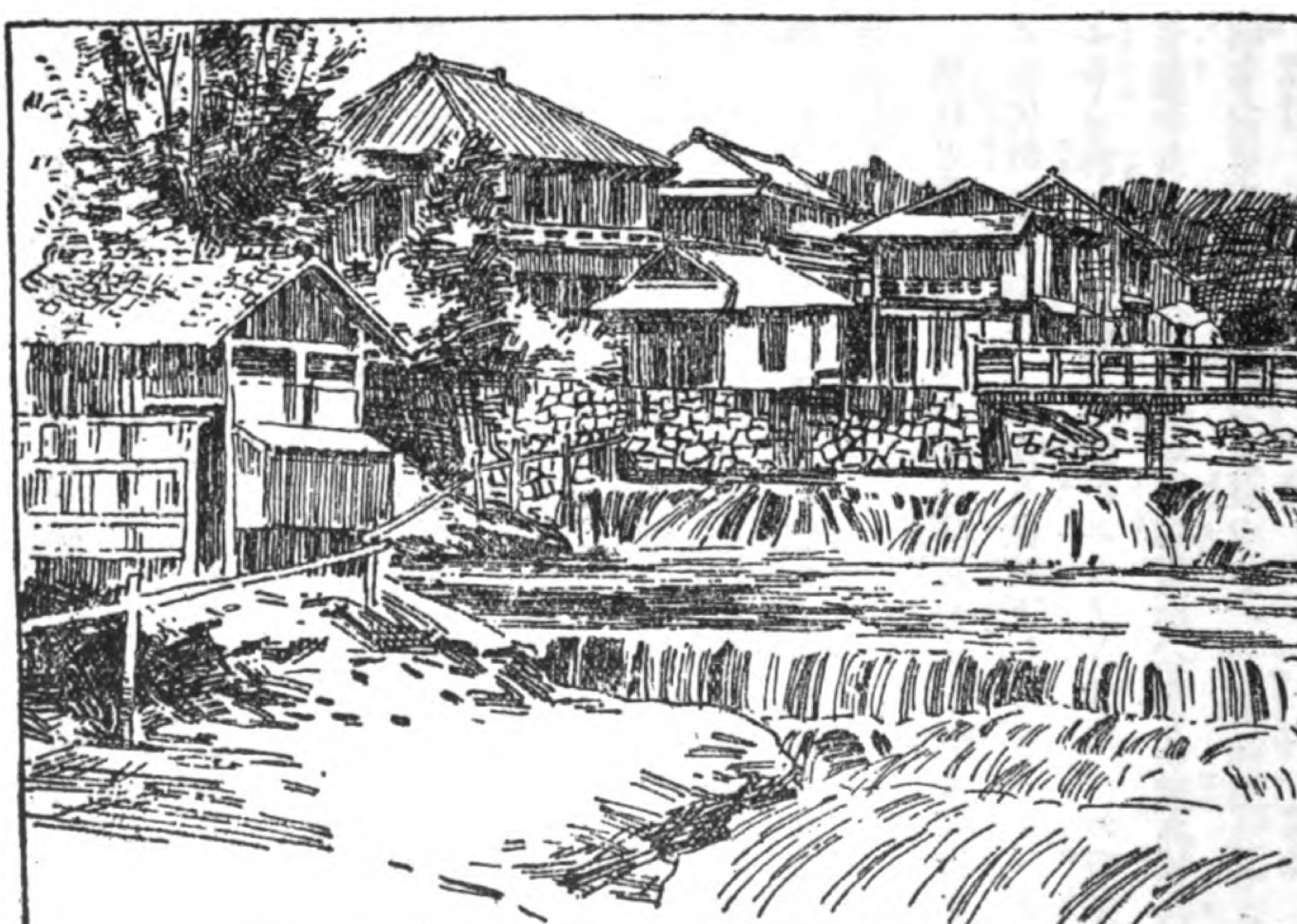
「チヨツ、うるさいねえ」

器量はそんなでもないが珍しく白粉の乗の可いので評判のお鳥さん、多い髪を東京風の銀杏返しにして、紺飛白を着た襟元がぬける程白い。母樣のお氣に入りを笠に着て隨分ゐばつて居るわ、この頃ぢや三番の穂積樣、あすこへばかりはいりこんで居て仕方がありません。玉枝さんなど、穂積樣の奥さま〳〵つて弄かいます、穂積樣はあんな温和しい方なもんで、困り切つてゐらつしやいますのよ。

ふと縁に立つて見る、まだ朝のほどの花やかな、深碧の空の色近く、純白の蓮の花は池の鏡に影を落して木蔭には降るやうな蟬時雨、また今日も照りつけられるのであらう。

高野樣からお手紙が來た。部屋へ行つて封を切る、相變らず美しい御手跡、

「なつかしき君の玉章これなくば忘るゝ事もあらましそ、裂きて捨てんと思へどもなほ捨てがたみ人知れず



修善寺名勝白糸の瀧

秘めおく心いかならむ……」

「唯一の紀念なる繪葉書は机上の友としてあかぬながめに當時を偲び……」

丈にもあまる卷紙に走らせた一言一句、例の熱烈の文字、私は顔におし當て了つた。あゝ高野樣、私何も貴下に特別に親切になどして上げた覺はありやしないのに……赤く思つて見れや赤く見えるのか、やさしいお情は身にしみて居るの、せめて兄妹の誓をしてくれ僕は片時半時も文ちやんの事は忘れられない、戀しい妹と思つてるのだ、雜誌や小說位はいつでもお望次第送つて上げますのつて、私、ほんとにどうしたらいゝんだか……あれからお手紙ばかり九本受取つた。高野樣……それや私だつて女ですもの……戀されて決して憎いとは思ひませぬ。胸に浮ぶはあの眼、あの聲、角帽かぶつた色白の細面……赤門……文科……

「孃や、孃や」母樣が呼んでゐらつしやる。びつくり我にかへつていそいで卷きをさめて箪笥の抽斗しに仕舞ふ。孃や……何と云ふ古風な士族的な言葉なんでせう、だから秋澤さん達に、「御令孃、御令孃」つて冷かされるんだわ。

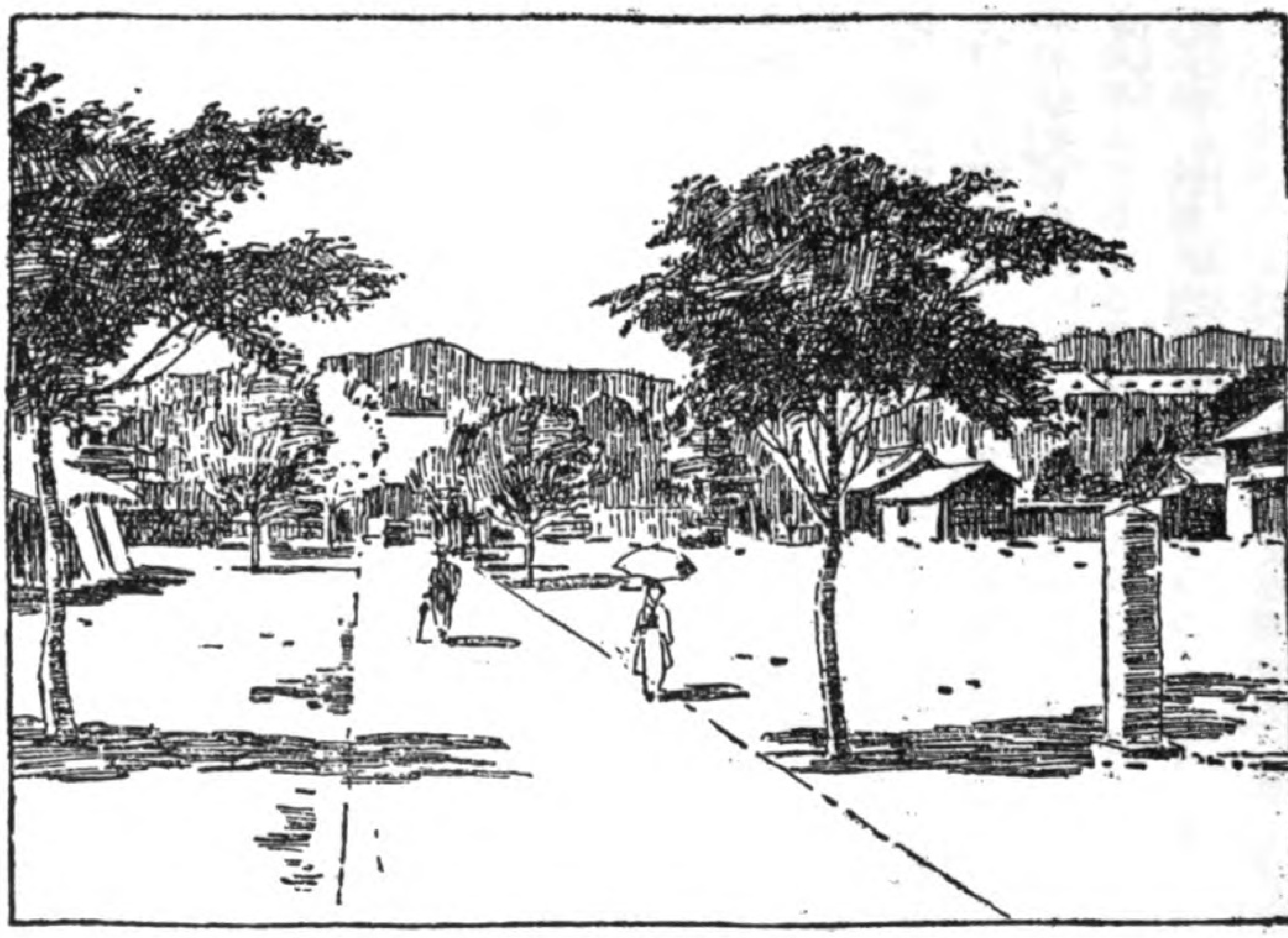
母樣の御用は、いゝ髮結さんが來たから丁度島田に結げて御覽と有仰るのだつた。

まア驚いた、この暑いのに？と獰猛に恐縮したが何も髮の事ぐらゐで養母樣の御機嫌を損ずるでもないと思ひ返して、鏡に向ふ。

折角結ひ上げたルイザ髷を惜しげもなくこはされて癖のしで引こするやら、梳櫛で目の細くなる程引張られるやら……根には紅白の丈長を三枚重ねて結ぶ。お嫁さんのやうだつて女中が代る〴〵のぞきに來る、馬鹿にしてるわ。

けれど賞められてみれば滿更ねえ、故とにはあらねどお化粧し直して、着物も仕裁下しのモスリンさらりと……久しぶりなので頭がユラ〳〵する。お晝餐にどうしてもお裏へ行く事が出來ない、うまく玉枝さんを說きつけて代りに行つて貰つた。

母樣が、野田樣のお見舞に行つてお出と有仰る。ほ



攝津湊川神社

んとにしばらく御無沙汰した、野田様は四五日前から胃をわるくして御病人なのです。丁度時間だから牛乳を盛つた美しいコップをお盆にのせてお離れへ行く。一寸お次の間に膝をつき、

「あの、野田様‥‥」

「誰か、おはいり」

「御免あそばせ？」

しづかに襖をあける、三日見ぬ間の櫻かな。お近眼鏡がいやに光る、いつもは光澤美くしう分けられたお髪もめちや／＼にみだれて、あをい額にかゝつて居る

「ヤア、これは？」

「どうも御無沙汰いたしました。いかゞでゐらつしやいますか」片手をついて牛乳をおすゝめする。

「お文ちやん、もう僕ア今度は死にます」

「あれ、野田様」

「僕が死んだら、從五位様をよろしくたのみますぞ」

「エヽ／＼その時こそ、煮て食べやうと焼いて食べやうと、此方の勝手でございます。けれど昔から出る出

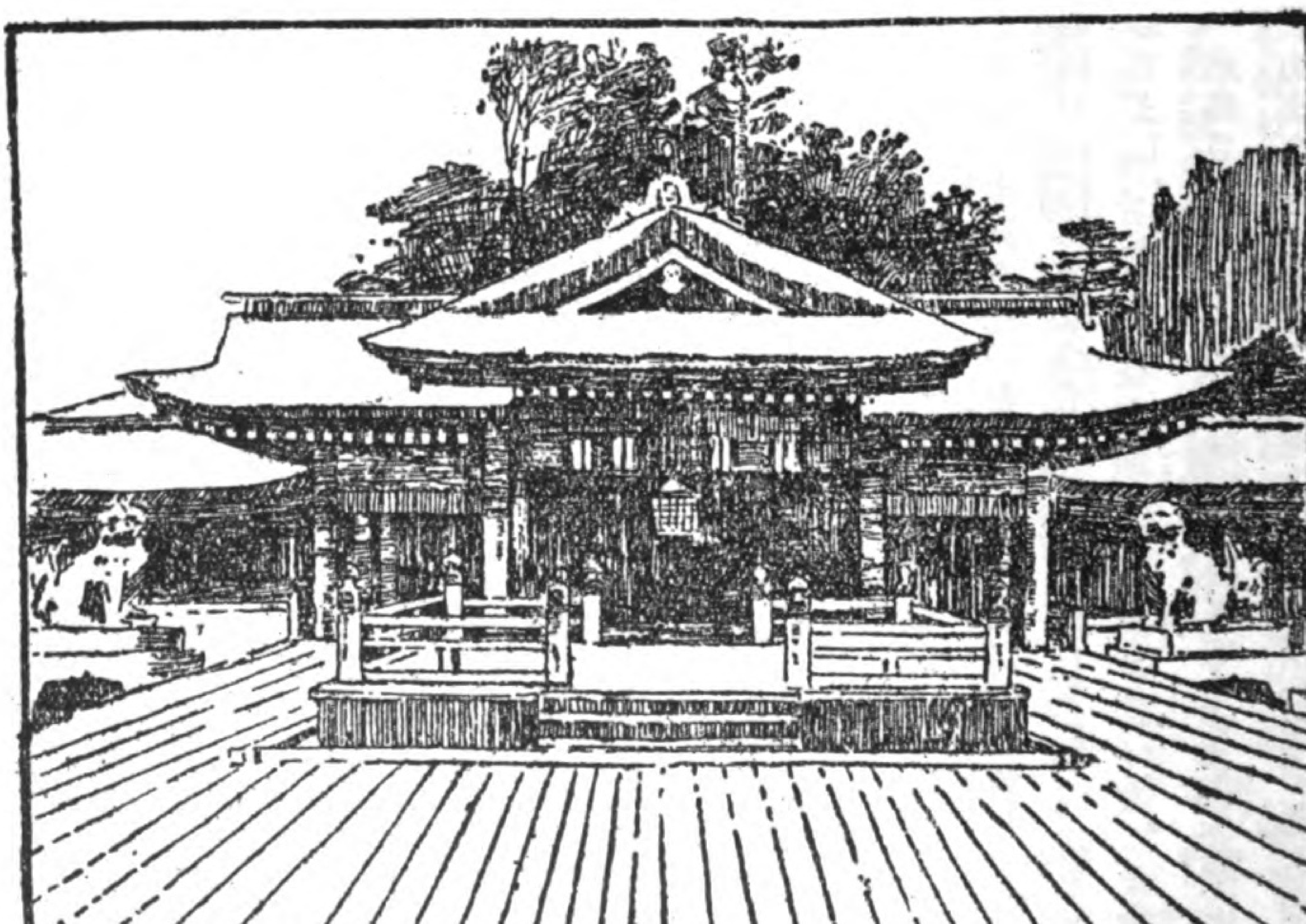
ると申す化物に出ましたゝめしはないさうで‥‥」
「死ぬ〳〵と云ふ奴に死んだためしはないつてか、情ないなア」
「ホヽヽヽ、何ならお線香立でも持つてまゐつておきませうか」
「オイ、誰か」「は」びつくりした、ふり仰ぐまもなく殿樣はもう襖をお開けあそばして「お文ちやんだな、今日は厭に澄ましこんどるな、ヤア、高髷がよく似合ふぞ」
「御串談ばつかり‥‥」
　仕方のない駄々つ子ちやんだ、出るにも入るにも御家來がついて歩いて、滅多な事はおさせ申さなかつたのが、野田樣の御病氣以來、お一人で御自由に出來るので、この頃殿樣ひそかに喜んでゐらつしやる。
「オイお文ちやん」
「はい」
「話してお出、お文ちやん」
　お文ちやん、お文ちやん、てまるでお文ちやんを賣りに來たやうだ。まあね、私の顏さへ御らん遊ばせば歇まずにお口きいて、またそのお話がせまい範圍の一ツ事‥‥丁度三尺ばかりのテーブルをグル〳〵まはりしてるやうなもの。毎日々々同じことをくり返してお話遊ばす、八重ちやんもこれには困つてたつけ？
　やつとそのテーブルから切りぬけて別館へ行く。
空色のパラソル深くかたげてそつと入つた、折よくA組は海水浴に行つて丁つた後なのではつとした、二階へ上つて若杉樣のお室をのぞく、何處へ行らしたのかしら？　からりと深樣が障子から半身をお現しなる、「あら、素敵？」と氣取た聲出してウス笑ひ、隨分深樣もお人がわるい。
「おはいりなさいよ、文子さん、合唱でもやらうぢやありませんか」
「業歌お歌ひあそばせよ、ね、深さま」
「えゝ一緒にね」
　花瓶には撫子の投げざし、床の間には雑誌と小說、柱には兄樣のお召が一枚ぶら下つて、一ばん風通しの

いゝ十疊室、新聞紙はバサ〱と室中をころげ歩く。

澪様、何故海水浴あそばさないの？　え、私これでも去年まではずゐ分振るつたものだつたのよ、愉快だわねえ、斯う板を抱えて身がまへて、大浪に飛びのつて片手に拔き手を切りながら、ツーツと岸を目かけて突進する氣持なんかつたら？　底へもぐる、浪をのり切る、そりやもう浴場第一のお轉婆を以て目されて居たんですからねえ。でももう今年はどうしても海水浴なんぞする氣にはなれないの……これだけ年をとつたんですね。あら私もよ、お互にねえ、ホヽヽヽ。

机のひきだしから寮歌集お出しなさると、バラ〱ツと頁がひるがへる。澪様はふと其處をおさへて、聲高く歌ひ出す、

アムール川の流血や　氷りて恨み結びけむ
二十世紀の東洋は　怪雲空にはびこりつ
コサック兵の劒撃や　怒りて光り散らしけむ
…………………　…………………
…………………　…………………



嚴島神社々殿

…………向ケ岡の健男兒　…………虚聲虚涙を外にして
照る日の影を仰ぎつゝ
「向のお部屋の健男兒　遠慮會釋を他にして」

ませつ返し乍らりと向の窓が開いた、澤様の兄様と吉野様がお顔をつき出す。

自治寮たてゝ十一年　世紀新に來つれども
北京の空は山嵐　…………
「十分食つた十一杯　お櫃は新に來つれども
ペコンの腹は——　ペコンの腹は」
さらば兜の緒をしめて　自治の本領現はさむ
「さらば袴の緒をしめて　肱の枕に一ねむり」

「兄様つたらよくつてよ」

流石に失笑して了はれた。

夕暮時のたすきに雪白のエプロンかけたまゝ、門際に佇んで居ると、不意と後から、「アハヽヽヽ、お文さん」廣瀬様が笑顔で殺布を取りながら出て來た。「アツ」

「いや、有がたう、非常によく撮れたです。いくら強情張つたつてこの通りですよ、實際いまの姿はよかつたからね、かう下向いてその…ハヽヽ、いづれ出來上つたら進上しますよ」

これだから油斷も透もなりやしない、返事は何ともしずに駈けこんで了ふ。

この夜兄様へ手紙書く。青山緑水、晝も山ほとゝぎす啼く山中、久しぶりなる御老親や姉上達にかこまれて、どんな日を送つてゐらつしやるでせう、湘南の妹を忘れ給ふなと書く。

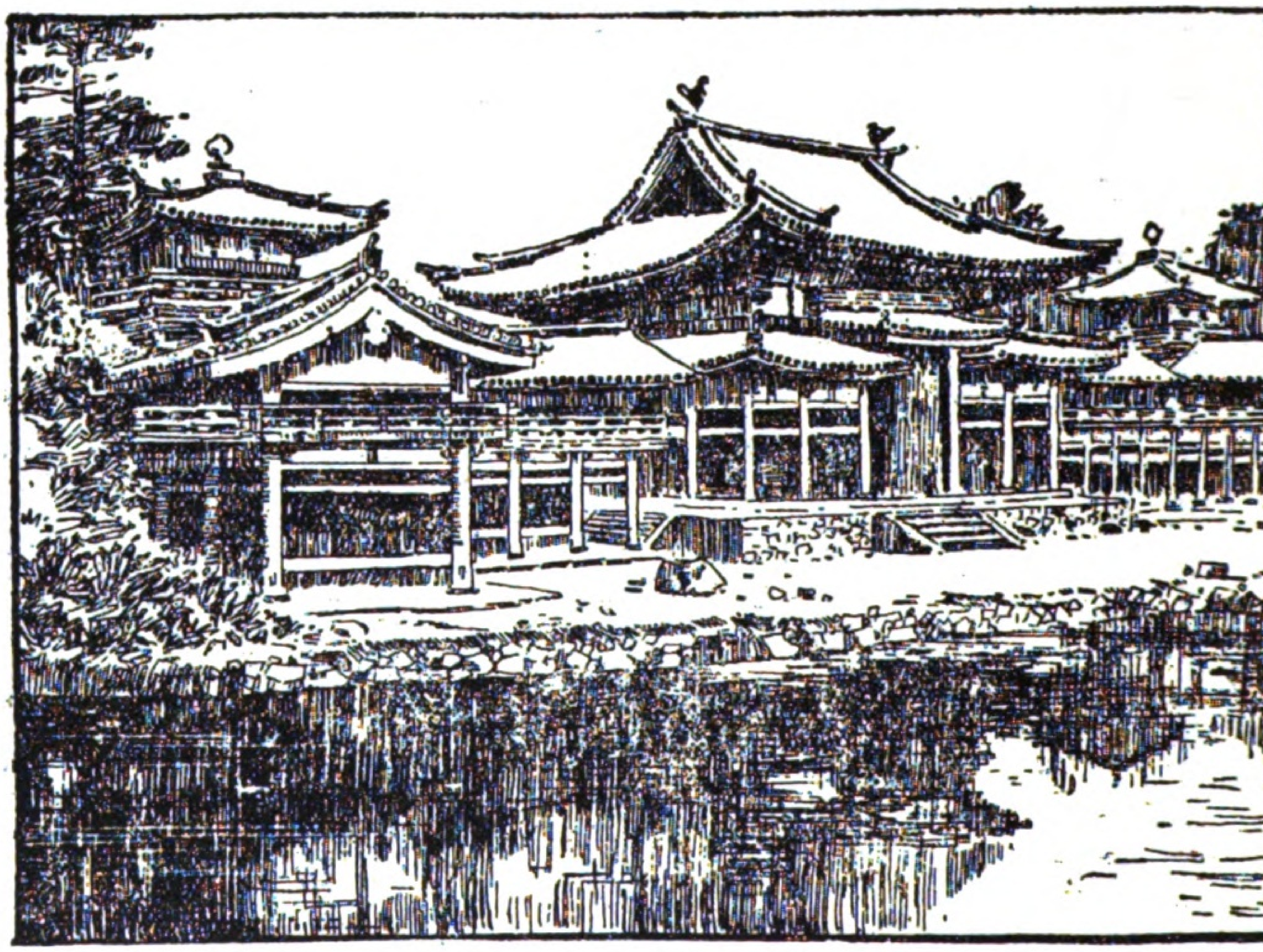
髪結ふて蚊帳を大きくくゝりけり

△

今日は水島さんの舟遊び、お重だ、瓢簞だ、お島もお供の一行に加はつて、取卷にぎ〳〵しく、早くからおでましになつた。

水島さんと云ふのは豪商の奥方で、もう八番に一週間あまりの御逗留、お附の女中と、お店の者とやら幾

宇治の鳳凰堂



を分けた若い人と、お三人のお仲のよさ、毎晩きまつて三味の音なぞする。私なんかどうせお話が合ひさうにないから一度もお座敷へ出た事もないが、お兼さん達は「水島さんの奥さん、水島さんの奥さん」と大もてだ。

「一體お幾歳……なんでせう、三十一二かしら。まアお粧りのお若いつたら……ふだんにお召なぞぞろりと着て、コントラスト織の伊達卷姿、粋な束髪の襟足の美しさ。

今日も紋上布かなんかに、白絽縮緬の墨繪模樣をキユーッとしめて、薄納戸色五ッ紋の單羽織。白いお指には紅寶石と金剛石、大きな眞珠も輝いて居る。

母樣が御秘藏の三味線、舟の中になぞまでお持こみになつて、ポコ〳〵にしちややしないかと私には交渉のない事ながら氣づかはれる。

ゴム輪の俥音もなく、流れるやうに門内へ入る。はゝつとしたが仕方なく、私と、そこに居合せた玉枝さんとが飛んで出た。手をついて見上れば、あら、五位樣

「おかへり遊ばしませ」左右から正しく頭を下げた。

玉枝さんはすりよつて式臺にひざまづいて、お靴をお脱がせ申すと、私はお帽子を兩手に受けて、長い廊下を先に立ち、お室の障子を開けてお待ちする、今朝すつかりお掃除したところ、掛花活には瑠璃色深き桔梗の一輪、五位樣、ついと入つて長椅子にお凭り遊ばす。白いおん面は紅に、息使ひさへはア／＼とおくるしさう。驚いて、

「まア何うあそばしまして？　お頭痛でも遊ばしますか」

「其樣に見えるかい、どうも酔て了つたよ、あゝ？」

お額にお手を加へられる。手持無沙汰に彳んだが、

「お召替あそばしませな‥‥」

「否、後にする。水を一杯‥‥」

「はゝ」

急いで引返して水を捧げて來る。と、かちりとお歯にあてゝ一息にぐつと干し、コップを私にお渡し遊ばしながら、お眼がとろりと、

「昨夜は○○の杉山の別莊へ泊つたものだからね、もう今朝明から‥‥僕ア少し休んで見る、もういゝよ、用があれば呼ぶから‥‥」

兩手を金ボタンの胸の上にくみ合して、もう半ば夢のおん心地。お煙草盆のお火を直して、葉巻の箱を添へて、それから婆やに云つてお好な麥湯の冷ましたのを井戸の中へつけておく。

若杉樣、興津に姉樣が入らしたから其處へ行つて來るつて、二三日前から口癖にして居らしつたが、とうとう今日二時頃の日盛りに、白飛白に短かめの小倉袴も小氣味よく、ズックの畫板を肩からなゝめにかけて、玄關に立つて、文さん文さんと呼んで下すつた。あはてゝ飛び出すはづみに板の間に蹴つまづいて痛い思ひ‥‥

延喜でもない私はこれが永いお別れになるやうな氣がして仕方がない、人目なければあのお手、御胸、何縋つてなり泣かうものを—

肩すり合せて門まで出た。

若杉様はまた帽子をとつて、
「ちや文さん、行つて來ます」
「行らつしやるの？　御機嫌よう！　早くおかへり遊ばせよ」
「エヽ」と會釋してにつこりなすつたが勇ましく‥‥でも曲り角でふと振りかへる。
「若杉様」と私は思はず、
「お早くね、早く歸つて頂戴よ」
「ヤア、浪さん」どつとはやされて、飛び退くほどに驚きながらふり向くと、いつの間にか秋澤さん達が笑つて立つて居た、ずゐ分だ。
　四時過水島さんの御歸館、奥さんはハンケチで口許をかたくおさへて、物も云はずに青い顔して、出向へた女中等を下目にちらと見やつたばかり、得意の筈のお嶋まで妙にしほれて居る。何事があつたのかときいてみれば、まア、奥さん、歸りの舟中で小間物屋を開業し、海の中へ入歯を吐き落して了つたんですつて。大へんだわ、何でもあれは金歯で百五十圓かゝつたと



志摩名勝青峯山正福寺

か何とか、とんびに油揚さらはれたやうな御災難、まさか改まつて御くやみも申上げられないぢやありませんか、これぢやお鳥にやる〳〵と有仰つてたばらふの櫛も取けしだらう。

夕方A組の岩瀬樣と吉野樣がやつて來た。用があるから一寸來て下さい、つてお兩人顔見合せて何だか笑顔して居らるゝ、ムツと癪に障つて、

「別館にはお鈴と云ふ受持が居ります筈よ、御用なら彼女に有仰つて下さい」

「ヤア、あんなお鈴大明神なんぞ……是非共御令嬢でなければならない事なんで、まア來て下さい」

「厭です」

強硬に出ると「ぢや、また來ませう、アハヽヽヽ」笑ひながら歸つて行つた。黄金備つて岩瀬樣のことよえ、何故かつて有仰るの？ ホヽヽヽ先日ねえ便所の中へ落こちたんですの。あら、まさかつたつてほんとだから仕方がないわ。

今夕は五位樣、いつになくお食のすゝむ事と思つて居ると、不意に「アヽしまつた」と有仰る、びつくりして、

「あれ、何う遊ばして」

「つひうか〳〵と過して了つた、僕アこれで何杯食べたかなア」ですつて。五杯目でございますとも云ひ兼ね、「あら私……」

「つひ考へ事して居たもんだから……」

面白い方、私達は考へ事などして居れば胸がつまつて御飯なんぞ通りませんわ。

もしやと待つた別館からの迎ひも來ず、縁に立つて櫛をぬいて前髪をとき上げながら、あか〳〵と泉水にうつるお離れの燈火をながめて居ると、ふいと後から目かくしされた。あら、お止しあそばせよ穗積樣」

「オホヽヽヽ」

「まア平岡樣なの」

向き直つて、二人は手を執つて莞爾した。

△

今日若杉様からお手紙が來た、姉様のを一枚頂いたものであらう、薄みどり色の可愛いレターペーパー。文子姉へ、嶺風生なんて美しいペンの走り書き、清見寺、三保の松原など云ふと何だか畫の中にでも住んで居るやうですけれども、實際はそれ程でもありません海岸の石ばかりなる事は第一氣に入りません、僕等の樣に一足十七八錢の下駄を穿いてる者は、何とも思ひませんけれど、立派なはきものを穿き給ふ方達は隨分氣のもめる事だらうといらざる心配を致すくらゐです



清見寺の晩鐘は流石に哀れ深い心地がします、三保の松原へはまだ行つて見ませんけれども、當地でながめたのでは平凡な松原です、白帆が通つても最う見飽きた圖ですから何とも思ひません、いや思へません。清見羊羹など一顧の價値なし、併しお土産に持つて行く僕はやつぱりあの地がなつかしい、秋月君兄妹へよろしく……」

澪様にもお目にかける。まアまア隨分ね、私の方へはお葉書一枚下さらないと思つてたら、秋月君兄妹へよろしく位ぢや私死んでも浮ばれないことよつてひしと私の手を握りしめる、こんな美しい令孃にこれ程までさわがれてる若杉様はまアどんな月日の下に生れた人でせう。幸福者？　とさけびたい氣がした。

午後ふたゝび別館に行くと、A組を筆頭に竹田様、豐川様、秋月様御兄妹、みんなあつまつて指環送りや雷様が始まつて居る、中村様のお饒舌、秋月様の空笑の高さ、澪様が癇癪おこす、面白がつてはクヽヽと笑ふ。私までつひお仲間入して、夢中になつて遊んで居る中に、空は何時の間にか曇つて了つて、さつと冷やかな風、と思ふ間に沛然たる驟雨、降るわ、降るわ、一しきりは屋根も拔けるかとあやしむばかり。ごろごろ〳〵ごろ。沫き込むので雨戸もひいて了つた。澪様と中村様今までの氣焔は何處へやら、ふるへ上つてゐらつしやるのにまた笑つた。

やがて青空が見え初めて、豁如と舞つた爽快さ、籠の鳥でも放されたやう、皆さん散歩にと出て行かれる遠芝の露深く、夕陽山を彩つて、涼氣冷々、磯の香かほる夕風は二尺の袂にはらみあまりつゝ。

不意に五位様へお二人お客様があつた、取り散らしたお室よりもと氣を利かせて突き出しの八疊へお通し申させる。

五位様、直ぐビールをと有仰る。

大きな玻璃鉢には冷した梨子を山とつんで、溢るゝばかり累々と盛りこぼしたる葡萄籠、私は象牙柄の小ナイフを取つて剝き始めた、お三人の視線が云合したやうにおつとその手許を見詰めてゐらつしやるので、意久地なくも胸さわぎがする、剝き終りしを四個に切つて、小楊子そへておすゝめしながら、

「五位様」

「何」

「オホヽヽヽ」

「馬鹿な……」寸とのびた葉卷の灰をはたいて、

「お文ちやん」

「はい」

「何でもない」

「まア」あかくなつて笑ふ。

白飛白召した二十ばかりの下ぶくれの可愛い方、どうも見たやうなと考へたらその筈よ、久様のお兄様だわ、少しお眼が出眼なので學習院で「金魚」と云ふ綽名のおあり遊ばす方だ。今一人は凛とした細面の貴公子、後できけば向野伯爵の第二の若君だと…。どうしても華族様はお品が違ふのね、けれど、「江田原」「河野」「坂田」つて各々にお呼び捨、少々驚いた。



ベルをおす。玉枝さんが來る、例の通り力んだ顔してウキンナ巻に素敵なリボンを掛けて居る、まるで半襟でも結ひつけたやうだ、五位様は笑を含んだお眼にお見送りあそばす。

軒の掛簾は高くまきあげられて、庭には颯と燈火が流れたほろ／＼と水玉がこぼるゝ。

なみ／＼とコップに堆き蟹眼魚眼、火影にうつて、金砂子のやう。

河野様は卓に片肱よせて、

「見よ甘泉の花ちりて」を美い聲でお歌ひ遊ばした、一高の御出身でゐらつしやるのでせうか。

九時過おかへり、玄關に手をついてお送りする。

「御苦勞だつたね」と五位樣はお如才ない。

「あらお文姉さん、貴女御飯まだでせう」

「いゝのよ、八重ちやん」手でせいすと、玉枝さんが出て來て、

「お文姉さん、御飯は？」

「えゝ、いゝの」

「ねえお文姉さん、あの五位樣つて方は隨分だわ」

「何故？」

「私のことをね、お前の腕は麥酒罎との區別がつかないつて……」

オホゝゝゝゝ、はゝゝゝゝ。

△

連日の氣づかれと睡眠不足か、しん〳〵と頭が痛んで堪へられず、私は二日あまり床中の人となつた。我が家をはなれて病氣するのは生れて始めてゞある、心ぼそくて〳〵昨日は一日泣いてくらした。でも皆さんが

「どうしたんです、どうしたんです」ときいて下さる。

皆樣はわざ〳〵お見舞に見えて、森永製の美しい小かいお菓子のつまつてるきれいな箱が枕下におかれた。A組からも代表者として中村樣がいらした。五位樣、廊下で王枝さんつかまへていろんな事きいて笑つてゐらつしやるのがよく聞える。

「ア、それや芝へ歸ればなほる病氣だ。ホームシックを起したんだらう」

なんてまアいつ誰からお知りになつたんでせう、だから油斷がならないつてのよ、いまに「兄樣はどうした」なんて有仰るでせう。うれしかつたのは穗積樣が丁度泣いてるとこへいらして、いろ〳〵なぐさめて、舊約の聖書を貸して下すつた。

この皆樣の御好意に對しても、寢ては居られず、今日は起きた。玉枝さんに髮を梳いて貰つて、いゝかげんに前髮出してクル〳〵卷いておく。浴衣の上に紫矢

飛白の被布と云ふ妙ないでたち、被布はよく學校へ着て行つた、と思ふとまた戀しくなる。

郵便屋が一束ばつさり投げこんで行く、一々選りわけて皆樣へ持たせて上げる、中に一通私へ、文子樣、秀人、大磯山秀樣にて！　まア、兄樣、思はず小さけびした。いつのまに大磯まで行らつしやいました、震ふ手先に讀み下せば、走り書き、

　　月の夜の、潮のひゝきに涙しぬ
　　　常に淋しき男なれども

兄樣、兄樣、あゝ四月にお別れしたつきりねえ。この頃の私の風を御覧になつたら、何と有仰るかしら、つとめて〳〵女學生風を、くづさないつもりぢや居るけれど…あれ程お嫌ひな旅館營業…朝な夕なあまたの人に接しては、つひ〳〵——昔の文とは人もかはりましてせう…

　兄樣堪忍して頂戴よ…

　涙の頰をはらつて立ち上つたが、つと應接室に入つてピンと扉に錠をおろして、オルガンの前に腰をかけた。

　ちらと大鏡に映つた姿、我乍ら顔を背けつ。

　窓もとの綠陰をサヤ〳〵と風が流れる。

　　大海原の月夜の景色
　　畫に書まほし筆とりて
　　月も出でぬ潮もみちぬ
　　とぶは鴎か岩の上に
　　砂にさゝやく白波は
　　わだつーみのーきみーなる
　　海の姫神むちあげて
　　すべーたもーらーんー
　　あなうるはしやあな面白し
　　ながめあかさん此一夜





今様 枕の双紙

磯千鳥

○仲悪しきもの

犬と猫と。小供の折の兄と弟と。されど年老ひぬればさる事もあらざめる。女同士の同胞は一生うちとけぬもの多く、殊におの〳〵夫持ちし後は身分暮し向の隔も出で來るに、とりわけさげすむなどの事はなくとも一人の言ふ事を他の一人は己が僻心に悪しくとり、時としてはいまはしき仲たがへも起りぬべし。

水と油と。文部大臣と新聞紙と。蛇と蛙と。何れも仲悪しきもの也。

○見出でゝ興さむるもの

髪の毛の下なりし禿。女は髪長ければよけれど、頭つやゝかに分けたる男にふと見出でたるはあひなし。今迄獨身とのみ思し師の君の子迄さへ持ち給へる。さては、作りし眉。鐵瓶の底。牛乳搾取場。

○厚かましきもの

晝間の盗賊。新聞記者。寄附乞ふ僧、物靜に入り來ぬれば何の僧ならむと思ひたるに、「寺の御堂建つるについては應分の御助力を」と額づき言ふに、神佛無信心と思はるゝもと思ふ折もありて、御米何に入れ參らさむやと問ひ侍れば、「此處に」と、をどろ〳〵しう大なる袋臆面もなう差出したるは呆るゝ外ぞなき。やがてかゝる事も度重りぬれば「御無用」と斷る時もあるに倘かれこれと物言ひ歸り行くけしきも見えねば、少し腹立てゝ「宗旨違なればお斷り申す」と女をして言はす、「御宗旨違とて何宗にておはす」など五月蠅げにき



廣島公園萬春園

くに「由なき詮議立する御僭哉、宗旨は耶蘇信者なり」とあらぬ事言ひ侍れば「あな忌々し、切支丹宗か」等舌皷うちつゝ、戸もあらゝかに打閉めて出行く姿もにくさげ也。保險勸誘員も厚かましき者の内に數へつべし。養老保險、生命保險、火災保險等と立板に水流したらむ樣に喋舌り續け斷りてもいかで承諾ふべくこそ何時迄も何時迄もたづねくるなり。

男も女も洋行歸りはげに、かたはらいたきものにぞありける。分けて女は醜き低き脊だけに洋服家鴨の樣にきなし、いづこの會にもはやり出でたるよ。ときに演說もし、わが邦の家庭は惡し、歐米の樣せよ、日本の建築は非衛生的此上なし、住み家は石ぞよき。男は女を尊敬せよなど、一も二も西洋を崇めたるはあはれ也。されど男にもさる事もあり、ある方に亞米利加といふ處より歸りて三年餘になる語學の先生ありけるが彼の國の事とし云へば賞め給ふに、誰彼となくこゝろよからず思ひけれど女なれば流石口にもいひいでざりけり、さるに些細の用事ありて、ある時友と二人、御

宅伺ひ侍りしが相もかはらぬ洋行談、話はこゝそことうつりしが、ふと語學の事に及びての給ふには、「かの國に二年も居る間には萬事西洋じみて日本の事言葉にて忘れしもの多かりしには歸朝の折悍きたり」など誇らしげに笑ひ給ふに、思ふ事隠さぬ友の君は微笑つゝ「さては御歸りありて三年にもなりたまへば、もはや西洋の言葉の方もいと多く忘れ給ひつらむ」といふ、意外の言葉なりければ傍のものさへ汗しとゞとなる心地なりしが、其後その君の洋行のこと絶えていひ給はずなりしこそ可笑しかりけれ。

〇物のあはれ知らせげなるもの

土瓶の口のかけたる。色褪せたる女の蝙蝠傘。障子のつぎ張り。女の豆腐、葱などさげて歩きたる。鰌髯。鯰髯。關西女の帯の手先のみよききぬ入れたる。その外、漢學の先生の洋服姿、二分心のらんぷ。など世の中には物の哀知らせ顔なるもの數かぎりなし。

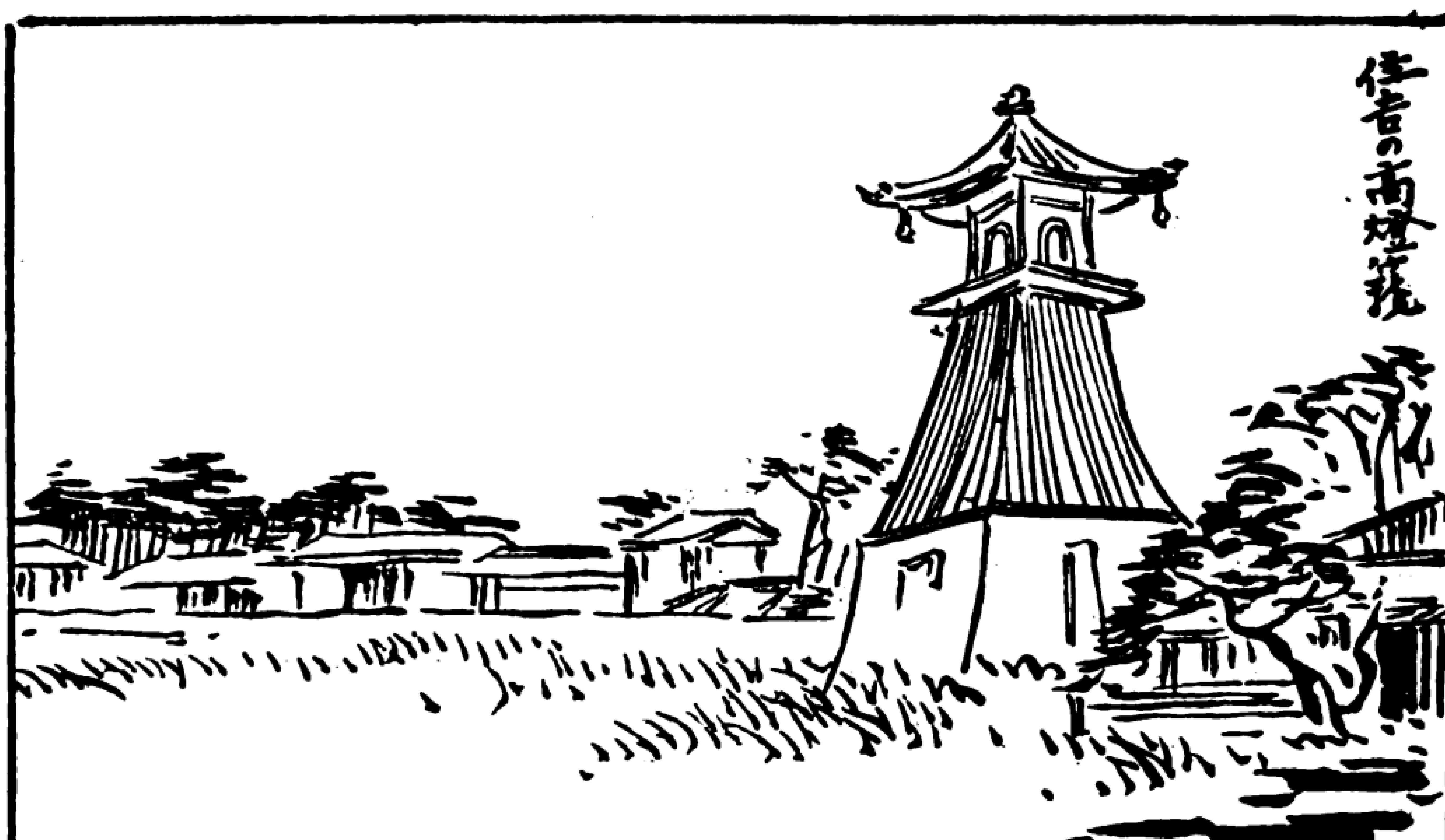
〇愛嬌なきもの

郵便局の事務員。猫の顔、猫の顔はいつも〳〵同じやうにて愛嬌なし、甘きものやるとも味無げに喰ひ尾一ッ振らぬ、是に引かへて犬は人の手に持つものとし、あらば石にても何にても欲しげにし、投げ與ふれば、何にても飢えたる様に喰ふは見苦しけれど猫の様に尾ふらずやはある。犬は嬉しげなる顔・悲しげなる顔、さては笑顔する様覺ゆるは妾の思なしにや。昔はかけまくもかしこき一條天皇の翁丸、御秘藏の猫喰はんとして勘事被りし折、中宮の優しき御言葉きゝ涙ほろ〳〵とこぼしけるとかや、犬は涙さへこぼすにや。借金とりも愛嬌なき顔したがるが多し。

夏の夕は興あるものにぞある。蒸すやうなる日影傾きて只蟬の聲のみ喧しき。未だ餘炎さめもやらぬ庭に降り立ては木の葉と言ふ木の葉は砂埃に乾はき切り朝顔の葉などの萎れはてゝ、ひとしほ哀げなるに冷たき手桶の水如露もて注ぐに唯燒石に水注ぎたらむ様に

ふく〳〵と打吸ふも面白し。また大きなる木には危き手つきして水打つに、いかにせしにや思ふ處には向かはでさつと我頭に打浴びたるはいみじ、さる程に、日頃氣質荒々しくて信長のやうなる兄の縁より降り來て、「目怠し、柄杓かせ」とて奪ひとり、力に任せて撒けば水は遠く塀を越えて隣の庭に落つる音す、見れば乾物の白きも見ゆるに「濡れては惡しかりなむ」といへど「いかでかまふ事やある」と一入其方にやるに、女は座に耐え得で逃げ入りたる、男はなどてかく意地惡しきものなるらむ。

夕餐濟ませてまた縁に出で立つ。日は遠く、西に落ち去りていつとはなしに暮れてゆくに打水の透垣の木の葉に消々しう雫しつゝ、吊せし岐阜提灯の火の微にゆるくも涼し。家の中は蚊遣けぶたければとて裏の木蔭に床几持ち出して腰かくるにふと夕顔の白きとほの暗き垣根に見出でゝ「あな何時の間に咲きけむ、今朝見し折は蕾も小かりしを」と傍によりて香嗅ぎなどするも床しきこゝちす。さては折戸開くる音するに其方



見やれば浴衣着の人いできたる、誰ならむと傍によりつゝ漸う我友の君と知れて、床几の上に招ずるもそかし、やがて此事其事、罪なき事語り合ひ、戯ごとなども云ひて華やかに打笑ひ、「あな甚じき蚊哉」とて、打あふぎゐたる團扇もてはた〳〵と足許追ふなど夏の夜は瞬たく間に更くるやう覺ゆ。

○惡しく言はるゝもの

正しからぬ子生みたる。血統怪しき。後家女の厚化粧したる。それもこれも宜しからず云はるゝ中にも大臣ぞ別けて惡し様に、云はれもし書かれもすなる。人の世の爵の高き限もち人に羨まるゝは昔も今も變りなき事ながら、今の世は新聞といふ恐ろしきものいで來て何にてもあれ大臣のする事とし云へばあし様に云ひ攻め「鐵道に禍多きは誰の罪、假名遣改正は幼兒の頭腦を亂すのみぞ。學制改革は理由なし」など、時としては、ぽんち繪といふものして似顏可笑しげに書くに物事知らぬ下々の女の身には、大臣はいつも戯たる顏し拙き事のみ企て給ふ御方の様覺ゆるも新聞の科なるかゝる事も其君の身にすれば蚊のさす程にも思召すまじけれども、連れそふ北の御方はよもよき心地はせじかし。されば「妻となるとも大臣の妻とはならじ、娘もさる處には遣らじ」と下司女の思ふもいみじ。なべて人の上に立つ人は己が身も重もく、些細の事にも人の責むるなるよ。

○早かりせばと思ふもの

停車場につきたる折汽車のそよろと動き出したる。臨終に後れ來たる。さては眞夏に、掃除あしき部屋に眠るに、蚤いと多く匍ひ廻るに、手そとやるも何物もゐず、はては眠むた眼に火ともして、寢衣など脫ぎて擴げ見るに、居たれば、あなと押へむずれば早や一躍して行方も知らず我指は空押へたる。口惜しさに今少し早かりせばと思ふも術なし。また闇の中に脊なかなどに手やりて捕へたる蚤三つ四つ、よう捻りて紙につゝみ枕元に置きたるを、翌の朝眼寤むるなり其事思ひ出

だして胸とゞろかせつゝ開け見れば、あらぬ塵の丸くなりて出でたる。「さては餘りに捕へ易かりしよ」と其折も思ひつゝも、柔順なる蚤とのみ喜びゐしか等悔むもをかし。

○急はしげなるもの

青物市の呼聲。味噌する音。拳といふものゝ手ぶりも急がはしく、怪しく顔ゆがめ、その掛聲の鵺の鳴く音の様なるもをかし水馬はいつも急はしげにす、淺き小川の水の上にいみじく長き足してそよろと浮びたる、ゆるき瀬に押し流さるゝ度に元居し處迄跳來るに「などて、さ急しげにするらむ、捕る人もなければ水の上に輕らかに晝寢もせよかし」と思ふも小供らしや。

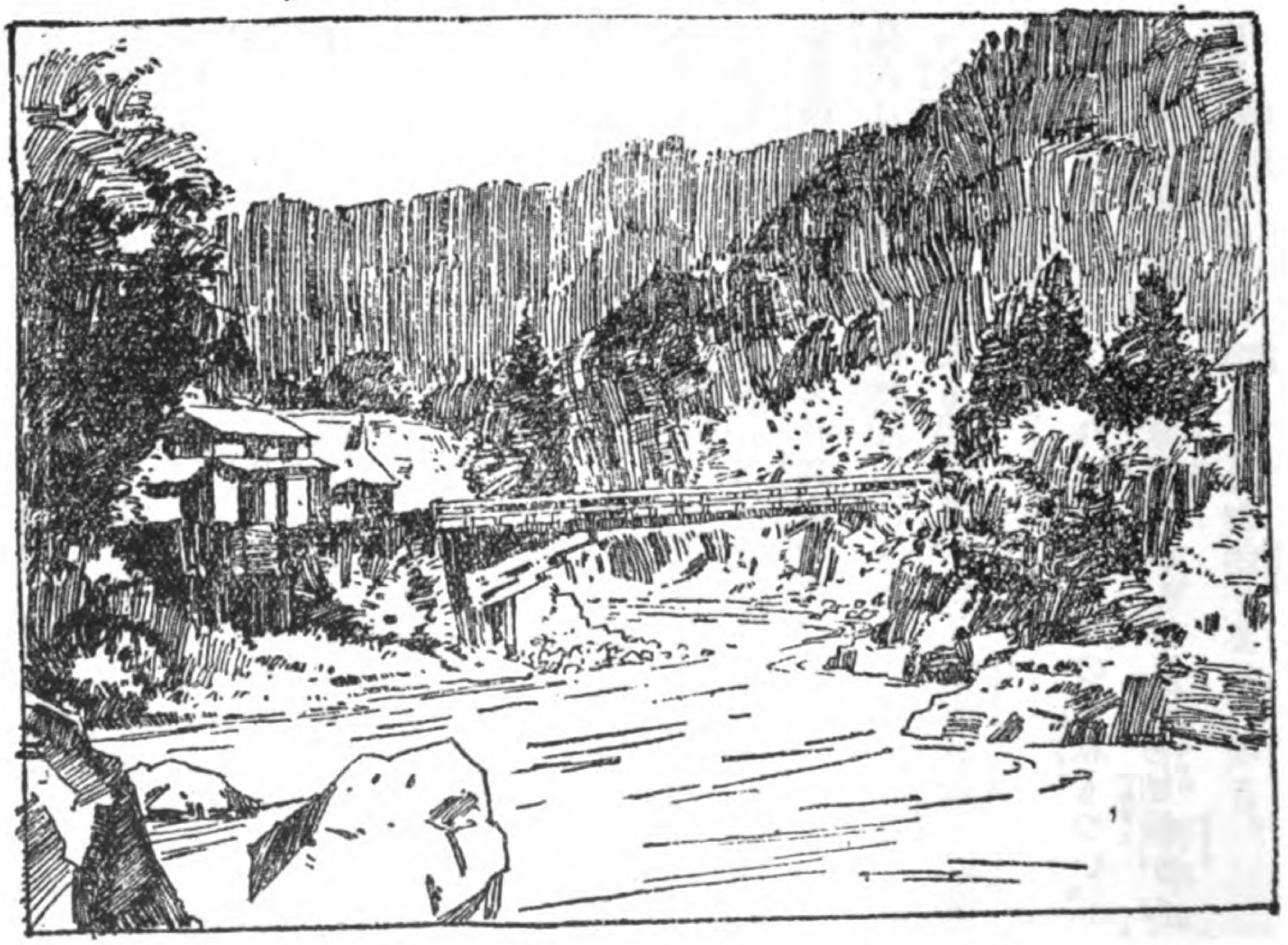
○　南　琴代

秋の水あかつきの野のくさむらを銀蛇のごとく走りゆくかな

○　今井かずゑ

萩が花すゝき尾花の路つきて鏡と澄める湖畔に出でぬ

御嶽山麓浮月橋



姑に虐待されつゝある
氣の毒な嫁の告白

柳田富美子

△又も皮肉な言懸り

けふは日曜日、朝から里の兄が來られた處へ、良人のお友達が二人被入つて、お話が大層はづみ、時計を見れば四時過ぎ、ちと早いが夕飯の仕度。

そと松を魚屋へ使に遣らうと書付をして居る處へ姑樣が被入つて、

「晩の仕度？　まだ早いではないか、全體お前は御馳走をしたがる方だからとても世帶持ちが惡るい」

と仰るので、御友達斗りなれば、

「でも時分時で御座い升から」と、おし返しても申上升が里の兄も居るのに、左樣も云へず時計を見乍ら早く歸つて下さればよいと思つて居りましたが、其内五時も打ちました、姑樣は又茶の間へ被入つて、まだお客は歸らないの、長尻な人達だと、仰り乍らお部屋へお返しになる。

彼樣な事が、お客樣のお耳に入らなければよいと案じ乍ら、お座敷の樣子を伺つて居りますと、歸らうと仰る方を、

「マア君夕飯を食べて行き玉へ」と、良人が頻りに止めて被在る。

さあ大變、何も仕度がして無い。周章てゝ下女を魚屋へ走らせる、鰹を　かいてお吸物をこしらへる、怎麼に急いでも、三十分はかゝります。彼是してゐる内にお客樣も兄も歸つてお仕舞成つた。

良人は常に無い不機嫌で、

「夕飯時に飯の仕度も出來ない、そんな事で人の家内と云はれるか」

と御立腹。無言つて居れば宜かつたのに私もつい、

「でも私が四時過ぎに仕度を致しましたら姑樣がお止めに成つたので」

と云ひ終らぬ内立聞していらしつた姑様は、恐ろしい見幕で這入ていらしつて、

「何です私が止めたつて、宜い加減な事をお云ひなさいお前は平常もそんな僞を云つて、正春に焚付るのだらう」

と疊を叩いてお詰かけになる。良人も今日ばかりは、常の温順に引かへ、少し激した聲で、

「お母さんも餘り闘渉なさり過る、富美も子供ではなし、來客の饗應位は出來ましよう、ちとお任せに成つては什麽です」

と。でも物柔かに仰ると、さあ大變、姑様の額は青筋だらけになりました、そして御自分の非を蔽ふべくより以上大きな御聲で、

「お前まで富美の肩を持ちなさる。どうせ私は厄介者邪魔者です、ほんとに生甲斐もない、息子と嫁に虐られる。あゝ情無い早く死にたい」と、果は泣聲におなりなさる。

良人は眉を顰め、腕を組んで、吐息をついて居られる。

この場合わたしが謝まらねば治りませんから、

「私が行屆きませんで誠に惡うございました。何卒お免し下さいまし」

と手を仕へ只管あやまりますと、

「惡いのは始めから知れて居ます。正春も氣を付なさい。此様な利口なお嫁さんうつかりすると敷物にされますよ」

と障子の明け閉ても荒々しくお部屋へお歸り。

嗚呼、また二三日御機嫌が惡からう。あゝ私は何で女に生れたかとつく〴〵思ひました。

△外出のあてこすり

此頃は良人の位置とともに、私の様なものでも、婦人會の幹事に推され、大概出ない事にいたして居りますが折々には出席する事もございます。

前日から姑様にお願ひ申して、さて出がけに御挨拶に參りますと、

「えゝ〳〵御ゆるり行てらつしやいまし」なんて、素

陽に叮嚀なお言葉、そして、

「此節の奥さんは結構だねえ、旦那は毎日骨折つて、勤めて來るのに、奥さんは善い着物着て遊び歩るく、私等若い時には、年に一度里へ行くか、親類の義理に一二度出る位のものだ」

とさも〳〵私が勝手に遊び歩く樣に仰るから、

「私も參り度はございませんが、是も矢張り義理でございます、それに少しは世間へも出なければ、何も分らなくていけないと旦那様も仰い升から」と申せは、



「左様でしやうとも、だからお前さんは物知りさフン」

もう何と申様も無くお部屋を出る。

もう一層今日は止めに仕やうかと、箪笥に凭りかゝつて、思案して居たところへ、お隣の奥様が誘ひに來て下さつたので、お斷りするわけにも行かず、お好きなお茶菓子を上げ、夕飯の仕度も下女によく云ひつけて出かけると、さあ跡では下女を捉へて私の惡口。

「奥さんは婦人會〳〵て出かけるが何處へ行くか知れ

やむしない、旦那が結構人だから仕合、私はいゝ留守番だと思つて碌な茶うけも當らない、老人を粗末にするから罰が當つて、子供も死んだのさいゝ氣味だ」と面して自分のお小遣で態々お菓子を買はせ、

「奥さんは吝嗇だから自分達斗り甘いもの食べて私やお前には碌なものも食べさせない、これは奥ざんに内緒だよ」

此樣な事跡で、下女が話すのでございます。私はあゝ情無いと思つても、一處に姑樣の事、彼是申せは家の耻。

「其樣な事云はぬがよい。聞けば聞き腹とやら、能い心持ちも仕ないから」と止めて置きます。其くせ姑樣はわたくしが下女に何ぞ遣す時御相談申せば、彼樣ものに、給金の外心付はいらぬ事と、仰る。いつぞやも單物の古いのを一枚遣りましたら、

「お前さんは結構だねえ、古いものはサッサと人に遣つて、旦那にねだれば、跡はずん／＼出來る、イヤハヤ結構な御身分だ」

何を致しても、私のする事は、お氣に入らず非難を受けるから、萬事にはら／＼して居ります。それに姑樣はお齒が惡いから、召上り物でも、なるべく柔かいお口に合ふ樣にと心配してあげますのに、昨日も姑樣の姪のお玉さんがお出の時、

「此頃は不漁と見えて、久しくお魚の顏を見ないねえ」

と仰いますの何てまあ意地の惡い事を仰るでしやう大方毎日、鯛や鰈や、いろ／＼にして上て若し烏賊や蛸斗りでお齒に合ふものゝ無い時には擂り身にしても必度お魚は上げますのに昨日は、お舅樣の命日でお精進だと仰るから、左樣致したら最早そんな事を仰るのですもの、若し知らぬ他人が聞たら嘸ひどい食事をあげると御思ひなさるでしやう。わたくしも當家へ嫁入てから、七年餘り、自分でも能く出來ると、思ふ位身を粉にして働きもし、姑樣のお氣に召す樣に氣骨を折つて、お仕へ申しますが、それでも毎日叱られたり、厭味を云はれたり、眞實にどうしたらよいのやら、我身で我身が分らなくなつて仕舞ひます。生家に居た時

分此位にしたら、嘸両親にも譽られ、嫂にも可愛がられたであらうにと、つく〲情なうございます。

△毎日の氣苦勞

夜あがりながら、空は瑠璃色に晴れた。雨後の庭は緑したゝる樣に美しく、茂りあふ楢の葉末の露は玉と散り、鳴きそめた蟬の聲も涼しく聞える。

「まあ眞眞にわたし什麼したらよからう」と、臺所の隅に立つたまゝ落る涙を袖でおさへた。



姑樣の皮肉も無理もいつもの事でございますが、今日は下女がつい姑樣のお洗濯を後にしたのをさも〲私が云ひ付でもした樣にお取りになつて、

「其樣に厄介なら、自分で洗ひます」と、私がいろ〲譯をまをしあげておわび申すのにお聞入れなし、一人井戸端へお出になつて、水をザアザア吸み上げて、洗濯をお始めなさるもういくらお止め申ても無駄と思つてせめて洗だけなりといたしましようと申上てもお返事もなく〲絞りあげてお仕舞ひなさつた、私として、姑樣のお品はなるべく、早く洗ふ樣に云ひ付けて置きますが、姑樣はいつもお出しになる時に、これは

急ぐのでは無よいつでも序手の時でよいと、くれぐれ被仰るので、下女は真にうけて、つい皆のと一緒にと思つて遅れる事もございますの、夫に姑様のお洗濯に六ケ敷、曇つた日に洗ふな、風の吹く日は塵埃がつく雨が降つて軒下に取り入れた陰干はお厭ひで翌日洗ひ直したりついお天氣を見定めてと思つて遅れると此通り。やう／＼洗濯も濟んで、腰を撫でながら、お部屋へお歸り。

「あゝ／＼、奉公人甞て、奥様は結構だけれど、私等何にもならない年とつて洗濯までさせられる、やれやれ疲労れた」と、大きなお聲で獨言、聞て居るわたしの身の辛させつなさ。

それからいろ／＼御機嫌を取つて御飯の時もお好きなものを揃へて差上げましたが、まだお心が解けぬらしい、お膳につけたお魚も野菜もお箸をおつけに成らず何を申上てもお返事なく、お香物でさら／＼とお仕舞ひなさる。其間の私の氣苦勞はら／＼して自分も御飯が咽喉へ通りませんでした。

△靴音を聞いた時

先頃も風邪をこじらして、熱が強く關節が痛んで我慢にも起て居られませんから、寢んで居りますと、姑様は大不機嫌。

「私なんか、少し頭痛がしたつて寢た事はない、御大層な事だ」と、俤は遊した事も無い、戸棚掃除なんかわざとバタ／＼なさるので、寢ても居られませんから起きましたが良人が顏色も惡し、熱が有るのに起ては不可ないと、仰やつて、直ぐ醫師を呼で下さいましたら夫が又姑様のお氣に入らず、うちの旦那の様に奥さんを大事にする人はない、だから奥さんが、増長するのだ。と下女や出入の者までに仰るのですもの、そして生家の母が見舞に參りました時、林檎かバナヽが食べたいと申しましたら、歸ると直き籠入りにして車夫にもたせて下さいました。親といふものは、ほんとに有難いものと嬉しく、一つ剝いておくれと下女に申しましたら、姑様が被入つて、病人が恁麼もの食べては毒

だとてひつたくる樣にして折角、母の志を姑樣の親類へ義理遣ひにしてお仕舞ひなさつた。

あゝ、もう申ますまい、これも私の運命と斷念ましよう。

だが上を見れば限り無しとか、御存しでしよう、〇〇樣あの方よりはまだ結構だと思つて居りますわ、〇〇樣のお姑樣は、むかしお大名の老女を勤めた方で、丁度鏡山の岩藤の樣な方ですつて、えゝ。夫婦養子よ、御殿で奥女中や部屋子に意地惡をした調子で、嫁樣を虐めになるのですつて、第一御夫婦中のよいのがお氣に召さない樣子ねえ、そして夜は姑樣が隣室にお寢すみになつて、お話でも遊すと八ケ間敷つて寢られないつて、吐月峰をポン〱お叩きに成るさうな、夏は間の襖も外してお置きに成るのですつて隨分ですわねえお嫁樣も今度の方は五人目とか、あの音無しい奥樣なればこそ辛抱も遊すのでございますわ、

妹なんか、自分が夫婦差向ひで氣樂に暮して居りますので、姉樣よくあんな姑樣のお傍に被在る、私なんか半日も居られないとまをしますが、でも私は幸福だと思ふ事があります。何故？と申ましようか、良人が寬大な、夫で誠に優しい親切な人で蔭へ廻つては、氣を付て慰めて下さいますので夫を力に日を送つて居り升、ですから一日の內何時が嬉しいと云、お歸りの靴音を聞いた時ほど嬉しい事はございません、何かの集に起て思ひふしてぞ思ふ世の中に二人なき君に何とやらいふ歌が有りましたが、眞實に此君在せばこそ、怎麼辛抱も致すのでございます。あら、お笑ひ遊ばしては厭よ



秋！秋!!秋!!!

藤田いさを

△

風の音に目がさめて、もう秋だと夢うつゝに思つた翌日から急に天地が秋めいて行く樣に覺えた。日の光が妙に衰へて朝夕空の色がちがふ。雨もよひの雲がともすると西から東へ走つて、沖が茫然と重くるしく霞む。秋はことに空氣が透徹してすが〱しい南國でも丁度時候の變り目なので今暫らくはそは〱として落ち付かない。風や雨が不意に襲うて來る。首を捻つて空模樣を氣遣うて居る漁師どもの濱邊に多いのは此の頃の朝である。不意の大波に港に繋いである舟が沖合へひきさらはれて人々の打ち騒ぐのはこの頃の夜である。何となくあたりが騒々しい。二百十日、二十日と紀伊路は例年雨量が多い。

私は今迄大都の町はづれ、むさし野の客舎で秋を送つた。時雨がよく降る。百舌鳥がよく啼く。朝夕の風が身にしむ樣になると楢や櫟の梢が色づいて一日〱と濃くなるのが樂しみであつた。水氣を含んだ雲の夕榮するのが美しい方外に大きな風の音に夢結ばれない夜などもあつたがこの空の夕榮と野の紅葉と、打ち沈んだ秋の色彩を浮して一樣の愁を帶びた夕ぐれを、黄に熟した稻の田圃路を歩くと限りなくものなつかしいもの悲しい。思はず涙の流れる事もあつた。秋の武藏野に得た私の印象は恐らく死ぬまで消えないだらう。私の追懷のうち深い意味を持つたものは、皆あの廣野から湧くのである。

今年は此の紀伊の海邊に秋を送らうとして居る。この海の秋はどうであらうか。一日〱と秋に近づいて行くのを見ると私の胸は波立つ。

紀の川口、青岸港を前に控へたさる二階家、私の客からは海がよく見える。松原をぬけて海濱へ出ると、そこに海水浴場がある。遠淺なのと水のよく澄んで居るので、南海名所の隨一和歌浦の海水浴場よりも盛況

の不便なるにも拘らず浴客多く繁昌する。其の脱衣場が二三日前にとり拂はれた。近所の旅館に宿つて居た人々は秋風におどろかされた樣に急遽行李を整へて去つてしまふ。京都のある富豪の別莊へ兒供衆が澤山來て何時も賑やかであつたが、それも歸つてしまつて二階の雨戸はきのふから〆めきりで松の木の間に何となく淋しげに望まれる。町を後にして出て行く車上の人人をこの窓から見送つて居ると、私もどこか漂浪の旅に去つてしまひ度い樣に思つた。磯山にはなでしこや露草の花が咲き殘つて居る。別路に摘んだ人々は、ゆかしき花の面かげに、この夏磯のやどりの明け暮れをおのがじゝ忍んで居るであらう。

一夜風が非常に暴れた。翌朝見ると牽牛花の垣根が倒れて居た、爺やを手傳つて起さうとしたが、もう葉も淋しくなつて蕾も少い。爺やはもうだめだから取り拂ひませうと云ふ。初花と喜んだ頃の事を思ふと惜しくもあつたが、切りに勸められてとう〳〵根こぎにした、夏の朝を飾つて晴々しい光榮を一つ身にしめて來た花、朝風に樂しくほゝゑむだのも夢、二十粒程の黑い種を殘して、入江の水に捨てられた。これから愈々秋の日記に入るのである。

△

天候もほゞ定まつて、每日々々すき通つた樣に空がよく晴れる。萬頃一碧の海、秋ゆたかな風を孕んで白帆が走る。文机によつてさる友へ手紙を書かうとしたが二行ばかりで後が續かない。頰杖ついてポンヤリと遂々時を過した。

水の面に流れた日光の色がしんみりと妙に寂しいのだもの淡路島の上に漂うた雲の孤影は見て居る中にうすく〳〵消え去るのだもの。衰へ行く自然の吐息がうめく樣なあの波の音松風のこゑ。靜として居て私はもう胸が一杯になつた。秋の日のひるさがり、私の前にひらけた此のうすら淋しい色彩と音調と、到底 皆 私の興趣として胸に入れることは出來ない。聲を放つて泣くか、身をもだえてもがくかしなければこのまゝ堪

尼寺の秋



へられない。胸苦しい、息苦しい。瞑目して胸を抱いた。

氣をとり直して手紙の續きを書く。

「――山の秋も悲しかつたが今年海邊の秋はなほ悲しい。悲しい〳〵と云つたら又あなたが私を近世憂鬱主義にかぶれたものと早合點をされるかもしれないが人事百般におこる悲哀ならば、またその爲めにうれしい事もあつて慰むすべもある。私は隨分と生れてからこの二十年の間に自らの境遇と生活とからおこる悲哀には堪へ忍んで來た。私は決して、人生の悲哀とか現實の悲哀とかそんな女々しい繰言は云はない。プラグマチストの主張する樣に勇ましい人格の活動を理想とする私は人間の事は人間で處理すべきだと思つて居る。神に信賴しないのは此の理由であることは御承知通りである。私の悲哀と云ふのは、此の天地自然絕對の悲哀を指すのである。四時を通じて靜思する私の胸にふと喰み入る此の悲哀にはどうしても抵抗することは出來ない。――抵抗することの出來ないのは神を信じないからだと說いてはなりません――胸底から一滴々々と淚がにじみ出て天地の悲哀と共に眞面目に切なく胸が動搖する、でふとこの感興に觸れると頭をかゝへ、杳々として幻影を捕へる樣に何が何やら分らなくなる事もある。今年はこの紀伊路の磯で、落寞とした秋の海に向ひ、千里より來る悲風に袂を拂はしむ。私は此所で、泣いて〳〵泣き通して見たい。人間や病氣の爲めに殺される位ならこの高潮に達した悲哀の窮極に於て海に入つて死にたい。――死ぬかも知れません。」

友はまた例のが初まつたと笑ふだらう。

△

今日は氏神樣の祭禮日である。磯山の峽にある釋尊寺に彼岸會があるので、朝から鐘がしきりに鳴る。松原の奧で蜩が啼いて夕榮の雲をさまる頃、私は脊戸から松の木の間を潜つて濱に降りうすら寒い風の中に立つてこの鐘を聞いた。

松原の後から餘韻を波の上に送つて、末かすかに暗

暗たる沖合に消えてしまふ。あの聲にもよほされて、萬象は一歩々々と深く〳〵秋の領域に引き入れられるらしい。天地をどよもして來る秋の氣には、人若し洗禪の國にあらば瞑ぶして新るに違ひない。

やがて一番星二番星空にきらめきそめて半月中天にかゝり淡として夢の様な光りを海と陸との上に放つ。風の音やゝ高い。

「孃様そこに御座つたか」

不意に呼ばれてふりかへると爺やが立つて居る。



「お迎ひに來てくれたの」

「へえ、あまり遅うまで御かへりなさらんで、婆々が案じまして見て來いと云ふてどうなりまへんので、さアもう歸りまへう、孃様」

「エ、、歸るよさア」

「まアお先へ御座らつしやれ」

私は先きに立つて濱づたひ家の方へやつて來た。

「此の邊で御座つた」

と爺やが云ふ。

「何がね」

「それ、去年の秋、綺麗な娘の身投をやりましたのは。」

この話しは人からも爺やからも何度となく聞かされてよく覺えて居る。

「何で死んだのだらう」

「京都もんやさかい、人は色々の事を申しますがほんまの事は分りまへんなア。川口屋へ來てからの容子がどうも變やつたので、狂氣者でなからうかとの話しもありました。何でも毎晩濱へ出て、考へ事ばかりして御座つたさうやが、それそのうちに死に神にとりつかれたのでへうかい。」

「さうかね」

「夜おそく女がこの濱へ來ると、じき死に神がとりつきますさうや。孃樣も御用心さつしやれよ。」

「エ、大丈夫よ。」

答へがあまり眞面目だつたので爺やはヽヽヽと笑つた。

△

一人の女があつた。極めて不幸に育つたが高等教育は終へてあつた。かねて藝術の門に入り憧憬の念胸に燃えて始終美の影を追ふて煩悶して居た。所謂自覺した新人である。家庭を忌み嫌つて孤獨の生活を續け一本の筆を慰藉として勇ましく奮鬪した。其の中に若い血潮は消耗してしまつた。空想の泉も涸れて、詞花さかえず落寞として只寂寥のみ殘る。時恰も水底の海藻さへも悲しむと云ふ秋に出逢つた。悲愁胸にこみ上げて靜座するに堪へない。筆を捨てゝ只身を悶えた。何とかして一方の血路を見出さうとあせつた末ふと昔の戀人を思ひ出した。靑々とした追懷の念に驅られて切りに逢つて見たくなる。其の戀人は此所から半里ばかり離れた和歌山の町で家庭を作り商店の主人となつてもう子を二人まで儲けてある。彼女は今一度尋ねて見る氣になつて此の秋のくれ、都を後にしてこの磯なる水亭の旅客となつた。秋の海は殊にさびしい。しかし

心身を腐蝕するこの寂寥は彼女にとつてせめてもの慰藉であつた。戀人に遇つたが、すべては過去となつて終つて居る。昔の戀人はもう老獪な紳士となりすまして何もかも昔を忘れたふりして何の趣もない世間話を平氣でする態度は彼女の癪に觸つた。反抗の念がむらむらと起つて今更未練らしく逢つた不見識を後悔したこんな唾棄すべき俗物に假りにも逢ひたいと願つたのを此の上もない耻辱と思つた。失望してまた別れた。これからの彼女は、戀しさ淋しさが一層である。戀人の膝にもたれて泣かうと樂んで居た涙をまた一人冷い秋風に流した。落日のかげを踏んで、この松原から磯のあたりを逍遥して果敢ない人生を歎いた。一歩ごとに涙が下る。「要するに皆逝けるなり」ふと死ぬ氣になつた。この自滅の歴史を知る人少く其の殘骸を水に洒し千古の恨を海に葬つた。――とかう云ふ樣にかの水死美人を解釋した。新らしく目覺めた婦人の死體は漸漸と山にも海にも多くなつて行くだらう。云はゞ我等女性の Sturm und Drang の時代が來た。宗教家も道德家も教育家も之れを救ふにはやゝ不充分不透徹な頭腦を持つて居るらしい。只各自修養を怠らず人格を博大ならしめて自ら衛るより外に路はない。用心せねばならない。

△

秋もだん／＼と深くなつた。磯山に露しげく置き、鰮の大漁があつて紺碧の海に鴎がさはぐ。今年は例にない豊年だと云ふ。皷腹擊壤太平の秋はゆたかに熟つた。私の讀書も大分捗取る。

文机に飽きた都度、私はいつも後の松原へ出てすみきつた秋の氣を胸一杯に吸うともう頭腦が爽快で、全身は圓滿な生理狀態に復し生々とした血液が何の故障もなく五體に循環して居る樣に思ふ。

例の友へ手紙を書いた。

「この磯はもう菊も紅葉も去らうとして居ります。私も今暫らくでお傍へ參ります。この紀の海のほとりから參らするお手紙はこれが最後となりませう。――夕

日は靜かに淡路島へ沈むでせう。空は七彩美しく夕榮するでせう。海は何とも知れぬ色に匂ひ、波はきらきらと輝く。其の時の水と空とは殊に大きく觀じます。私は松原へ出ました。松の下かげはもうほの暗いのです。松の幹にもたれて木の間からあの海を望みました。後でサラ／＼と風が鳴ります。病葉が散るのでせう。凋落の冬にはひとりとては堪へられません。余りますよ眞面目に考へたことも色々ありますから、今度遇つたら澤山お話しがありますわ。」（完）

毛髪の洗ひ方

▲皆樣が御髪をお洗ひになりますには、洗髪料の撰擇は別としまして、その方法は大抵お髪が艶になる樣にしてゴシ／＼お揉みになり、それから櫛でガリ／＼と御梳りになりますが、あれは御髪の爲めに大へん惡いので御座います、又灌ぐのは熱湯をお用ひになるが、あれも毛髪の光澤を害します。

▲好く髪を洗ふと頭痛がするとか、或は風を引くとか云ふ方がありますが、それは皆自然に乾くまで御髪をお下げになつてお置きになるからです、それを毛髪扇風器で乾かしますと僅か五分間で、丁度好い工合に乾かすことが出來て、決してそんな事はありません、此器械は機螺旋の廻はし方一つで温い風と冷い風とが望み次第に出て來ます。

▲髪を洗ひますには玉子クリームを拇指の頭位一合ほどの熱湯（髪多ければ其つもりにて量を多くす）にて溶し、それを頭に撒布して毛筋の通りに靜かに指頭にて撫でるやうにし、毛髪一面の垢を除きたる上、微温湯を靜かに注ぎかけ、最後に櫛で梳きますと毛は一本も拔けませぬ、それから煽風器を掛けて冬ならば温い風夏ならば冷い風を出して、乾かしながら快腦術と申して頭を揉み血液の循環を好くするので、斯うしますと毛頭の營養上にも大層効能があります。（[illegible]はつ子）

不良學生の情的行爲

青年男女を持てる父母長上の警戒事項

覆面記者

記者曰く、私は曩に不良學生の狀態に就て某法學生の實驗談を記述し聊か江湖の注意を喚起しましたが今又更に別の學生より這般の消息を聞きましたから前の補遺としてこゝに記す事に致しました再び妙齡の處女を持たるゝ父母長上の一讀を乞ひます。

▲才色双絶の辣腕女學生

私が曾て神戸の學校に居ました頃同級生に倉島といふ男があつた、この男非常に文才のある男で小說家を氣取つて居りましたが品行は極方正で私とは同胞のやうに致して居たのであります。その頃大阪の某商（反物商で五十萬圓以上の財產家）の娘で神戸に別莊を持つて、そこから×××の女學校へ通學する十七ばかりの美人がありました、それが中々の才媛で學問が非常に出來て學科は何時も首席を占めてゐる、特に文章が大評判で女學校の女王と呼ばれてゐました。絶世の容色ある上に物持ですから不斷胸の金鎖や指環のダイヤが眩ゆい、ハイカラの洋裝で通學するので電車なぞに乘ると、どんな者でも視線を向けました。倉島生もこのクキンのために戀の虜となつて懊惱したのです。で、せめて文學上の交際でも求めたいと思つたから得意の筆でいろ〳〵理想的の事を書流し、それをその腹心の下級生を傳令使としてそれに托しました。下級生は旨を含んで早速彼女を歸路に擁して手渡し爲やうとすると、

ろくべし、彼の女は少しも恥羞かむ風情なく明断なる言語で以て「私は知らぬお方からのお手紙は頂きません。第一そんな大切な手紙なら何故御自身で御持參なさらないのですか」と一本定め込んださうです、そこでその傳令使は大いに赤面してすご／＼とその手紙を持歸つたのでありますが、倉島生は彼女の如何にも落着たところに益々敬愛の念を增し事こゝに至つては尋常に申込むより外に策なしと考へたから立會人同道で一度拜姿を得たいとの旨を再三申込みましたところが先方も漸くそれだけは承諾しましたから時日を期して例の下級生を連れ彼女の通過する林間に待ち受けて手紙を渡さうとしました、すると彼女は再び謹嚴なる態度を以て「貴君があの倉島さんですか、ハヽさうですか、かうして御目にかゝつた以上は最早手紙など頂くには及びません、どうか直接に御用向を仰つて下さい」と切り出した、倉島生はいよ／＼以てその平然たる態度に呑まれて仕舞つて一寸口が開けなかつたさうです、が漸く取直して「御尤ですが、僕は元來口不調法で十分胸襟を述べる事が出來ないのみならず、感情が亢ぶると思想の十分一も言ひ得ないのですから、それに近頃男女學生の風紀問題が八釜しくなつた場合にかゝる處ろで長時間の對話する事は困難…根もなき噂を立てられては殘念ですからかやうにいたしたのです兎も角一度この手紙を御覽を願ひますと迫つたので彼女も漸々受取つて分れたのださうです。それから二三日經つて彼女から返書が來ました。その文意は、文學上の御交際云々とお申込になつても私は學科の中で文章は一番不得手ですから平にお斷りいたしますと簡單なる挨拶で、最後の別行に「併し特別の御注意を願たい」とかいてあつたのであります、これは何の事でせうか。無關係の者から見れば只通り一遍卒氣のない斷り手紙で、特別の御注意をと云ふのも以來かやうな手紙を送るなと云ふ風に聞えるのですが、倉島生は前後を對照して、これを頗る有望のものと解したのであります、即ち文學上の交際は斷るが特別の交際ならばと云ふ意味に了解したのであります。そこで彼は有

婦女界

■九月號要目■

◎大日本と女子の覺悟…下田次郎

▲我子を立派に育てたい爲の苦心…金子男夫人

▲嫌いな妻が私を如斯く助けたり…酒井孝三郎

▲下婢の操縦に就いての私の理想…岡崎氏夫人

◎砲煙彈雨の裡に過した私の娘時代

▲子供の叱り方褒め方は斯くせよ…岸邊福雄

▲女子秋の服装は如何にすべきか…久保田米齋

▲如斯き簡單なる婦人の內職あり…福島せん子

◎淀君は如何なる女か　辻文學博士

▲東京市に於ける中流人士の生活…太田千代子

▲如何にして鼻を高くし得べきか…北原十三男

▼婦人は斯くして知らず識らず自分で顏を醜くしつゝあり…富士川ドクトル

▼今日の女學生の手紙に現はれたる欠點…文學士鹽井雨江

▼女子の晩婚は斯の如き不幸を來す…狩野病院長

▼二圓で世帶を持ち二十年間共稼した苦闘

▼新婚の夢に憧憬れて悲境に陷りし若き妻告白

▲秋の七草と文藝

▲京都の女

▲新學期

▲嘯原ゆき

▲茶を薦むる作法

▲九月の園藝

▲眞球の話

▲九月の料理

▲秋の日本室裝飾

▲西洋菓子製法

▲秋の化粧法

▲一週間の獻立

▲衣服の始末洗濯

一冊十五錢　郵税一錢五厘　六冊九十錢

東京神田表神保町　同文館　振替東京一三五番

女へろめ一し

森鷗外君　巖谷小波君　坪谷水哉君　大町桂月君　序

今井翠巖君著

最近調査

女子東京遊學案内

◎附錄　東京實測明細地圖

全一冊洋裝四六判美本

紙數……約七百餘頁

各學校寫眞版十五頁挿入

正價五拾八錢郵税拾錢

女子遊學の好指針

近時女子教育の勃興と共に、各種の女學校年を逐つて其數を増し現今都下のみにても實に百を以て算するに至れり然り而して從來地方の女子が是等の學校に遊學する案内として刊行したるもの甚だ多きも、而も此種の編作は概ね粗漏杜撰單に各學校の規則を抜萃配列したるが如きものに過ぎず甚だしきに至りては、數年前既に廢滅せるものを、其儘記載し却て遊學者を惑はしむるの恐あり概して遊學者の良指針たり、好伴侶たるべきもののなかりしは、著者の夙に遺憾とせし處なり、是に於て本書は此缺陷を補はん爲めに普く都下各學校に亘りて其最近の組織、學則、校風等を詳細に調査し、凡ての遊學に關する事項の細大漏さず左の各項に區別説示せり、されば女子が將來志望する學校撰擇の上に好指針たるは勿論亦教育界の一斑を窺ふことを得べければ各學校の經營上絶好の良參考書なり。乞ふ一本を備へよ。

◀本書目次▶

同君著

最近調査

男子東京遊學案内

洋裝四六判美本紙數六百二十頁

定價五拾五錢郵税拾錢

增訂再版四十三年九月現在

▼附錄……………東京實測明細地圖

東京日本橋本町三丁目

博文館

振替口座東京二四〇番

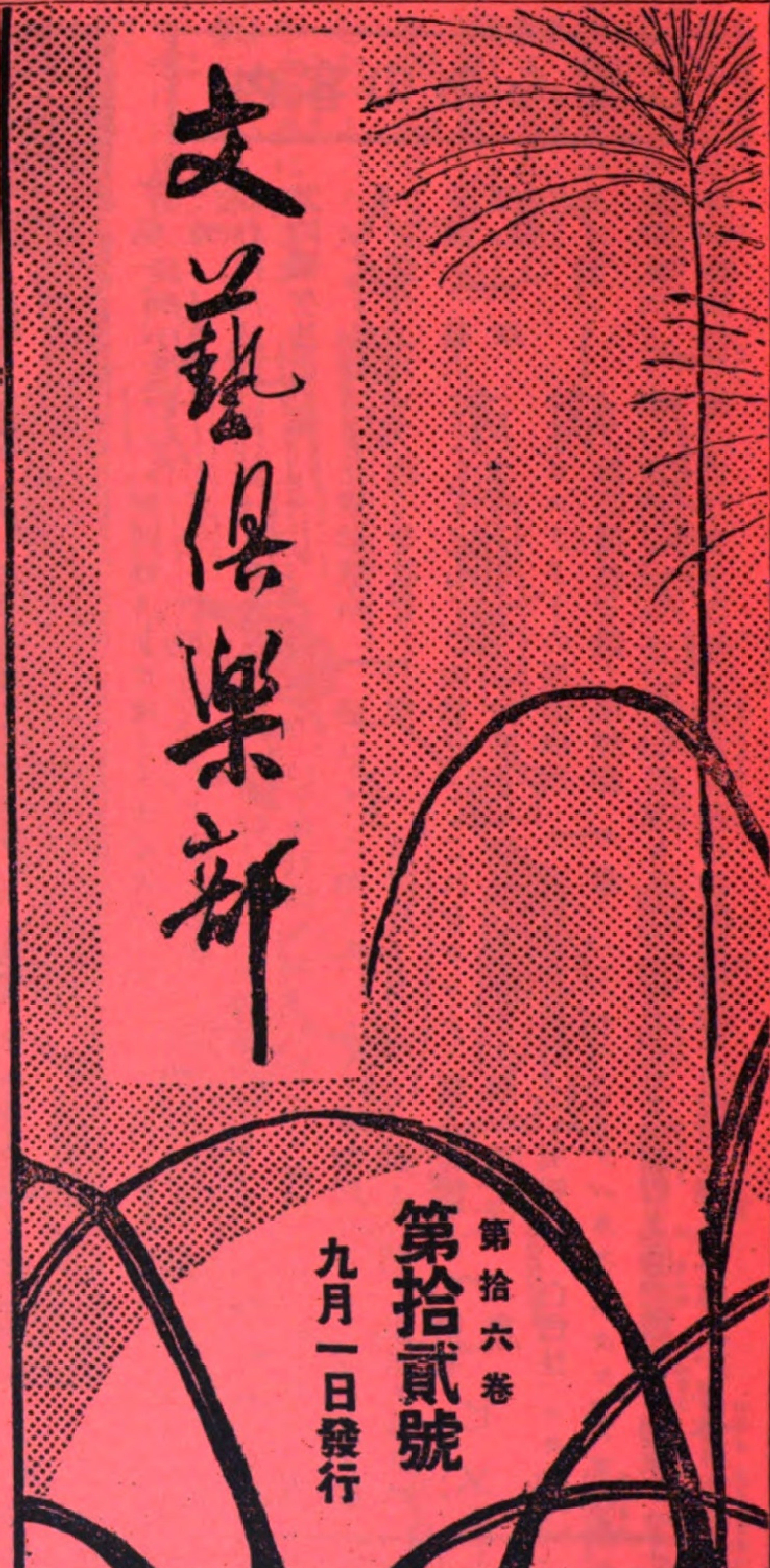
少女世界

九月一日發行
第拾卷
第拾貳號



菊判本文
百廿八頁
口繪寫眞版澤山
正價金拾錢
郵稅壹錢

東京日本橋本町
博文館
振替口座東京二四〇番



菊判三百二十頁
口繪（精巧木版數十度刷錦繪、及婉麗なる三色版寫眞版數頁）
正價廿五錢
郵稅二錢五厘

殘暑の炎威僅かに衰へ、衣袂を拂ふ朝夕の風は漸く冷氣を帶び來りぬ、時候變りには疫病多し、此際豫防の頓服劑なかるべからず、本誌九月號に於て、之を江湖に捧ぐ、即ち卷頭には饗庭篁村氏が『油蟬』なる作物を載す、この蟬一たび啼かんか、讀者はその妙音に醉はされて、座ろに無我の境に入るべく眞にこれ疫魔を攘ふ最屈竟の良劑たり、次に前田曙山氏の『紅粉櫻』田口掬汀氏が喜劇『豫備大尉』を掲ぐ共に見逃す可からざる逸品なり、尚前號より新たに掲げ始めたる新講談は讀者の大喝采を博しつゝあり、次號には斯界の重鎭西尾鱗慶子が得意の快辯を振うて鼠小僧次郎吉の傳を讀む、いかにその面白きかは想像するに餘あらん、雜錄以下百花園の賑ひはまた天下に冠たり矣

（ろの七）

女學世界衛生顧問擔當
糸左近先生著

女ばかりの衛生

三六形總クロース金文字入
紙數三百八十頁

定價六拾錢
送料金六錢

内容のあらまし

第一章 **標準女** 東西婦人を比較して頭の先から足の爪先まで解剖的にその優劣を說く

第二章 **月經に關する事** 月經前後の心得及び其の攝生法

第三章 **子宮病に關する事** 子宮病の種類を擧げ一々其の原因病狀攝生療法を懇切に面白く說く

第四章 **婦人科雜病** 生殖器諸病悉くを收む

第五章 **子の無き妊娠法** 如何なる人にもハヽア成程と合點の出來る妙法頗る面白し

第六章 **產科概要附嬰兒の保護法** これをドンドン素人に讀まれたら產婆先生飯の食上げ

第七章 **ヒステリー病** ヒステリーの原因病狀豫防療法を說く事詳細

第八章 **美容法** 美髪法、白色法、ニキビ、ソバカス、ハタケ、ナマズ等其他一切の療法

附錄 **花嫁の失敗** 語るも哀れな花山文子の身の上噺、衛生を加味した小說的事實譚、未婚の婦人にはよい手本

東京銀座弓町四番地 **三立社** 賣捌全國書店

女(るの入)

望也と思はず叫んで悦びました。でその後は双方共腹心の友達を立會人にして清い交際を始めましたが、互の熱情はレターに於て充分に感通し肝膽相照し互に心を明し合つて居ました。ところがこの女學生は是迄多數の男子を翻弄して中には肉體に關係したのもあると云ふことが分つたのです夫が倉島生と肝膽相照に至つてから悉皆他の方を捨てゝしまつたのであります、併しいつしか双方共校友の嫉妬を受け、噂が高くなり、種々の邪魔が入つて折角の戀を絶たざるを得ざるに至つて了ひました。私は倉島生に同情の涙を濺ぎ此方も相應な資產家の息子ですから、どうか圓滿にと結婚の手續に骨を折つて見ましたが、倉島生の母が恐しい頑固な人で彼是と噂の立つた婦人は如何に才媛でも我家へは貰へぬとはね付て了つたのであります。



▲金髪女學生の戀

それから又私の友達に米國でスクールボーイをやつた感心な學生があります。此男は本來家が有福で二十

萬圓ばかりの資產家の息子であります、鳳采もよし學力もあるので彼地で何かやるつもりで渡航して見ましたがどうもそいつが思はしくゆかず、その內親からの仕送りが絕えた爲に中學校や高等學校のボーイを爲て歩いてゐたのでした、ところがスクールボーイといふのは月給の上に食料を給され、餘閑な時間には他家へ一時間二十仙位の賃銀で馬鈴薯の皮剝に雇はれると云ふ都合です、ところで、暫らく辛抱してゐる間に貯金も可なり出來ました。彼地では御承知の通り男女混同の敎育法で、一脚の机に必らず男生と女生とを組み合せてあります、登校の際には机同士が相伴ふて控所に設けられた化粧室に入り、姿見の前で互に身なりを直し合ひ手を組んで敎場に入るといふ頗る以て自然派の歡心を得る樣になつてゐる、ですからその間柄が至つて親密です。まア考へても御覽なさい日本では男女の學生が家が隣り合て居ても出掛る時には故と顔を見ぬ振をする位であるのに、彼地の學生は互に誘ひ合て双方手を組み合つて出掛るのですから大變な話ですけれどもそこは間違はとんと起らない。ところが、滿月は忠實に働く上に貴公子のやうな男振だものですから女學生達のひいきは大したもので、毎日爭ふて握手を求むる女生徒が三十人、五十人とあつた譯ですが、それで居てラブレター一ツ附つた女學生はなかつたさうです。けれどもいざ日本へ歸らうといふ時にたつた一人波止場へ跟いて來て婚約を求めた女學生があつたのですところが彼は元來金髮の妻は眞平だと云ふ主義の男でしたから、「僕は未だ言葉が滿足に出來ないから」と逃げました、すると彼女は、「私が先づ貴郎から日本語を習つてそれを利用して私が英語をお傳へしませう」と云つた、「併し僕は未だ何一つ纏つた職業もなく且學費も乏しくて此地に留學することも出來ず、貴女と約束したところで何時迎へられる地位になるか當のない話しですから」と斷りましたけれども彼女は中中肯ません。「では私が家庭敎師でも爲て貴郎の學資を仕送りますから御成業の曉に貰つて頂きませう。それまでは何年かゝらうと必らず待ちますし、日本へでも

何處へでも参ります」と言ひ出したので彼は愈々遁辭に窮し、「兎も角も一度歸國した上でお返事しませう」と誤魔化したので彼女は懐の金時計を紀念に呉れました。仕方がないからこれだけは貰つて自分の粗末な時計を與へて別れたのださうであります

▲初對面の學生に送つた艶的書簡

私の親友で〇〇大學生佐藤某なるものが先日淺草公園の電氣館へ活動を見に行きました時、



傍らに佳なり容貌のよいマガレットに結つた女學生が居りました、何かの機會に言葉を交はし始めたところその女學生が歸りがけに名刺を呉れと言ひましたが、流石に本名を名乘るのは後難恐るべしと思つて、唯今持合さないからと斷つたところが、中々執拗く請求して止みませんから仕方なしに本姓の

佐藤を佐久間と代へ、住所は不斷心易くする近所の本屋にきめて、手帳の端へ書いて渡したところが、果してその翌日その本屋へ手紙が屆きました、まだ世間を知らぬ佐藤生はこの一件に餘程心を動かしたものと見え早速私の處ろへその手紙を持つて相談に參りました、そしてこれを打棄て置いてはどんな報ひをされるかも知れぬからそれとなく彼れを思ひ切らせる樣な返事を書いて與れと私に迫ります、私だつて元より、そんな事に經驗のあらう筈はないし、殊に惑い往復を始めていよ／＼深味へはまる樣になつては惡いからと一寸延ばしに延ばして仕舞ひました、その手紙が即ちこれです。

亂れがき御許し下さいませ

今日は樂しい日曜日で本當に嬉しかつたわ、私ね一番日曜がすきよ、實際は品川に行くつもりでしたが從子に誘はれて活動に參りましたのよ。寫眞のうちの小倉山はよかつたわね。でもあの込んで居るには驚いてしまつたわ、ほんとうに失禮致しましたわねよりかゝりさぞ苦しかつたでせう、御許し遊ばせ。

それから私お氣の毒なのよ、それはね名刺頂いても私差上げなかつたのですもの、私隨分我儘者ですよ御交際いたして下さる？ 仲よう眞面目に世の中を送り度いわね、あなたをお兄樣と呼んでもよろしふございますか、でも目の前で呼ぶことが出來ないのは殘念だわ、私はほんとうに都の西なんですもの私の學校がお分りになります？ エ？ 私毎日お轉婆ばかりして居ります。シーツ（思想ならん）丈は慥よ、お兄樣の學校は何處ですか、どうぞお知らせ下さいませな、ねお願ですから屹度ですよ、レター下さる時はね家に下さつても宜しいのですが伯母が居て開かれてしまひますから他に是非送つて下さいましな、直に御返事頂戴なね、きつとですよ。若し下さらなかつたら私お兄さまを羨（怨の間違か）みます、よろしう御座いますか、送つて下さるところは（この處へかいてあつた住所は親友が墨で消した）とね、この方は本當の家ぢやアないから見られ

ないからね、これ明日出しますからこのレター着次第御返事を。私ね金曜か土曜に銀座へ參りますがお兄さま入らしやらない？　私學校から廻つて行く積りです若し御兄様も入らつしやればホートグラフを私に下さいませんか、私も醜いフイースですが差上げますわ、學校より廻るのなら五時までに家に歸れば構はないのですからいつかまたお目にかゝりませうねー、ア、初めてなのに本當に馴れ／＼しくこんなに下らぬことをかきまして感情を害するところがあるでせうで若しあつた時は何卒シスターと思召て平にお許し下さい、今は初めてゞすから長くかきますまい、今度は長くかきますよ。

お目にかゝりました時はいろ／＼家のことなどをすつかりお話し致しませうよ、それでないと何だか氣持が惡いのですものね。

お兄様約束破るのきらいでせう私大嫌ひよ、私これ程までに云ふのですからすぐ學校をお知らせ下さいませな、二三日內にお目にかゝりませうね、すぐお返事頂戴な乾度よお話はいくらしても盡きませんからこの位にして置ませう。、お返事きつと／＼頂戴お願ひ致します、でわね、またね、お身御大切に遊ばせ。

My deer Mr. Sakuma from　（姓名）

フートーを中へ入れましたからこれに入れてすぐね。

隨分鐵面皮なものではありませんか、初めての手紙でこの位大膽にかいたのは餘り見たことはありません。名前や住處は佐藤生が後難を恐れて塗消してしまつたから隆張當が付きませんが、都の西としてあるのを見ると早稻田邊から目白へ通つて居るもののらしいですな、又手蹟と文章の程度から考へると未だ高等女學校三年生位で、迚も大學生とは思はれません。何にしても度胸の宜いものです。この佐藤は迚も懐を當にされる樣な地方の物持息子の風采ではないのですからその女も普通の女學生に違ひありません。

▲始めて東京の女學生を見た時

神戸の高等女學校邊りにも可なりハイカラなのが居ますが先づ指で數へる位で東京に比べたら丸でお話にはならない、全體は東京よりズット質素です。主だつた女學校なぞは一定の制服以外に飾りたくも飾ることが出來ないのです。私は四年前に東京へ出て始めて女學生の華美な風を見た時、地方とは斯うも違ふものかと驚きました。けれども天下の御膝下で貴婦人令孃が雲霞のごとくむれ集ふところですからだらう位に理屈を付けて見て居ましたが永い間に譃言位に思つて居た新聞の素破拔より以上の事實もこの華美が原因と云ふことが分つて恐ろしく感じました。

▲當今着目の女學校

當今男學生の噂に上る女學校は先づタイガー（虎の門）目白が大關で、柳町、第三高女が關脇位でせう。それからワンラインと云ふのも大分着目されて居ますが何んでも三田邊だつたと思ひます。素より各學校全體が左樣であるとは云はないのですが問題に上るところに多數の黴菌があるのは爭はれぬ事實でせう。併し老練なやり口で實行の割合に煙の擧らぬのも隨分あるのです。

▲男學生間の制裁

男學生もまづ中學時代は食慾一方で放課時間には唯暴れる方ですが、それ以上私共のごとき大學程度になると大分考へが趣味的になるものと見えて晝飯後なぞには食堂で喫烟しながら此處彼處で女學生の批評、大袈裟な手柄話、妻の撰擇論等が却々盛んです。この仲間に外れると除物にされて不都合な場合がありますから頑固なものでも口先だけは調子を合せて居るのです。男學生の情話は針小棒大滑稽なもので、「君はあんなお轉ックに夢中になつて居て若し眞劍に結婚を申込れたら如何するんだ」「ナアーに僕は外交官になるつもりだから彼の樣な快活な女が適當だ」なぞと怪しからぬ言語を弄し已に成功したものゝ如き口氣を以て話を爲て居る男もあります。併し實際未だその女學生

と言葉を交したこともないと云ふ風です。然るに實行しつゝあるものは却つて猫を被つて居ますが艶聞一度朋友間に漏れるとその男が成績が宜からうが、平素人望があらうが又立派な講演をやらうが少しも直打なきものとして侮蔑して了ひます。こんな制裁がありますから堅い連中も寃罪を蒙らぬ豫防を爲て居るのであります。

▲身代りの名刺の製造

男學生の友達を澤山持つて居るのはハイカラ女學生の誇としてゐるところですから互に競爭して男學生の名刺を貰ふのであります。僕が大磯の從弟の家へ海水浴に往て居た時、從弟の妻の母校から四五人の女學生が避暑に來て居たのですが、この連中から名刺を請求されて閉口しました。



維納風俗　奥野清信

而して何れも例の交際自慢で一人の女學生が『貴郎はかう云ふお方を御存じぢやアなくつて』と云つて男學生の名刺を見せますから、『僕は一向知りません』と云ふと『それではこのお方は』と別の名刺を見せます、『その人も知りません』と答へると、『このお方達を御紹介願つたこのお方は如何』と又突出す。側から又他の女學生がその通りに名刺を並べるので丸で名刺の陳列會を見るやうですが、どう手を廻はして

あれ丈集めたものかと驚きました。彼等は先づ自分の名刺を差出して請求するのですから厭と斷る次第には行きません、併し此の如く吹聽の材料となつては何時どんな寃罪を蒙むるか知れませんから身代り名刺と云ふのを思ひ付いて、女流のかき名刺にして渡して置きました。かうすれば若し問題になつたところで女學生が自製したものと逃げられるのですから豫防になります、活版名刺ではいくら物好な女學生だつて十枚や二十枚活版屋へ注文するものもないですから私の手から受取つた證據になり、後難が恐ろしいのです。その後も又どう云ふ機會で請求を受けるか知れんと思つて身代り名刺は始終十枚位づゝ用意して居るのであります

▲女學生敬遠策

名刺の請求が熾んな位ですからうつかりして居ると彼等はドン〳〵男學生の假寓へ突貫して來ます。私は先日大磯滯在中女學生連が居る時には散歩に出掛け、彼等が海へでも往つた留守にのんびりと書見でもすると云ふ風に用心して、窮屈な思を爲て成る可く口を利かぬやうに爲て居ましたが、家族から紹介されて一言二言話すとモウ直に二三人連で「御勉強ですか？」なぞとやつて來る、坐り込れては面倒ですから私は机の前に堅く坐つた儘、「何か御用ですか」と詰問してやります。御用？と詰られては流石に間が惡いと見えて「イヽエ別に—」と云ひますから「それぢやア一寸復習しかけてゐますから失敬します」と敬遠すると大概は退散して了ふのです。何でも「御用は？」と詰るのが一番良い敬遠策のやうです。

▲英語の熟語

緣日なぞ隊を爲して散歩して居る女學生に擢れ違ふとピーピーと口笛を吹くのがあつて實に小癪に障るのです。それから彼等の間には英語の暗語が出來て居て大聲で男學生の批評をやります。女學生の知つて居る位の英語なら男學生に分らぬものはありませんから旨く暗語を拵へて居るのでせう。

▲ベースマッチとボートレス



ベースの選手がユニフオームを着てバットを持つてマッチに立つた風采は同性の吾々が見ても震ひ付くほど良のですから女學生連が騒ぐのも無理はありませんナ。併し選手なぞには餘り艶聞がないところを見ると活潑な運動家には近寄り悪いものと見えます。ボートの選手も却々人氣が盛んですが、ハイカラな學生は下着まで新調してレースに出ますから實に恰好がよく競爭服を着込んで審査役の前に一禮しボートに乗り込む時には雲集した女學生の視線が集注するのです。男學生自身も大方これが當込で服に金をかけるに違ひありません。

▲虛榮女學生の富士登山

先日私が友達と兩人連れで富士へ登つた時に一合目の窟へ同泊した兩人連の女學生がありました、何れも劣らぬ容色で、そのけば〳〵しい袴や着物は胸の金鎖と共に夜の窟に異彩を放ちました。あんな風をしてよくこの登山が出來るか知らと心配して居ましたが、剛力の脊も借ずに頂上に達し僕等と一處に下山したのですが、そのハイカラな登山姿は一般の注視線となつたのであります。歸りは汽車が同じでしたが彼等は二等に乘込んで新橋に着いたので先づ豪商の娘と推定したのです。富士山も彼樣な虛榮の振舞場所となつては堪らないでせう。

▲つまり男子が惡い

斯樣な次第で、彼等デカタン式令孃の裏面を言ふと際限はありませんが、併し彼等はデカタンと曰はれる丈皆一種の才物です、箱入の娘に比べると彼等の頭腦は中々明斷で、そして、からつとして居て惡遠慮のないところは中々二十世紀式です、箱入娘に琴を所望すると羞耻んで却々彈きません、餘り執拗く迫ると逃げ出て了ふものですが、デカタン孃は一旦辭退しても良い加減なところでサッサとヴワヰオリン位やつて了ひますから世話がなくつて良のです。唯あれで今少し心身の虛榮を制すると危險が少いでせうが。併し彼等の墮落は畢竟男學生が惡いのだと思ひます。いくらお轉婆の女學生だつて男學生が品行方正で居れば間違の起りやうはないのでせう。彼の黑兵兒帶の不良學生連は往々脅喝的に女學生を陷れるのですから餘程用心しなければなりません。

▲父兄方に一言

私の口から斯う申ては生意氣なやうですが父兄方が女學校を撰ばれるのに假令敎育法が少々手ぬるくても家庭と一番接近して居る所へ出すのに限ると思ひます、男子でさへ活社會へ出ると學校擇を爲たのが爲

廓々しくなるのですから、況して家庭本位の女子には學校撰みをする必要はない次第です。如何程嚴正な學校へ用心して通はしても長途の往復では三四年の間に間違が起ると云ふことは男學生側の觀察で判つて居ますからこの邊は深く御注意申上げます。それから轉ばぬ先の杖と思つて父兄方が種々倫理のお説教をなさるのは結構ですが、餘り具體的に注告されるのは如何かと思ひます。私等にしたところで親から『あの婦人の側へ近寄つてはいかぬ』と云ふやうなことを言はれると氣恥しくて聞いて居られず終に腹が立ちますがこんな小言が度重なると慣れてしまつて返して圖々しくなるものであります。女子は猶更親から露骨に注意されては熱湯をあびるより辛いに相違ありません。否つらい内はまだ良いですがそれが例の鳴子の鈴になつてしまふと實地に過を犯した場合に、よし露はれたところで幾度も辛い經驗を嘗めて慣れて居るのですから小言などはもう平氣だ位で度胸が据つてしまふのであります。ですから若い女子には如何しても間接でよく感じるやうな訓戒が必要だらうと思ひます。

お月見の献立

東浪女

聞及びますに、舊幕時代には諸侯方を初といたし、何方様でも月見の宴のお催があつたものださうで、當夜は御親類、お交際をはじめ、それ〴〵一藝一能に堪能な者をお招になりまして、詩歌、俳諧、連歌、さては管絃舞曲のお慰などありまして、一夜を風流の樂に費されたさうです。その日の献立も、家々にそれ〴〵仕來が定つてゐたもので、千差萬別ですけれども、その中で極手數のかゝらない、何處にも餘り差觸りのないのを撰み、これを今様の家庭に應用いたして見ましたら、チヨツト面白からうと思ひます。

そこでチヨツト古式の擬似事に二の膳附にいたしますと、先づ此様な鹽梅になります。勿論これは據所のあるので、お慰に遊ばしても押しもおされもいたしません。

一の膳

○皿　鯖ずし　○吸物　黒蛤

○刺盃　櫛形蒲鉾、衣かつぎの附燒、枝豆の鹽蒸、柿

盃を前の方に伏せてつけておく。

二の膳

○猪口　鱠、鱚の笹作、獨活、木耳

○汁　米團子、茄子、もみ大根

○平　半片、初茸、春菊

○御飯、豆飯

そこで以上の献立の拵方を申しますと、

○鯖　すし

まづ鯖の鰭を切り、鱗をおとし、尾頭を除く。頭を落しますには斜に庖丁を入れるのです。それから脊より開いて、骨を拔き、腸を棄てゝ、鹹目に鹽をして、一時間ばかりしてから、下酢で鹽を洗ひ落し、毛拔で腹の小骨を拔き、新しい酢の中に二時間ほど浸しておきます。おすしに使ふ魚は、毎時も凡て下酢で洗はなければ味がよろしくありません。これは魚の汚油を除く爲ですから、自然味が淡薄といたしてまゐります。

それから新酢に漬けた魚を出しまして、表の皮を頭の方から尾の方へと、段々に剝いて取るのですが、若し中途で思ふ樣に剝けない時には、指先に酢をつければ、自由になります。皮が剝けましたら、身を上にして、飯を敷き、布巾で巻きしめ、形がついたなら、布巾を取除けて、箱に入れて壓しておくのです。

また御飯の焚方と、酢の交せ方が、おすしを拵へるに一番大切なので、飯の工合が惡いと、折角のお滋味い具も、何の役にも立ちません。如何も焚工合といふのはなか〱難しいものです。しかし大概温湯で仕掛ける方がよろしいので、米二升に温湯一升六七合位、薪六七本で盛に焚き、湯が煮立つたら米を入れ、それが煮立つて來たら、直ぐ火を引いて仕舞つて、五分間位經つて釜をおろし、二十分間ばかり蒸しておきます。蒸れたら酢一合に鹽五匁、砂糖五匁の割合で、味噌漉を持つて、半切に移した御飯の上から、漉しかけて

杓子で飯を交合せ、五六回も打返し、團扇で煽ぎますと、自然と冷えて仕舞ます。これを前の魚の上に敷くのです。

して押石をしておくのも三時間が度合です、鮒が小さい時は丸で附けますが、大きいのは小口から一寸宛位に輪切にして盛ります。

○黒蛤の吸物

これは別に更つた仕方でもありませんが、味を上品にするには、水で好く洗つた蛤を鍋に移し、薄い煮汁を少し入れ、水を登滴加へて煮立てます。煮立つと蛤が口を開けますから下して、泡を掬ひ取り、酒を盃に一杯ほど、醤油を少し注し、チヨット煮立てゝ、吸物椀に盛るのです。

○盆盛の品々

蒲鉾は普通の板附にてよろし。衣かつぎは土を好く洗ひ落し、湯煮てから金網で割醤油をつけて焼く。割醤油とは醤油に松魚節の煮汁を少し割つたものをいふのです。栗は湯煮たばかりのものを使ひます。

枝豆は常の通り湯煮たので好けれど、これを味好くしやうとするには、枝豆の鞘の前後を鋏切り、擂鉢に入れて、手で攪廻し、二三回水で洗ふと、毛が綺麗に脱れて仕舞ひます。それから笊に取り、鹽少し加へて好く湯煮、また笊に取り水を切つてから、鍋の水のないのに入れ、鹽を撒布けて、火にかけてカラ煎にするのです。此様すると心に味がついて風味はよろしいやうです。柿の果は生の儘盛ります。

剝盆は八寸盆で、普通八寸とのみ稱へてをるものでこれに以上の品々を體好く盛り合せるのです。

○鱚の鱠

鱚を笹切にするには、先づ鱚を三枚に截し、腹身の方は除けて仕舞ひ、これに薄鹽をしてから、小骨を丁寧に抜取つて、酢を漬けておく。以前の鮒と同じ様に魚の漬き加減を試て、頭の方から皮を剝いて、これを

蓮に小口から笹の葉の様に刻めば、笹切になるものです。

これに獨活の皮を剝き、短冊に刻ざみ、鹽を入れた酢に、チョット漬けておき、木耳は湯煮てから細く刻み、ザット味をつけておく。この三品を混合せて、三杯酢をかけて猪口に盛るのです。

○米團子のお汁

米團子は常の米の粉を湯で捏ね、好き程にとつて蒸し、これをまた擂鉢に入れて搗き、小さき團子とし、蒸籠に布巾を敷いて蒸す。茄子は皮をむき、亂切にして茹で、揉み大根はよく洗つて湯煮て、この三品を白味噌にて汁を立てゝ煮る。これが月見のお團子のしるしです。

○お　平

平に使ふ半片は別に凝つたものでなくとも、普通のでよろしいので、これと申す程の變つたものを使つたのを聞及びませんが、それは適宜お見計ひでよからうと思ひます。初茸は笠の裏に兜角蟲のゐるものですから、先づ掌の上へ載せて、笠を輕く叩きますと、裏の筋の間の蟲は出て仕舞ひます。そこで尙ほ鹽水に漬けて後、湯煮て、松魚節の煮汁に鹽を少し加へたものに漬けておく。添への春菊はザット湯煮ればよろしいので

この三品を盛合せて、澄し汁で附ます。

○豆の御飯

これは枝豆を湯煮て、豆を彈き出し、薄皮を剝いておき、味醂、醬油、酒、松魚節の煮汁とを好い加減にしてキガラ茶に致し、豆も一所に入れて焚込む。これで豆飯が出來、月見のチョットした會席になります。



天は今妾に如何なる幸福を與へつゝあるか

森戸禮子

出かねる乳をもどかしがつて、容易に寝付かぬ八重子を、苛立てさせじと忍び音の子守歌で、かろく背をたたいてやつとねむらせた。

まるでぬすびとの様に足音をしのんで、勝手に來て見ると、もう五時と三十五分、半時間もおくれては大變！と大急ぎで焚き付ける。

續いた雨天で、ジツトりと濕氣をふくんだ柴だからかいたづらに白煙朦々と立ちのぼるばかり。

「今朝の浮しは宅のですのよ」

「と聞くと味が落ちるね」だつて、まあお味噌も葱も手作りのお汁、おぼえず微笑のでゝくる私の顔は、寝みだれ髪に火吹竹でほゝふくらしてた。先刻の人と誰が知らう、女はどうしても化物だわ……。

安らかに眠つた子供をのぞき〳〵服召してゐらつしやる。

「あ、お觸りなすつちや覺めますわ！」

ちよいと指先でついたら、びつくりしてお退きなさる。拍子に後ろにあつたカフスを、カラ〳〵ツと、思はず吹き出す處を、タス〳〵と、とう〳〵茶の間へ逃げてしまつた。

お午飯をしまつてから八重子が、ねむたがつて泣くので添乳してやる。

かうして添乳する間ばかりが私の世界、子供なんぞを持つて居つてはなか〳〵机に向つて書見などはできぬ一分のひまをも無駄にはならぬ、けれどこんなにして横になつてる間だけは、他の仕事はできぬから、私はこれを屈强の書見時と定めて居るのだが……。

軒端の梧桐の若葉をすかして、差し込む光りは、あゝ心地いゝ初夏の景色！、と、ひし〳〵胸にしみる、その靑い光りを照り返す艶々しい廣縁に小机を持ちいだして……思ひを平安の古にしのばせたこと……或時は墨

薫る細筆にこゝろの丈を永々と…あゝ處女の時代！しかもなつかしきおとめ十八の花の盛りは、わづか私の過去三年とへだゝつては居らぬのだもの…。

移れば變る人の世、とは云へあまりにかはりやうが早すぎた、花にあこがれ月をなつかしんだ樹の下蔭でまさか今の境遇には思ひ及ばなかつた。

こんなになつて以來、日ごと／＼極く單純な仕事が定まつてしまつてしかもそれに毎日／＼追はれて居る。今日迄二年間かはることなく繰り返してきた、おそらくこれから先幾十年でも命の終るまでは、とても私のすることは今の範圍からひどく踏みいだすことはないだらう、ほんとうにさう思ふともう堪らないほど馬鹿らしくなる、それが女の務め？　天職？

小さいながら家の用事を一身に引き受けて、萬事萬端おしろいの仕樣に至るまで（ホヽヽ）氣に入らぬことの無いやうにと、そりやもう男方だつて外に出てお働きなさるには並大ていの御心勞でないことは、百も二百も承知してるけれど――。

「そんなこと位少しの時間があればできる事だ」つて一口に云つておしまひなさるのだもの、女は常々樂をしてるから子を產むといふ苦しい役があるんだ。位に考へてゐらつしやるらしい。

えゝそりや別にやかましくお小言などきくことはなしまあ／＼至極平穩無事なんだけれど…だけど…。

夫も妻も力の限り働いて、そしてお互に平和だとか、仲がいゝとか、何だとか、好い加げんなことを云ふが、その中味は…あゝその中味は？　人生の目的はたゞその中味…それなんでせうか？

あゝ嫌や、嫌や、ほんとうのところ、人の世に生れてきたのは、只是れだけの目的を達せんため、そして人類を繁殖させん爲めにだけなのだらうか…？。

再び云ふ、今の處私の身にこれといふ不足も無し、愛の結晶物だといふ者さへあるけれど、どうもたゞかうして働いて夫婦といふものや、親子などが、毎日同じことを何べんも／＼繰り返してしまひには燒かれてしまふのかと思ふと…。

あゝ人とは實際そんなに趣味のない無意義なものなんだらうか、何とかそこにも少し、頼りになる意味がないものかしら。何だか美しい女神の様な方が來てこゝにいゝ物をかくして置きますから見出してごらん、といつて消えてしまはれたやうで、何物をも捕へねばならぬやうで、さてといつて何を捕へるのかわかりやしない。



といつたやうなこそばゆい様な氣持ちがする、でも今のまゝぢゃ、あまり馬鹿らしいのだもの。一層たれかに尋ねて見やうかしら。夫に聞けば譯はなからうが……でも無邪氣な者をよろこぶ方に、自分の妻はそんな生意氣なことを考へてるのか、なんとは思

はせたくなし…誰かゞ來て、ソーッと、この耳にささやいてくれるといゝんだが、どうも自分ではわからぬ、でないと何だか、物足りなくてしかたが無い。何だつて私はこんな事を考へ出したのだらう、一體いつ頃からかしら、そのことを考へ出すと、物事をするのもなんだか馬鹿らしくなつてくる……。

「ナツ、ツーン、ごめん」

おや、たれ？　立たうとしたら、

「毎度おそくなりまして――」

あ本屋さんね、成程今日は十五日、きつと增刊だね。

＊　＊　＊　＊

あゝ、くたぶれた草臥れた、やつと今日のひと日もくれて八重子も寢んだ、さあこれからこそ一仕事いたしませう、あ、お仕事もお仕ごとだけれど、增刊があるね、今夜一晩は許して貰つて――せひあれを、さうだ、さうだ。

忙がしさにまぎれてつひまだ開いても見ぬ五月の增刊、まあ私共にはほんとうにうれしい名、世渡り上手だなんていふのだもの、口繪はざつと、でもどれも例の通りお美しいこと。

そら本文よ、おや玉露さん、お野菊さん、おや〳〵「獨立獨行の模範」だなんてずゐぶんお達者ね、まあどれもこれも模範的の奥樣ばかり、このたくさんの奥樣のよさゝうな處だけ、あつめ合せて自分のにしたら、まあどんなに立派な女ができてしまふだらうか、ホヽヽヽ。

「世間を猛烈に罵る人」なんとおもしろいお作だこと一氣に讀んでしまつた、ほんとうに二階のすみつこからあれだけ猛烈に世の中をのゝしりながら、下に降りれば內氣なよい奥樣だつて、自ら名乘りを上げてゐらつしやるあたり、其の邊なか〳〵處世上の秘訣をわきまへてゐらつしやるわね。

「機敏に働き過ぎて同情を失なつた人」成程ね、何と云つても古今道にかはりは無いものか、「心さへ誠の道にかなひなば……」誠の一字はやはりおろそかにはなりませんわね、Tさんはお氣の毒でもあり、いゝ氣味

でもあり……、おや殿が「樂しき世渡り人」？冒頭數行すでに人生の根本義が說いてある、そして心の持ち方を「樂しくする」……それから萩野さんの御親戚の八百屋さん夫婦の心の持ち方、「人間は此の世の中に生きて居るといふとが快樂で、只生きて働き何等かの結果を見れば澤山である、笑つて暝することができる、偶々起つて來る厄病や災難とても、決して無意味には來るのでは無い、それに打勝つて、生をつゞけ働きを續けて行く所に無限の樂しみがある」……。

吁々わかりました！



至つて無意味な味ひのとぼしい、妻、否人といふものも、

それで萬事わかりました、意味ができました。

いそがしいと云つて二三日も拭かなかつた緣を、十分間子供を泣かすつもりなら或はせなに負つてしまへば艶々と物の影が、さかしまにうつる美しさとなる雜巾持つた瞬間の働きてはやがて一日美しい氣持のよい緣が見て居られる結果となつて現はれた。

庭の隅つこに雜草がはびこつて、取るのも何だかいろんな蟲が居りさうで氣味が惡いと打やつておいたが、

明日は思ひ切つて刈つてしまはう、きつとすつぱりと、すゞしさうになるだらう。

これまでの私の心に、七六ケ敷い眞理を説いて貰つたつて、とても解らないのだつたらうけれど、今この僅か四頁にたらぬ、萩野さんとやらの御話を見て、あゝ永らくひとりで苦しんだ、この疑ひの胸も、もうすつかり晴れました。

古い形容ですけれど、まづ黒闇の中に一點の光をゆくてに見出した、といふ心持がいたします。

「人が此の世に生きて居るといふことが、すでに快樂なのだ」

ありがたう！ 私は終生の身の教訓として世を渡りませう、飢渇れた私の心は、今はもう、露をふくんだ、わか葉の上に、わかい日の光りが、さしこんだ樣になりました、おかげさまで夫に嫌な思もさせずにすみまして、私これほどうれしいことは、生れて以來、實の處、曾て味はつたことはありません。

このうれしさの御禮は、誰方に申上げればよろしいでせう、萩野しづく樣には勿論のこと、こんな立派な雜誌として、吾々のやうに迷へる者、悶える女を行くべき道に導いて下さる、この女學世界には、これまでとてもいくら御恩になつたか知れません。

衷心より感謝いたします。

あゝ、今聞えた、たつた二つ？

さらば、こよひこそは安らかな眠りに就きませう……

……。



維納風俗——奥野清信

歐米印象錄

文明國の高等批評

中村春雨

私が日本横濱港を出發したのは明治三十九年六月五日で、先づアメリカの桑港へ上陸し、其附近に二月不足、暮らしてから、鐵路、大陸を横斷して東部へ行き、プリンストン大學及び紐育市に前後、約二ヶ年の月日を送つて後、大西洋を渡つて英京ロンドンに入り、茲に滯留一ヶ月、次には獨逸伯林に赴き、一年有半の間、足を留め、愈々歸朝する事となつた間際、歐洲大陸の漫遊を試み、歸途をサイベリヤ鐵道に取つて、昨四十二年十二月十四日、無事敦賀港に上陸したやうな次第です、その間、三年有半の歐米生活の經驗やら、觀察やらは、先頃出版した「歐米印象記」中に大體取り纏めてありますから、茲には可成、それ以外の實驗談やら、觀察談やらを試みたいと思ひますが、自然重複する廉があるかも知れません、それは豫め御斷りして置きます。

△憧れて見た青い空、

先づ洋行前の實驗を云つて見るのも、何かの御參考にならうと思ふが、自分の頭の方から云つて見ると、洋行は多年の希望で、例へば銚子邊へ旅行した時でもこの向ふに米國の新大陸があるのだが、何うして眼に見えないのだらう、行つて見たいなどといふ氣が出ます、そんな事を思ふと、自分の生活してゐる東京が鼻を突くやうな狹い處だといふ感も起る、殊に一夏の休暇を利用して、東北から北海道へかけて旅行して歸つた後など、日本といふ國は實に狹い島國であると、ツク〴〵思ひまして、人間一生こんな檻のやうな島國の中で暮らして、中で果てるのもつまらない事だと青い空や白い雲を眺めては折々嘆息を吐いた事もありました。

こんな事を云ひ出して來ると、何んだか少し小說めいて可笑しく聞えるかも知れませんが、常に靜的なキマリの附いた事の好きな婦人方と違つて、兎角活動を思ひ、變化を喜ぶ男性の心理狀態の一部は略斯んなものだと御推察の料にはなりませう、然ういふ次第で、漸く機會を作つて、洋行する事になり、準備に取りかかりましたがサテ其間際になると、家族の者や、舊知

友人等も、未經驗の事だからいろ〳〵の杞憂を持ち出して來て、自分でも心配をし、他の者にも心配をかけます。

△肉食と壞血病の杞憂

その第一には、外國へ行けば肉食許りやるのだから壞血病を起す憂がある。現に先頃、米國へ旅行して歸つて來た一牧師は、白血球病に罹つて、暫らく入院療養したが、遂に手當が行屆かず、三十餘歲の壯齡で可惜、病死した實例が手近に轉がつてゐる、君も外國へ行つたら精々注意して野菜物を多食するやうにし給へと、眞面目な忠告が來たのであります、自分も何んだか道理のやうに思へて、若し西洋の料理店で、野菜の出し方が少い場合には、後で果物屋の店頭に立つてバナヽか何か大にパク附く事にしやう、然したら恐るべき壞血病なんかに罹る患はあるまいと、大丈夫とは思ひつゝも大分神經を惱ました事もあつたのです。

然るに洋行して見ると、サスガ西洋の人間は、日本人よりも長い間、洋食の經驗があるのだから、マサカ肉許食つて壞血病を起すやうなブマな眞似はして見ろと云つても、爲はしません、肉の種類に依つて、それぞれ野菜の種類も違へて附けて出すし、おまけに林檎もバナヽも、デザートに備へてある、生の野菜のセロリヤ、紅大根などと來ては、令夫人や、令孃などといふ貴婦人連までが、鹽をつけて、パリ〳〵云はせて召上りになつてゐるといふ體裁であります、偶に一人や二人、壞血病を起した日本人があつたからと云つてそれは除外例の方で、肉食といふ事は、身體の健康を增し、筋肉の發達を資け得るのが先づ普通の狀態と見てよからうと思ひます、こんな杞憂は寧ろ滑稽の種になる位なものでせう。

△到る處日本料理店あり

それから食物の事に就いて、も一つ云つて置きたいのは、西洋へ行つたら日本食が食べ度くなるだらう、そんな時にはサゾ困る事であらうといふ心配やら、質

問やらでありますヽ處がこれも又杞憂でありますヽ米國などはヽ殊に到る處日本人が多くゐますからヽ隨つて日本の料理店がありますヽ桑港などにはヽ隨分軒別も多數あるやうですがヽ東部の紐育市へ行つても五軒や六軒ヽ日本飯を食べさせる料理店なりヽ下宿屋なりがチャンと出來て居ますヽ又英國の倫敦市へ行つて見てもヽ紐育の支店の「生稻」といふのと「渡邊」といふのと二軒ありますヽ此處では鯛のさし身やヽ鰻丼などいふものが食べられるからヽ日本へ歸つたやうな氣がしますヽ獨逸の伯林市にもヽ日本倶樂部とヽ今一つ日本料理店が出來てゐてヽ牛鍋やヽさし身や味噌汁やチヨツとした料理は出來る事になつてゐるヽその他ヽ伯林市から汽車四時間程のヽドレスデン市にはヽ「日本婆サン」といふヽ日本ビイキの下宿屋の婆さんが居てヽ飯もこしらへてくれるヽ牛鍋も調へてくれる佛國の巴里市にはヽ元ヽ一軒ヽ日本人が店を出してゐた筈だがヽ此の頃は引拂つた樣であります。

斯の如く歐米到る處ヽ殆んど日本料理店を見ざる無しといふ有樣であるがヽそんな設備の缺けた處ではヽ日本人同士が寄り合つてヽ自炊をやるヽテキサス米とかヽ支那米とかを買つて來てヽ鍋に入れてヽ油ランプの上で火加減をする。鷄肉を刻んでヽ玉蔥やヽポテトーの片など一緒くたに煮るヽ胡瓜を醋酸に漬けてヽお菜にするヽそんないろんな手料理でヽ皆が日本食の大振舞に逢つたやうな氣になつて舌鼓を打つのでありますヽ唯日本の澤庵漬やヽお菜漬のやうなものはヽ料理店へ行つても食べられないヽせい〳〵キャベツの漬物位で我慢しなければなりません。

△西洋人の觀た東洋料理

又ヽ日本料理に用ふる醤油は色が濃いのとヽ臭氣が烈しいのでヽ西洋人は嫌がつてゐます併しヽあの味の分つたものはヽ捨て難く思つてゐると見えてヽ現に獨逸邊でもポツ〳〵賞翫者が出て來るヽ醤油の需用者が多少あるやうになつて來たといふ事であります。

米國では日本飯以外にヽ支那飯屋がありますヽ無論

支那人が嗜んでゐるので、鷄肉に、葱やセロリなどゴタ〳〵切り込んで、濃厚な豚の油で煮上げたチヨプスイ一鉢に、味のない南京米の飯椀をつけて出す、最初は一向食る氣になれぬが、食り附けて見るとナカ〳〵旨しいもので、西洋人までが多く食べに來てゐます。

まア斯うした調子で、食物などの事は、洋行前に、いろ〳〵心配し過す程のものはありません。

△日本で作つた西洋服

又、衣服などの事は、洋行する人の家族が何彼と氣を附けて、思ひ過しもするものです。第一、洋服にしても、米國邊りで三四十弗、即ち日本の金で七八十圓費るものが、日本で仕立てたらその半額位で濟むから可成多く調へて行つた方が善いといふやうな事を注意する人もあります、成る程費用の點からいふと、それは全く間違つた考でもありませんが、日本の洋服屋の手にかけたものは、何うしても型が違ふので、外國へ行つて着惡いといふやうな事が出來します、流行などは年々變つて來るから、旅行用のを一着位、日本で製へて行くのは止むを得ん事ですが、後は向へ行つてから買ふなり、注文するなりした方がよいのです、それは注文するとなると、米國邊ではナカ〳〵高く費りませうが、出來合せを買へば比較的廉價で、日本で注文したもの以上の品が得られる事になつてゐます、獨逸なら、八十マーク、即ち日本の四十圓で、先づ上等の品を誂へる事が出來ます、それから夏服にしても、あまり地の白いものを用ゐると熱帶國から來た人間と間違はれる恐れがあります。

白シヤツとか、カラー、ネクタイ、こんな者は無論彼方で買ふ方が得用です、私は大分、日本から持つて行つたので、米國滯在中、白シヤツなどは一着か、二着しか買はなかつたのですが、こんな眞似をするには及ばなかつたとツク〳〵思つた事もあります、それから或時家族の者が、毛織のシヤツを小包郵便で日本から送つてくれましたが、税關で檢査され、一弗七八十仙の税金を徴收されたので、飛んだ高い品を背負込

んだといふ滑稽もあります。

△持つて重寶な品々

日本服を持つて行く必要があるか、ないかと申ますと浴衣や、搔卷などは、室內着としては一寸と便利で夜分、勉强する時などは、洋服と違つて肩が張らないで善いと思ひます。

それから羽織、袴などといふ禮服はあまり必用が無いやうです、併しそれも人と場合とに依る事で、假裝會とか、又は特別に東洋的の集會などに出るやうな機會がないとも限らぬから、持つて行くのも惡くはなからうかとも思ひます、日本の染模樣の手拭などは、手土產物になります、又錦繪などは西洋の婦女子を喜ばす品です、日本では子供の翫す繪日傘を、西洋では夫人や令孃達が、自慢さうに翳して、社交の席へ出て得意がつてゐる事などもあります、それからキモノは、洋服の上から羽織つて歩いてゐるのです、その色模樣なども隨分派手なものを撰んでゐるので、一體に趣味とか、茶氣とかいふものは解せられてゐません。

△東西衛生設備の相違

猶一つ、洋行前に、家族や、親戚、故舊の者の一番心配し、當人も氣にかけるのは、氣候風土の異つてゐる爲め、病氣などに取附かれ生別是死別といふやうな忌ましい事になりはせぬかといふ事です、此れは尤な話で、所謂老少不定、無常迅速、何時何んな事が起るか保證されたものではありませんが、併し大體から云つて見ますと、衛生といふやうな事にかけては、歐米文明の諸國の方が、日本などよりは遙に進步してゐます、日本の模範的の都市たる東京市の如きさへ、下水道などはまだ出來てゐません、宮城附近の、外濠には汚い黑い、惡臭い泥水が沈滯してゐて、塵芥の腐敗したのが、見ても胸惡い程溜まつてゐます、糞便なども日本のはその儘になつてゐるのだから、家每に惡臭がある、それを運搬するにしても、市中に肥車が行列を作ると云つた有樣になつてゐます、かゝる不潔の結果

夏分は蚊などが多く出る、本所、深川と來ては、東京市中で蚊の名物と云はれてる次第であります、然るに西洋文明諸國は、これと全く面目を異にしてゐて、水道の設備は市中市外を論せず、行届いてゐる許りでなく、下水道の如きも第一に設備が出來て、外濠の水溜の如き醜いものは、苟も都市と名の附く處では、探がし廻しても見附かる沙汰ではありません、その上、家家の糞便は悉く水で押流して、下水道に落ち込むやうにし、それを遠く海の沖合へ放散する仕掛になつてゐます、ロンドンも紐育も然うですが獨逸の如きは、殊に進歩したもので、糞便を固めて肥料とし、痩せた砂地を肥やす材料に使ひ、濾過した水にはもう惡臭も何もなく、眞の清水となつて、湖水の中に流れ込むやうになつてゐます。

△都會には蚊は一疋も居ない

斯樣な次第であるから、市中には蚊など一疋も居ない、蚊帳などいふものは見た事がありません、怖るべき流行病のコレラだとか、赤痢だとかいふものは絶えてない、況んやペストなどいふ如きものは、印度邊にあるとか云ふ事を新聞で讀む位のものです、コレラの流行する露西亞の如きは畢竟、衛生設備のまだ至つてゐない事を證明するもので、ペストの折々ある日本の如きは、まだ〲一等國などと云つて、威張る事は出來ないと思ひます。

斯の如く、衛生が行渡つてゐるといふ點から考へると、日本にゐるよりも、西洋の文明國に行つてゐる方が、病氣に罹る割合は少いといふ事になります、西洋に行つて病人になる程なら、日本にゐたら先刻流行病か何かの犧牲になる人だと云へると思ひます、併し、その以外に氣候といふ事も一つ考へて見る必要がありませう。

△北米常春の樂土

氣候は、日本程よい國は一寸とない樣に思ひます、春夏秋冬、四季折々の變遷は、日本程秩序よく行つて

る處は、歐米文明國には先づないやうです、米國で云つて見ると、カリフホルニヤ州は常春の樂土と申してもよからうが、併し、春のやうな季節が年中續いては恰も温室の中に入つたやうなもので、あまり難有味がない、年中、洋服一着あれば濟むといふやうな處は、經濟的には都合がよいが、變化を喜ぶやうに出來てゐる人間の性質には不向です、私がカリフホルニヤへ行つたのは六月であつたが、成る程、草花は美しく咲き揃つてゐるし、護謨の樹は鉛色の葉を繁らせて林をなしてゐるし、熱帶地方でなければ見られぬやうな椰子樹なども青々と繁茂してゐる、珍らしい景色だと思ひましたが雨といふものが一寸も降らぬ、十一月から十二月頃の降雨期以外、年中、乾燥し切つて雨雲なども見えぬ土地柄であるから、地上の草は眞赤に枯れ・丘の上なども秋の末枯れの色になつてゐる、路傍の木々の葉の上には、黄色な土埃が溜まつて誠に汚くなつてゐる、朝夕、人夫が水を撒きかけるので、そのお庇蔭で、持つてるといふ次第なので、日本の夏の夕立のやうな、氣持のサッパリした目には出逢ふ事が出來ません、おまけに、カリフホルニヤ灣から立昇る藍色の靄が、空中をさまよひ歩いてゐて、空色の青々とした、快晴の日といふものもメッタに無い、要するにヌルヌルして蛇の腹に觸つてるやうな氣持がするので、常春の樂土と云つても、あまり永住すべき處とは思はなかつた、矢張り、暑い時には暑く、寒い時には寒いのが好い氣候といふものでせう、尤も此れは主として桑港附近の事を云つてゐるのです。

△紐育邊の氣候の激變

米國でも、東部となると又ズッと違つて來ます、紐育の如きは、冬となると酷寒で、〇度以下十度、それ以下に迄も温度が降る事がある、而して雪が一尺以上も積る事がある、斯うなると、市役所では早速、人夫を驅り集めて、雪掻をさせ、それを荷馬車でドン〳〵ホドソン河へ運んで、街途を明けて了ふ、その費用に五十萬弗も支出して、お庇蔭で失職者に生活の途を與

へるといふやうな例も乏しく無いのでもあります、然うかと思ふと、夏は又百度以上に暑い日もある、家の中にゐると、蒸しつけられて、油汗がタラ〳〵流れて出る、何んだか、息苦しくなるので、公園へ逃げ出して行つて、ホッとするやうな事もあります、貧民窟では日射病で死ぬる者が七名八名も、毎日出ます、暑い日には、海濱へ出て夜明した者が幾千、幾萬といふ數に上る事なども珍らしくありません、要するに、氣候の激變するのは、大陸の特色で、紐育邊が殊に然うです。

英國のロンドンとなると、夏は左程暑くもないが、秋十月頃から冬にかけて、例の暗黑な大霧で、晝やら夜やら區別が附きません、氣候が頗る惡くて、病人などには、とても行かれる處でないとせられてあります、獨逸の伯林は、ロンドン程、霧が深くはないが、それでも氣候の善いのは、六七八の三ケ月位のもので、多分は、太陽の色もボンヤリ、黄塵が流れかゝつたやうになつて、霧深い空に見えてゐます、寒い日には、○度以下十八度に降つたりなどもします、二三町歩くのも息苦しくつて、耳が凍傷に罹つたりする例もある、呼吸器病患者には、甚だ不適當な土地だとして有ます。

△避暑避寒の便

斯うした次第で、氣候は日本が一番善いに相違ないが、併し、室内の設備、暖爐、蒸汽温管などいふものが行屆いてゐるから、寒さを凌ぐのは、日本の唯、紙一重の室内よりは、遙か優つてゐます、外出するには毛の厚い外套や、ラパ、シユーなどを用ゐるから、日本服を着て、空ッ風の市中を慄えて通るのとは趣が違つてゐる、日本で想像する程ではないと思ひます。

殊に、交通便利で、歐洲大陸などは諸國の國境が相連續してゐるのだから、避暑、避寒、轉地、旅行なども自由なものであります、日本では「可愛い子に旅をさせろ」と云つて、旅を苦の一つに數へてゐるが、歐米に在つては「可愛い子に旅をさせる」のは、樂をさせる事であると云つても差障ないのです。

斯うした譯で、歐米の氣候も、一方にそれを補ふ設備があるから、他から心配した程ではありません。

涼しさうな料理

△夏季は料理も自然涼しさうなものが宜しい、又それに附隨する装飾も、成るべく涼しさうにしなければなりませぬ、併し日本料理では氣候の寒暑に拘らず、一體にあまり油濃いものは好みませぬから、別に夏の料理であるからと云つて、さして異つたものがある譯ではありませぬ、總じて口中に熱を有たぬもの、淡泊したもの、口になづまぬものを撰ぶのが專一であります

△夏は魚類は可けぬとか、又は流行病のあるときは刺身を食べぬなど丶云ふ方がございますが、食べる人の體が丈夫でありさへすれば、其季節の野菜、魚獸肉は何を食べても害にはならぬやうに、自然がなつて居るのです。

△料理の装飾は夏は何うしたら宜しからうかと云ふにこれは吉凶に因て無論違ひますが、先づ普通の會食などならば大根、胡參、牛蒡などの剝物細工で、洗ひの盛皿は百本杭に都鳥でもあしらうか、或は鱸の瀧登りでも造るとか云ふやうなことになるのです。

△献立は、吸物は鮑の膓滑汁などが宜しい、又口取代りとしては、穴子卷、源氏蝦、二色栗などが、あまり口になづまないで宜しい、鉢肴は鮎ならば申分がありません、但し新鮮ならば鹽燒が最も宜しい、洗身は鱸や近海の生鯛など、茶碗盛は季節に關らず、上等の材料としては鶉の糝薯などに口柚、酢の物の代として水鉢、これは小杯鮑、蓴菜、琵琶生薑、それ等を取り混せて氷の上へ載せて出したら、見た許りでも隨分涼しからうと思ひます、甘煮としては唐茄子の丸煮、これは青い三寸徑位の唐茄子をスープで煮て、中に詰物をして蒸すので、季節の料理としては最も上等なものです。(三枝富吉氏)



家族主義の犠牲となつた弱き女

花すゝき

又あの鐘がなり出した、私もう〳〵あの鐘を聞く度に昔がなつかしい。

丁度こんな夕べ、局内の櫻がもうそろ〳〵散りかけて青い若葉が淡紅色の花の間からちらりと見え出してもう〳〵何とも云へぬ靜な夕、今もなるあの鐘が靜な空氣を動かして私の耳に達してから三十分の後いつもの樣に夫はあのしんとした煉瓦の道を櫻樹の下をくゞつてヂャラリ〳〵と澤山の鍵のすれあふ音をさせ乍ら歸つてらつしやる。その鈎の音が門まで來ると私はいつも「お歸り遊ばしませ」と玄關にお迎へする。とやがて靴をおぬぎなさつてお書齋へおはいり遊ばす、私はお和服をおきせ申してお茶を入れる、あゝ毎日〳〵日曜と祭日の外はこうなんでした。

×

「ネー三枝もう花も大分散つたね」

「ほんとにねー私今日門まで出てびつくり致しましたわ」

私は洋服を衣桁にかけて暫らく樂しく話してゐると清が、

「御飯を御上り遊ばしませ」

つて云ふから茶の間で語り乍ら御飯を頂く。

と、又、松村の寅さんが元氣よく驅けた。いつも案内なしに通るのは此の子ばかり、

「あらまだ御飯なの？　おそいわね、小父樣、小母樣私と一緒に花ひらはない事？」

「あゝひらふよ、少し待つてお出で」

寅さんは「早く〳〵」と急ぐから夫は「よし〳〵」とお立ちなさる。

「奥さんもお出でなさい」

オホ・・・時々夫は奥さんなんて私を呼んで・・・・私は

針に糸をつけたのを用意して三人で門を出る。ほんにまあ三日前にはあの枝といふ枝皆花をつけて通りぬけの人々をあつといはした數十樹の櫻がもう半分は散つて地一面の花、寅さんは早くも針にさし初める一樹をゆれば怒ちさつと花風雪。私の丸髷にも寅さんのおさげにも夫の肩にも花瓣が一ぱい。伏見をさしてゆく淀川の川蒸氣がぷーと一聲私達を驚かした。おもへばたのしかつたわ、あの頃は・・・

×

こゝへ來たのは十七の春それから今日迄一日として樂しまぬ日なく、無邪氣に暮して來たなれど丁度お庭の松の木に靑葉かくれに藤浪ゆらぐ初夏の頃、東京にいらつしたお姑様とお姉様お二人それに秀さんといふ大姉様の子と四人突然我家へいらしつた。靜だつた家の中は一時に賑はしくなつた。私はすぐお歸りなさる事と思つてゐたらずつと當家にお止りなさるのであつた。

お姑様は至つて昔し堅氣な氣難かしい方なれどそれでも我子の様におもつてゐて下さるし、大姉様は陰になり日向になり私をかばつて下さる。あゝこれだけならば私はどんなに嬉しからう。たゞ小姉様は何かと私のする事一々御氣に召さずお姑様へおつげ口、夫が私の氣苦勞を察してやさしくして下さるのが、あの小姉様にはお氣に入らず、夫の御留守になるときつと、

「ネーお母様、義彦さんはお三枝さんでなくてはいけないとさ」

と仰やる、あゝ毎日〳〵一口こう云はれて私は身の細り行くを覺えました。

或日曜日お姉様達は中座へ行かうと仰る、今日こそは御留守居して終日夫と昔の樂たのしく暮さうとおもつてると、

「お三枝さんもいらしやいな」

とお姉様の仰せ、

「あの私はお留守居を致しますわ」

「いらつしやいよ」

と大姉様のおすゝめ、
「私、あの頭痛が致しますの」
「あゝそりやいけないわ芝居など見ると尚いけないわ



と大姉様はおやさしい。すると小姉様、
「お三枝さんがゆかなきやあ私もやめませう」
あゝ仕方がないわ、行かねばならぬ、
それぢや、お土産をどつさり買つて來ますからお留守居をたのみますよ」
「では私も私もお供致しますわ」
急いで仕度をして出かける、

「ネーお三枝さんお糸さんはね（小姉様の名）我儘だからいろ〳〵つらくあたるでせう、けれど堪へて頂戴よ。あの人は嫁入つて小供を置き去りにした位の人ですもの情も何も分らないの、私はついてる限り、義彦さんがついてる限りお三枝さんに指一本さゝしはしませんよ。

とは道々大姉様のお言葉、あゝ嬉しい〳〵この大姉様がなかつたら私はどんなにつらからう、うれしいわうれしいわ私は大姉様のお情深さに嬉し涙をこぼした。

×

丁度二年はこの樣に夫と大姉様とを力にたのみ暮して又も櫻の散りそむる四月の末、小姉様とお姑様とが私をお呼びなさる、

「お三枝さん大變今日は元氣ですね」と小姉様、

「まあそんなに見えまして？」

「今日は日曜ですもの、ねーお母様」

私はハツとおもつて、

「あの御用で御座いまして？」

「いゝえね、あなたはこゝへきてから何年？　五年になりませう、それに小供が出來ないのね」

「糸もさう思ひかい。私だつて早く義彦さんの子供を見たいとそればかしを樂しんでるんだよ、お三枝さん、しつかりして早く子供を生んでおくれ」

「お三枝さんお嫁をもらふのは何の爲？　小供を生ませて家の血統をたやさぬ爲でせうそれに子供も出來ないお嫁さんならいらないわね、オホ……女大學にも第一子なき女は去るべしつてね」

あゝ小姉様もあんまりな、これだもの私は子供がほしいとあらゆる神樣に願つてるのに天は私に子を與へて下さらぬ。生めと云つたつて生まれはしない。それを生めとは御無理ですわ。私もう口惜しくつて〳〵おもはず涙が出ました、

「あらお三枝さんないてるのいやな人、これだもの子供などとてもだめよ」

あゝほんとに幸なき私、外の事ならどんなつらい事

でも忍びもしよう、けれどこれはかりは、人の力でどうとも致し方がない物を。あゝどうぞ神様子供を與へて下さいませ・・・

×

明る夕、夫に御手紙が來たのでそれをもつて行かうと書齋まで來るとお姑様との御話し聲。何ともなしにきいてると夫の聲。

子供がないから離別せよと仰るんですな、お母様、小供は他家からいくらでももらへます、いよ〳〵なければ長谷川（造幣局長）さんだつて子供をもらつてらつしやるじやありませんか、家名はいくらでもつがせます、何の罪もない三枝を子供がないからとはそれは昔の事です、お母様私にはどうしてもそんな事は出來ないです」

「そりや三枝はねあんな優しいしほらしい子は又とないんですよ、私にだつてついに一度我儘をした事はなし、それは〳〵おしいのです、けれどね他家から子供をもらつたらもうお前の子ではないのです」

「そりや勿論私の子とはちがふです、けれど私の子とすればいゝのです」

「それはいけませんといふに」

「エ・お母様もあんまりです、母親の言葉にそむいてはすまぬけれど私が今もいふ通り長谷川さんだつて・・・・」

「いけないよ、いけないよ、私にやどうしても他家の子供をもらうなんて、そんな事出來ないよ」

「はゝ・・・・」

わたしは立きゝして、心の中、すみませぬ、すみませぬ、あゝすみませぬ、それ程までに私をかばつて下さるお心、死んでも忘れは致しませぬあゝ何故私に子供が出來ないか。私ばかりの不幸とのみおもひしに、夫の不幸、家の爲ときいては一日もおられませぬ子なき女は去るべしと小姉様が昨日も申された、あゝ私は去ります・・・わ、

×

あくる夕、夫は一人書斎で考へ事をしてゐましたから私はそつとはいつて、

「旦那様！」

夫は返事もせず泣いてました目には涙が一ぱい。

私も悲しくつてさめ〴〵と泣きました。

「お前歸るか？」

「あゝ……私……」

「三枝歸るならば今夜歸つておくれ、今夜歸つてくれたら……お母様にも小姉様にも云ひたい事云つてしまふ」

「あなた……私は去られても……去られても……」

「あゝ三枝、お前の事は死んでも忘れん、何も天命とはあきらめ乍らね……母だもの姉だもの、わしは子に生れた、弟に生れた、是非もない……」

私は夫のそばに泣きふしてゐました、

「でもお互にね身を大切にしやうね」

いつの間にかお母様が來てらつしやる、

「あ、お母様三枝は御言葉通り只今歸ります、どうか實家の方へ迎ひを出して下さい」

「今夜？　まあ急だねー、今夜かい？　まあいゝさ、何も私は今夜にとはいはぬ。」

×

私は實家の母につれられてこの夜この家を去りました夫と大姉様は門口まで送つて下さいました、お姑様も小姉様も今日ばかしは泣いて下さいました清やは私にすがつてはなれません、

「三枝きをつけておゆき、三枝、あゝ三枝どうしても歸るか、きをつけておゆきよ」

「三枝さん私は時々たづねて上げますよ」

「あなたお大切に遊ばして……お姉様もおいとひ遊ばして……」

丁度その夜は満月でした、かへり見れば夫と大姉様はハンカチーフを目にあてゝゐる黄櫻の下に月の光を

あひ乍らいつまでも〳〵見送つてゐて下さいました。

英語を敎はりに貢さん處へ行つてた秀さん、いつの間にか走つてきて、

「伯母樣どこへゆくか？　伯母樣よう…‥」

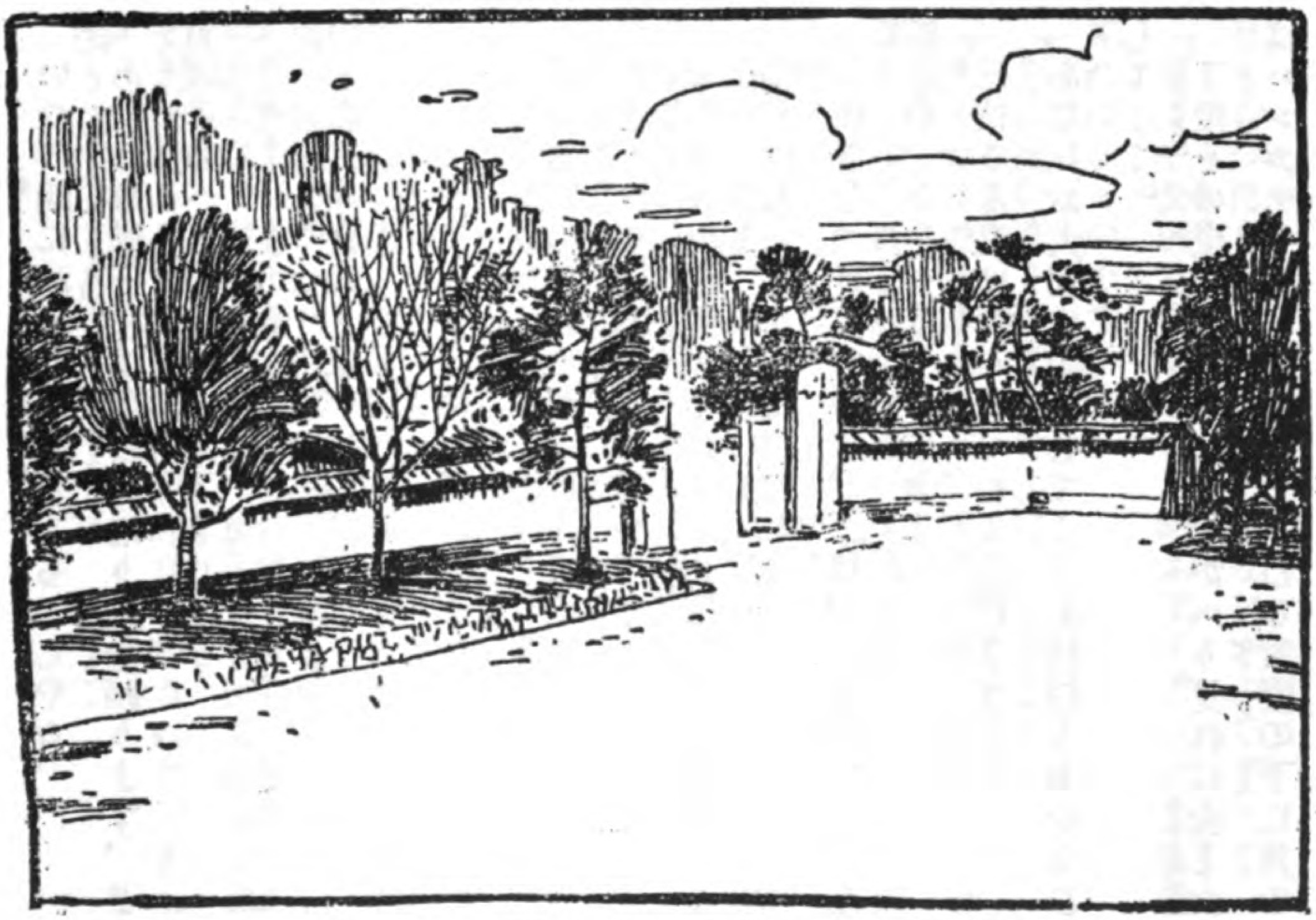
つて泣いてくれました。

あゝ私は溝口家を去られました。

×

こゝへ歸つてもう二年その間私は一時も夫を忘れは致しません、歸つた時は今迄の苦勞と夫をおもう一念に長ひ間病氣を致しました、秀さんと大姉樣は今も時々尋ねて下さいます。

花は年々同じ樣に美くしと人の評にきくけれど、なつかしい夫は去年の春……私は寂しい。



本郷切通し岩崎邸

斯の如くして彼等二人は親族より見放されたり

葉越の月

塵の浮世をさけて父の故郷の北山郷に暫時浩然の氣を養ふ綠樹の蔭、流水淸き細谷川、向へば優しき人の心、百年の壽命も延びん心地せり、或日京都の從兄より一通の信書着しぬ、手にふるだに心地よからぬものなれど如何なる事や書きたりけんと開き見れば相も變らぬ柔弱至極。

此度暑さをさけて北山に行れし由風の便りに聞き、なつかしさに絕えで一筆申遣候、吾も一時の心の迷ひに其許には濟まぬ事に相成申候、併し吾は決して其許を捨てるやうな薄情の行爲は取らず、されど其許は吾を恨み居らん吾は其許を歸國させたるを悔ゆ兄上も義姉上も其許の事のみ語り居れり、今一度其處より直ちに上京せられよ叔父叔母樣へは當方よりよく申譯すべければ心おきなく上京せよ旅費は當方より送らん何處の局當てに送りて宜しきや、至急報せられよ。さらば。

秀　雄

え、處女の神聖なる愛情を弄びながら又再び妾を僞らんとするか、否僞りにあらざるべし、今迄の行爲の非を悟りて悔ひし故か、たとへ非を悔ひしとて妾は一旦思絕えし男子に再び情を仰がん心はみじんもあらずまして旅費など受くべきや。

御書面拜見、御親切の程かたじけなく候されど妓兒妾は　君にさる御芳情を受くべき理由無之候、兩親に告げず直ちに上京せよとの仰せに候へ共、妾に於てはさる不德義なる行爲は出來不申候　此段御返事申上候。かしこ。

照　代

秀　雄　樣

此一通を限りとして文の道はとだえぬ。

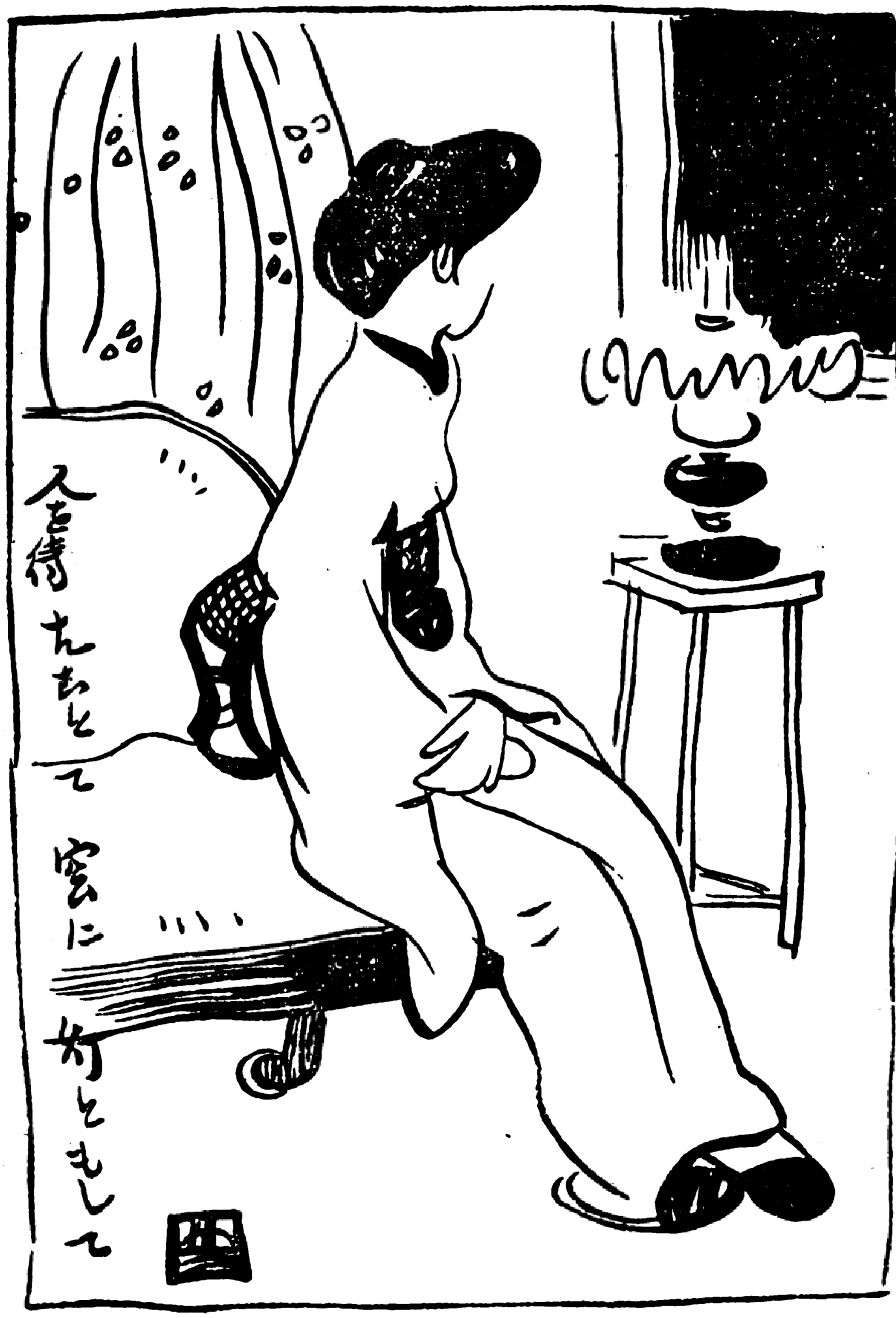
そもそもこの從兄といふは京都大學出身の新聘學士

容貌風采申分のなき樣子、田舍育ちの妾風情とは釣合ぬ縁、されど許婚と云ふ名にかられて學士の妻と云ふだけの資格をそなへよと、十六歳の三月に京都なる叔父の許に引取られ、高等女學校へ通學の身となりしも夢なれや、あゝはかなき夢なれや、叔父は優しく兩親も及ばぬ御養育、從兄は親切に照ちやん〳〵と、早く卒業してくれ僕は待かねる、未來の妻だの、可憐の少女だの、嬉しい言葉のありたけを聞かされ、何處へ行、にも一緒に行う、博物館へ行う寄席へ行うと妹の如くいたわつて、都會の塵を吸ふた女と田園の清水を吞んだ處女とは、まるで泥水と淸水だねなど、生れて初めて聞かされた蜜の如き言葉、身をさす如き情けには百年の命も惜千萬年の壽をも何かはと喜ひもせり。

浮世になれねば人に表裏のあるものとはゆめ悟りもせず、隨つて未來の事など思ひみし事もなく、又苦と云ふ事も知らざりき、今にして思へば一生の中の最も樂く美しき時なりしなり。

叔父君の妾を愛しみ給ひし事は秀雄樣にもおとらざりき、されど秀雄樣は、實に其情紙よりも薄きお方なりし、一時は蝶よ花よと愛でられし身にも漸く秋風立ち初めしか、妾には變らぬ行爲の裏にはや他人を愛するやうになりしと見え、怪しからぬ言葉を聞くやうになりぬ、女を弄ぶは下賤野郎とばかり思ひ居りしを「教育があつても之ばかりはあてになりませんよ、貴孃はおいたはしい世にお馴れなさらぬから、だまされていらつしやる、秀雄樣は貴孃を寄宿舍へ投込んで自然に忘れさせやうとなさるのですよ、氣を慥にお持ちなさい今の男子は皆之れですよ」と或友人から聞いた時、よもや〳〵と思ひしがはふり落る淚は止むべくもあらざりき、されど輕々ると他人の言葉を信ずべきにあらず、兎に角男の眞意を聞んと或日この事を聞へば、「何、人の口と云ふものは何を云ふやら、そんな事氣にせぬものぢや、併し人の運命と云ふものは如何樣になるやら分つたものでない、マア夫婦になると思ふて勉強して居るさ。」

何と云ふ水臭ひ言葉であらう、之が許婚としての從


人を待たぬとて
窓に
灯ともして

兄の言か、妾は之に於て斷然意を決した、實に男心と秋の空とはよく云ふたもの、僅か一年たつかたゝぬに、此冷やかなお言葉は初戀の蜜に醉され夢ともつかず幻とも分ぬ間に鐵拳の頭上に、一打をあたへられたる苦痛、其又矢先きへ

「私はお前の夫にはちと過ぎる。」

「お前のお父さんは腰ぬけだね。」と侮辱極る言葉の連發、其當時はしなくも讀みしは眉山作の「奧樣」、噫世にかゝる憂きめを見るものは自一人にはあらぬか、高家の奧樣方も上部は立派に美しく見ゆれど、其裏には親にも語られぬ苦痛あるものと、妾は深よく斷念せりそは妾の愛情の未だ充分に發達し居らざりし故とも思へり、さるにても妾は最早此處に要なき身なり、居るも汚らはし妾は再び此京都は省みじと心に誓ひて、叔父母の止むるをも聞かず歸國せり、有難きは父上母樣

「お前もあゝいふ處に居ては生涯苦痛であらうお前には良い養子を取るのだ。」

とていたわられし、父君母上の御厚恩は、何にたとふるものあらじとつく〴〵思ひぬ。

幸ひ滯在中なる妻の叔父に乞ふて北山郷に伴はれ心のつかれを此浮世はなれし綠蔭清流の地に癒さんとしたるなりき、かくて妾は最早人妻とはなるまじ嫁には行くまじと思ひしが父母はうら若き身にて獨り過されるものにあらず、世に夫ほど有難いものはない、あゝいふ人ばかりが夫でもあるまい、と云はれたれば、夫を持たぬとは云ひませぬ其かはり選擇は自分にまかせて下されと乞ひぬ、五年は夢とすぎ父君も身まかり給ひぬ、元より豊ならぬ家なれば妾は或病院の看護婦となりぬ、あゝこれ天か命か、

何れの女子、殆どあらゆる女子に虚榮心のなきものは一人もあらざるべし、妾とても女子の端しくれ人並に高位を望めりし、されど其第一階段にてもろくも落ちたりし後は此心を殆ど捨てたり、名譽何か、權力何か、ましてや金や容姿においてをや、眞實のなき結婚は苦痛の種ばかりなり斷じて取らじ、其代り眞情さへあらばたとへ其日暮しの日傭にても、よしや奧山住ひ

の山賤にてもいとはじと思ひき、されど〳〵親元はなれし女子の身は實に危きものなりき、岩石の下の鷄卵に異ならず。

其頃委員の中に同情すべき青年姓を高山といふあり心緒の一端に觸れて危ふく戀に陷らんとせり、されど前途多望の青年なり、これを如何にすべき、あゝおそろしきは戀なり、こよひ我が心を告げて深く思をたゝんと室をおとなへば、いつもに變らぬ笑顔にこもる優しさ、「高山樣實に妾が惡う御座いました、どうしたはづみか意氣投合と云ふ樣な‥‥ですがお互に愼まねばならぬ時、どうせ末遂げられる身ではありませんから。」

「……………。」

「之までの事は水に流して。」

「何、どうしやうと云ふのですか。」

「まあおこらないで御考へ遊ばせ結ばれる樣な緣ではありますまい、ですから今迄の事は夢と思ふて、ふッ之からは兄妹のおつもりで御交際をして下さいませ。」

「照代さん貴孃はそ、そんなお心ですか、そんな事を云はないでも少しまつて下さい其うちには兩親の許容を得ますから。」

「でも到底だめと思ひますから。」

「もう少しまつて下さいもうかうなつてから何うなるものですか、私はそんな輕薄な戀はしません、貴孃はさう容易に捨てられるのですか。」

「イヽエ妾はつひ迷ふて居りました、よく考へて見ると貴方も之れから御勉强なさらねばならぬ大事の御身ですし。」

「何も勉强すればよいのではありませんか。」

「どうか斷念して下さい。」

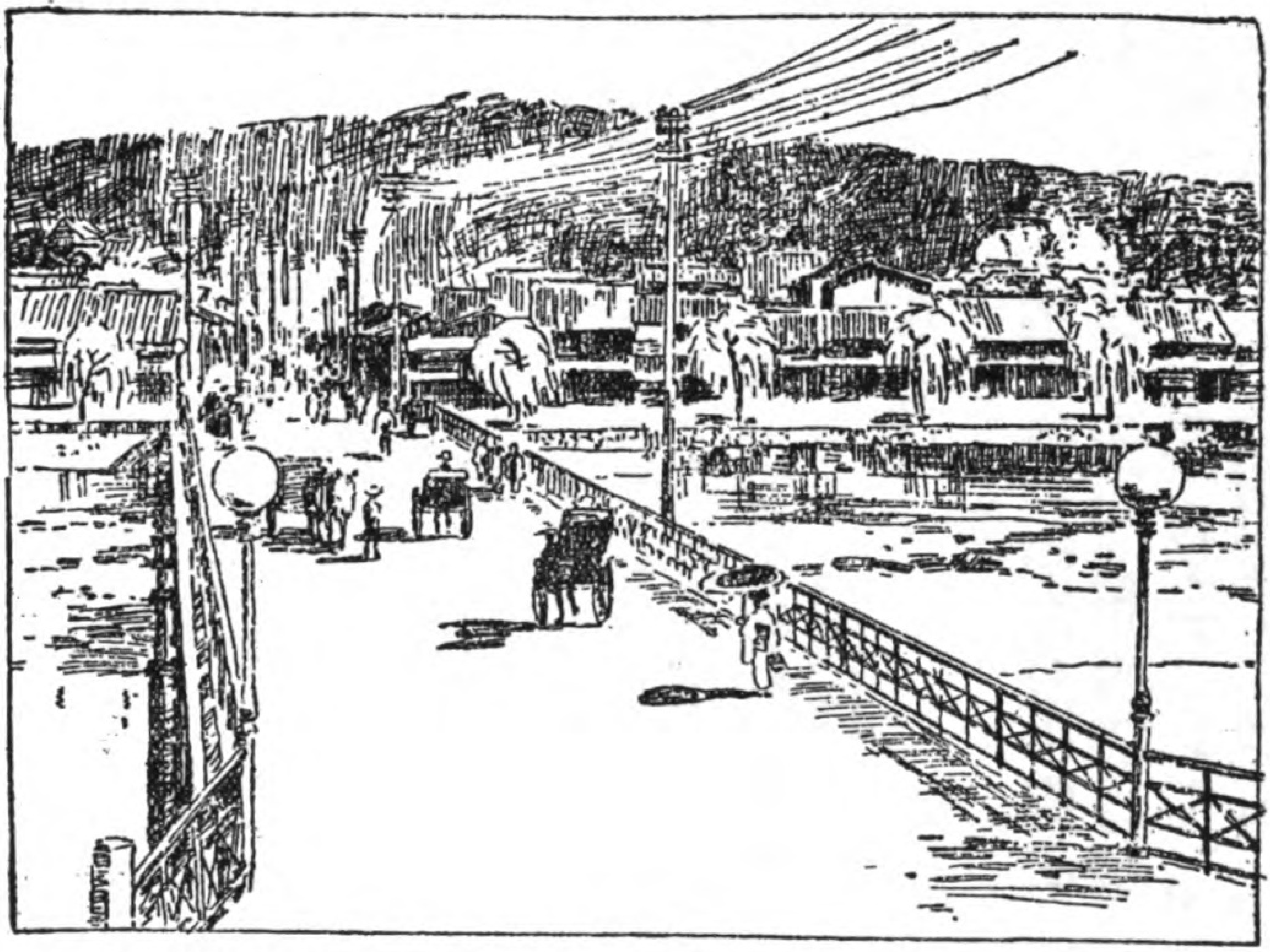
氣强く云ひし言葉や氣に障りけん。

「宜しい斷念します、そんなら今迄になぜあんな優しい事をしてくれた、薄、薄情な。」

無限の恨みやこもりけん淚をハラ〳〵と膝に落し一旦は心を決せし身も往事を思ひ起し女の情のもろさは、

「あゝ高山樣偶りで御座いますお許し下さいませ。」

京都四條の大橋



「いゝえ僕は貴孃の良人となる可き資格のないものですから斷念します。」

「僞りで御座いますよ御免なさい。」

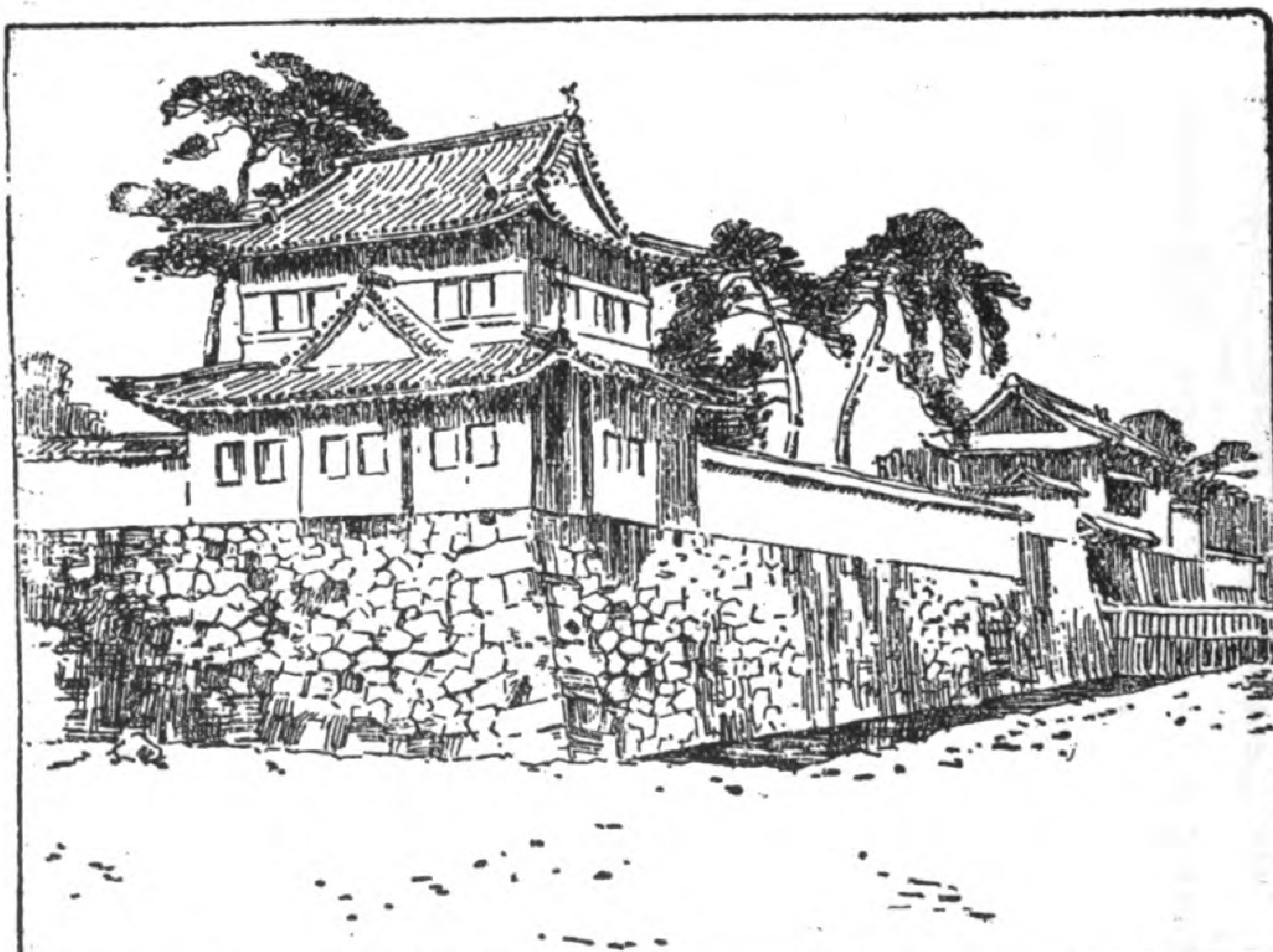
覺めんとせし心は再び迷ひ出しぬ。

昔、我戀の破れし時も如何に苦痛なりしか、今又此青年の初戀をむざ〳〵折らば如何なる自暴自棄に陷らんもしれず、それも傷ましく、此塵に汚れぬ心は妾に取りて何も不足はなけれども未だ一個人にならぬ者を此人が理想ですから、結婚させて下さいとは云はれもせず、よしや云ひしとて人々の批難を受けるは知れた事、親姉妹への手前世間への義理、如何にして、之を一個人に仕上たる後ならではと思ひしも先づ親々の許容を得ねば、只いたづら者と誹られんも口惜し！、嗚呼不覺、妾は何故かゝる戀をしたるぞ、さらばとて妾は之を捨つるが如き心强き事はなし得ず、未來は兎に角今此の情に對するむくいとして無情なる仕打がなさるべきか、

されば高山樣御願が御座ります、妾は秘密と云ふ事

は大嫌ひで御座います、秘密ある身ほど苦しいものはありませぬ、只二人の誓約だけでは世間を憚らねばなりませぬ、人々に淫者と誹られねばなりませぬから人に憚らぬ様に御兩親様の御許しが受たう御座りますそして共に上京して貴方の成業を及ばず乍ら助けたいと思ひますから、お願のお手紙を出して下さい。

さすがにためらう高山様を説きたてゝ二人の手紙を同封して許容を乞ふべく送りしが其返書は、實に意外なりき。「抑も婚約と云ふ事は人間一生の大事なり、輕擧にすべきものにあらず、然るを汝等の行爲餘りに輕々しきに過ぎずや、汝は未だ一個人に非ず笈を負て都に上り修業せねばならぬ身なり、汝が一定の地位を得妻子を養育すべき時機に達する迄にはまだ餘程の年月を要すべし、其間に婦人は可惜花盛の時代をむなしく過さんのみならず、其業も成就すれば好結果を得んも、萬一失敗に終らば如何、然雖一旦誓約致したる事なれば今一度熟考の上、其決心の程を申越されよ其上に於て取るべき手段もあり、」とて附言には、茲に血



京都二條の離宮

統第二に精神第三に素行等結婚に就ては注意すべき事なりと、誠に御尤もなる仰せにて又寛大なる心根なり、重き叱りを受けんかと思ひしに御情けある御言葉に接し實に赤面の至り、仰の通り私共の婚約は輕擧に失し誠に申譯なく候へ共、一旦誓約致したる上は死すとも此誓は破るまじく妾は生涯一身を捧げて盡さむ心、されど御兩親樣の思召におまかせ申上んと返しぬ、兩親はそれほどまでの精神ならばとて遂にゆるされて兩人は東の都に上りぬ。

高山樣は某醫學校に通ひ妾は看護婦會に入りて幾分の補助をなしつゝありしも、不幸は妾病魔のおそう處となり、一旦歸國せよとの切なる母よりの言葉に止を得ず念を後に殘して、必ず惡しき友に交りて身を過つて下さるなと盡きぬ名殘を新橋のプラットホームにそしみて、二日後は早や二百里をへだてたる東と西に心を通はせぬ。

人は皆苦學々々と云はるれどそはとても普通人には出來まじき業なり、高山樣とても普通人なり學資の思樣にならねば一時は或商會に入りしも、之又病にをかされ歸國せんにも旅費はなしとの書面に、妾は衣を賣て送金しぬ、かくて妾の病と思ひしは意外の姙娠なりしなり、いまだ表向きに披露なき身なれば從姉に計りて人々に贊を求めぬ、呆れたる人もそしりたる人もありしが漸々乍ら許し呉れぬ、中に義兄のみは如何にしても許さず如何に詫びても己れは知らぬとのみ、さればかくてあるべきにあらねば是非一度彼地へ私を行かせ給はれと願ひしかど返辭だになし、運命ならば是非なけれど打捨ておかるべき事ならねば心はあせれど思ふにまかせず、如何にせん如何にせんと煩悶の中に早や二ケ月を過ぎぬ、一日〳〵と苦痛は增しぬ、今は止を得ず家出せんと思立ち、衣更の衣類を小包みにて送りおき殘りは賣拂ひて旅費となし時をまちぬ、されどさすがにさる事もできざりし、孝の爲めに恥かしや愚や如何でかゝる心にはなりしぞ前には許婚の夫に對してさる不德義なる行爲はする能はずとはねつけし潔さに反して今又其行爲をあへてせんとせり。

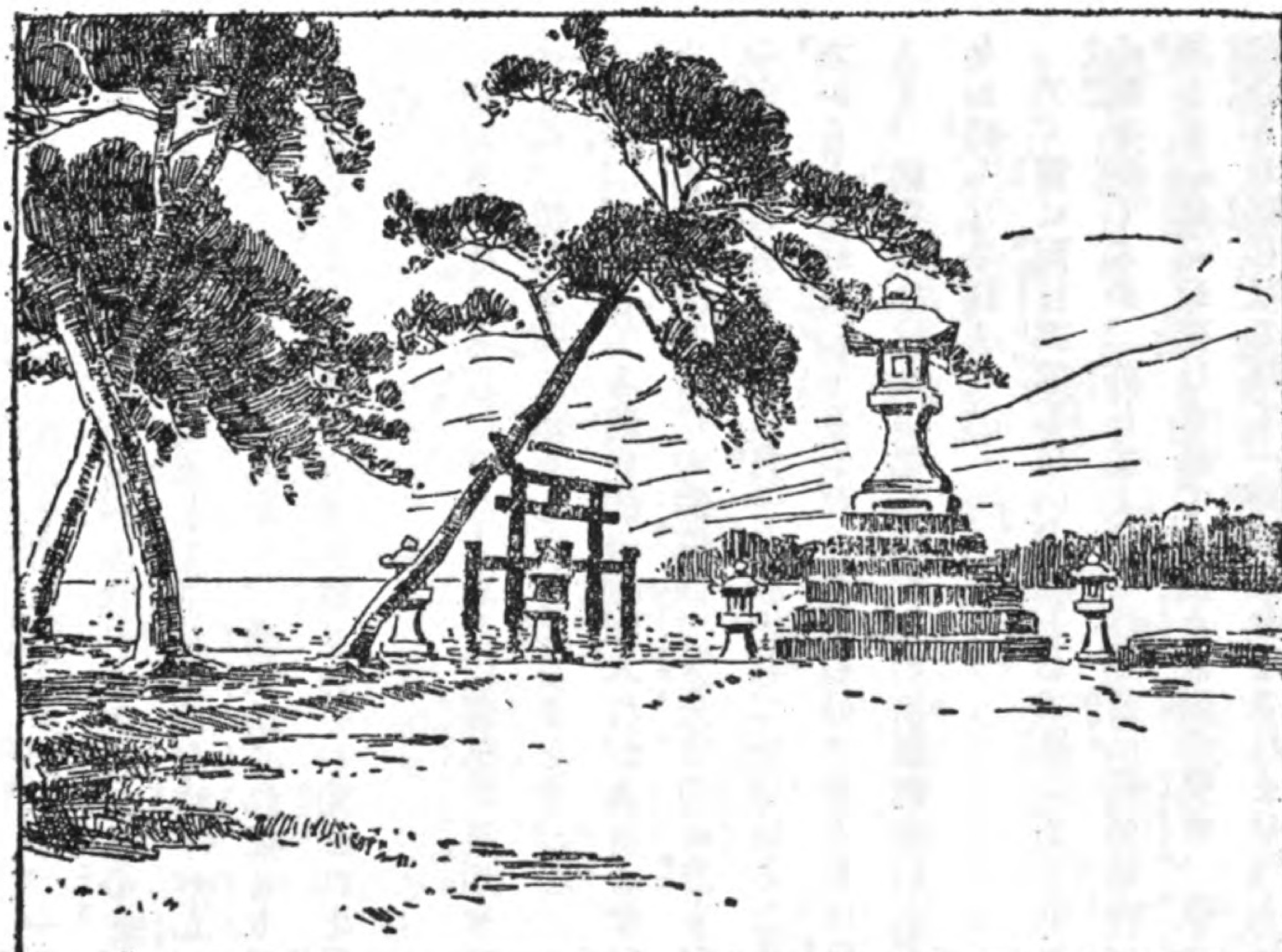
秀雄樣を斷念するに左程苦痛を感ぜざりしはまだ妾の愛情の充分發達せざりし爲ならんも、彼と之とは雲と壑なり、彼は鬱氣偏性なり一時は人目に立つ程に愛せらるれども、又他に珍らしきを見れば心機一轉するの人なり、されば妾が心も解けざりしなり、されど高山樣は我理想と云ふにはあらぬも妾の爲めに凡てを捨て高きを見ても美しきを見ても、更に〳〵省みざりき、眞に妾を愛しくれたれば妾も之に對するむくいなくてや、されどまゝならず、最早絶體絶命に至らば身を殺して申譯せん、それも母上や姉妹には申譯たゝねど、殊に母上には二十二年の月日御心配ばかりをかけ萬分一の御報恩もせずして、死後は又世間の批難を受給はん事妾死にもまさりて苦しくおはさん、されど何事も前世の約束事と思召し御許し下され、生れ變りて御孝養を盡しまゐらせん程にと、意を決して遺書三通を認め、一通は母に一通は叔父に高山樣へは最早御目にかゝる事もかなうまじ、如何に義兄に許容を乞へども聞入れられず、さらばとて此義兄そのけものに結婚はならずとて君を捨つる事は元より出來ず、一旦は家出せんと思ひて着更を送りたれど如何にも心とがめてさる事もならず、唯死して、お詫びを申すべし、其衣は遺物とも見て給はれかし、此後はこれにこりて過ちを爲し給ふな、何卒立身出世をなし給はれと云遺りぬ。

嗚我身の終りも近づきぬと思へば悲愁の涙頬をつたはりぬ、折しも側に來りし妹の人なきを幸、

「姉樣、どうしても義兄樣の御聞入れがありませぬが止めて止まらぬあなたの御氣性、又先方のお方もお氣の毒に存じます、兎に角一旦家出して下さいそして先方から人をお遣し下さつたら又話の付けやうも御座ります、旅費がなければこゝにお金が拾圓御座いますこれをお持ちなされませ。」

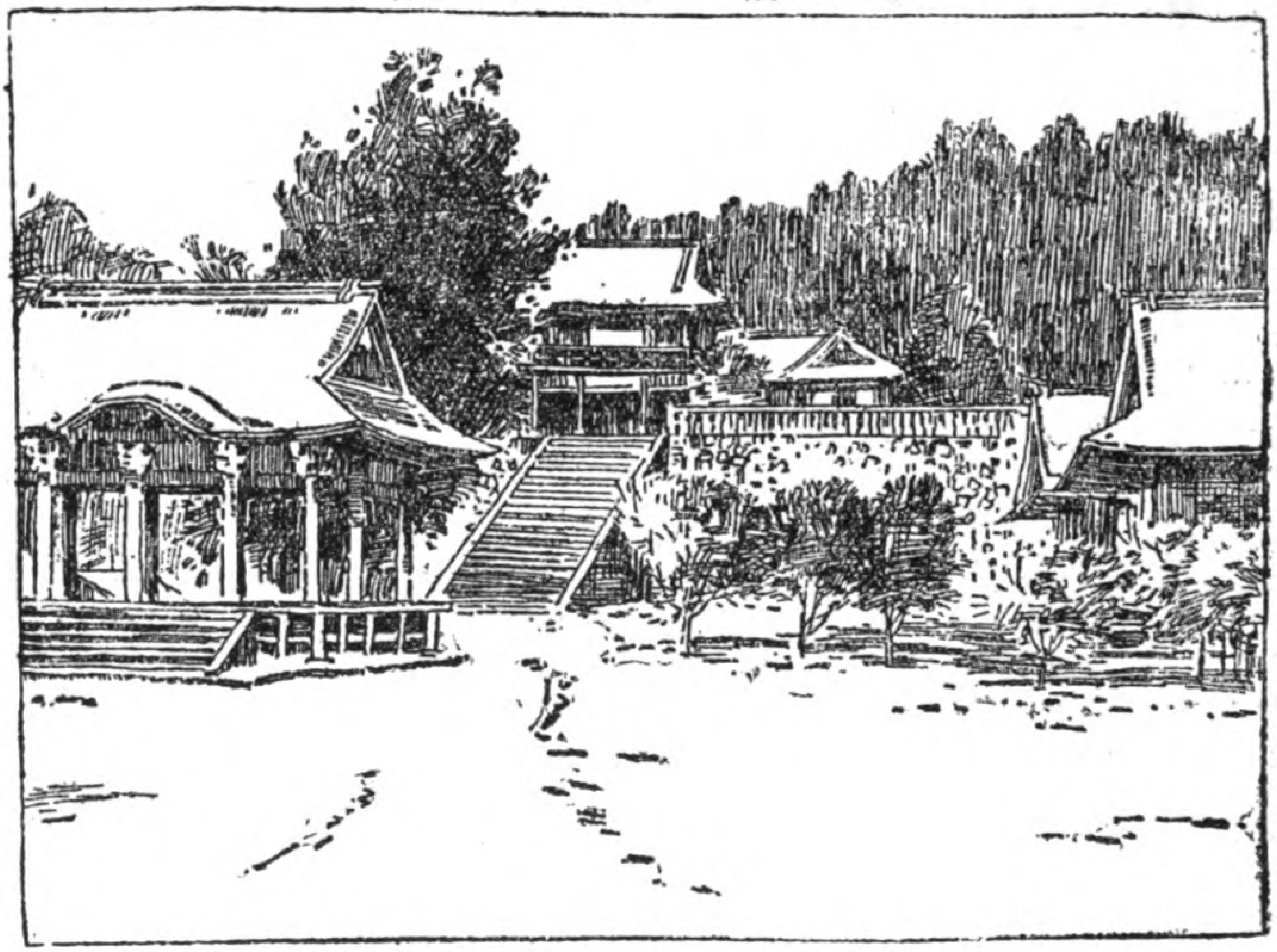
ア、實に面目次第もない、姉として妹にまでかゝる心配をかくるか、許してよ、されど妾は死を覺悟して居りました、「お死なされては後々世間の笑者、母上の御心もお察しなされて一時家出をなされませ」、と妹の

情に風呂敷包一つを抱へて裏より忍び出ぬ、母樣は後より追かけ給ふて、あゝ如何に貧乏しても父上が在さば門出もしてやるべきに義理ある中は是非もない、これから二十里と云へば隨分遠い、涼しい處は成可歩み暑い處は車で行け、氣を付て身を大切にせよ、そこらまで送りてやりたけれど人目にたちては惡しからん程に、見送る母を送らるゝ身も共に涙の切なき胸を風呂敷包みに押へ、人目なき處をえらみて行きぬ、さるにても肉身の有難さ思へば濟まぬ事ばかり、妾ばかりはなせかくも不孝なるぞ、道々も涙はたえず人なき處にては聲を出して泣きぬ、さらでも姙娠の身に長途の疲勞、歩まんとすれど一歩も引けずなり、止むなく車をやとひて次の村に到りし時も顏知らぬ宿に泊りて夜半の汽船に乘りて高山樣の許にゆきぬ、豫て打電しおきたれば高山樣は重き枕をはねて途中まで迎へに參られ、やつれたる妾の手を握り、「照さんもう再び逢れまいかと思ふて僕はもう覺悟して居た處だ、今しがた電報が來たから驅けて來た、義兄さんがゆるしてくれた



嚴島の海岸

鎌倉八幡宮



のですか」頭から足の先まで見上げ見下し、「やせたネー」「貴方もネ」「まあ兎も角歩みつゝ話さう、併し直に家へ行く譯にいかないから僕の姉さんの嫁入つて居る家へ行て話の付くまで居る事にしやう」今迄の淋しさ苦しさ辛さに引かへて力を得たる嬉しさ、

斯くて二人は涙の中に高山様の家よりは一里許り手前なる姉様の家につきぬ暫時此處に止まり何かと手傳ひ爲し、又一方には人を遣して、種々交渉をさせたりしもむなしく歸りぬ、されば何時話の付くとも分らぬに、さして豐ならねば自づと家内に風波は起りぬ、せめて賃仕事なりともしてたしにせんと思ひしに、惡しき時は惡しき事の重なるもの、布を裁ちそこないてかへりて金の入る事をなしぬ、止むなく國の母様に送金を乞ひしも母様も妾故に少からぬ金も入りたれば、容易にとゝのはでかまてども〳〵送り來らず、此家の夫婦は次第に心うとく遂に姉様より高山様に左の文を送られぬ。

汝等故に我家は窮境に陥りて困難せり、夫は小言絶

えず又汝等一厘も食費を拂はざるは如何なる故ぞ、汝等程不孝なる者は世にあらじ。何時迄親や姉に迷惑をかけるぞ、之より直ぐ覺悟すべし、汝等は詐欺なり、汝來らずとも金は送れよ、送れなくば借りてなりとも送れ、何時まで女を我家へ置くつもりぞ、との意なり、高山樣は此端書を封じ込めて妾に送りかゝる手紙をよこしたれど案じるに及ばず、併し兎に角金拾圓許り調して姉に與へよ、僕の衣と君の衣とを合せて賣拂ひそして一時を忍べと云來りぬ、されど西を向きても東を向ても知らぬ人ばかり、何處へ此衣を持行きてよきやら只衣を出したり入たりとほうにくれて姉上に伺へば、とても何時とも分らぬ話しなれば一時歸宅せられよと、そつけもなく、若き男子の來るとき、之お前ら決して女に迷ふなよ、難儀するぞ、あたら若い盛りを馬鹿らしいと、それを聞く無念さ、一年前上京の際立寄りし時はやれお越しなされたか、緣とは云乍らかゝる立派な嫁を持つ弟は仕合物ぢや、かいしよ者ぢやと甘つたるい言葉をならべておいて、淺猿しきは人の心、實に落ぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥はしらるゝものぞかし。

何時までも御心配かけて濟まねども、當家とて有福な家ではなし、妾故に困らるゝ事故何卒妾が有丈けの衣を金にかへて送つて下されと母樣へ手紙出せども返事來らず、こゝも又針の莚劍の山なり今更歸宅などゝは思もよらず。又妾故に苦しみ給ふ高山樣のお顔を立ずにておくべきか、さり乍ら妾も弱き女なり、今日は海に投じて死なんか明日は何處で果てなんかと思ひし事も度々なりし。

神や捨てざりけん佛や導き給ひけん、高山樣の御兩親より當方へ來よとの御慈仁深き仰せのもとに高山樣は迎ひに參られ、又母樣よりも送金ありたればそれにて食費を拂ひて立出ぬ、御慈深き兩親樣は我娘の如くいつくしみ給ひぬ。こゝよりも、實家へ種々交渉せられしも梨のつぶての音沙汰もし、其秋の事一子を生落したりしが僅か數十日にして逝ぬ嗚呼彼は、運拙くして妾が流離の間に宿り人とならずして空く逝ぬる。

手輕に出來る子供の洋服

裁縫專門女子共立會　松江美佐子

△八歳女兒三ツヒダ上着

前々號に、海水着を記載いたしました處、各年齢によつて形紙の御依頼が澤山にございました、其の内で、七八歳のが最も多うございましたから、本號には、此年齢の寸法を以て記す事に致しました、さて此形は、男女兒兩方に用ふる事が出來ます、最も男兒には六歳以上は用ひませんが女子は、十二歳位まで用ふる事が出來るだけの相違です、此形は、出來上り圖にある通り、至つて飾等も少なく、從つて外出着と云ふより平常着に至極適當な形でございます、地質は、春、秋、夏にても涼しい時は小倉など尤も適當でございます、眞夏は綸、絹寒冷紗、麻、色合は、小倉ならば白、霜ふり、綸ならば、白、水色、鴇色、クリーム色等、冬ならば、ネルカシミヤ、セル、ラシヤの類を、色は、紺、花色、鳶色、紅、ねづみ色を用ひます、用布は八歳兒のために、二尺巾、七尺五寸、これより二歳につき、五六寸づゝ加減をいたします。

△形紙の拵へ方

形紙を拵へるには、先づ左の印の說明に注意をしなければなりません。

一 ●●●　此の遠く三ッの穴は、地の目たての印

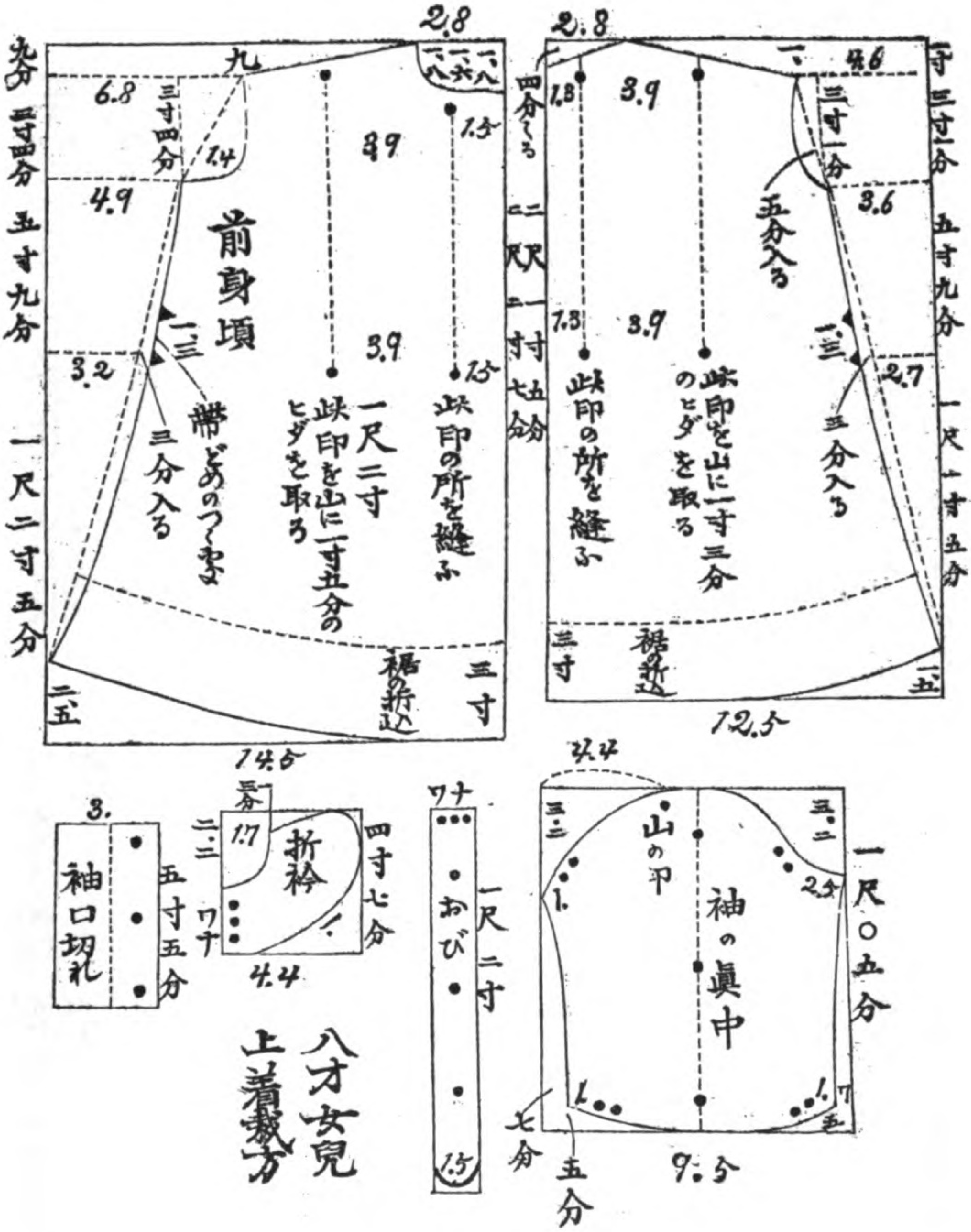
一 ●●●　近く三ッあるのは、ワナの印

一 ●●　かやうに二ッ穴のあるのはギャダの印

一 ●　又一ッづゝ各所にあるのは、ヒダとか山とかの印

一 V　切込は合印です

右印の内、第一、と第二、即ち、地の目縦の印と、ワナの印は、切れを裁つまで必要な印で、他の印、即ちギャダ、ヒダ、合印等は、縫ふ爲めに必要な印でござ



八才女兒上着裁方

いますこれが解りましたなら、形紙の拵へ方にかゝります、先づ上圖の如く、何れも、寸法通り四角な形を拵へ、所々を圓く或は斜などに裁たぬ内に、眞直の所へ地の目縦の印、及びワナの印をつけて置きます。夫れより各所の形を寸法

通りに拵へるのでございますが總て圖取をつける處は、圖に倣ひて、無理のないやうに自然に致します、かくして裁ち終りましたなら、縫方に必要な印、即ち、袖にギャダの印、山の印、前後身頃に、ヒダの印、帶どめのつく印等を落ちのないやうに、悉く穴をあけます。

△切地に形紙を宛て裁つ心得

左の通り、二尺巾の切れを二ッ折として、其ワナの方へ、先づ前後身頃の形紙の、ワナの印のある所を宛てて針をうち巾の足らぬ所は後で足す事にして、他を形紙通りに裁ち切ります。

夫れより、袖の地の目たての印を、切れの地の目の眞直の處に宛て、針をうつて裁ちます、次に折衿を切れのワナの方へ、ワナの印のある所を宛てゝ裁ち、夫れより、帶、袖口切れ、及び前後身頃の足し切れを、何れも地の目正しく裁ちます、但し此時注意を要しますのは、はぎの切れに前後共四分ずゝの縫代をつけて裁たねばなりません。

かやうにして形紙通りに裁ち終りましたなら、針を拔かぬ内に、チョーク或は白墨で各所の印（但し地の目たてと、ワナの印の二ッは除き）を悉く、切れに移して置きます、夫れより形紙を取りのけ今のチョークで付けた印を下の切れにまで通るやう白糸二條で叉印をつけます。

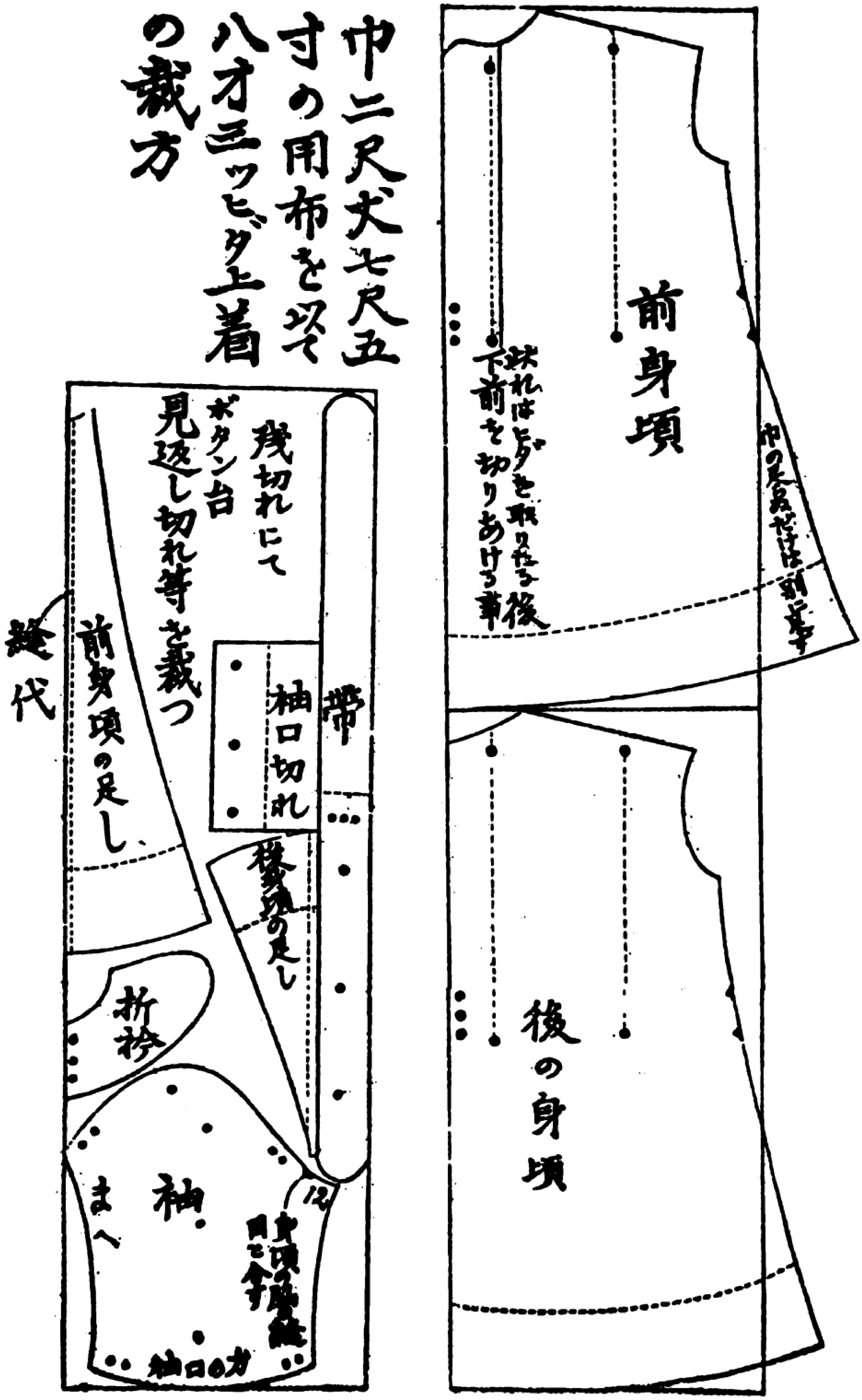
尚前後の足し切れは、二分の縫代ではぎ、こてにて割り形紙通り正しく切つて置きます。

尚この身頃の巾を足すのに、兩脇ではがずに、右か左のヒダので、はぐ事もあります、巾の例へば一尺八寸巾の時などには、はぎがあまり眞中へより過ぎて目に立ちますから、はぎ目がヒダの上に出ないやうに注意をして、目立ゝぬやうに、何處でゝもはいで宜しふございます。

△縫方順序

先づ第一に、袖の袖口の方に印から印まで、ギャダ

巾二尺丈七尺五寸の用布を以て八才三ツヒダ上着の裁方



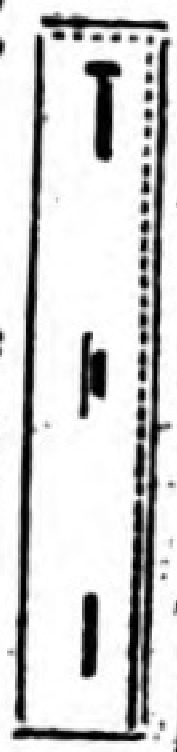
縫ひをなし、袖口切れよりも二三分長いだけにちゞめ前端へ一分づゝ殘して、此れと縫ひ合し、折りは袖口の方に向けて、表から飾ミシンをかけます。
夫れより、表を外にして袖下を一分縫代に縫ひ、裏へ返して、今度は袖口切れの端から袖付まですつと續けて二分の縫代で縫ひます、夫れより、折衿の廻りにレースを付けます、但しレースの巾は、六分から一寸位迄、長さは、折衿の外廻りの一ッ半、即ち折衿の廻りが二尺ならば、三尺のレースを用意し、これを外廻りだけ、即ち二尺にちゞめこれをつけます、付け方は、折衿を裏の方へ一分折り此上にレースの耳をのせ、しつけをかけた後、表からぐるりと飾ミシンをかけます、



男兒服出來上り圖

次に、前後の身頃に三ッづゝ巾着ヒダを取ります、此れは、先づ後身頃の眞中を山にし印通り、即ち、一寸三分つまみて下まで假縫ひをなし、次に左右も各々印を山にして同じ一寸三分の所を假縫しこれより三本ともミシンをかけます但しミシンは、形紙の印にある通り、下から、一尺一寸五分上つた所までかけ、出來上り圖にある通り、正しく巾着ヒダになし、下まで鏝で正敷折りをつけます、かやうにしますと、ヒダのために肩が不揃になりますから肩の端から、衿肩の端へ物指しを宛て、正敷裁ち切ります。
　次に前身頃も後と同樣に巾着ヒダを取ります（但し前身頃のヒダ巾は一寸五分です）それより前身頃の下前を切りあけます、そのあけ方は、眞中のヒダの縫代を一分殘しミシンのかゝつて居る所だけ切り、あけるのでございます、それより、上前即ちヒダの方へ比翼をつけ、下前へ見返しを付けます、見返し切れは巾七分位丈は切りあけたゞけの長さになし此を裏の方へ付

けます次に比翼は、巾一寸六分丈は見返しと同樣これを縦に二ツ折になし、ぐるりへミシンをかけ、下圖の通り、穴をあけてかゝります

上

下

それより此れを、上前のヒダの裏へ、一分程ひかへてしつけをかけ、巾着ヒダの心の縫目より、一分程奥へ縫ひつけます、次に、下の方を見返しの上に重ねて、かたく止めて置きます、次に、前後の肩を合して縫ひ、折りは前の方へ向けて折衿を付けます、折衿は、後の眞中と身頃の背の眞中とより合して針をうち、前でつき合せになるやうに、上前は巾着ヒダの眞中まで下前は折衿の方を二三分持ち出してしつけをかけ、同時に巾七分の斜の切れにて、見返しを拵へ、共に縫ひ付け、折りは身頃の方に向け、見返しをはなして表から押へミシンをかけ、次に、身返しは裏へまつり付けます、夫れより身頃の脇を袋縫ひになし、袖をつけます。

袖は袖付の印から印までギヤダ縫ひをなし、袖付のあきに合してちゞめ、袖の山の印と肩の縫目と合し袖下の縫目は、脇の縫目より一寸位前へずらしてつけます、此縫代は、叮嚀にすれば巾七分位の斜目切れでつつみます、

夫れより裾を三寸折つて平ぐけをなし、別に帶を拵へます、帶は先きを圖の通り圓く致しても宜しく又ホコ先形に致しても宜しふございます、丸


女兒服出來上り圖

形の時は、眞中を一尺位縫ひ殘して、他をぐるりと縫ひ一方が輪の時には、其處を殘し表へ返して縫殘した處にしつけをかけぐるりと飾ミシンをかけます、(今度は輪の方にもかける) 夫より帶どめを拵へます、帶どめは、共切れで羽織の乳の如きもの、丈は帶の通るだけにな

しこれを兩脇の形紙の印のある所へかたく縫ひつけ此中へ帶を通します、最後にボタン及ホックをつけます、先づ折衿の付際にホックを一ツ、其れより下前に、上前のボタン穴に合してボタンをつけ、帶は、四寸程重ねて、兩端をホックでとめます、

注意

右の通り記して置きました　尙ほお解りにくい處があれば、お答へも致しますし尙形紙の御入用な方には、本號記載の形紙に限り說明書として代價十七錢(郵稅共)で御頒けいたします、申込は、本郷區追分町女子共立會洋服部尙催に色々の形を御仕立になりたいと思ふ方は、拙著「子供洋服の拵へ方」(服部書店發行)と云ふ書物を御覽になれば凡三十餘種の形に就て、形紙の拵へ方から縫方まで一々圖解を入れて、手に取るやうに記してありますからそれを御覽下さい。

市區改正　番號記入　新東京全圖　麻生鉄三著

本圖は麻生式折本と稱せらるゝ專賣特許品の一にして、從來の地圖の携帶披見に付ての不便を一掃したる形式のものなる上に、其内容を見れば、最近の市區改正に據りて番地を記し、鐵道及び電車線路特に乘換場等は赤文字にて明にし、其他官衙名勝等も十分精確に示しありて、なかなか重寶な地圖なり、定價貳拾貳錢、本館發行



女子大學[illegible]山寮の眺

根柢ある美顔術

安藤妍子

加賀千代女でしたか

　朝顔につるべとられて貰ひ水

何といふ優しい句でせう。露けき夏の朝早う、水をくまんと井の端に行つて見る、と咲いたりや花一輪、清けき朝風になよ〳〵たるが井桁に置いた釣瓶に這うて、まあ何といふ美はしさ、汲まんか水を、されどされどこゝたゆたびの女心、これも亦やさしいではありませんか。さうした優さしい優婉な、心情が今の社會――殊には未だ學校生活の女の方々には別して不足してはゐますまいか。優さしみ、それがやがて女性の女性たる所以でせう。畢竟女は女らしいといふことが其生命でせう。と言つて何もかもへな〳〵と御無理御尤で男の方の意見に悉く從ふ、盲從主義てな譯ぢやないのですよ、それは見識はきちんとあつて、しとやかにありたい、あまり蓮葉でありたくないてんですの。さうすれば自然と女性的美を發揮することが出來やうと思ひます。

「色の白いのは七難かくす」とか、やたらに白粉を使用せらるゝ向も多い樣で厶います。額の短い方は喉の所に白粉を塗る、鼻の低い方は鼻の上により多くぬるゝと高く見える、其他近頃は美顔術なんて隨分とお化粧に憂身をやつさるゝ方々が多いやうです。人は男と女に限らず成丈さつぱりと立派にありたい、それは人の感情をも確かによくします。美人――美人には女として誰でもなりたい、それは人情ですもの。それでお化粧をする、何の惡いことがございませう？

　しかしお化粧で顔丈は綺麗になつた、顔丈で美人といへませうか？　是非立居振舞、衣裳の着こなし、帶の結び工合もそれに適應しなけりや駄目です。顔の綺麗な方でも人によつてはイヤにツンとして、妾は美人であるとでも言ひさうに愛嬌も何もない人があります。そんな人どうして美人の資格がありませう。自分

は美人だなんて考ふる人――そんな人もありますまいが――もしありしすればもう其人は美人の資格はないでせうと思ふ。殷の紂王の寵姫の褒姒は一向に笑はなかつた、烽火をあげたら漸やう笑つた、しかし其爲に紂王の國は亡びたと申します。この褒姒、なる程美くしくあつたには相違ないでせう。ですけれど其美は單調な表情のない京人形のそれのやう生命なき美くしさであつたらうと思ひます。顔かたちのみならずその働作擧動、それが整つて始めて眞の美人と云はれませう。身振働作はとりもなほさず其人の精神の發現です。其人の精神――心情が如何にもデリケートで女らしければ從つて外面に表はれます。標致は左までなくも其心情が淸らかで優しければ自然と誰でも慕はしうなるやうな人をチャームする？　といつたやうな高尙な美が現れます。これこそわが愛するレヂイーです―

　麗なるかな心の淸き人は、其人は神を見ることを得べければなり。私は宗敎家ではありませぬが眞實さうに違ひないと思ひます。淸き心で親切に人に接することと、私は私自身さうありたいとつく〴〵思ふのであります。表情も眞情より流露したものでなくば美くしく感じませぬ。

　或る方々、否多くの方々は三十歳位になると急にお婆さんにでもなつたやうな氣持になつて若い時に如何だつたの何のつて述懐遊ばす方がございます。三十や四十、何のお婆さんでせう？　斯ういふ方々のみでは其お子さん方も定めて規模の小さいコセ〳〵した方のみ出來て從つて國家の前途も思ひやらるゝではございませんか。みな〳〵若い若い氣持で樂しくほんとうの美人になることを務めやうではありませぬか。心掛けでは年をとるにつれて眞の　美　はいよ〳〵發揮せらるゝ譯であります。窈窕たる淑女は君子の好逑とか、こ昔支那の文王は姒氏といふ賢夫人を得て益々國榮へ、民喜ぶに至つたとやら、私共は宜しく眞の美人術を修めていつたなら國家の爲にも誠によろこばしいことだと思ひます。

水難記

潮風

▲さきに盲腸に患ひ、ついで脊病にとりつかれて臥床中也。やう〱快癒の曙光を認め初めしとき水難に會す。天公吾を呪ふか。

▲とは云へ何ゝ人間の修養なり、生存競争なりとあきらめて見れば左程でもなし。さるにても不幸中の幸。大したる損害も蒙らず。その代りかの一丈二丈と出水したる地方の人に比して、觀察は淺薄ならん。

▲夕刊の三面全紙に各地の出水記事滿載されたるを見、聊か厭嫌かき、日記の末に「皆な人の亡ぶべきとき來りけり爾して二十日（はつか）、日輪を見ず」と記して寐たるは八月十一日午前零時半。家は小石川關口水道町。

▲二時凄まじき物音に眼さむ。浸水二尺餘。庭の下駄箱と石油鑵覆へりたる也。ヌアと夜具を二階に揚ぐる時、疊の隅凹みつ。而して忽ち浮き上りつ。水ひた〱と溢れて踏み込らんとす。二寸、五寸、一尺、三十分ならざるに二尺を以て、やう〱損害は疊を代なしにしたゞけに留りたり。臺所道具の家中浮きまはるには、吾が事乍ら氣の毒也。

▲かゝる時必要なるは、沈着と機敏と腕力と。うれしきは、二階あると、隣援來れると、損害少なき事と。

▲戸外は暴風雨。大混亂大狂瀾の中に心細き二時間半。

▲雨わづかに歇みて、折々風のおとづれ雨戸を搖かすのみとなりぬ。窓の方を望むに、川水數尺を増したれば一面の湖水。ほの白く光れる中に浸れる家は黒く立つ。街燈黄點、灯かげたら〱と流れつ。何の家の籠（こ）に飼ふ鈴蟲ぞ。此騒ぎよそにして、鳴く聲澄みわたりて、寂寞の間に云ひ知れぬ淋しみを催ふ。今しばしとまどろむ。

▲曉は白く戸の隙より這ひ入りぬ。こたびは裏の戸を繰る。雨を孕む雲破けて、久し振りなる懐しき青空見ゆ。ノアの箱船が、アラヽット山頂に漂着せしときもかくやと。

▲夜は全く明け放れぬ。一夜作りのヴェニスの町は、早瀬の大井川、褌の漢子（をとこ）ゆきかひて、背に貨を積み、渦わかしに水をさゝげて、流を亂して渡る。

▲吾は近頃二食主義也。十二頃に晝飯したゝむるを常とすれど、今日の如きは、朝に飯らかざるに、物食ひたくてたまらず。所謂「ヒダル根性」には相違なきも、これ確かに苦痛也。

▲食物はなほ辛抱すべし。人は筋肉の存する間饑死せぬものなれば、十日やそこらは我慢出來ざるに非らざれど、堪へがたきは渇（かつ）也。清水の必要也。「洪水（こうずゐ）の時には清水（みづ）で苦むする」とは聞いて居たれど今にして思ひあたりたり。尤もこれも五時間や十時間は何でもなけれど手水（てうづ）使ふ事もならぬには閉口せざるを得ず。淺草にては機敏なる男、ビールの空壜に清水一杯を二十錢にて賣りつけたりとの話。後に聞きぬ。洪水の時には、なまぢつかの着物などよりも飲料水と、小許の食物を安全の場所に運びたきものなり。下司（げす）の後智惠（あとぢゑ）。此時の役に立たず。

▲往來は人出益々多し。舟こぎて來るもあり　平業は見るも賑ひのふかしオン。椽干など載せ

たり。分けで喰れども云へず、術なくはへて二階より見おろす。腹の虫グー〳〵と鳴る叙りなり。

▲十一時過某呉服店より鶏卵大の握り飯十個を贈りくれたり。水は其の力の某家に水道あるを始めて知り、人して小ヤカンに一杯貰らせ來嘗しむ。やう〳〵飯にありついて一と息。

▲すでにして博文館よりの焚き出し到着す、赤子の頭大の握めし胡麻ふりかけしもの三十個に油揚げを叩き切りたるもの一箱、三人して盛して三日食ふも尚ほ餘らん。ついで隣三軒より救援來り今は握めし攻めとなる。「なくても困るありすぎても困る」と母は言ふ。

▲限なく受けたるもの。餘りあれば他に分配するにしかず。一粒を温ふすへからずと先づ隣家に聞ふ。大の男髭食ひそらして、腹を減らしてゐたる由にて、容體なくも、三拜して受けたり。近隣の隣三軒みな然り。めしの尊さを痛切に知る。

▲日は靜々と暮りぬ。水は夕に及ばずして退き去りぬ。この機を外さず車夫をして掃除せしめたれば床の上、椅子、寢牀、かへつて美しくなれり。往來は石磊々、汚れたる處に行きしが如き爽あり。此の夜は一同二階住ひ。夢屢ば驚く。

▲翌日出社。沿道の平家は惨たる光景也。疊全く腐りたるを捨てたるは、米人の行き倒れを見る心地。

▲後に種々の珍談を耳にす、或家は夫婦と七人の子女あり。押入れの棚に小兒を入れ、父母と長兄とは終夜腋を沒する水中に立ち明したりと。

ある不逞兒はカステイラの箱にしたゝか、むさきもの盛れて、蓋をし、水引をかけてのしをつけ、遠く水に流したりと。

▲浸水後の注意は、床下の泥を除きよく乾燥せしめ、濡れたる疊はなるべく新調し、然らざれば全く乾き切るにあらずんば用ゐぬ様する事井戸は一應さらへる事。壁になるべく離れて寢る事等の由、然せずば、悪疫の因ふる處とならん浸水軒に及び中斷になりし家などは論外先づ移轉か新築がより法なし。あゝ東京は厭なる地。

洪水中の銀座街

胡蝶

八月十三日の夜は、遂に瓦斯も電燈もつかなくなつた。之ではならぬ、早速副食物でも買出して來やうと思ひ、夕方家を出て見ると驚いた。常には、瓦斯燈電燈夜を照し光まばゆき銀座街など〻名所の一つに歌はれた其の銀座も、一朝洪水のとばつちりを蒙れば、實にみじめだ。常が常故一層淋しい。

皆店をとぢてゐた。こんな淋しい事が又あらうか。

電車の内には、水見舞の人が、竹の杖に兩鉢卷で實に勇ましい。

嘸大勢の人が困るだらう、自分の持つてゐる糺諸を此の人達に上げて一片の同情を表したいとも思つたが、遂に斷行出來なかつた。

あゝ又雨が降出した。これも雷屋のでた年故であらう。

中々昔の人の云つた事も馬鹿にはできないとつくづく思つた。

朝露

野末庵子

◎

暗きに目さめぬ。雨戸繰りて欄に凭れば、東雲の空かすかに白みて夏ながら朝の氣肌にさむし。

露を含める青葉の中を、一人徐かに逍遥へば、身は實に汚れ知らぬ仙境に有る心地。空はみどりに澄み、水はゆるうめぐる廣き野は我れを取りまきて清き初夏の氣を吐きつゝけぶり渡れり。心地よき朝や、我れならぬ誰にか傳へん、此靜かなる趣き。

◎

今日初めて蟬の音をきく。うぐひすのそれには似で、いとはしき聲なり。怠惰の聲なり。暑さを思ひ眠りをもようす。

今宵は陰暦の六日、遥かの森に新月白し。尺八の音幽かに聞えて、端居の袖に風そよ〳〵通ふ。

◎

京より文おこせり。

うるはしき水莖のあと、葉ざくらの窓に凭る優しき人の面影見えて、眞心こめし言葉のかず〳〵、涙おつるに堪へたり。

我が思信濃路に入りて、早四年を過ぎぬ。望めるまゝの侘住居、心のひ〳〵と靜かには有れど、折々もたらす雁のたよりにさすがあづまの昔こひしき心地もぞする。



樂しかりし早稲田畦畔の散歩、青葉の江戸川、關口の瀧、小窓や、友や、夕ぐれや、思いたづらに往時を追ひて、離愁の情やるによしなし。

身にせまる靜寂に得堪へで窓をひらきぬ。あゝと鳴きて過ぐる烏一羽。心細き夕や、紅の如き雲入日の跡に棚引きて、そゞろに武藏野の暮れを聯想せしむ。

◎

久しぶりに古き友が墓を訪ふ。

荒れ果てし野寺の隅に眠る君が奥都城。石も朽ちなんとして苔のみぞひとり花ざかりなる。

孤影淋しく辿り來て、苔青き墓に親しむの時、誰か人生の儚なさを感せざるべき。

庭寒の風起りて悽氣身邊にせまる。暫し瞑目して、友を思へり、其有りし日を思へり、聲を思へり姿を思へり。然して我身の末を思へり、白木の墓標を思へり。淋しき哉この心、あゝ永劫の眠りいつか我身にもめぐり來たるべきか。

今宵月殊に淸うして庭の松が枝にかゝる風情得も云はれず涼し。あはれかゝる夜頃ぞ人のなつかしさも……。

今宵だに亡き友が魂かへり來て
昔を語れ夏の夜の月

◎

花菖蒲眞盛りなり。白や紫や絣のとり〳〵、美しともうつくし。三本ばかり手折りて床に活くれば、清香あたりを拂うてすが〳〵しく、詩興おのづから湧きて寂しき胸もやゝ慰まるに似たり。

◎

發つ方書にあきて庭に下り立てば朝顔の苗賣り來たる。五六株求めて手づから植付なす。此の花やさしう咲き出でゝ、うらぶれし垣根を飾るはいつぞ。初花と日記帳にしるす日の、さて待たるゝ哉。

◎

野ばら薫る窓の下に、歌ふと考がうるも又興ありや、

年月を安曇野が庵にわび住みて
　靜寂のまどにひとり親しむ

白雲の峰湧くころとなりぬれば
　たゞなにとなく人の戀しき

一日の草鞋日記も興ありや
　青葉涼しき初夏の頃

我れながら餘りの拙なさに、ほゝぞ笑まるゝ。

此の夜月よけれども笛もちて柴の戸たゝく人もなし。風いたづらにそよぐ窓より見出せば、西方遙かに日本アルプスの連山は隅なき月光にてらされて、物慘き樣にそびへ立ち、遠く幽に高瀬川の涙は淋しう太古の音を傳へ來す。

◎

夜來の雨心地よう上りて、朝露しげく空よく晴れ渡る靜かなる安曇野の景や、我が孤影こゝに有りて神秘こもる大氣に浴しひとり自然の歡樂に醉ふ。

見渡す山や野や、木や岩や草や、有らゆる天地の風物凡て我が爲めに永刧の笑ひを含めり。

あゝ此の頃の野住居ぞうれしき。我れや又幸多き哉。

來れ人々、朝露の庭に。來れ、松かげの庵に――。



掃除の順序

私は掃除に就いては大分苦勞を致しました。私の仕樣をお話し致すと、お座敷の掃除を致す時分には、先づ天井から先きに掃除します。何も知らない人は下の方を掃いてから、天井を拂ひますが、是では上から塵埃が落ちて來ますから、何もなりません、上の方から段々に順を追ふて掃除して、一番の終りに下を掃くのが本統です、それから絨氈は、茶殼のよく絞ったのを撒いて掃くと、綺麗に塵埃が除れます、茶殼の無い時は胥萹でも宜しうございます。

衛生顧問

糸左近

（ヒステリーと催眠術） 問 ヒステリー症に催眠術を施せば最も効が有ると申す人も有之候が何と無く氣味惡く候。併し有効なるものなれば施術を受け度と存候。兎に角先生の御意見を伺ひ度。（横濱の絆 經實女）

答 一般の醫學上より論ずれば健康なる人に催眠術を施せば一時的のヒステリーになるものである、然るにヒステリーの人に催眠術を施せば益々ヒステリーを重らせる種になりはせぬかと愚はれる、故に小生は催眠術に大不賛成なれど、中には醫師でも其の効能を賞讃してゐる人もある。

（顏面にグリスリン） 問 私事至つて荒性にて顏面にヒゞ、ヘタケなどを生じ、倔里設林を塗布致し居り候處、或人の申すには顏色が赤黒くなる云々、果して事實に候や。併せて荒性の治療法をも承りたし（栃木のみれ女）

答 倔里設林を其儘塗布することを續けてゐると手足は左程で無いが、顏面は往々倔里設林燒とて赤黒くなることがある。されど金盥に一杯の水を盛り、之に倔里設林一嗎を灌ぎ、能く攪拌せて洗ふことを續けてゐると大いに荒性を治されるのみならず、色艶も美くなるのであるが併し毎日倔里設林を使用することは勿體無き次第なれば、糠にて洗ふ程の所が適度であらう 糠も仲々侮られぬ効能がある。

（發汗過多症の療法） 問 私事夏は申すに及ばず冬でも腋下、手の掌、足の裏などに汗が多く出で、而も臭氣を發し、人前へも出られぬ程ですが何卒御憐れと思召し、其の療法を御教示下され度、（甲斐のふき子）（本所のかをる女）（加賀のきみ子）外十八名

答 屢々其の部を冷水にて清潔に洗ひ、能く拭き取つて乾燥せしめ、左の劑を一週間宛順次に續けて試られよ。

タンニン酸一・〇　水　二五〇・〇
右一日七八回塗布

ナフトール五・〇　酒精　一〇〇・〇　グリスリン一〇・〇　右一日二回塗布し、後澱粉を撒布す可し。

明礬　五・〇　單舍一〇・〇　水五〇・〇
右一日數回塗布

硼酸　五・〇　華攝林　二五・〇
右寐際に塗擦

クロム酸三・〇　酒精三〇・〇　水一〇〇・〇
右一日二三回塗布

イヒチオール五・〇　テレミン油一〇・〇
酸化亞鉛軟膏一五・〇
右寐際に塗擦

以上の處方は發汗過多を防ぐのみならず、腋臭の療法ともなる。

（胡瓜の保存法） 問 八月の末頃に胡瓜に含める液體が皮膚に有益なることを承りました冬季まで保存せしめる方法を教へ給へよ。（北海道 高原夏子）

答　床下に穴を掘り、胡瓜を箱に詰めて其の穴に入れ、空気の入らぬやうにしてあれば大抵は保存出来るさうです。

海水浴後の衛生法

問　私事毎年夏になれば度々の海水浴場に逗留し、海水浴をなす為に皮膚は黒くなり頗る健康になるやうですけれど、冬に向へば皮膚の色は段々白くなり、再び感冒に侵され易く、何時も気管支加太児の気味が有ります、其故宿人は海水浴が却つて皮膚を弱くするのだと申され候、私は色が如何に黒くても健康の方が宜いのですから、何とか白くならぬ方法が有りますまいか。（神田の衛生美人好む女）

答　盛夏の節、太陽に曝されて居り、冬になつて家に籠り勝なれば色の白くなるは言ふまでも無いことである。白い人が必ずしも弱い訳では無いが、兎に角夏日に海水浴を行つた方は家に帰つてからも秋冬に拘らず冷水浴を続けられよ夏だけ海水浴を行ひ、折角健康にしたる身体でも秋になつてから冷水浴を怠るやうでは却つて始より海水浴を為さぬ方が寧ろ宜い位である、宿人の御説も一理有りと申さればなりませぬ。

薬品は何うして買ふか

問　本誌にて教へられたる毛生薬及び其他の薬を薬舗に買ひに行きても、或は劇薬であるから医師の証明書を持参せよと云ひ、或は手前方には有りませぬ、或は斯る薬品は存じませぬ云々、折角教へて頂きながら買ふことの出来ぬ場合には、如何致したら宜しいでせうか。（土佐の迷郷女）外廿二名

答　劇薬なれば勿論御地の懇意なる医師に斯様斯々の場合に用ひたいのですからと、事実を打明けて其の証明書を求むるより外に致方ありませぬ、若又劇薬で無い薬が其の地の薬店に無い時は其の薬店の取引先より取り寄せてもらひ給へ。

隆鼻術及脱毛施術を行ふ處

問　隆鼻術及び脱毛を電気にてなす療法をなされる医師は何處に居られ候や。（牛込のＫＳ女）（大阪の低鼻女）（鹿島の多毛嬢）外三十七名

答　これに就き多くの問はあるが小生一々記憶致さず、されば東京或は京都等の医科大学内なる耳鼻咽喉及び皮膚科の施術を受けられよ。

うをのめの療法

問　足の裏に俗に云ふ「魚の目」出来、時々小刀にて削り取り候も直又出来、此頃では痛まで加はり、歩行も困難に相成り候、其療法を御教示下さい。（肥前の二十歳女）

答　其の療法に色々あるが、其中で素人療治として最も簡単且つ有効なるは、撒里矢爾酸一瓦古魯胃謨十瓦を混ぜて塗れば遂に除かれるものである。

聲を美くする方法

問　常に聲悪しく、琴歌唄ふ時などは聲が嗄れ困り居り候何卒宜き聲の出る方法を御教へ下され度。（讃岐のドメイ）

答　聲の悪しき方は一応医師に就いて呼吸器其他に異常無きかを診て貰ひ、異常が有つたら其の治療を受け、若し異常無しとの事ならば練習より外に致方無し、即ち美聲を発する所の琴の師匠或は三味線の師匠等に就き稽古すると、如何なる悪聲の人も美聲になること受合である。但し天然に美聲を発する人よりは、遅きことは勿論であります。



いろいろの實驗

母親の注意

長崎　いし子

私の方には五歳になる女の子と、二歳になる女の子が有ます、二三日前私が縫物してる傍の方でしきりと二人遊んで居ました處、小さい方がお茶チヤ〳〵と申しますけれども、丁度入口のとめをして居ましたからチヨツトお待ち、すぐにあげるからと申して、私もすぐについでやればいゝのにまだ縫てました、すると五歳になる方のが得意らしく走し來て、お茶チヤついであげましたよと申ますから、アラあついのをとあわてゝ立かけますまに、ギユーとのみましたのでたまりませぬ、泣て〳〵口中一ぱいやけどしまして、四五日は本當にこまりました、其の以來何しかけても子供の申すことを先にいたします、また火鉢もかたづけました。

忙しい中に時間を作る

肥前　耶枝子

誰でも家に居るとそれ〴〵身に應じて忙しいものです、其ために一日之と云ふ、ためになる事は出來ずに暮して仕舞ふ樣になります、それで私共は家内の仕事をそれ〴〵人々に分けておきます（其の人に出來る事をそーして毎日自分の仕事を第一順序正しく致します、此次には何な仕樣かしらとぐづ〳〵して居る中に時間は立ちますから、毎日同じ樣に定めた通りを行ひます、さつさと致しますと一日から一時間二時間はきつとに餘ります。

園藝種子の採收法

信濃　青木恒子

皆樣、御丹精の花壇には追々結實を初めたで御座いましやう、明年一層の好成績を得やうと思ふたなら、只今よりのお心懸けが肝要です、物間に鬻ぐ種子は、迚も信用は出來ませぬから、成るべく直接に採收し、同好の友と交換する等は、趣味と實益を兼れた事と存じます。

種子採收の時期に就きまして、大抵の方は十分熟した物ほど良い樣に御考へですが、過ぎたるは猶及ばざるが如しとは、此場合にも事實なのであります、一番花から出來た種子は、翌年開花し初めるのは早い代りに花が澤山には咲きませぬもの故、中成の物から、少しく色付き初めた頃採收し、良く々々乾燥精選し　溫度と濕度の變化の少い所へ保存して

置くのです。(賞)

下女使用について

三重　あをやぎ

何れでも當今は女中が拂底で、その上長く居つゝかなくつて困ります、就ては私共なども種々苦心した結果、此頃居ます女中に、少しも裁縫が分らなかつたのを、隨分面倒でしたけれど、自分の暇の許す限り裁縫を教へて見ましたが、當人は非常に喜んで蔭日向なく働き、御飯後の後片附などきちんくと早くして、一枚でも縫はして貰はふと云ふ風に一生懸命になりますから、子供の常着など大方仕たてるやうになりました、裁縫のみに限らず何でも當人が知らないで困つてる事を懇に教へてやりましたら好いだらうと思ひます。(賞)

乳をもどす時の手當

青山　やす子

乳呑子はよく乳をもどすものです、併し同じ乳をもどすにも場合によつては夫々性質が異つて居りますから、注意せねばなりません、例へば固まつた乳をもどすのは胃の弱つた證據で、固まらぬ乳をもどすのは乳を飲み過したのです、從つて固まつた乳をもどす小兒には僅かに重曹ソーダを飲ませるがよろしく、その分量は生後四ヶ月までの小兒には、茶の匙に一杯、一年位の小兒には四杯程を乳に交ぜて飲ませます、又た固まらぬ乳をもどすものは之を放任つて置くと、胃腸の擴大病となりますから注意して飲む分量を適當に減されねばなりません。

新案鮮魚の保存法

代々木　山谷子

私の宅では主人が毎日午後四時過に役所から歸つて參りますので、朝買つた新しい刺身を何うかして其迄保つて置きたいと、種々工夫致した末、遂に左の方法を考へ出しました、夫は有り合せの大きいバケツの底に小さい砥石を一つ置いて、お刺身を盛つた小皿を其上に載せそして擂鉢又は米研桶を逆さにして其上から蔽ひ被せ、なほ其上に壓鎭用の砥石を一つ載せて、汲みたての冷水を徐々に注ぎ込むのです。かくて又其後約一時間半毎に冷水を注ぎ込み、晩餐の少し前に靜かに水を杓子で汲み出し、擂鉢の下部より一寸位まで水が減つたら、石を除けて徐ろにお刺身を取り出します、かう致せば空氣の壓力で魚肉は少しも水に濡れず冷え切つて居て、お旨しく頂けます。

ダリヤの水揚

牛込　高木秀子

今年程園藝界の賑つた年はありません、殊にダリヤの栽培は上流中流の家庭を通じて頗る盛んでした。これから秋花になると、自然切花として眺める人が多くなりますから、私の實驗したダリヤ切花の水揚法をお知らせ致しませう。先づダリヤは前日の夕方切つて、切口を炭火で燒き一夜水に浸して置くか、又は切り取つた時に直ぐ切口をアルコールで殺

せば、能く水を掛けて永く保ちます。又毎朝三時から四時の間に切り取れば葉がなくとも一週間は保ちます。（完）

子を持てる方へ

牛込　名なし草

先日お隣りの奥様が産褥の時に楊子なさした後、赤さんを抱いてお出になりました。

するとお赤さんが、顔をお母様の胸にすり付けられましたので、お可愛顔に、きれいな玉の様なお顔に、顔からヒタヒタにかけて長い〳〵みゝづばれが出來ました。お子様を持つてお出になるお方の、御注意までに一寸。

馬鈴薯の菓子

淡島　永井靜枝

先づ大粒の馬鈴薯十五個程を洗つて皮を去り、輪切にして繊に打ち、水に放ち、度々水を取替へて、澱粉が浮上らなくなつた時、又た一度清水と替へて四時間程漬けて置きます。それから爪が立つ位に緩と湯煮して水に晒す事又四時間。さて鍋に三盆白中斤を五勺許りの湯で能く溶かし、芋の水を切つて、其中に入れ、砂糖が飴の如くになるまで攪拌して居ますと、芋は透明になります。其を皮として文火にかけて置き、砂糖壹斤を擂盆でつぶし、篩にかけて後ち木鉢に移し、鍋の芋を其中に入れ箸で攪拌す節から團扇で煽いで冷まします。かくして出來上つたのをペラペラにして御客様に出して御賞翫ばせ、上品で、美味で、誰も馬鈴薯と思ふ人は御座いません。

反物の仕舞ひ方

山口やねの草

新らしい反物を（絹、木綿ともに）仕舞ふ時に、上に付いて居る黄木綿を棒の如く巻いてそれへ反物を帯の様に巻きつけて置きますと、日なふるまゝにたゝんだ筋がとれて、幾つにも疵付にも大變便利です。羽二重のやうなものでもこてを使はないで平らになります。然し桐の棒へは決してお巻き遊ばすな、あれにには、蟲の生じ安いものですから、現に私の衣が紅絹を巻いて置いて穴だらけになすつた實例が御座います。

髢と梳毛の洗ひ方

備後　葉がくれ

髢を洗ひますのは、湯の中で揉んだり振つたりして縺らしては駄目です、一度水の中で縺れた髢はどうしても解けません。まづ髢をよく櫛で解いて置いて　梳櫛で梳いて置けば尚結構です）、洗濯曹達を少し濃く熱湯に溶かして置いて、その中に前の髢をそつと縺らさぬ様に浸し、幾度も幾度も油や垢の去るまで浸し、其のまゝ櫛で梳くのです、大凡五分も然うすると奇麗になりますから、次ぎには湯の中で浸して解き、次ぎには水の中で然うします、つまりこれは濯ぐのです。それは〳〵奇麗になります。

鐵のシミ拔き

臺北　高木登毛子

白い洋服や、白地の着物等へ鐵の錆が附着したのを其儘放つて置く時は、終には地質を損じ、再び役に立たなくなりますから、速に是を除く事が肝腎です、最も手輕な方法は、レモン（金柑、夏蜜柑、其他柑橘などでもよし）の汁を少量の鹽と混ぜて、シミの部分を能くこすり、暫らく日光に曝して後、淸水で洗ふので綺麗にとれて了ひます、若し一度で除れぬ時は幾度も之を繰返せば、必ず脱けます。

南瓜の種の利用

信濃　松尾

私は每年今頃になりますと、南瓜の種の熟したのを取つて乾し、貯へて置きます。そして其を煎り、豆の代りにお米の煎りたる中に入れて一緖にいたゞきますと、大層香ばしくて美味しうございます。又た、少し焦げる程煎つて、擂鉢で能く擂り潰し、篩にかけて皮を去り、砂糖と醬油で味をつけ、胡麻の代りにお萩につけたり、又た春先大根を短册に切つて茹で、之で和へて頂きますと、隨分結構に喰べられます。

髮の毛の手當

靜岡　寺島いと子

私は頭髮の毛が弱いので、いろんな經驗を積みました。或時白髮を拔いた跡へ生姜の絞り汁を塗つて置きましたら、黑い毛が生えて來ました、それから髮の毛がこぐつて困つた時、或人の敎に從ひ、寒竹の根を水で煎じて冷し、之に櫛を浸して、徐かに梳きましたら綺麗によく解けました。又た麻の葉と桑の葉とを等分に煎じて、三週間程每日洗つて見ましたら奇妙に縮れが直りました。其外五倍子の粉を水から煎じて度々洗つて見たところ、髮の毛が眞黑に光澤がよくなりました。

嫁入時の簞笥

近江　さつき

桐は成長の速かなものですから、私の國などでは、桐畑を作つて盛んに培養します、而して女の兒を生むと、その兒の爲めに更に數本の桐を植ゑて、嫁入時期に簞笥、長持などを作る用材と致します、私共でも先年僅か二本の桐の木を軒端に植ゑました所、此頃は大ゝ層大きくなりました。

子供の問

佐世保　政子

子供が五ッ六ッに成りますと、「御母樣是は何？」、「それはどうするの？」等とまじめに問ふ事が有ります、其時に私に「それは何々と云ふ品で、此樣な時に使ふ物です」、「是はかうするものと委しく子供の分安い樣に申し聞かせます、左樣致しますと不思議にも一度言ふて聞かせた事を何時迄も忘れませぬ、子供は自分の氣の向た時に聞いた事は忘れぬものです、それを忙しい時等に胡麻化して置きますと、後日直すのに困る事が有ります、



和歌

佐々木信綱先生選

一等　　神戸　森中かず子

○かくまでにかちほこりたる今にしてかなしうなりぬ君が眼みれば

評　多恨

二等　　陸奥　紅うばら

○うらさびし君さゝやけばむねに咲ける名しらぬ色のはな片ゆらぐ

評　下の句の響おもしろし

二等　　麹町　牧野銀杏

○京の町河鹿買り來ぬ古里の木曾の川邊の夏なつかしき

評　京にて木曾をおもふ趣多し

三等　　福岡　大庭たか子

○行くところ花さびしくも散りにけりわが世の春の末の如くに

評　上句すぐれたり

三等　　弘前　久保田衣子

○街くれば火影人かげ水にゆれて小傘おもたき春雨の宵

評　美し

三等　　日本橋　あい子

○七夕やわが妹は歌かきて涙ぐみつゝ笹にむすびぬ

評　可憐

秀逸

○　　横濱　小豆澤淸野

蔓草のとりとめもなきさまに似て我が放縦の心すべなし

○　　東京　三宅はな

にげまどふ蝉をすゞめの追ふ如くにくき思ひに一日暮しぬ

評　にくき思おもしろし

夏の京五山の鐘はたゆげにも祇園の街に響く宵かな　○　芝　眞崎靜子

はるばると淺間につゞく高原の眞晝しづかに靑嵐ゆく　○　信州　渡　波奈子

傷き果てぬあでなる色のだありやと榮ありといふ少女てふ名と　○　盛岡　佐々木百合香

思ふこと半ばも云へぬあはれなる女とうまれ生くるさびしさ　○　堺　花井きみ子

評　あはれなり

限りなき悲しみ秘める大空に織りてきかん人の世のこと　○　南千住　千葉しげ

評　前句言ひたられど

我が胸のほのほよ紅き雲となり君ます里の空にうかべよ　○　宮城　安井露香

評　措辭新し

前の世にちかひし人のたづね來てすゝり泣くとも秋の雨繁く　○　愛知　渡邊ますこ

評　音律妙

わが胸にみてるかなしみ秋風の少しふるれば涙こぼるる　○　尾張　榊原みね

評　四句巧みなり

佳作

情けなき冷たき人よさはされど此子病ませし美しの人　○　大阪　ちどり

大阿蘇の山荒れすらし花の風なまぬるうして夕燒紅き　○　大分　江口かなる

夕なぎの相模の海にかへり來る帆の舟みれば母ぞこひしき　○　橫濱　小豆澤しげ子

悲しみの小川たえせず流れたるそこに沈める我心かな　○　釜山　朱雀とし子

山の端ゆるがぬ木に白き鳥輪をゑがきゐぬ初秋の朝　○　牛込　平塚白百合

瀬戸の畑ふくべに似たる夕顔の一つのこりてかうろぎの鳴く　○　相州　中田園子

新しき生に入りぬる我ながらかはらぬ癖をあゝいかにせむ　○　栃木　とよ子

太陽はペンキのはげし教會の屋根に追はれし蟬に照りつゝ　○　豐後　是永こま子

京都　川島芳枝

せまりくる夕ぐれごろを月見草浮ぶが如く咲けば寂しも
○　新潟　河野白菊子

離れ島うしほみちくる背のして白き小鳥の南さしてとぶ
○　越後　北山倭文子

君にずれて小旅によれば宵月のかげほのかなり母います空
○　京都　吉田さと子

逝く春のうらみもながき黒髪に桐の花散る夕月夜かな
○　河内　森若柳野子

夏すぎの日ざしまばゆく大空に輝くなかの濃緑の山
○　下野　香蘭女史

ふと我にかへりて遠く眺めやる刹那を夏の雲白う照る
○　神戸　森中かず子

京に来し言葉可愛き叔母が子とたはむれ居れば憂も忘れぬ
○　長崎　深見つゆ子

恋したふ妹かなし雨の夜を昔話などしてなぐさめぬれど
○　京城　中尾露子

高麗人は小暗き街の片隅に夜露ほりしてうたゝねをする
○　下谷　岩見たき子

籠り居の夕日寂しく秋更けてこぼれ初にし白萩の花
○　丹後　西園節子

初秋の思ひはかろし落ち髪にわがおとろへをなげく朝より
○　小石川　川岸照子

實にみのる高粱畑の朝風に雁の聲きく九月となりぬ
○　牛込　平塚白百合

紙すける小村静かに秋の日のうすづく途に網を見る
○　麹町　牧野はん子

筑波山麓大野の秋風は我が漕く利根の川舟を吹く
○　上總　山口貴代

涼風や月なき宵をなつかしみ君を思ひぬ夕顔の花
○　上總　もみぢ

合歡の花ほのかにかをる夕暮にふと君かみ名さゝやきて見ぬ
○　石川　石田春子

悲しみを胸にいだきて笑むらむが如く咲きけり夕顔の花
○　金澤　愛子

姫百合の花の露もて化粧せし蝶が羽袖のうるはしきかな
○　上總　野村はま子

午後の日のうすくかぎろふ水無月の青野ゝ中に白き蝶とぶ
○　日本橋　松岡千代子

源のなにがし殿がみやかたへ急ぐ駕あり時雨降る宵
○　麹町　牧野はん子

虎杖の哀れに伸びし若芽折りてせゝら笑の人に泣く哉
○　本郷　松井都喜子

さとばかり青き簾と文庫の袂をなぶる初秋の風
○　千駄木　米澤愛子

ほろ〱と萩の花ちる嵯峨に来て静心なくあつま琴きく
○　東京　朝倉たかえ

山の夜や小川の岸の農家の灯木立くゞりて遠く流れぬ
○　下谷　伊東百合子

うすものゝよき人三人朝風に林と河との中の橋ゆく
○　京都　嵐子

何となく淋しき夕なつかしき御名よびて見ぬたそがれの窓

○　　岡山　業昭女

はら〳〵と桐ちりぬ静かにもたちばな散りぬ朝に月夜に

○　　伊勢　岩木淑子

その日よりものゝ哀れなまびしさないたくおぼゆる我とはなりぬ

○　　倉敷　春草

思しほにながれてぞ行くすて舟のむくろいたまし十六夜の月

○　　栃木　柳葉女史

春月夜露おく庭に麗人のたゞずむさまに白百合の咲く

○　　横浜　松尾文子

かたことに母よ〳〵とよべばなほいとしさまさる親心かな

○　　横浜　小豆澤紫の月女

ほと〳〵と音して梅の花ちるを春月の庭のあかるみに見る

○　　千葉　入田綾子

夏の薄暮すごきまでむらさきによどめる海に月白うてる

○　　愛媛　河内サト子

君ならでたれに心をかたるべき世にちよろづの人はあれども

○　　水郷　伊藤ひで子

港の町の月ほの白き霧の夜高どのゝ灯もはかなげに顫る

○　　千葉　堀れ水

ピアノの音はたと途絶えて純白のカーテン揺れぬ洋館の窓

○　　大阪　小島貞子

もくげ咲く白もくげ咲く家の前まつともなしに人の待たれし

○　　京都　森子

美しき夕の雲もむへゆくらゝ懐しきは北の國かな

○　　本郷　佐藤かず子

柏葉にゆうべの雨のしとゞ置く黄みを行きて物を思ひぬ

○　　越後　岩木芳子

いそづたひ月ふみ行けば沖はるか漁火みえて舟歌きこゆ

○　　石川　林幸子

友禅の振袖かほに押しあてゝむせび給ふに似たる姫百合

○　　福岡　辛島寿美子

語らはん友だにもなき侘び住ひなぐさめて吹け浜の松風

○　　熊本　矢野やなか

荒磯遠なみまき寄する大岩に立ちて見てあり夕日の沖を

○　　神戸　西尾信子

怪鳥の叫びきこえぬ姫君の館に狂ひて身なげし湖に

○　　水戸　中根雅子

雨の日や友禅のこぎれとりいだし袱など縫ひて妹と興じぬ

○　　東京　井上菊枝子

やるせなき思ひを秘めて傾くる弦月の面見る我にもあるか

○　　神戸　手塚さかゑ

亡き姉に培はれたる白萩の花咲き出でゝ忌の日は来ぬ

○　　神戸　しな子

実家の日続きし姉の部屋されて涙に濡るしめやかさかな

○　　麻布　渡邊ひさ

昨日見しうつくしき子をなつかしみ今日も野に出で辿りさまよふ

○　　陸奥　ちゑ子

つく〳〵と眺むる空を雲とびぬ淋しさ迫るさすらひの旅

○　　越後　大島たつ子

川ぞひの森の道ゆく若僧の寂寥げなり秋の夕風

○　大阪　鶴　子

小松原つゞるあたりに日は落ちて牛おふ人の道いそぐかな

○　岡山　村井貞子

五月雨の霽るゝを待ちて徐に庭を歩めば桐の花散る

○　備中　平野美子

なんとなくたゞなんとなく悲しきは恋もつ身の夕暮の鐘

○　麻布　とみ子

物あれば狂女の如き我が心冷たきものといひますな君

○　横濱　小豆澤紫の月女

初戀のあまきが如く白百合のその甘き香をなつかしみかぐ

○　兵庫　内海千鳥子

手をとりて泣くも笑もともにせし友は母てふ名にかはりしに

○　大阪　秋山種子

君なき日の恨み姿に花[illegible]果の咲きぬ夏来し荒れたる庭に

○　横濱　百合子

夢のごと淡路島山ほのかにて月にすみゆく濱寺の里

○　米國　村鶴光子

風なぶる夕のいそに君と二人藻の香かざつゝうたおもふかな

○　京都　成田てい子

何故かわかぬ涙のあふれきて其度思ふ人ぞ恋しき

○　札幌　けふ子

やどりして夕月めでぬ旅の子はゆりほの白き草の小家に

○　宮城　村山すみゑ

御肩うつ手もたゆたへり父君の御召されしおもかげ見ては

○　信濃　世津子

牛曳いて小松が原にまよひでしその夕月になくほとゝぎす

○　東京　たづ子

誰がやの蚊やりの煙立迷ふ森の梢に夕月の影

○　下野　増淵かれ子

我君のやさしきみどり身にしみて今日も泣きけりいたつきの床

○　相州　齋川かめ子

そよ〳〵とわした涼風心地よや池の面かをる白蓮の花

○　美作　青山いま

この頃は夜更かす夫をまつになれあまり恨みず砧んぞ打つ

○　上總　山口豊久子

大風なぎたる後の青草の中にまじりぬ晝顔の花

○　臺灣　山村麗路子

妹を都へやりてこの夏は我ひとり取る小山田の草

○　赤坂　田中靜子

靜かなる夢の浮橋心なくたどればうれし君にあふ道

○　下總　小出保子

ふと見れば秋海棠の花ちりぬしきりに君のおもはるゝ夕

○　麻布　伊藤ちか子

黄なる花たわ〳〵と咲く八月の萱の野に立つ君と別れて

○　石川　宇都宮花子

かゝる日のかゝる夕暮しとやかにわれは死なむと思ひける哉

○　相模　智豊子

つゆ分けて君が御墓に詣ればおもかげ見ゆる白百合の花



日記文

留守居日記

東京　笹のつゆ

主人は出勤された、十分程して弟も早稲田へ出掛けた、臺所の掃除を終へた自分は、汗ばんだ着物を糊の硬い浴衣に着かへて、凉しい三疊へ針箱据ゑて、未だ見ぬ子の綿入にもと買つておいたメリンスを廣げる。前の夏椿の木にはミンミン蟬が體の中迄響く程、聲張り上げて居る、アヽ私も此蟬欲しき時も有つたのに、今はもうアト三月過つと、母様に成るのかと思ふと、盧のやうな、又心配なやうな、嬉しいやうな心持がする。里から一緒に來た春やは、一昨日から母様の御手傳に行つて居ないし、慣れぬ私は淋しくてならぬ、隣の子のニコニコ婆さん唄ふ聲が可愛らしい。自分は縫ひかけの肩をつまんで衣紋竿に掛けて見る。（一等）

雷雨のあと日記

牛込　平塚白百合

ゴロゴロと臼でも挽く様な遠雷の音か　だんだん遠くなつてゆくと微かに雨が降り出した。干した千魚をドギマギしてゐるうち泥棒猫に二つ三つとられてしつた。

磯馴松の葉末から金色の露がポタポタ落ちる、靜さんが風呂の口へ落松葉をくべながら、ひどござりましてと、手拭にかくれた顔をむけた。雨の後の海は藍の色が一しほあざやかだ。深緑滴る許りの磯馴松の間から、社の赤い鳥居がクッキリ見える。

乳母がしよぼ濡れになつて歸つて來た。頭に載せた籠の中には觸つたら手の染まりさうな茄子が一ぱいは入つてゐて、露がフツフツ結ばつてゐる。

靜さんは松葉がぬれてゐていぶるのか、眼をこすりこすり吹いてゐる。（二等）

お墓詣り

遠江　石野くに子

七月十八日、朝からお仲と中庭のお掃除する、十一時頃森の菊郎様いらつしやる、眞白の服に金ボタンの見るから心地のよい、嗚呼亡くなつた良夫も生きて居たならあゝして歸省て來るものを、と思つたら、ついホロリとなつた。午後から菊郎様式に、私と三人でテニスをして遊ぶ、夜菊郎様の寄宿舍の愉快な事悲しい話を聞く。

廿一日　午前は舟遊びに行く、船を付て水泳をやる、菊郎様は實に上手だ。

三時頃三人で澤桔梗女郎等持つて、良夫のお墓參りする、見送つて御出の母様が泣いていらしつたので、私も忍び泣きに泣いた、あゝ四年昔の今日はお祖母様の初のお盆で、其の時は良夫も、四人でかうしてお參りしたのに。（三等）

いたつき日記

神戸　ゆかり子

生きかへる様な朝風に昨夜妹が呉れた風鈴が頻りに鳴る、外は暑いと見えて、何處からか雲が上つて來て、枕元を赤い蜻蛉を裾立てて這ひ歩く。母様は又畑のお手入と見え、裏で時々御聲がする、子供等は學校に行つて居るので誠に靜かだ、黒い大きな蝶がひら／＼と頭の上を這つて行く、離れから父様の誦經の聲がきれ／＼に聞える。うつら／＼して居ると、急に枕元が恐ろしく喧しいので、目を覺すと、弟のみやげであらう、蟲籠にぎつしり蟬を詰め込んだのが、シーツの上に置いて在つた。午後久振にお醫者様が見えたが、熱度表の山路が高低平坦になつたとて、大よろこびで歸られる。夕方お湯で體を拭いて貰ふ。今日見れば筋骨が一枚隠れた様だ。手も餘程丸みが出來たか、母様は弱く拭くと折れ相だと寂しく笑はれた。（芳悦）

受信日記

東京　若紫

お葉書が參りましたと姊が持つて來た。

靜江さん御蔭様にて頂上に達しました、樂しみにして居た紫雲靉く日の出は曇天故殘念ながら見る事が出來ませんでした。これから金明水、銀明水へ參るところ。富士頂上にて百合。

お羨ましい。本當に百合様は御幸福よ、妙義山も赤城山へもいらつしつたし、今年は又富士登山、三景の中松島は三度も御出になつたとやら、私なんか毎年の避暑とて鎌倉か逗子がヤツと、一番遠いところで大磯、其より先は西にも東へも踏み出した事がない。富士でなくとも今年は是非秋の高尾山に行つて見たい。（芳悦）

鈴ちやん

東京　とみ子

奈良へ行かれた伯母様から送られた小包を、今朝姉妹打ち寄つて開けて見る。奈良人形の根掛りやら簪やら、古繪圖の數、其の他種々と入つて居る、中に可愛い人形が一つ、鈴ちやんとしてある。早速持つて行つて桃紋帖の中にすや／＼寢入つて居る鈴ちやんの手に抱かせると、眠むたさうな眼をぱつちり開いて「あら好いれゝちやん」と、すぐにもう起き上つて、譯も無く、眼を細くして喜んで居る、いかにも嬉しさう。而してれん／＼ころりと唄ひ乍ら、自分の枕をさせて居るあどけなさ。思ひ出したやうに「姉ちやんあのもう一つのお人形は、おぶうへ入れて按摩ちやんのおつむの様にしたから、誰かに直つて頂戴いつて、まあ現金なと吹出して了つた。（芳悦）

雨の一日

東京　のばら

昨夜の雨、猶晴れやうで、朝からしと／＼と降つている、覚の木は時々大きな音をたてゝ落ちるるで、其度毎に、居眠して居る露の玉が驚いて目を覺ます、私も雨の音を聞きながら作りかけの羽織を縫ふ、お勝手からはしきりに三弦の音が聞いている、徒然のすさびであらふ、聲はまだ萬葉をたゝいで歌まない。

あまり寂しいので故の夜の「行方なほ遠けき」に、夕づく日は早落ちぬ

いつくにか今宵もまた……を歌つて見る、大好きな曲、夕方係上よりのお帰り、常に變らぬ温かき姉の膝に思はず抱きしめた、そしてそゞろに感謝の涙があふれた、涼けき風は徒に洋書の頁をひもどいて去る、雨の日は雨の中に暮れて行く、あゝ今日は寂しい日であつた。

逗子に避暑中の一日

麻布　戸田幽星香

朝早く海岸を散歩する、空よく晴れて、沖には、白帆ゆきかひ、江の島は、近く澤青く水の上に浮んでゐる。小波は靜かに砂を洗ひ、彼方此方、群れとぶ濱千鳥を、三匹の洋犬が水に入つて、競争になつて追ふ、スケッチの好材料だ、田中(從姉の家の書生　が、和樣(從妹)の本宅に用があつて、歸京する事になる、「田中お前汽車に乗つたら、窓から手拭か何か白いものをお振りよ、私も庭でふるから」と、和樣が吩附ける。午後二時何分、逗子發、上り列車の汽笛が鳴つた、和樣に呼ばれて出て見ると、列車の中程で、白い小さい物がチラ〳〵動く、和樣は、物干棹の先へ大きいタオルを付けて、重いのを一生懸命に振る、田圃を隔てゝ一町餘距と車窓との振りあひ、私が笑ふと、「でも面白いのですもの」と、は嬉しい、和樣は未だ十二の無邪氣な少女。

今日のおやつ

四谷　藤　椅

午後のおやつには白玉團子を拵らへるといふと、午前より芳ちやん、美ちやん、源ちやんたちが、私が丸める〳〵つて大悦び。早くかゝりましようつて、うるさく責めて仕様がないから一時過から取りかゝる。さお臺所は大騒ぎ、捏れる者、丸める人、食紅を入れ過ぎて毒々しい眞赤いのや、赤と白と交ざて大の斑の様なのや、馬の頭の様なのや、或はお月様の様なの、潰ぺつたなの、いびつなの、かう樣々な格好かできた。早速井戸の水で冷して家内中集まつて喰べる。是れ僕のだ、イヤ私がこしらへたのですと百面相の様な形のをてんでに自慢し合つて喜んでゐる子供等を眺めて、お祖父様、お祖母様はたゞにこ〳〵と嬉しさうに、召し上つていらつしやる。

獨身主義のマダム振り

名古屋　千石梅子

楓さんから此頃は寂しくて困つてるから一度いらして下さいと、再々御手紙が來るので、今日は久し振で伺つた。また例の獨身主義の詠歎でも始めるのだらうと思ひながら伺つて見ると、驚く勿れ！、獨身主義主張者の楓さんが、丸髷に赤い手柄で澄ましていらしやる、私、一目見て、まあーと呆氣けにとられて次の句か次げなくなつた。楓さんは「まあ、お久し振でやうこそ……」と平氣なもの。御本人が平氣で澄ましてるのに、まさか私が楓さん昔の獨身主義は？とも訊かれず、お話もソコソコに切上げてお暇した。歸りにつく〴〵人の心程分らないものはないと思つた。楓さんは十九のミセス、私よりたつた二つ上なのに、あのマダム振り！、もうあきれる事許りで、私、氣が遠くなつた樣にボーツとして了つた。

外虫の記

愛知　日野路子

六時の汽車で英語の稽古に行くとて、いつもより早めに起きた。涼しい朝風がすうと吹いて鉢植の朝顔がゆら〳〵と動いた。

名古屋の停車場も乘る人、降りる人でなか〳〵混雜する。ピーと出て行く汽車をわかず見送つた二三人の女があつた。その眼は潤んでゐる。あゝ、久し振りに迎へる喜びも、遠くに送る哀みも皆このプラツトホームに繰り返されるのであるか。遠からずその喜びに逢ふべき我が身、あ待遠しい。薄暮、歸宅して見たら百合子さんから御手紙が來てゐた。御忙しいマダム振り眼に見えるやう。

休暇中の一日

信濃　菊　香

休みになつて三日目、我儘の樣だけれど無趣味な田園生活がいやにたつた。やつぱり私には都の方が適して居るのだ、日比谷のそゞろあるき、百花園の夕涼みなど、次々に胸を過つて益々田舍がいやになる、晝飯後迄退屈凌ぎに妹を連れて學校を訪ずれる、當直の田口先生御一人ぎり。こんな老先生では面白くないと言つて、すぐにも歸られないから、ピアノの練習會して知つてる限り彈き散らす、先生きつと今の女は仕樣がないなんて笑つて居らつしやるんだらうと思つた。夕方から兄樣と植木見に行く、ちつとも氣に入つたのが無かつたので買はずに歸る、何しに行つたんだなんて父樣に笑はれちやつた。十時床に入る、何んだかつまらない、要領を得ない日だつた。

店番日記

京都　野村元子

今日始めて店番をする。往來を見てゐると、種々雜多の人通りで實に面白い、十時過護謨輪の車を召して、杉江の奥樣見える、大切なお得意と聞いてるので叮嚀に遇らふ、寶石入の指輪を見せて下さいとの事、早速種々出してお目にかける、約そ半時間斗り彼此とお選の後、二百圓の眞珠入のにきまる。某社長の奥樣とやらちつとも威張らない氣さくな人、似合いますかと美しい指にさして笑つて歸られる、七時頃主人歸宅、夕飯後店番は何うだいと尋ねらるゆゑ、中々面白いとお答する、其は結構たと大笑、夜十二時やすむ。

縁先の涼味

山梨　小百合

伊藤屋を掃き上げて遣り水の涼しい縁先に、兄樣と左武さんとは熱心に何か話して居らつしやる、シトロンに水菓子を添へてお二人の前に持つて行く。

裏の光扇寺では村の若い衆が集つて今しも盆踊の最中と見えて、歌ふ唄打つ太鼓、吹く笛の音か手に取る樣に聞える。「兄樣あれも藝術の一種れ」つて言つたら「相變らず奇拔な事を言ひますな」つて左武さんがお笑ひになる、私は不圖漱石の漾虚集の中にあつた「一夜」を思ひ出す。髯ある人、髯なき丸顔の人、眞黒く髮長き女、そして言ふ事の非人情なる……。

さつと吹く風が岐阜提灯を搖めらかしたと思ふと、お床の間に挿してあつた白百合の芳烈な薫がぷんと室中に漲り渡る、此香を好きの、厭ひのつて爭ひ合つた左武さんも明日は愈々御郷里へお歸り……。

日記の一節

京都　菜直子

妹の發起で四人は散歩に出掛た、今夜は祇園會の宵山とやら、其賑かさを見るも話の種とて、其方へ赴いた、案の條四條の人は大したもの、

貴方も彼方も押合で、鉾の所は黒山の人、優美な蝶も手に取る様聞えて、囃子の響も思ひやられる、漸く切りぬけて出た時はもう電車もなかつた兄上の音頭の一聲で歩き歩いて御所に入つた、明るい夏の夜もしーんと更けてぼんやりとした朧月夜、四條の混雑に引かへての淋しさは一しほに感じた、雲の様な山、一刷毛はいた様な叡山等は、黒繪の様で美しい、枝葉分たぬ夥多の松の間を通して、遙かに紫宸殿を見た時は、何とも云へぬ心地がした、あゝ殺風景な……、腰折一つ出来ぬ身が悔しい、家に歸つた時は誰も着物はじんめりとして、月は雲間を出でゝ清く照して居た。

夏の一日

熊本　中田荷露

雨戸くる音に目がさめた、もうそんな時かしら、ねむい目をこすりながらあける、朝顔が今朝初めて垣根を飾つた、旦那様に御はつを御目にかけ様と一輪取つてお飾り迄とさして置く、朝の中琴の稽古に行く、歸つて郵便箱のぞいて見たら、弟から野球大會の知らせ、逃げて行かい中にとお琴のおさらへする、午後ベルはを見ると、長くなつて寐て居る、金魚の傍に行つてチヨツキ摘んで居ると、おば様がえらいお節ですね、風がひいてかないかと心配でれと仰つしやる、氷々と呼んで來た、いつもなら直ぐ呼ぶのだけれど……、夕方行水すまして色縞の浴衣と着換へる、漸う生き歸つた様だ、頼みもしない新聞おいて行くから、九州新聞お断りと門にはつておく、夕方淋しいからオルガン引く。

玉出の一日

大阪　香露

きふのは久し振で玉出の別莊へ行つた、おかげで非常に疲れて、今朝八時に床を離れた、大變な疲功だと奇しく思つた、それから昨日姉様から頂いたバラの木を鉢植にした、そして一人玉出の一日を思ひ浮べた、實に樂しい一日なりしとそゞろ姉様を懐しく思つた、書狀は明日と止めて、昨日姉様に借りて來た本を讀み始めた、豆腐屋の鈴が門口で鳴つた時、私は又夕食の用意に働き始めた、食後一人淋しく庭に立つた時は、早四邊は夜の世界に化せられて居た、月はみ空高く青く清く輝いて居た而して又玉出の一日を思ひ廻らした、ふとバラの木に氣付いて見やればやはり鉢の中に平然と……、あゝ其氣高い姿!!、あゝ姉様!!、私は危く呼ぶ所であつた、そして樂しき玉出の一日を無言で語つた、早夜は大分更けたらしい。

ヒヤシンス

愛媛　小百合

泳ぎに行つた弟は、今しがた一本のヒヤシンスをもつて歸つて來たが嬉し相に花壇の前のぬり池になげ込んだ、水がはれて波だつと、浮いて居た小鮒は驚いて深うへ身をひそめてしまつた、池の面にはヒヤシンスがひとり淋しげに淡紫の花をゆるがせて。

まあ可愛い事、花瓣の色のよさ、その眞中の黄紋がまたきわだつて美しい、私は田舍の清い乙女の様な心地がして大好き!●

翌朝みるとあの可愛い花が一輪もない、どうしたのかと心配顔してのぞきこむと、色あせて凋んだ花を水の中に沈めて折れ曲つて居る、まあ何といじらしい花であろふか、みにくい姿を見せまいとは、あゝ人もかく有りたきものよと、しばしこのいたましい花をみつめてゐた。



書簡文

新婚の友へ

神戸　ゆかり子

御樂しさに輝き渡る樣なるお手紙誠に御芽出度拜見致候。朝の御散歩夕涼の御樣子、御樂し氣なるお言葉の端々、 お手放のおのろけには少々恐入候。公私のお集にもお馴れ遊し候由、誠に結構に御座候、然し露子樣變れば替る物に候よ。 まだ御一緒に寄宿舍に居候頃、君には運動會も嫌ひ、音樂會も面白からずとて御許樣の獨唱をプログラムの花と樂み居られし師の君を御假病して失望させられし事もおはせしに。又私共の故鄕戀し父母戀しと泣き、又は理想のハスなどと騷候折、親も嫌ひ、兄弟も頼りにならず、まして心も知らぬ人を夫と嫁づくなど思ふさへいや、只深山隱の月を友に琴など彈じて思ふ樣泣いて〳〵泣きあかし度しなど、言はれしたびに、私はあたら才色兼備の君をと笑止に思ひし事も候ひしが。さても〳〵今日のお手紙にて全く安心仕候。此頃の君の御幸福は此の御緣を無理にお勸めせし私共の効か、優しき背の君の愛の御力か。又は不幸に過されし御半生の御歷史の賜に候か。隔なきまゝのざれ言許し給ひてよ。(一等)

野山の趣を報ず

福岡　葉子

文子さん、私は草深い田舍に歸つてもう一旬を過しました、 折角上手になつたツヰンナ髷も、母が大變にいやがりますから。十九世紀的の髮にかへました、此度御目にかゝる時は又どんな田舍娘にかはりますやら只今山里は蟬の聲が滿ちて居ます、私は蟬と聲の出しつくらしていたづらの弟等を叱つて居ます。毎日蟬追ひや魚取りで着物を汚す事それは御話になりません、花は今活けられるのは野百合と桔梗ばかりよ、 今朝早く露草を蹈んで野百合をとつて來て活けました、當年三歲の妹が花をとつて仕方がありません、もう今日中には此の百合君は坊さんとなつてしまひます、明朝は又桔梗とりに山に遊ぶ筈です、 良い花がありましたら後便に封じて御目にかけませう、(二等)

愛兒を亡ひし友に

淺草　一本千代子

御玉章うれしく拜し候に、いたましき御事のみかいつられ玉へるぞうたてきや、神ならぬ身の、 今日かゝる御なげきの程承り候はんとは露思ひもよらざる事にて候へば、夢にてはあらじか。 御筆のあやまりに非じかと胸おししづめ幾度かくりかへし候らへど、まがふかたなき御筆の跡なればいかゞはせん、仰の如く世は假寢の夢のやうに候へば、 飽かず戀しく思召され候御身はなほ〳〵現の事とはおぼし分らせ玉ふまじく、御さつし申も仲々になん、さりながらなほ二本の撫子さへおはしまし候事故、何とぞ御心を鬼に遊ばされ度候、かくの如き事申上候へば、 情知らぬ友

よと仰めしく覺へ玉ふめれど、昔は昔も今も同じ事に候へば、御幸麗のあまり御いたづきなど引起させ給ふ事もやと、おれ〳〵しきを打忘れつたなき事申上候も、つばさならべし秋の島の友千鳥の、常にへだてなき睦むにこそと見なほし聞なほし給へや〳〵(三等)

都の妹に

大分 瀧とみ子

昨夕長月夜の偕崎へ行て見ました、総蓑は露を噛むで居る、露は涙として動かぬ。涙が露つか露が涙つか、この雰囲を見るにつけても、京都の寂い人間が懐しい。

青い若々しい葉や、白い清麗な萩の花が牡丹色に映える川水を覗いて調子好く揺れる。美しい水は優しく咲いて汀の月見草に觸れる。深いので鳥渡底の砂は見えぬ。川下にクル〳〵と渦が捲いて、其處に流れて来た水草が二三度廻つて、スーと吸ひ込まれる。危いのは月見草の運命、綺麗の責は日が暮れた。

誤つて白紙に一點墨を落した。お清書にも使へぬ、書も描けぬ。何にするにも其墨が邪魔になる。坊ちやんの鼻を拭いて屑つて反古籠に入れた。女は操が大切です。(寄稿)

繪端書にて

東京 若紫

第一信仙臺より

今朝の六時から夕の七時迄の十三時間を、ゆられ〳〵てやつと仙臺に着きました、何しろ本ずの見物とて休む暇もなく、直ぐ市中を見物に行きました、中々廣う御座います。これは只今家共の居ります仙臺ホテルの前の景色です。

第二信松島にて

まあ島の澤山あります事、八百八島と申すけれど、これ程とは思ひませんでした。三景の一つで御座いますから景色は申すまでもありませんけれど、其の名程松は御座いませんのよ。この繪の烏帽子島の處が私一番好きです。(寄稿)

妹に結婚を勸む

須磨 俊子

御兄様よりの御手紙御覧遊ばされし事と存じ候。かよわき女の御許様に一家を興してもとて、萬事責任を負はせ参する事、誠に情として忍び難く候へ共、遂夫様にも、入夫の件快く御承諾なされし事にてもあれば、卒情御汲み取り下され候うて、何卒情を忍びて御結婚なし下され候様、呉々も御願ひ申上候。

なほ御兄様御病氣は必ず全快致すべしと固く信じて、御看護申上候へども、何分長引く病にて候へば、私共結婚の事などは當分思ひ設けず候間、妹が先になどの御遠慮さら〳〵遊ばされ間敷、此段私より特に御願ひ申上げ候。(寄稿)

親しき友の許に

東京 坂本双葉

千草にすだく虫の聲々、いよ〳〵細りて、月影寂しき秋の景色如何に眺め給ふらんかと、思ひ参らするさへ、いとゞ悲しうこそ、露の雫に濡るゝは庭の草木のみかは、干しわづらふ袖をも、少しは哀れと思しやらせ給へや。聞え上げたき事は、澤山ありながら筆澁りて思ふ儘ならず萬は

お月もじの上御物語り致したく、なれど今の身の上にては訪ひ參らするよすがもなきゆゑ、たゞ〳〵、涙に咽ぶ胸のせつなさ。泣く子哀れと思し給はゞ、露けき庭の戸ぼそまで、訪ひ給はれかし。かしこ。

湖畔便り

近江　麗子

妙さま私今裏の小川に沿ふて山へ上りましたの、太陽は西の山の陰に今や入らんとして比叡山のあたり連峯に霞んで居ります、夕風そよそよと私の浴衣の長袖を吹いて快く〳〵、聞ゆるものは蛙の聲ばかりで靜かなものです、もう峯も黑く一の塊となつて、琵琶の湖は濃い鼠色になり、西の空の赤かつたのもいつしか消えて、いよ〳〵夜の幕の落ちんとする時湖畔れに洩るゝ燈火二三つ、三井の鐘の音はゴォーンと胸の底までも沁み入るやうです、妙さま私は思ひましたよ、始めて詩てふものを……。

千本濱の風景

沼津　高木喜代子

照さん、お懐しうございます。「夕顔棚の下涼みに睦じき物語せしは過去と過ぎて、追憶の深き印象と相成申候」との親玉章の一節は、忘れずに暗誦んじて居ります。併し夕顔の棚はなくとも千本濱の夕暮を彷徨ふ身は、誠に愉快でございます。いつぞや貴女と二人で松崎の渚を歩いて居た時、若い男に尾けられて困つた事など思ひ出しますよ。私は今弟（春樹）を連れて並木の中を逍つて居ります。今宵は生憎月なけれど並木越に透いて見える黑い海に點々幾つかの漁火が見えるさまは、マア何といふ佳い景色でせう、照さん。風に漂つてかすかに聞えて來るのは曾て記憶のある曲、アフーレフイなのです、木蔭に好い處よ、照さんお出でなさい待つてます。

姉樣へ

靜岡　丘靜子

十年前、柿の葉が赤くなつて、百舌が喧しく鳴始めた頃、姉樣は不意に佐樣に連れられて行つてお了ひになつた。一人ぼつちになつた後の私はどんなに寂しかつたか、察して下さい。年がかはる毎に、今年は〳〵とお歸りを待つて居たのです。東西相距る百五十里、何を申すにも喉の無いお互の身では、如何にあせつても聞えても、夢より外にお逢ひする事は出來ないものと諦めて居た所へ突然あのお知らせを受けたので、私はボーッとなつて涙が頰を流れました。あゝ數日の後には十年目でお目にかゝられるかと思ふと、胸中がぞく〳〵する程嬉しくつて既う何も言へません。お懐しい姉樣！一日も早く來て下さい、待つてゐますよ！待つてゐますよ!!!

月見に友を招く

廣島　しのぶ

今宵こそは三日月の頃より待ちに待ちたる望の夜に候、いと晴れ渡りたる空の景色、三五の月影さこそと思はれ候まゝ、いかで空しく過されべき。何許りの設も得致さず候へども、先つ頃新築致し候所に心おきなき友がき御招き申上げ、月見のまれ事致し度、草の庵に蟲の音を琴と聞き、歌など詠み明さんはなか〳〵に興多からんと存じ候まゝ、夕暮の風に御單衣袖吹かせ給ひ、川添の道が麗に月の登らぬうちにお出で下され候はゞ、こよなう嬉しう存じ候、先づは御招きまで、よろづは御目もじの節にと殘しおき候、かしこ。

結婚せる友へ

越後　花子

妙様御健かでございますよ、何故打明けて仰有つて下さいませんの、只の御目出度の様におとぼけ遊ばしまして、　私は口惜しくて口惜しくてなりません、私の時など夫の見合寫眞まで御見せして、御相談したぢやありませんか、その惚氣話させて置き乍ら、御自分はコッソリホネームーンの途に御つきなさるなんて、あんまりよ、姉よ妹よと契りしは嘗の夢と遊ばす御つもりですか、私は今も姉様と賴んでゐるものを、さりとは…、　私は夕顔の白う暮れ殘つた窓に泣きぢやくつて居ります、オヤ御恨許り申上てすみません、永久の妹ある光明の夢を作つて頂戴な、そして旅路の妹の事も時々は思ひ出してね。さよなら。

姉の事を

下関　松山瀧子

お母さんと土用干をしました。私は毎年この土用干をお母さんとする度毎に亡くなつた姉の事を思ひ出して、お母さんと話し合ひます。そして干した着物を見ては涙を流して懐しみます、私は本統に姉が懐しくて干した着物を見ると、姉さんがそれを着て居られた事があり〱と目に浮んで、思はず姉さんと言つた事も度々あります。

姉は能く私を可愛がつて呉れました。あゝ姉が生きて居たら私も貴女のやうに姉さんに可愛がられることでありませう、眞實に私は貴女が羨ましくてなりません。

従妹の許に

東京　たづ子

清子様御手紙有難う、私の故の事に就いての御意見よく分りましてよ貴女も御歸り匆々、降る様な御話では、今年中も駄目よ、來春は丸善拜見に伺ひますわ「然し東京の生活に馴れた身には、單純な田園生活が懐しい」なんて、そんな事仰しやるから都へ出るとやれハイカラになるの生意氣のと言はれるのよ、私田舎なら幾年でもいゝわ、あの氣高い富士の峰、松原越しの青海原に白帆の三つ四つ、床しい野中の秋祭、あゝ懐しい、あなたは嘸ぞ上り下りの汽車の響に郷戀しい胸を躍らせて居るのでせうね、私も何かにつけてあなたが思ひ出されますの…、

親しき友に

岩代　岡美都子

御文嬉しく拜見致しました、眞ちやんは嘸ぞお可愛らしうお成り遊ばしたでせうね、私いつも思ひ出しては、飯事致した私達の幼な時代を思ひ浮べて笑つてゐます、いつも母様役だつた貴女は眞實の母様になられ、前髪で島田を結つて喜んでゐた私がこんなに大きくなつたのですもの、過去はまるで夢でございますね。昨日久し振で森の六地藏様へお詣致しましたら、手がかけたりお顔がかけたり、實に見るかげもない御樣子に、なつて了ひました、よく遊びに行つた頃を思ひ出して、石を積んだり花をあげたりして來ました。お盆においでの折には御一緒に參つてヨダレ掛でも奉納致しませうね、かしこ。

お詫びの手紙

大阪　盛岡米子

昨日は御見舞下すつてありがたう、御深切身にしみて思はず涙にくれ

ました、あまり淋しいものですから、御迷惑とは存じながら、ついお止め申してすみませんでした。

お見送りして歸つた時はもう電燈がついて居りましたので、心配で堪りませんでした、

其節御山お裏み下さいました林檎大變いゝ味でした、厚く御禮申上げます、

もう一週間もすれば退院が出來るだらうと、院長さまも仰有つて下さいますので、一日千秋の思ひで待つて居ります。

田舍より

美濃秀子

姉樣、今朝水野樣御夫婦は御立ちなさいましてよ、御母樣はお留守中ですし、御父樣は御忙しいし、私眞實にどうしやうかと思ひましたわ、まだ一度も一人だちで御客樣に應接した事のない私でせう、それに田舍の事とて料理の材料はありませんし、泣き出し度い位の處を耐て、不行屆きながら一週間居て戴きました、我田に水かは存じませんが、さ程御不快の樣もみえませんでした、でなんだかこう自分がえらくなつた樣な氣がしますわ、今度の機會に依て實技りに就ての經驗がふへた樣で……い

詩中の人より

四谷みち子

文子樣、お便りほんとにうれしく、幾度もくりかへして拜見致しました、いつも御丈夫なのが何より御結構でございます、白いベッドに横はつて、淋しい病院の一室にこうして苦しい寂しい境遇にゐる私は、何と不幸なものでせう、大好きな歌も、もう自分自身が詩の人のやうに思はれて、夢もくつて何も思ひ出すことが出來なくなつてしまひました、この頃の夕、あの石橋のあたりに浴衣の袂を胸にいだいて歌思つてゐらつしやるあなたの影が目の前に見えるやう、あゝ早くなほりたい、あゝこの庭のくちなしの白い花がホロホロと散つてる、淋しいわ、今度の日曜日に是非入らして頂戴な、まつてゝよ、

湘南の友に

東京とよ子

靜ちやん、お手紙ありがたう、御文面によると近頃大變御悲觀ね、人生は果敢ないつて、馬鹿な事仰有い。それから毎晩波の面を見つめては深き思ひに沈むのですつてネ、なかなかいわ、何が其の思ひの種なの歌へて頂戴な靜ちやん、私の事何と仰有つて、姉妹よと指切りまでしたでせうその姉さんにもいへない事なの、然し「逢へば南山の節も短く惜れば假寐の一期も長し」とか、全く思ひ樣で、何うにもなるもの、まあ御用心遊ばせよ、青い顏して「神經衰弱よ」なんて言つてはいやですよ。お願だからね、あゝそれから兄樣おすこやかですか。あの節がよろしく申したと仰有て下さい。

都の弟に

三島遠山榮子

昨日御投函の手紙が今朝到着した。學校も追々昇級したと見えて、大層字が上手になつたね、始めて與書を見た時には思想とは一寸受取れなかつた。益勉强するがよい。申し越しの木兵用軍刀は姉さんが稍々奮發して、上等のを買つて樽の箱に入て小包で送ることゝした、然し萬一行儀が惡かつたら神田の義郎さんに上げて了ふからそう思ひなさい。



俳句

天

筆談に暮れ行く夏の海しづか　清津　板井たか子

地

馬盥に鮋折り／＼夜半の秋　廣島　小松小夜子

人

張板に庭せき家や茄子の花　愛媛　曾我操

秀逸

去來する雲に雨なし蟬の聲　釜山　朱雀とも子

山の井の眞菰揚げ行く避暑娘　若狹　三井富美子

紫の花見付けたり露の原　芝　鈴木壽子

咲初めの色香奪し菊の花　京橋　毛利園子

邪魔になる木の由來聞く月見哉　埼玉　操子

心太樹下石上の苔青し　三重　やす子

秋萩は露も匂ふてこぼれけり　小石川　宮島玉江

蜩や竹の伏見の雨あがり　宇都宮　稲原廣子

姉と妹と歌隱し合ふ星まつり　愛媛　近藤とめ

今朝の秋僧になりたる人戀し　神戸　森本豐子

緋牡丹の二尺の袖の色褪せぬ　臺北　田代はな子

赤き色を雨になやむや蓮線花　越後　北岡倭文子

言傳も物うき今日の暑さかな　盛岡　松田清江

風鈴に蜘蛛糸引きて蒸暑き　越後　淺野こも

川涼み船上に咲く玉子菊　深川　鯉沼ますゑ

香水のこぼれて咲くや菊の花　丹後　宮崎美子

千頃の穗なみに庄屋のゑまひかな　神戸　森中かす子

氣高さよ池に白蓮御堂　筑前　竹内あき子

くものすに珠をころばす白雨哉　岡山　松浦鵑女

梅干や風にひら／＼池の水　美作　田鶴子

歌想ふ窓にさわがし蟬のこゑ　埼玉　近藤ふぢ子

鮎の飛ぶ影は小笹の流れ哉　大阪　小野秀子

藍の香も嬉しき君が單衣かな　三重　早川百合枝

おしろいの花にも露の化粧かな　香川　瀬川雪枝

鈴蟲のなくかげ見ゆる月夜哉　札幌　加藤雪子
松蔭の木肌流るゝ暑さかな　下關　安部しげ子
若竹のつゆにいろます夏の月　岐阜　今井管子
蟲の音の墻居に洩るゝ殘暑かな　大阪　菅御花子
夕顏の葉かげに小さき蟲の聲　近江　なみ子
隣の茶居古りし縁な日暮かな　大阪　まさ江
長き夜や燈籠の灯のほのぐらき　東京　花代子
結實め數かぞへ居る並木かな　伊勢　佐々木らく
薄化粧の消えし恨みや朝の月　下谷　增野玉枝
短夜や燈明臺の灯の殘る　大阪　石川芳子
夕立に仕舞ひ忘れし干飯かな　本所　小林のぶ子
こほろぎのはつ音にむせぶ夫の留守　宇都宮　大内美鶴子
折鶴を下げて蠅追ふ夏座敷　栃木　金鳳子
牛追ひし若き日思ふ花野哉　神戸　荒牧とく子
淋しさにそへる詩吟や秋の月　横濱　吉川志佐子
鬼灯をふき得し稚兒の笑ひかな　信濃　とし子
遠く夏をやぶれ扇に一句哉　山形　柳河日和女
夏やせや美はしき人の凄きまで　牛込　輝子
京人の眞白き顏や夏のつき　東京　山田はな
玉樓の欄も涼し夏の月　磐城　眞田りゑ子
夕立の晴れ間を蟬の噪しき　淺草　たま
なき友へたむけし百合に蝶一つ　赤坂　元森みつ子
秋立ちて机に一つや團扇　東京　石坂きよ子
物干しの闇に人聲や遠花火　茅ヶ崎　龜山いれ子
怪ありと聞く古寺や秋の雨　横濱　山崎京子

老松に蟬の來て鳴く暑さかな　長崎　井村絹子
十六夜をたゞひとり見る旅の宿　深川　泉月華江
夕風に露拂ふ女郎花　麻布　遠藤留子
歸省する姪は直し夕涼　韓國　曙子
なき人を偲めて懐しき蚊帳かな　本所　生田修子
紫陽花の窓の灯や夕嵐　麹町　牧野銀杏
萩の戸に人まつむしやつくし琴　東京　下紫
月かげの洩れて涼しき竹の露　作州　多美子
大島小島飛び飛びにある秋の海　下關　松山繁子
涼げに見えて風なき月夜かな　美作　多笑子
紋つきは母のゆづりや土用干　土佐　美都
妻といふ名に馴れ今日の初袷　大阪　ちどり
山家住や見上ぐる百合の風薫る　栃木　波多野篤子
父逝きて淋しき庵や月見草　日本橋　千葉幸江
別莊の涼しき庭や盥の音　福島　佐間蝶子
豆腐きる音の忙しき梅雨　東京　三宅はな
武者一騎朝霧の川渡りけり　下總　小出保子
京人の眞白き顏や夏の月　深川　佐久間貞子
瓜畑に一人さびしや夏の月　豐前　山脇みちの
夕なぎにねむる社ののぼり旗　下關　武田春枝
ひぐらしの聲かすかなり夕涼　伊豆　白菊
魂祭り貧の一盞さゝげゝり　三島　遠山雪子
蝶したふ車の上やおみなめし　深川　秋山いるな
職人街露店の塵や二寸五分　韓國　飯田睦子
かれつけて弱氣な武士や銀扇の秋　本郷　壬生鳥花



美文

母のこゝろ

山梨　櫻子

「では氣を注けてね、お祖母さんに宜しく、我儘を云ふんではありませんよ」と思はず東窓に寄り添ふ間もなく列車は徐々と動き出した、窓から頻に此方を見て居る道夫の顔もだん〳〵小くなつて、果ては山の端に汽車の影も隠れて了つた、甲府から福島までを十一歳の兒が獨旅、「よく思ひ切つてお遣し遊ばす」つて昨夜もお隣の奥様が驚いて居らした、何も經驗の爲と勵まし立たせてはやつたものゝ、若しやと思ふと箭の樣に不安の念が胸ん刺す、新宿と赤羽の乘換へを呉々も云ひ含めて置いたけれど……、福島へ着いたら子よりも可愛い孫の初旅、母が何底に喜ぶだらう？、道夫もさぞ得意になつて……、不圖氣が注くと廣いプラットホームに私只獨、改札口で驛夫が怪し氣に此方を見て居た、（一等）

追想

越後　侯文子

釣から歸つて被居た兄樣の投出した魚籠の前に踞んで、がサ〳〵とはひ出る宿借貝を面白くてたまらなさうにイヂり乍ら、白いエプロンのみち子は、「これ何處で捕つてらしたの？」といふ、兄樣は足を洗ひ乍ら「海さ」と答へる、「海つてどんな處據やもちれてつて頂戴な」、又こびる樣にいふ、「遠いんだぞ、此から御山迄よ、廣くて深いんだ、もつと大きくならなきや駄目さ」、こんな貝が澤山とれてどんないゝ處だらうと小さな頭に想像し乍ら、「遠くたつて　」と見惚れてゐる、

私は胸に病を得てから、日毎〳〵海邊を逍ふ身となつた、水や空なる沖眺めては宿借貝によつて海を戀うたその少女時代に追想して、熱い涙は止度なく溢れる、大きな殻しよつて宿借貝はがサ〳〵とはつてゐる（二等）

病みし日

牛込　佳菊

一昨日から咽喉が痛むので、稽盤へも行かず、家にばかりごろ〳〵して居る、少し風邪を引いても直ぐ咽喉の痛むのが私の癖だが、今度は頭も痛むので、床の上に横に成つてうつ〳〵して居ると、ふと過ぎし日の事を思ひ出した、今迄も幾度か早く何處かへ嫁ぐやうにと皆んなからいはれたが、其度毎にどうしても稽に執着心が残つて嫁ぐ氣に成れぬので了氣なく斷つてしまつたが、斯う病んで靜かに考へて見ると、追々年を重ぬる父や弱い母にいつ迄も心配を懸けるより、一人の妹に成功を望んで自分は犠牲に成つてしまはうかとも思ふ、其れにしても今迄私に望を持つていらした母はどう思ひなさるだらう　成功もせずに止したら今迄の苦樂は何んと思ひなさるかと思ふと、理もなく涙が溢れて來る（三等）

こほろぎ

美作　青山いま子

この頃の身の衰へ、いつそ何もかも打明けてしまつたら、少しは胸も晴れやうかと、里の母へ書きかけた文は、又むないい偽りのうれしい事ばかりとなつてしまつた、それでもそは〳〵と打ち返し〳〵、なつかしい母の名を見ますれば、白づとよき空想にまつはられて何事をも忘れてゐた。

ふと窓近くこほろぎが啼き始めた、夜は深く更けてゐる、細くかなしいその聲に耳を澄ましてゐると、張りつめた力が溶けてゆくやうに心はそくなつて、もう胸が一杯になつた、廣い家に妾は今一人ゐる。(秀逸)

舟遊びの記

德島　天野貞子

朝四時裏の岸から舟を流す、心地いゝ朝風に送られて海際迄出た時、キラ〳〵と太陽が上つた、兄様は釣糸を垂す、お料理道具は総ての用意鯛か鱸かと一同待頭、小さな〳〵鯛が一匹かゝつて面白かつた、津田港に舟をよせて三景樓に上る、洋々たる海を隔てゝほのかに見ゆる淡路紀伊の島山、嗚あの絵の様な中にいまを樣はいらつしやるのだらうとそゞろなつかしさに堪へなかつた、阿州沖の洲は手も届く許り、數十の漁船は贅銭に潑剌として躍る鮮魚の男ましきを躍ばしめる、波をけ立てゝ十二丁艪丸が入つて來たと共に階下の騒しさもやんで終ふ、午後綾緬の樣な濱の眞砂をふんで海水浴に行く、再び船に歸つた時淡路紀伊を包んだ暮色は正に阿州を覆はんとして居た、漕出すと涼しい月が上つた、軸の音で見慣の竹の音が響いたよ(秀逸)

夏の朝

東京　水野録子

お姉様、昨夜の雨御存じでゐらつしやますの?、すゐゝゝ蚊がひどい降りで御座いましたよ、つて雨戸繰りながら清やは云ふ、白河の關の道路程かならねど思ひしも宜なるかな、其の名殘りは樹々の緑に一層の色を添へて朝日に映ゆる樣の心地よさよ、コバルトの空はまばゆけれど、絶えず凉風は青傘に舞ふて、冷露は玉と散る、タツキリと白うわけたる百合花一輪、ボンネットの花に相應しき風情、隣れる秋海棠の優形も亦捨て難く、老松に寄生れるみん〳〵蟬の聲も、油蟬の其れとは事異りておかしく聞ゆ、(秀逸)

朝の電車

牛込　輝子

車掌が、もう切符のないお方は有りませんか、割引が上げますからと大きな聲でどなると、あつちからもこつちからも手がによき〳〵と出るすると私の席から三人目の魚の兄イと云つたいなせな男が、ちよいと須田町で日本橋乗換頂戴なと、黄色い聲を出したので、皆がどつと吹き出した、

又暫くしておいた……と云ふ聲に、何事かと思つて見ると、車掌があなた何所も踏みはしませんよと云ふと、其兄イ先生、あそうか、踏まれてから云つたのぢあ駄目だから、前から要心に云つといたんだいと平氣な顔をして居るので、車中は又もやどつと大笑ひ、

川開きの夜

牛込　平塚白百合

お叔母様と美枝さんは、下女をつれて川開きへ出かけた、行く時恰度出合つたので、「一寸其處迄」と云つた切り、「あなたも如何」とも何とも云はない、勿論行きはしないけれど萬事にこうふるまはれるので、つくづく薫子は見じめなものだと思つた、むやりに雜誌をひろひ讀してゐると、あやしかつた空は案の條、植込をたゝいての俄降り、

サーつとふる音をきいてゐると、燃えるやうに込み上げてゐた胸が平らかになつて、何だか勝ち得たやうな戦情者が胸一ぱいになつた、木村（書生）が余の用意であはてゝゐるこゑを冷やかに聞きながら淋しくほほゑんだ、

叔母はこんなにしてひれくれてゆくのではないかしら。

母を偲ふ

東京　野村元子

久々の上京とて兄上嫂上ら最と優しくもてなして下さる、うつかり話してる間に何時か一時も過ぎてゐるので、驚いてまあお眠むかつたでしよう姉様におそく迄と云ふと、嫂上は、否此方はちつとも構はないんですよ、ほんとにね、折角来なすつてもお母さんが入被らないから氣の毒だつて今日も云つてたんですよと仰る、併お前は勞れたらう、話は又明日にしてゆつくりお休みと兄上も云つて下さるので、其ではと挨拶して寝屋へ行く、嫂上も来られて夜衣を出したり雜誌を見せて下さるやら種々と世話みもて、ゆつくりお眠みなさいと靜に彼方へ行れた、獨に寝の響れを覚てほつと息した刹那、目に入る床の琴、あゝ懐しい姉と日頃姉様の三味線とあの琴とよく合奏て頂いた、彼のお琴も嫂さん来たのと悦んで下さるお顔も此世では最う見る事は出来ない、姉様、妹は来て居ますよと胸の中で呼んで、思はず泣き伏した、明日は亡母の一周忌です

親ごゝろ

京都　雪子

オヤもう十二時だ、又花子が裏庭な顔してお腹をへらして歸つて来るだらうと晝御飯の支度して置て年端の者妹に授乳してゐたら、急に門が騒がしくなつた、何事だらうと聞耳たてゝゐると、子供が電車にしかれて脚が二ツになつてるなどいふ聲が耳に入る、ハツとして胸はおどつた、もしや花子が幼稚園の歸りにうつかりしてでたのではあるまいかと、思ふと、心配でく立ても居ても居られず、ハラく氣をもむ、傍に年端は何に驚いたか火の付た様に泣きだしたが、もうロツトしてゐる事も出来ず、いそぎ足に門を出る、出合ひ頭らに花子は只今と言つて歸つて来たヤレうれしやと思ふよりも先きに、夢中でシツカリとだきくめてゐた。

秋草

深山　星百合子

秋をほこり顔なる白萩の、おく白露に澄む月影を宿し、下葉は枝になく蟲のゆするにまかせ、低ううなだれて露重げなる風情、優しき袖の振りにこそ、

秋の花の中わきて氣高くやさしきは白菊になん、日さへたる夜におく露もうらます玉と輝くなど床しともゆかし、野菊は靜ま小川の畔に淋し

げにまける哀れになつかし、

まがきの下にやさしく笑める桔梗の、吹く秋風に花は花とゆれ葉は葉とさゝやけるも又なく美し、

色もゆかりのうす紫、藤袴とは誰が名づけしや、いとめづらかなり、

誰れまねくらん花薄の、月ならで言づる人の無きを寂しとや、哀れなるかな、

海邊の一日

房州　岩波篤子

午睡してた千代子が、急に飛び起きて、「磯に行きまちよう、ね、よう」と鼻を鳴らす、まあ烏頭の黒くなつた事、ホヽヽヽまるで純粋の濱の子だ、島の上に始めては、義姉様の御心配がと、無理に止めて、金魚を漲讃ませてやく、「波にゆられてねコツトノホイ」、唱歌が聞ゆる、兄様は歸つて來た、千代子を買つて、昨日取つてきた寫眞青年宵を見に行く、宵の御内儀さんが縁に居たから一寸言葉をかけたら、御手紙がと出してくれた、まあ嬉しい愛子さんからの、しかも大封はつて、さぞや銚子濱の屛風岩探検記が記されてあらう、銚子つてどんな所だらう、

前がみ

四谷　藤袴

小柴垣のかなた、小さい足音に續いてちらと肉色のへこ帶がみえた、やがて枝折戸おしあけて、「姉様」とすみちやんがきた、唐縮緬の單衣に赤いリボンなかけて今年十一のいたずら盛り、「姉様分らない？私前がみあげたのよ」と自慢さう、「まあ知らなかつたわ、よく似合ふ事」と云ひとまも嬉しさう、あゝすみちやん此次にはやがて額上が下りるのだ、そして無稚さなお下がマガレツトとなり、桃割となり、こればかり子供のかたみの額上も下ろされて、無邪氣なほゝゑみは人にこびる笑となりやがて高島田、丸まげとかうして女盛りもすぎてしまふのだと、思ふと私は何だか云ひしれぬ寂しさを感じて、じつとすみちやんを眺めた、すみちやんは嬉しさうににこ／＼して居る、

夜のながめ

本郷　小谷彌生

黒雲もおさまつて雨は今止んだ、泉水をかこむ木々の緑のすが／＼しう光てゐる中に、唯一本赤い／＼紅葉、春の芽葉の頃から色濃く美しかつたが、雨にうたれて一層あざやかになつた、月の昇るを待ち顔に花を飾つた月見草はしほらしく立つ、恐ろしい雨音にさえぎられてゐた噴水も急に音高くはやし出すと、金魚も喜んで麩を食ひ、蛙も嬉しそうに飛び歩く、振袖の色にしたい様な碧く澄んだ空に、月姫は静々と昇る、ゆかしい眺めに我れにもなや「月見れば」の曲を琴高らかに、折柄坐敷の下の草むらから、これも同じ心でか、涼しい聲にリン／＼と、鳴けよ鈴虫、松虫も鳴け、めでゝ猶く美しき今宵のながめを、

振袖

若松　峰子

今日も朝から雨が降る、しめやかにさゞめく音を聞きながらぼんやりしこ居ると、「京ちやん用がないなら一寸お座敷まで來て下さい」と母様のお聲がする、何だらうと思ひながらおづ／＼お座へ行くと、「あの是れ

なお前に上げようと思ふのしと古代紫に金糸と銀糸で秋草を縫ひとつた目の覚めるやうなお振袖をお見せになる、マアりつぱなとびつくりすると、「是れはねお前のお祖母様がお若い頃将軍様の御前でお踊りなすつた時お召しになつたものだそうです、母様が此家へ嫁た時お祖母様から頂いたものですが、私も年をとつて振袖も着られまいからお前に上げませう、お形見なのだから大切になさいよ」と私の手にお渡しなさる、其昔今小町とうたはれたお祖母様が、此振袖召してお踊りなすつた時の花の姿が目に見える様で、何とも言はれぬ嬉しい思がした、

忘れ得ぬ君

福島　高野その子

今宵の様な夜であつた、よせては返す波の音も、白砂に描く松の影も今宵其まゝの夜であつた、折から床しい琴の妙なる調べ、只もう私はうつとりときいた、其翌日保養館にいらしたのはときいた時、百合子様、とか御美くしい都の御方と人は云つた、懐かしき御名よ、百合子様、都人……、淡からぬえにしある様に私は懐かしくて堪らなかつた、斯くして床しき君が調べに幾夜慰められたであらう、

二三月降り続いた雨の晴れた或夕、見知らぬ君を訪れた時にはあゝ君は再び病を得て都に迎へられた翌日であつた、

其夜は遂に眠れなかつた、それからはもう二ヶ年、忘れ得ぬ君百合子様は、其後どう遊ばした事であらう、

其の翌日

山形　作田　[illegible]子

昨日までも兄様と呼んだ其人を、今日からモー良人と仰ぐなどゝは全く夢にも思はなかつた、

それにしても今後は何うなるだらう?、一家の主婦として又母として其責任を全くする事が出来るだらうか、などゝ考へて見ると、何だか恐ろしいやうな、又嬉しいやうな気もする、

常には慣れた我の室も、妙に気づまりて、一寸も落ちつかない、

つれづれ

東京　なでしこ

鬱陶しい空模様、何もかもかびだらけで、手のつけ様がない、雨を喜ぶものは草木ばかり、庭の木瓜は私の背より高くなつて、一寸ほどの葉がくれに三本なつてゐる、いやでいやで此春からおしやつておいたお召の着物の入替直しをする、嬉しい花の頃には毎日の遊山、人から御姉妹だなどゝひやかされたのも道理で、甲斐絹の裾が散々に切れてゐる、やつと直してホツト一息ついた、

厳島の夕

日本橋　澄　子

紅葉谷から渓流に沿ふた道を、愛らしい小鹿に戯れながら小山に登つた、夕日はいつしか山の端に消えて、三笠ヶ浜の沖にて紅玉の如な月が美くしく一條の金蛇を波上に漂はして居る、夢のやうな海原の真中に立てる大鳥居に夕潮が満ちて、岸辺の常夜燈は星の如く点ぜられた、島廻りの舟が帰て来たのだらう遠くでギー〱と櫓声がかすかに聞ゆる、

月光は益々さえて島はいつか夜の幕に包まれた、

讀者倶樂部

▲晶子先生の雑記帳は何んといふていゝのか、實に御えらひ力と感心致します、男子も及ばない書き振、而かも痛切です、そして他から見てかれこれ評する隙が無い、私は二十世紀の婦人種類の人として先生を尊敬して居ます。(京都かつ代)

▲皆さん如何でございます、回覧繪畫帖と云ふものを編んで、お互に繪畫の上達を計ろうではありませんか、既に私の友だち三四人の賛成者もあり、其の上に私の從兄達も骨を折つてやらうと申して居ります、御賛成のお方は御自分のお筆に成つた玉稿住所氏名明記の上私の方へお送り下さいまし、紙の大きさは中紙半折、畫の種類は和洋御随意です、巻末には餘白を作りまして各自に寸評する事と致します、紙の種類も御随意のこと……、兎に角第一回募集締切は九月十五日と致します、郵税や其他は私の方で引き受けます。(京都市[illegible]通松原上る東入上田町木田方皆木かよ子)

▲八月號誌上の告白を御かきになつた柳田富美子様御いたはしふ存じます、私もおぼえが御座いますよく御辛抱あそばします、どうぞ御自愛あそばしてね、何なら私あなたの御宿が伺ひたう御座いますわ、

同じく讀者倶樂部のあはれの愛の君、私本當に御同情申します、御差支なくは誌上で御住所御知らせ下さいまし、できます事なら、御相談相手になりたいと存じますから、御子様は女の方か男の方か、ほんとに御いたはしふ御座いますね、(白萩女)

▲お喜ひ申します花散里様、ゆく／＼は是非花散里文集を出して下さいな、お願ひです、私御文章の美しい方を見るとすぐ羨しさが胸いつぱいになりますの、私一生でもよいから綾さんのお側に居てそして習つて見たいと思ひますわ。(愛知縣名古屋市新柳町なでしこ)

▲此の度の大雨にて各地の水害は、去る四十年の其れよりも一層恐ろしきものゝよし、私共都の山の手に住む身は、唯新聞紙上にて知るのみに候か、定めし愛讀者皆々樣にも此の災罹られし御方もあらんと深く御案じ申上候、箱根の方も餘程酷しきよし、石内富枝様の御やかたは如何、御無事ならん事切に／＼いのり居り申候。(本郷小谷彌生)

▲花散里さん、あの萩香さんのすらりとした姫百合花の様なおすがたのお寫眞をおもらひあそばして、此の紙上に出して皆様にお目にかけて下さいまし、お待ちして居ますよ、(岐阜靜香)

▲御地も御暑い事と存じ上げます、當地は毎日毎日九十度以上、心も體もとろけさうです、先々月から御存じの討伐が行はれて居ますが、蕃地に有る勇士の身の上を考へると、いたづらに扇に涼を取り、氷をかんで呑氣にして居られません、慰問袋や其他演藝會や丸で三十七八年戰役の内地同様です、同情厚き皆の方々、遠く生國を離れ兇猛な野蠻人相手に可惜貴き軍人の命を落すのさへあります、殖民地に在る同胞に同情を垂れ給はん事を願ひます。(臺北淡余子)

▲牛込輝子様、御心あらばおいで遊ばせ、皆々さんの内で時間をむだに費さず、勉學餘暇等にいくらかの收入を得んと云ふ御方は、おいで遊ばせ、私方に先頃横濱の叔父より頼まれた歐米へ輸出する、きれいでわかりやすい編物の材料が澤山ございます、これは年中休みなしで割合に收入が多くあまり時間がかゝらぬ仕事です、たしかなお方と見ましたら、材料はいくらでも差上げますから、自宅で遊ばしませ、おわかりなさらぬところはくわしく御教へ申します、御一報下されば御相談いたします、住所はどうぞ記者様へ御聞き下さい。(麹町たけ子)

▲あはれの愛の君、御心の内充分御察し申しま

す、治らぬなど〻悪言を申しては駄目です病人の攝生と、心からの御みとりで必らず治ります、私はまだ若き乙女ですから確と申上る訳はありませんが、二年に近き病中に得た攝生法及び看護法とも云ふべき事ですが、申上て見たいと存じますの、お差支なくば御住所を御知らせ下さい、薄命なる乙女心より流露せし悲心やみがたく病床にて(某)

▲内藤千代子様のお作は、詩と歌を交ぜた様で美くしく花やかで、私大好です、上原さんのも鈴木さんのも結構ですれ、又富枝子様も實に面白く、幾度讀んでもあきません、皆様の内では萩香様の事を評つ調子の何の彼のと仰しやる方も有りますが、何と云つても千代子様は一種云ふに云ばれぬ妙味の有るお筆です、かういふ方の悲しい時の日記でも見せて頂くと屹度沈んで涙の出る様なのであらうと思ひます、以後どん〱お出しなさつて下さい、私共のハイカラな處が大好です。(横濱杉浦富枝)

▲内藤様御一家の方の御心盡しの待遇を受けられた精子様の御喜びと、松風を友として都よりは昔のふ人も稀れな鵠沼の千代子様のお噂しさと、まあどちらがより以上深く胸にひゞいた事でせう?精様の佳人の奇遇を讀みて、希望に満ちた御書きぶりに、自分までがうぞ諧まれて、微笑を禁じ得ませんでした、けれど今度のはいかにもお名残おしく悲しげな處がまざ〱とあらはれて、そゞろに涙を催しました、これと申すも一つは精子様の御氣が自由に働くからですれ。(本郷小谷順生)

▲大阪府下の石田愛子様、靜けき里に心ゆく友の君と彩筆とりて自然に親しみたまふ御羨しさほんとに御幸福で被居しやいますことー私の寓居は、湘南地で随分憧憬する様な畫材に富んで居りますよ、私も好きで出来もしないのに時々試みて見ますが、難しいものですれ、然し私はあなたと違つて故国遠く離れてこの濱邊に、わび住ひ、田舎の事にて趣味の友とてひとりもなく、淋しい榮養生活をいたして居る夢ない境遇、しみ〲寂しくなつて仕舞ひますの——(房州の濱にて孤子)

▲姉様方に私の最近の失敗を申上げます、私は前髪に少し癖がある爲め思ふようにふくらみません 、だからつひれ、よく雜誌に廣告が出てゐるでせう。女優諸師何々女史の多年實驗の整髪劑だなんて。それを私あでにして紹介してみましたの、そして小爲替で代價一圓五十錢送つたのよ。そしたらなるほど整髪劑を送つてくれましたが、何とかいふくせ直しの汁そつくりの品が瓶に入れてあるの、いくら使用したつて一すとも効なんかないわ、他にもこんなのが澤山あるやうですが、多くはヤマ師だらうと存じます。(隅田の堤露草)

▲過日靜香の號を以て投稿候。「鮎一尾高の花しろき流政」の揃旬入月號に天位に當選いたしなり候へども、いかゞ致せしにや、日本橋靜香と記しあり候。御手數ながら御訂正被下度候。(千葉靜香)

▲花散里様はあや子様でしたのれ、私此方のは大好きです、上品で落付いてゐらつしやるわ、御文を通して御品性の程もしのばれます、晶子様の古事記の歌、私共の様な田舎に居る者はどれ丈け有難いか分りません、あのキビ〱した御筆、讀んで氣持が宜しう御座います、どうぞ永く續けて下さいまし。(西の國にてつゆ子)

▲れえ皆様、人生は長い様で短い五十年ですもの、思ひきり華々しく暮さなければつまりませんわれえ、まして私共の時代な無意識にくすぶつて暮ふなんて實際つまらないぢや御座いませんか、誰かの様に「日陰の小草と育つが處女の美徳にこそ」なんて私あんまりだと思ひましたわれ、皆様、思ひつきり心のまゝに理想を試み空想にもわくがれ、間えもして平凡ならぬ月日な送りたう御座いますわれえ(名古屋市外御器所村吹上爽末の露)

▲記者様、四月一日發行の女學世界に出ておりました西澤豐子様は、米國の何と言ふ所にてビズネスを持つて居られたのでせう、若し御存じなら教へて下さい、私も理髪に付ては少し經驗もありますが、桑港附近で白婦人の理髪をする日本婦人は未だ聞いたことがありません、尙シヤトル市には軒をならべて日本婦人が理髪を營んで居られるさうですが、是れも當地と變らず男子だけ理髪するのに止まるのです、何卒御知らせ下さい、(桑港西川鈴子)——小石川區[illegible]町力行會女學校内岡女史へ宛てゝ御問合せ下さい

▲藤川様、あなたは何等かの動機に由り、肯ての思も枯れはてゝ、過去を追はず、現在未來を想はず、唯永劫に清く美しき偉大なる自然を友とし、運命の極みまで行かるゝ由、御胸中深く御推察申上ます、私も去る頃より人生の實に儚なきをしみぐゝと感じ、たゞ自然を朝夕の友として居りますが、緑の葉風涼しき下蔭に、獨り還ひ獨り語りますと、葉末のゆらぎにも深い深い意味がある如く樂しう感はれます、(下野黒髪山の逸森芳女)

▲園藝好の皆様、私も大の園藝好ですが、片田舎で種苗を如何云ふ風に何處で買ひ入れたら最もよろしいか御教へ下さい(奈良園藝好女)——東京府下瀧野川町字西ヶ原の大日本種苗株式會社へお問合せなさいまし、

▲記者様、御館發行の雜誌を發行日よりおそく御注文いたしても送り下さるでせうか、たとへば九月一日發行の女學世界の廣告をみて文藝倶樂部に何か面白さうな小説があれば、それから御注文しようと思ふのですがいかゞですか、(箱根女)——宜しうございます、

▲七月號の本誌で繪端書の交換を御願申しましたら、早速御送り下さいまして、深く感謝致します、一人も洩なく御返し致しましたが、御知せ下さい。(在加州サンタアナ市アールデー一郵函九二瀬島千代子)

▲上原様のは拜見する度に、上品な優しい令孃を想像致しますが、アノ平和な文の中に、父様母様の御うわさのないのが物足りなく、又何か御淋の事なやうな氣が致します、(春子)

▲米國桑港の西川鈴子様、何卒御住所を誌上に英語にて御教へ下さいませんか、日本語のを拜見しましたが、スペルがちがうといけませんから、(倫敦ＫＭ子)

▲一月發行の「マダム振り」それから内藤様の「スヰートホーム」ののつて居る四月號の御不用の方はどうぞ御ゆづり下さいませ、繪端書でお返しいたします、(なごや矢場町一九〇栗原ゆき)

▲[illegible]にて山家の一枝様、マダム振り御嵌み下さいましてまことに有がとう存じます、心ばかりの御禮申上げたいのですが、御住所がわかりませんので、困まつて居ります、どうぞ御教へ下さいませんか、御待ち申して居ります、(小樽にて久子)

▲誌友の姉君よ、皆様の中にて本年正月頃迄東京本郷區金助町八番地に御出になられた兒玉様と申すお茶の湯の先生は今何處に入らせられますか御存じの御方は一生の御恩ですから御知らせ下さい、兒玉様は私の師君です、(茨城縣結城郡岡田村齋藤房子)

▲妾は永く本誌を愛讀して居ます、いつも皆様方の春のやうなあたゝかい御家庭を羨しく思つて居ります、お恥しいわけですが、妾嫁ぎまして七年になりますが、常に夫の不身持に苦しんでをります、これも妾のいたらぬせゐと種々に夫の機嫌をとつて見ますけれども、今以てなほりません、この分では一生こんな境遇で了らればならないでせう、どうせ子供もない身故とたまに短氣の心も起す事もありますけれど、里には何も存ぜず、妾を姉妹一の幸福者と思ふてをる兩親もあり、又妾と同じ運命に泣て居る人も澤山あれば涙をのんで忍んでをります、(阿島沖の石)

▲與謝野晶子様の風采は確にハイカラだわれ、それこそいはゆる現代を超越してるわ。(思貫少話)

▲園藝に趣味をお持ちの方に伺ひますが、草花を押花に致す時どうしたら色が變らないでせう御存じの方は御知らせ下さいましな、それからもう一つ電氣やランプの下へ蟲が澤山來るでせう、あれの來ない方法ありませんでせうか、(米澤にて谷間の姫百合子)

▲敬愛なるお姉様方、私は本年十八歳で、小學校を卒業後女學校の二年を修業いたし故あつて退學したものでありますが、どうぞ皆様方のお内にて小間使若しくは御子供様のおつきとしてお使ひ下さいませんか忠實におつかへ申します(春日の里花子)

▲私本年五月號を求めたいと思つて、五月二日に本屋へ行きましたら、最早賣り切れてありませんでした、誠に申かねますが御不用の方は御めぐみ下さいませんか、お禮には繪葉書を送ります、(北海道岩見澤鷲羽よし子)

▲兵庫日百合女様、おなつかしくございます。貴女はクリスト教信者で被居いますの、私も信者なのよ、不束者ですが何卒御交際下さいましな、(奈良蕾子)

▲湖春様は誠に面白う御座いました、表紙の繪は可愛いスタイルですわれ、口繪の快走も美しいわ、中の記事では晶子様のお作でせう、藤田いさを様も磯千鳥様もなか〳〵お振ひあそばしていらつしやいますのれ、(札幌ホワイトローズ)

▲誠に申兼ねますが、諸姉様方の中に一葉全集御持ちのお方は、何卒實價にて御ゆづり下さいませ、(大和葛家口中西清)

▲淡路の篠村美也子様、新潮歌壇の事は何月號に廣告が出てましたか御聞かせ下さいませ、(奈良縣吉野郡六田藤木道子)

▲京都宮川しづ江様、先達の御通信ほんとにうれしく拜見いたしました、私ばれ貴女の學校に程遠からぬ平安女學院の生徒で御座いますよ、九月から寄宿舍に歸へりますと、もう誌上のお交りが出來なくなりますわ、でもれ土曜日はお互にお休みですから、どうかお遊びにいらして下さいよお待ち申して居りますから、(成田てい子)

▲皆様にお願申します、實は十五六歳の下女をさがしてをりますが、一寸見當りません、家は父母と私と三人暮しで誠にさびしう御座いますどうぞお世話下さいまし、朝夕の食事とお使ひだけで大した用もありませんのです、(神戸市宮町一丁目二番屋敷の廿一入澤方清子)

▲米國の深雪様、御なつかしう存じます、少々御尋ね申たい事がありますから、何卒御住所をお知らせ願ひます、(孫花)

▲「嫁ぐ人」お持ちのお方がございますれば拜借を願ひたうございます、(近江大津市松本布澤よし枝)

▲若し皆様の中に夢二畫集「春の卷」おあきの方が御座いましたら、お送り下さいませんでせうか、お禮には嵐峡名勝繪葉書スタンプ付數組に青蘆集を添へて差上げます、(京都嵯峨嵐山時岸川方山本よし)

▲野菊様、今度はお顔が見えませんが、御快癖お振ひ遊ばして下さい、(東京すゞき)

▲當地の繪ハガキ山程ありますから、外國のや花又は名所繪ハガキなどゝ御交換願ひます、諸姉様より他のを送つていたゞけば、一時に澤山御送り致します、(京都市上京區吉田町字近衞二十二番地ノ十一號藤田千代子)

▲相州葉山の今關八重野様、わたくしは御近くの鎌倉に居ります、何卒御交際下さいませ、先日はじめて葉山の方に參りましたが、中々よい處ですのれ、(鎌倉大町夏子)

▲米國加州の神島千代子様、外國の繪ハガキ交換して下さい願ひます、(京都市吉田町字近衞廿一番地十一號藤田千代子)

新刊紹介

△婦人の理想　安部磯雄著

本書は偏に婦人の自覺を喚起することに勉むるのみならず、婦人に對する男子の思想を根本的に改むべきことを併せ說きたるものなり、先づ教育の理想を說き、生前の教育を論じ、次で男女の優劣婦人の現地位に及ぼし、それより服從の結果、婦人と宗教、婦人の智育、體格美、及び婦人と職業、政治等を論じて痛快なり、若しこれによりて幾分にても婦人を尊重する風が我國に行はるゝに至らば、獨り著者の喜びのみにあらざるべし、定價金壹圓貳拾錢、小石川區櫻木町北文館發行。

△家庭劇小公子　小波山人譯

米國の女流作家バアネット夫人の一代の傑作「小公子」が故若松賤子女史の譯文によつて我國に紹介せられ、紙價爲高からしめたるは、人の知る所なり、本書は著者が昨年米國觀光の途次、紐育の俳優學校に立寄り、計らずも其の脚本に仕組まれたるを見、其の一本を得て歸り、今回譯して公にしたるなり、若松女史の譯文と相俟って家庭の讀物として最も有益なるべく、又これを舞臺に上すときは、家庭的の觀物として最も趣味多きものならん、定價金七拾五錢．京橋區南鍋町新橋堂發行。

△夢二畫集旅の卷　竹久夢二著

曩に春の卷夏の卷等を出したる著者は此度又旅の卷を出せり、東海道、近畿、北陸の諸地を跋渉して其の觀察印象を畫きたるものなり、記事も詩趣豐かにして面白し、定價金七拾錢、麴町區飯町洛陽堂發行。

△詩、(箏曲集)　高安月郊作歌　鈴木鼓村作曲

鼓村氏が、箏の樂曲の未だ舊套を脫せず、且つその歌詞の文意の通ずるもの鮮きを慨し、先づ抒情詩を曲に作して箏道の革新を企てしは數年前の事なるが、その第一に成りたるものが即ちこの曲なり、總て普通の西洋樂譜を以つて現はされたれば、今日之を學ぶ者の爲に頗る便利なり、定價金六拾五錢、日本橋區馬喰町古今堂發行。

△少女小說わか草　沼田笠峰著

少女の讀みものとして、家庭及び學校に關する小話をあつめたるものなり、學校の教科書以外に於て、少女に清新なる趣味を養はしむるによろし、謝恩會、雪子、藤掛盗等すべて十二篇を收む、文字清麗玉の如し定價金三拾五錢、神田區猿樂町誠文館發行。

△講談義士銘々傳(後篇)　博文館編

知名の講談家が赤穗義士中の各々得意の人物を選みて講演したるものを輯めたるものにして、本篇に於ては、前篇になかりし大石主稅以下十四名の傳記を收む、家庭の讀物として有益にして且つ面白き書なり、定價金五拾五錢、本館發行。

△偉人と言行　高橋淡水著

我國近代に於ける思想界の偉人十人を選びて其の傳記及修養訓等を集めたるものにして、中江藤樹、山鹿素行、貝原益軒等を初めとし、近くは新島襄、福澤諭吉、勝海舟等の人々に就て說く、孰れも青年子女の修養の資としてよろし、定價金五拾五錢、京橋區南小田原町東山堂發行。

女學世界定期增刊

迷信に囚はれたる婦人

九月十五日發行

通俗哲學者の說に曰く、迷信は人の一生を支配する大引力なりと、是れ今日の科學を無視したる言なり、されど心象の上に齎らす文明科學の力は、その實案外微弱のものにして、十中の八九は猶不可思議なる感情の支配に屬す、凡百の迷信はこの不可思議なる感情を抱合して様々なる變態行爲を演ず、この狀態を冷靜に觀察するは、啻に趣味感の上に無限の味を感ずるのみならず、又人間處世の上に幾多の暗示を得る事ならんと信ず。

目次概要

才媛文壇懸賞募集（九月十二日〆切）

▲美　文（二十字詰十五行以內）

▲日　記（二十字詰十五行以內）

▲書簡文（二十字詰十五行以內）

▲いろ〳〵の經驗（十五行以內）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲笑話▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、いろ〳〵の經驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、笑話、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館内女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞壹圓五拾錢、地賞壹圓、人賞五拾錢

△和歌△俳句△笑話
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△いろ〳〵の經驗（賞壹圓以下）

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册／增刊四回：一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年八月廿六日印刷納本　第拾卷第拾壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番／千十八番
本局　二千六百二十番／三千二百二十九番

女（後付の一）

第十六卷　拾貳號

太陽

九月一日發行
正價金三十錢
郵稅三錢

洋裝四六倍判
紙數二百五十六頁
口光澤紙寫眞版
四頁二色刷二頁
並寫眞版十二頁

太陽小說脚本大懸賞募集規定

博文館

女(後付の二)

中學世界

第拾參巻 第十一號 九月十日發行

菊判美本 總頁數二百四十頁
毎號外國語欄十餘頁
口繪
水彩畫
ペン畫
鉛筆畫
寫眞版十餘頁

定價(一冊)廿錢 郵税二錢

東京本町
振替東京二四〇番
博文館

女（後付の四）

◁第拾六卷……第拾貳號▷

少年世界

菊判紙數百廿八頁═口繪寫眞版如例
正價一册金十錢═郵税一錢五厘

九月一日發行

口繪

新式展望機フリックフラップ（原色版）　西野猪久馬筆
コスモスとダーリア（標本畫）
△英皇帝の家庭△瀬戸内海府遊會記念繪ハガキと少年小會△天下第一勝＝耶馬溪△宇和島の闘牛會と﨑岡の七本山車（寫眞版）

▼お伽小説 飛右衛門（羽根の借物）　巖谷小波

▽マラソンの血の雨……新井雷化
▽沈勇の人……木村小舟
▽蠅の曲藝……三津木春影
▽秋の夜蟲……河村鮮夢
▽少年手品……竹貫直人
▽數學遊戯……海に變哲
▽お話の種……少年諸君
▽千本木さん……しんろ生

▼探險小説 氷海王　江見水蔭

▽長政毒殺せらる　文學博士 上田萬年

▽裏九州見物記……牛田弦擊
▽坊主持ち……黒田湖山
▽金崎の戰……沼田笠峰
▽少年文壇……編輯局選
▽少年和歌……尾上文學士
▽少年俳句……沼波文學士

▽特別懸賞 表紙の圖案　▽學藝顧問▽少年通信
▽懸賞智慧くらべ▽最近の出來事

▼大運動會愈々……九月廿四日……（詳細は本誌にあり）

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

與謝野寛君著

詩集 檞（かし）の葉（は）

全一册

菊版半截上製紙數三百卅頁

正價四拾錢　郵稅六錢

詩壇の平靜を破つて一石を投ずるものは此集なり・小曲百六十篇、雜體四十二篇、短歌數十首を收む・詩の愛深き人人よ。ふと思ひつめたる刹那の『我』を彈じて高調を出だす著者の奇才を見給へ。

今井柏浦君選

榊原蕉園女史口繪

古今女流俳句集

全壹册

菊半截美本

貳百五十頁

正價卅五錢

郵稅四錢

女流の俳句は、男子の俳句に較べて放膽豪宕の氣に乏しいが、纖細、優婉、溫情自然に溢る、天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある、畢竟女子は男子に比べて、思想の緻密なると共に、感情の溫柔なる處が多いから、俳句なり歌なり、女性的と男性的とは、歷然した區劃があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある、俳句を學ばんとする婦女諸君は固より女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

最新發明 肺病。肋膜 新藥に就きて

獨逸ドクトル 高平氏報告（醫事週報二七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す患者は本藥應用後は常溫下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を增進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞讃により明らかなれども今本院服藥患者に付き其成績を左に報ぜん

●金森某（總て上住所姓名を秘す）女子三年前發病遂に末期重症の**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盜汗發熱激しく度々喀血し非常に羸瘦す服藥貳週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥褥せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を增加せり

●兵頭某 卅一歳男 **肋膜炎**（喀血無し肺が初期の疑あり）胸部痛み食不振身體倦怠盜汗の咳嗽・頭痛あり身體羸瘦を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へ、いかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	發効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

患者	性	病名	成績
龍谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
[illegible]田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
阿嶋	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず中國藥劑界名譽の發明藥として報告する義務あるを信ず又効力多大にして持長服藥するも副作用なく殊に**喀血**と其豫防に可驚効あるを以て弱藥の傍ら服用最も妙ならん吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むると共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく誰者にも療法あり）遠慮なく送料郵券二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代貰ひ得らる、故是非一讀あれ益する處多からん、之れにより全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週金二圓
貳週參圓九十錢
參週五圓七拾錢
四週七圓貳拾錢
五週九圓

東京神田竪大工町 療養院製藥所 **村尾明治堂**
電話本局參千七百五十二番（私書函神田本局第三號）
振替口座東京壹四參壹九番

西村醉夢君著 和歌ト俳句

袖珍洋裝美本 紙數三百五十頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

本書は和歌及び俳句に關する解說、歴史、批評、並びに修辭法を記載し、卷頭には『詩學梗概』と題し、それに就ての解說をしたもので一般家庭に讀まれる目的で編んだものであるから、極めて平易な、通俗なとのみを選び、修辭學、詩學の梗概が窺へ、また和歌と俳句との文學的價値をも分るやうにしたものである

《內容》

【第一篇】詩學梗概＝●詩とは何ぞや●詩の內容●詩の律格●詩の種類●詩の用語●空想と寫生●詩の生命【第二篇】和歌＝●和歌とは何ぞや●和歌の種類●古歌の風格●現下の歌壇●和歌の書式【第三篇】俳句＝●俳句とは何ぞや●句の制約●俳句の特色●俳句の沿革●最近の俳壇【第四篇】修辭法＝●譬喩●對照●雜種の修辭

東京本町 振替口座東京二四〇 **博文館**

女（後付の入）


柳清香油
けいしかう油
紳士
貴女用
フロラー香水
二十錢
一円廿錢
一円八十錢
美術小間物化粧品
東京日本橋通二
柳屋本店
電話本局二二一
GIYA
瓊姿油
RYUSEIKO
柳清香


專賣特許
臺所重寶
名和式テンピ
大三圓●中二圓五十錢●小一圓九十錢●說明書御希望の方へは無料送呈
專賣特許名和式テンピは曾て實業之日本誌上に於て「改良されたる臺所重寶器」として紹介されし和洋兼用のテンピなり
東京日本橋區蠣殼町二丁目十五番地電話浪花一一七七振替口座一〇二五四番
特許カマド据風呂
名和商店

女學世界
（毎月一回廿六日印刷納本）
明治四十三年八月廿六日印刷納本
第拾卷第拾壹號
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可